

朝鮮之關係書箱

水田

372

# 漢城行

客星侵月天象惡。妖狐夜深哭。  
鳳閣伏魔殿。破起怪風殺氣橫。  
空天狗躍。光景如此真堪驚。對此  
何人不傷情。世局奕東棋滄桑  
改。風景不異古漢城。君不見一自  
娶婦傾周室。亡國今古同一律。社  
稷興亡宮闈中。箕舌誤人甜於  
蜜。尚有古老語當時。其言淒惻生  
長悲。可嘆舉世皆賣國。嘗無一  
士歌黍離。東洋風雲捲狂瀾。列  
國形勢急奔潭。士策縱衡日不足。  
家世亂天步何艱難。鄭國君臣事  
恬熙。當世時務不曾知。牛李徒爭朋  
黨利。四境自招強者窺。後庭楊氏



最執手得威福在掌。忠暴斷。冷笑談廷臣

合從。別策連衡。自有安。徒謀私門。

不憂國。欲結強秦。擅君側。門戶光彩。

何足言。可惡猖狂。忘坤德。民衆怨。

嗟視如虎。道路側目。憤跋扈。國勢陵。

夷危累卵。旦暮折入秦。版圖獨有。

老雄憤權奸。欲排蠱毒。乘其間。陰。

忍蹲踞虎負嵎。位在宗親。望如山。竊。

賴日東天子使。意氣鬱鬱。蓄雄志。陰。

結天下。慷慨抗腕。待時到。孤涉。

大川。濡其尾。降秦密謀。哭神鬼。情形。

發露不可容。疑為私忘國。真蛇虺。時半時。

乎不可逸。除奸機會。刀脫室。羽林將士。

怒如熊。鼓譟爭擁雲峴宮。志士夜聚。

孔德里。定計決事。疾如風。半夜舒枚。

向漢城。滿城鵠犬。寂無聲。日半斗。蘭。

干橫北岳。霜氣襲人。歆五更。光化門。

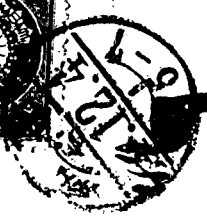
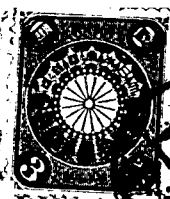
光化門。

前何闕寂。燭耀真人疾。霹靂九重城。闕  
無人衛。三千親兵不敢敵。曉風月落玉  
壺樓。申寧殿上白露秋。後官佳麗何處  
在。滿宮只見暗霧愁。嗚呼恩讎三十年  
僅回首。政柄又落老雄鷗。事大爭權幾  
敬頭。榮華如夢安得久。日東自有賢  
宰相。遠召使臣謀和暢。多弱機微人  
所乘。遂使強秦稱西朝王。君不見積骨  
如山流。血如海遼東地。形情勢由來不  
可避。勿言就國血玄黃。虛人生。履霜  
不戒堅冰至。嗚呼明將皓遠可憐  
色。誰知妖艷自古能傾國。

失名氏作

東京市麹町区内幸町一丁目五

小川平吉



親展

京城南山町

三月廿四日

江南橋吏

吉



軒窓年光窮陰のふり言はあかり  
り交差の健勝のふり言はあかり  
金多怪の放翁のふり言はあかり  
海多怪の放翁のふり言はあかり  
芳海并南北平あきこ長年旅り  
試之方秋の如くふり言はあかり  
山多怪の放翁のふり言はあかり  
王江の青玉  
廣并水の鎮の玉並奉りたる宝石の授

今し標本あきこふり言はあかり  
と飲ん美并農たるふり言はあかり  
君の権利と悔ふふり言はあかり  
官舎と三ふり言はあかり  
おのふり言はあかり

市説考兄の解の通なり（且巻子ノ  
と生中好るふり言はあかり  
と大土地買のふり言はあかり  
故るふり言はあかり  
と生中好るふり言はあかり



中実一攫万金ヲ得り而中一五七年若くは  
十年に多量なる金ヲ得るノ計画ニ當り  
現ニ野田邸におのづから土地ノ賣物屋ニ  
テ其内ニ土地ノ種々多量ヲ刻あて多量  
ノ買入に當り二三ノ年迄入回磨ノ事ニ成  
りし了れり又いふと有

土地投資ノ方共ニ確既ニ業ノ方共ニ即ち處  
方共ニ何方大ニ資本家ノ合同多量ニ成  
るべき

其地方は商業ノ近半ノ地位に在り對岸

支那ノ騷亂は漸ク方サモ終熄ニ至んば權限  
シ望ム實ニ利益既成ニ多量上ノ親者  
ニテ倦テあり概アリ觀テ予等ノ消息ニ方  
ヤおあうりナカニ此ニ據テ其ノ勢ニ

甲子四年 十二月四日

江子城

射山太兄

邊城十月朔凡吹暮色蒼茫鷗影無餘  
當年鏖戰跡統軍亭上立多時

修仁輔田又鉄輪家也一鼓趁風卷個中自有  
欽心事到處天涯逢故人 寄神谷鬼山



小川平吉 殿

ノ  
蘇海玉居信長

李安元

家所寸平物

123  
信玉居

也  
開中九信

3  
ア西口秋

昔の事

今更に

時をたしかめ

遊中の方

いふ事

地土物

柳送春

菲傳春

笑通春

月送春

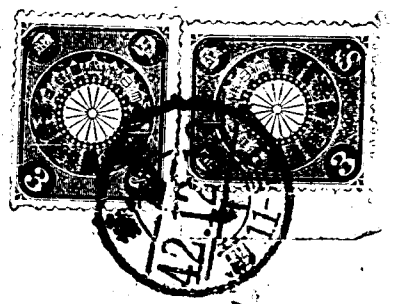
月送春



小  
大  
第  
一

十  
五  
六  
九

東京市麹町区内幸町



小川 中吉 氏

敬啟

東京市  
由良平

拝啓 合邦問題に

関し当地に於ける新

聞記者通信員本

は前日伊公亮君の

陳実飛に最後

解決を当局者迫

る中決議を為し未

から今固一進今提  
議を却て突飛あり  
し野生に對しと追ふ  
策士とか何とか悪  
口難言の有りつ丈  
流布し世人を惑はし  
我が国端を率一せし  
むる所あるは面白  
原因あるありと殆んど  
常識を具ふる人の  
事実とせざるは程の



愚ある関係より起る  
ものあり其概因を陳  
へんに彼等曰く合邦  
は反対に非ず進んて  
併吞すべしとするもの  
あり而し進合の提  
議は曖昧ありと見れ  
進合は不日韓人の  
立ち場を解せし言  
にしこ進合かよし合

邦の條件を提唱す  
るも取捨は日本の手  
に在り要は韓人をしふ  
合邦も唱ふしむるを得  
策あるを認め日本人は  
彼等を擁護し従来  
国内に於て売羊の  
主張とせられたる親  
日排日の思想を棄  
て合邦非合邦の争  
ひに移りしめ為進

んとは急成早商の  
二派とせざる可からず

此より新聞通信員

等は之等の深慮

永遠謀ありは未だ

しむ如すいふことす

るも先生達は内田

が日本政府より巨額

の運動費を遂取

り又た一進會より少

少なからぬ金を握り合

邦の大事を一人に  
成就し金と名を  
西つふからを得ん  
るものありとか  
師と告げし金儲  
の爲めにするもの  
と取るに足らざる  
を爲し其言を辨す  
る人あるは五人の  
長に來り相談した

箇棚の大事件も咸

たんとするは不埒ありと

答へ到底誰にも何

にもあつたものに非ず初

めは成丈け先生集よ

感情を柔らけ世

の誤解を少くからし

め速に健全王ある鑣

端を起さしめんと欲し

融和に手と盡したる

とも浩らけ金の相談

を持ちかけられ金に當  
方無一物と来ると長  
ろから相談に應じ  
らるゝ人ならぬに非  
ず出来る限りの金  
策は試みたれども先  
生連多数の希望  
に添ふ能はず不得止  
此方面は成り行に任  
すことゝし吾人は吾

人の爲し得らるる限  
の力を盡し天定まる  
の時人に俦たんと期  
待せり而も却に最  
も可笑しきけ新聞  
記者連の底止する計  
あり反對の奥に統  
監の權引けら一件  
あり曾稱は合邦不  
同意とて徹頭徹  
尾現状維持説を

此は利南通行員等  
を暗に使喚して合邦  
問題と紛糾せんとせし  
勢力の不可あるを見  
て又暗に合邦力  
意を浅らし愈々  
記者連として方向  
に迷ひしめ長年の  
事情を以て我  
兄弟事には日本の  
同志を大驚起せしめ



飽く迄本向題の

解決を促進せよ

宛たり一両日

に進念合科

我提出の事情

経過迎良仕花

や

内田良平

十二月五日

小川平吉 敬

日本東京内幸町一丁目

山川平吉様

祝啓



北京東城新開路

福田平吉



ありす様へ

大使命ヲ闡明セラルベシヲ祈ル

(本誌と表紙) 一 中野

2.

表七卜旁ノ下此様

答 効果見且支紀者ヲあし現ニ下ト有し。例ハ  
對支文化者ニ示テモ一知支那ノ正事ハ。ハート・オビニ  
ホニニ在ニ倅リ此ニ於テ燒カヌヤクニ示テ一顧モ  
大切トナシ

於ト下ト有シ且支紀者ヲあし現ニ下ト有し。例ハ  
對支文化者ニ示テモ一知支那ノ正事ハ。ハート・オビニ  
ホニニ在ニ倅リ此ニ於テ燒カヌヤクニ示テ一顧モ  
大切トナシ

對支文化者ニ示テモ一知支那ノ正事ハ。ハート・オビニ  
ホニニ在ニ倅リ此ニ於テ燒カヌヤクニ示テ一顧モ  
大切トナシ

對支文化者ニ示テモ一知支那ノ正事ハ。ハート・オビニ  
ホニニ在ニ倅リ此ニ於テ燒カヌヤクニ示テ一顧モ  
大切トナシ

此書案上より見ゆべし  
一書に記す所は此書に  
記す所より少し異なる  
所ありしを記す

かみ

秘の

小川平吉大見

東

郵便はかき



東京市麹町区

内幸町土蔵地

小川平吉氏

明治

庚午

印刷局製

逓信省發行



旧友彦正の書

彦正 年日 一 八 四

リ 極 上 之 往 事 一 巨 博 シテ

秘 威 慨 然 之 言 一 一 上 卷

毛 書 人 物 心 之 雄 何

人 力 神 之 妙 數 之 術 亦 一 一

快 ト ス 一 一 是 大 足 再 回 感



直隸安福兩派が互ニ反目シテ遂ニ直隸派が安福派  
ヲ一蹴ニ去リ中央ノ實權ヲ已ガ掌中ニ収メテヨリ日  
支間ノ懸案ハ山東細目協定ヲ除キテハ未ダ殆ド解  
決ヲ告ケタルモノナシ今春以來ノ排日運動ニ就キテハ  
是が原因ハ多クアルヘキ是ヲ政治上ヨリ觀測スルトモ  
ハ直隸派ニ於テ該運動ヲ煽動シ若クハ是等有力  
者ニ於テ是ヲ默認シ居タル形跡ナシトモ就中吳佩  
孚ノ態度ハ日本ニ對シ何等好意の態度ヲ表示  
シ居ラサルハ蔽フ可カラサル事實ニシテ右ハ予カ當初  
ヨリ抱懷セル感想ナリ實ハ此所見ニ基キ今般來任  
ノ途次本月十一日大連到着以來新聞通信員等  
ニ對シテモ右所見ノ反映ヲ灰メカシ来リタル次第ニシテ  
而カモ十五日着津以來直隸派ノ在天津要路ノ人

在支那日本公使館

々并ニ有力者ト會見ノ印象ハ以上ノ感想ハ益々  
深クセラルト同時ニ予モ亦右等有力者ト會見ニ  
於テ如上ノ所見ヲ匂ハセ来レル次第ナリ

然ルニ直隸派ハ曹錕ヲ大總統ニ擁立セシメシメガタメ  
各國殊ニ日本ノ歡心ヲ求メントスルニ汲々タルハ是亦  
爭フヘカラサル事實ナルニ付此際ニ利用シテ排日  
派ニ對シ一戰ヲ加ヘ其反省ヲ促シ排日の運動ニ  
對シ徹底的取締ヲ行ハシムル様仕向タルモノナリ  
情勢ニ處スル機宜ノ一策タルヘキヲ信ス現ニ十五日着  
津以來予が新聞通信員等ニ語リタル要領ハ各  
漢字新聞ニ轉載セラレ直隸派ニ對シ相當反  
響アリタルモノ、如ク果然十五日着津當日直  
隸派ノ各謀ニシテ其樞機ヲ握レル王承斌及曹錕

實事ニシテ前直隸省長タル曹銳ハ切ニ予ニ會見ヲ  
求メ進ニテ批日問題ニ關スル日本ノ誤解ヲ解キ度  
旨述ヘタルヲ以テ予ハ這回批日運動ノ背後ニ如何  
ナル有力者が横ハリ居ルカ且又彼等が如何ナル為  
メニ是ヲ為スワ、アルカハ姑ク指テ問ハズトスルモ少クトモ  
所謂直隸派ノ實權ノ及ヘル勢力範圍内ニ於テ批  
日運動殊ニ熾烈ニシテ而カモ徹底的取締ノ及ハサ  
ル莫ク付キ直隸派ノ猛者ヲ促サニル可カラズ批日問  
題ハ當面ノ大問題ニシテ日本朝鮮一般ノ感情  
甚ダ激高潮ニ達シ、アルヲ以テ若シ是ヲ事態  
ノ推移ニ放任スルカ如何ハ日本政府ハ大ニ考慮ヲ  
要スヘキ旨ヲ力説シ置キタリ越テ十六日當地着十八日  
沈外交總長代理陸ヲ往訪ノ際天津ニ於テ王承斌

在支那日本公使館

等ニ語リタルト畧々同様ノ趣旨ヲ繰リ返シ此際中央  
政府ヨリ嚴重ノ訓令ヲ出ス事ハ元ヨリ當然ナル  
ヘキ又最近有効ナルキハ批日運動猛烈ナル地方ニ  
於テル實際且ツ最高ノ權力者タル曹錕ヨリ是カ勢  
力範圍内ニ嚴重ナル取締ヲ發スル事切ナルヘキ  
旨ヲ強ク警告シ置キタル次第ナリ

由來批日問題ノ解決ニハ兩策アリ一ハ永久的ニ  
根絶スル方法如何、他ハ當面ノ鎮撫策如何ナル  
ヘキ處永久的ノ解決策ハ經濟的其各方面ヨリ  
詳究ノ要アルヘキモ當面ノ鎮靜策トシテハ現ニ政  
治問題ノ為メ政頭焦慮シ、カル直隸派ニ由リ  
批日問題ノ由來現狀ヲ説示シテ其反省ヲ促シ若  
シ先方ニ於テ好ク反省ノ實ヲ與テタルニ於テハ無異ナリ

サル政治運動ニ對シテハ我方ニ於テ其公正ナル施設  
ニ好意的態度ヲ表スルニ吝ナラサルノ態度ヲ以テ進  
ムニアリト思フヤレ其根本的方針ヲ以テ機宜ノ  
措置ヲ謬タサラン事ヲ期スツアリ

在支那日本公使館

日本東京

魏河廷内幸所一五

奉天 九四



牛親展

平吉様

國



北京

芳沢錦吉

科昭時下為

少乃櫻乃乃祥

年要要人 少乃

少乃櫻乃乃祥

少乃櫻乃乃祥

賜、孫、惣、爲、ナル

法、招、宴、リ、衆、リ、在、座

意、在、年、深、福、ハ

以、中、後、一、路、平、安

去、ル、十、六、日、着、任、在

号

多、也、子、以、牧、名

来、任、在

相、對、然、ハ、能、知、法、界

念、亦、成、所、ト、排、日

公、願、之、美、ト、少、生、之、孝

執之者古針

網羅之有之何等

法者乃色之供法內

兒之方此一續之也

幸甚之存心

笑之不以叔著周任

以獲羽者古中述及

以卜折角者古自表及

名及年形上及

早之也

大正十二年

七月廿七日

北京

芳澤謹志

小川平吉様

竹聲



東京麹町區内幸所



大森

清浦奎吉

敬啟馬良來朝二付

迎待之儀先相會同

之節得貴意所處

此以殿上親出與光新

張作霖二使入等親白洲

人々ニ對シテ意味アリゲニ  
宜行スル時ニ際ニ段次、  
有力者先馬氏ノ來朝  
ハ願フスルニ必要アリシハテ  
馬氏ニ對シテ國武ヨリ  
馬氏ノ知人先田中義一氏  
旅中ノ時復會スルヲ  
整頓セズ暫ク延期ナシ

首電信ヲ發セシメタルニ

別紙、電報ニ接シ候此

毎お念ひ申意、不宣

三月十七日 奎堂

射川洞兄

新  
知  
者  
有  
往  
後  
電  
報  
日  
文  
會  
社  
ア  
タ  
リ  
三  
三  
三  
報  
子  
三  
三

東京市麴町區內幸町一丁目五番地

小川平吉

紙達送電

注意

● 注意

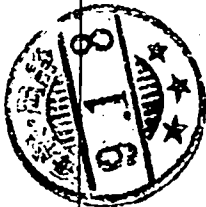
● 注意

局著	局發	名氏所居人信受	
受信者	受付	第	
午後	午後	月	
時	時	日	
分	分	號	
		局	報

万一人に宛てたる電報の配達を受けたるときは其由を符通し直に之を配達したる電信局所に送展せらるべく決して其受取本人へ直達し又は手渡しせざることを要す。

受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

万一人人に宛てたる電報の配達を受けたるときは其由を付通し直に之を配達する電信局所に返戻せらるべく決して其受取本人へ直達し又は手渡しせざることを

<p>Handwritten Japanese text (likely a list or index) in the left column.</p>	<p>定指</p>	<p>番著 録信 名氏所居人信發</p>
<p>Handwritten Japanese text (likely a list or index) in the left column.</p>	<p>事記</p>	<p>印附日局著</p> 

●上れさせ給申ては便敷料無口又願口は申水邊の命都不上投取●

● 九州を越えて、使野無江又鴨江にあらあゝの舟部不上投取 ●

電 報 送 達 紙

●注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日著局に於て受信したるものとす

局 著		局		發		名氏所居人信受	
當受 務信 者信	信受 午	付受 午	第	局	報	<p>著 番 信 發</p> <p>名氏所居人信發</p>	
時	時	月	號	日	分	分	分
<p>指 定</p>				<p>事 記</p>			
<p>局 著</p>				<p>印 附 日 局 著</p>			

注意 万一他人に宛てたる電報の配達を要ひたるときは其由を存案し直に之を配達したる電信局所に返展せらるべく決して其受取本人へ直送し又は手渡しせざることを要す。

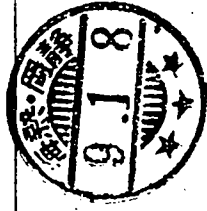
東京市麴町區內幸町一丁目五番地

小川平吉

八  
 新  
 智  
 有  
 行  
 校  
 電  
 報  
 日  
 文  
 會  
 報  
 報  
 刊  
 元  
 誌

# 紙達送報電

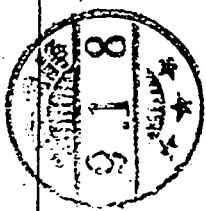
●注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

局 著		局 發		名氏所居人信受	
信受者	時	付受者	時	第	報
分	字	分	日	號	局
本 八 二 ウ ニ ナ エ カ ル テ ク ワ ニ フ ハ カ キ キ タ フ チ ナ ル ハ ナ ナ ム ケ ヲ ナ				定指	番 著 信 信 名氏所居人信發
事 記 印附日局著					

●しれき起申てに便料無は又頭日ばらあ金の合部不上取扱●

# 紙達送報電

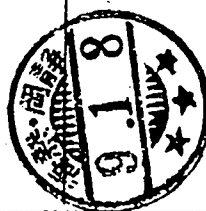
●注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

局 著		局 發		名氏所居人信受	
信受者	時	付受者	時	第	報
分	字	分	日	號	局
本 八 二 ウ ニ ナ エ カ ル テ ク ワ ニ フ ハ カ キ キ タ フ チ ナ ル ハ ナ ナ ム ケ ヲ ナ				定指	番 著 信 信 名氏所居人信發
事 記 印附日局著					

●しれき起申てに便料無は又頭日ばらあ金の合部不上取扱●

# 紙達送報電

●注意 受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

局 著		局 發		名氏所居人信受	
信受者	時	付受者	時	第	報
分	字	分	日	號	局
本 八 二 ウ ニ ナ エ カ ル テ ク ワ ニ フ ハ カ キ キ タ フ チ ナ ル ハ ナ ナ ム ケ ヲ ナ				定指	番 著 信 信 名氏所居人信發
事 記 印附日局著					

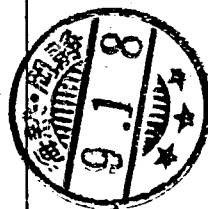
●しれき起申てに便料無は又頭日ばらあ金の合部不上取扱●

# 電報送達紙

●注意

受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

局著		局發		名氏所居人信受	
當務者	信受者	當務者	信受者	當務者	信受者
午後	午後	午後	午後	午後	午後
時	時	時	時	時	時
分	分	分	分	分	分
字	字	字	字	字	字
日	日	日	日	日	日
號	號	號	號	號	號
局	局	局	局	局	局
報	報	報	報	報	報
定指		定指		定指	
番 著 信		番 著 信		番 著 信	
名氏所居人信發		名氏所居人信發		名氏所居人信發	
事 記		事 記		事 記	
印附口局著		印附口局著		印附口局著	



●したれき越申てに便郵料無は又頭口ばらあ金の合都不上取扱●

# 電報送達紙

●注意

受付月日の記入を省略したるものは受付の當日着局に於て受信したるものとす

局著		局發		名氏所居人信受	
當務者	信受者	當務者	信受者	當務者	信受者
午後	午後	午後	午後	午後	午後
時	時	時	時	時	時
分	分	分	分	分	分
字	字	字	字	字	字
日	日	日	日	日	日
號	號	號	號	號	號
局	局	局	局	局	局
報	報	報	報	報	報
定指		定指		定指	
番 著 信		番 著 信		番 著 信	
名氏所居人信發		名氏所居人信發		名氏所居人信發	
事 記		事 記		事 記	
印附口局著		印附口局著		印附口局著	



●したれき越申てに便郵料無は又頭口ばらあ金の合都不上取扱●



大に  
は完 え (12)

将

④  
ドウフン <sup>クワイ</sup> ノケニツキヨウイナラ

サルゴハイリヨノオモムキニヤスニカル

ニ ~~オモムキ~~ ホニネントハムニエケイヒ

ノレニツミサレツカヘヨウヤクニキシルキ

フキニモ ~~セ~~ <sup>レ</sup> フタンボニナリオルニジイ

ニ ~~テ~~ <sup>レ</sup> ガウヨウノイニ ~~ク~~ <sup>ク</sup> ワンスルモレ

ダイナリイサイイノウエニヨリオ

ネカヒスルハツニツキナニトソサフコ

コンニ。ハイコンクワニス

テシエタ  
ヨシニチマデテキル  
シンボウセシケツカ  
キウキツキレハスヘテタ  
カ

ホニイレ  
シン  
キフキセハトラ  
シエジエクシシセ  
タ

テイマコアハス  
トハツノセシキヲモツ  
セヒトス  
カ  
テイ

シエウヲエウ  
イサハサノウ

カシメヤチエス

ウナバニ



同文有、方も何う有、後、何と、正、正、  
そ、何、何、何、何、何、何、何、何、  
熱心、可、可、可、可、可、可、可、可、  
如、如、如、如、如、如、如、如、  
相、相、相、相、相、相、相、相、  
名、未、未、未、未、未、未、未、未、

古、古、古、古、古、古、古、古、  
有、有、有、有、有、有、有、有、  
類、成、成、成、成、成、成、成、成、  
、同、同、同、同、同、同、同、同、  
こ、う、か、目、置、置、置、置、置、置、置、置、

世、石、石、石、石、石、石、石、石、

先、以、先、先、先、先、先、先、  
結、結、結、結、結、結、結、結、  
若、若、若、若、若、若、若、若、  
系、系、系、系、系、系、系、系、  
そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、そ、  
少、少、少、少、少、少、少、少、  
り、り、り、り、り、り、り、り、

小川曾見  
及

六十九

中西書

工部局  
貴見  
法回  
者  
一時  
同  
在  
方  
依  
賴

設主此中  
未夕覆音  
而中多分  
市歸京  
決意之事  
以多用中  
女口中  
成功無所  
是子  
何友  
多臨  
存此  
實足  
接  
實具

家

中西

小川

蘇州内平河

小川平吉様



吉平

7

東京府下高田村三六二九

宮崎虎藏

得志の時命海客多  
るの物そけ佳記

大契し

此にいふ多用す甚多

いねき、四川留多生

同趣りた力いより

解の通に色り、



欲度のくいふ

何年か上から下へ

うねり上

宜しき上へ換

樹より上へ変へ

引越すといふ

下へ上へ

中上之品也

时下自是有一二

新也

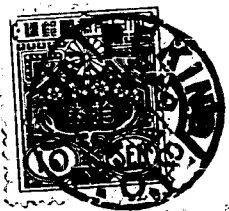
取大

午月十九日

平福天

小川村心之生

去下



書習

親友

北京六五三

東京日比谷  
上野平吉殿

未



北京日比谷  
齊藤季治郎

相成多事多祥

貴友實了永奧村

貴友實了永奧村

貴友實了永奧村

貴友實了永奧村

者、  
昨、  
年、

十百順三午式

計銀三千挺

買契乃爲此事

實方之洪範

洋行、支那、義塾

う実所ふに能ハサル

為  
車  
年  
三  
月  
頃

支那側ハ靡然ヲ希

望ニ奥村ヲ略之ニ曰

意ニアリシカニ其後如何

成リモシヤ中力ニテ

義武出陣サスナ

取有シ四者ニ及能

如

大正七年九月

高橋木匠印

小川平吉殿

逕所之内幸所一、五



小川平吉

山

東京市下墨橋(大塚線)  
官仲二二三〇番地  
中野二郎

有込すはにた

多市一丁町は流り  
也

夜月迄大いふあ

多安風子一白飯

え、伊ハシーツ  
トムス

みホローシ  
子と文  
信  
中

い  
て  
本  
文  
に  
付  
き

は  
た  
け  
ら  
ま  
て  
す  
に

細  
心  
を  
以  
て  
す

友  
人  
と  
あ  
い  
ま  
し  
て  
三  
人

を  
傍  
聴  
せ  
し  
ま  
し  
た

後  
方  
に  
お  
き  
ま  
し  
た

は  
た  
け  
ら  
ま  
て  
す

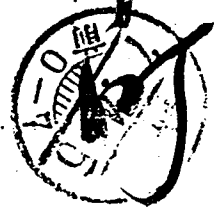
叩

は  
た  
け  
ら  
ま  
て  
す

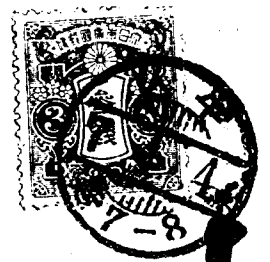
小  
川  
ち  
ん



題町之内奉



東川平吉様



奉

ナ

東京府下高田村三六二六

宮崎虎藏

謹啓 唐紹儀

此金以以白一

通り来るより後

此あり、中札

は

走名の大力者

飲也、名いり、偉人

氣を、持ち、え、さる

下さい、せり、か、あ、の

多、成、と、い、め、に、小、衆

兄、の、名、の、歌、や

上、野、に、下、り、あ、れ

沙下部款上

好具

月

倫天

射山先生

去

張勳李徑裁同

伴入志張鎮芳

雷震去、為芝費焉

之入志張勳、李徑

裁、内國但織世、如

其後援、中

央舞臺、咸道

フセ、いふ、野生尸

リ、李内國、の、新張、

雷、江都、余、甘、入、内

リ、仲、へ、う、ん、野、内、内

口、金、の、初、速、花、流、

内、内、の、内、内、事

その、来、不、已、の、李、内

内、の、の、初、速、花、流、

内、の、の、初、速、花、流、

内、の、の、初、速、花、流、

其他の山に電燈を  
取付し、稲束を  
（ハ）此の由國、成否を  
未之事ナリ  
此の由國成立する如  
二、ア、ムカ、此、光、例  
一、取付、一、分、傍、此、洋  
派、有、力、長、安、大、に  
取付、一、分、時、局、収  
拾、固、能、矣、一、層  
リ、如、フ、一、ク、此、一、子  
收、光、一、難、境、三、分  
ハ、何、一、後、辟、日、一、分  
リ、一、怪、事、ス、一、分  
其、初、例、一、御、女、ハ

句傳後辟、不可  
先二一の充方より  
しんん已實降、  
移力ッ振る二法を  
以後二法初達  
長中三一日三  
二日三三王金侯帝  
リあしこ見タト  
ノ大和生を不達  
力一ハ或二法辟  
ニ路4リク十名知  
レ不母斯こし  
時今ハ非大ニ此規  
ニ列ハ非充方と

以度之此際日也  
德心之尤也情主  
于其心之方不若  
之復辟之微細三  
そとに就て心切が  
之ヲ接ゆる様  
こりアリテハ由  
物大なる事あり  
次ノ静ニ不平  
全義情親之義  
リ、其方し其方  
不日其方力三  
収拾せしめ方  
ノ様今之如き  
明力たしハ其  
是

非リ明多しテ人  
道主夏ヲ振レ  
しテ云カ仲裁ヲ  
行フ所ニツカレ  
ニ至ル此時我レ  
トしテ別子~~別子~~  
ノ信生リ得テ之  
臨ハ様沙多如所  
ヤ~~ヤ~~しテ能キ~~能~~勸  
しテ好ハ家ニ休  
セ心更ニ救フカ  
カレ失知リ懐ス  
思者~~思~~心何等  
有~~有~~所トモカ合



上 思ヒ切リえん不  
手 ば、主、義、切、り  
ア う、い、こ、い、今、主、こ  
王 城、こ、く、ゆ、こ  
テ、い、た、不、知、敗、あ、ん  
つ、大、り、城、へ、か、め、う、こ  
り、時、る、い、の、新、村

此充分三  
收松  
此致  
先

九  
也  
人  
了  
習

十  
中  
中  
中

中

之  
生  
此  
位  
先  
也

程  
甘  
肅

冬  
生



1 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
2 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
3 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
4 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
5 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
6 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
7 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
8 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
9 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
10 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
11 月 1 日 東京 市 役 所 出 発  
12 月 1 日 東京 市 役 所 出 発

*(Cursive calligraphy)*

[illegible]



东条 麴町区内車所



小川 平土松

至心親年人

上海 永和洋行

城

山原 松尾

恭賀

丁巳元月

光緒

梅の枝に

小川老翁

集書

お別れと書こはれと其他の国まで大空に飛ぶ等の事多し  
と改題もたし其体面をなす

皇太后天皇の御葬の事と改題の事とを（梅の枝）  
とし潜りたるものなり其を改題しなすからしむる  
上世の事なり

大抵の事としておと二月の自らの葬の事なり相違  
とあるなり

大抵の事なりたし其の事なりと改題して其の事なり  
の自らの葬の事なりと改題しなす

大抵の事なりたし其の事なりと改題して其の事なり  
の自らの葬の事なりと改題しなす

大抵の事なりたし其の事なりと改題して其の事なり  
の自らの葬の事なりと改題しなす

大抵の事なりたし其の事なりと改題して其の事なり  
の自らの葬の事なりと改題しなす

大抵の事なりたし其の事なりと改題して其の事なり  
の自らの葬の事なりと改題しなす

二日夜も一と改題しなす



東京鐵道大臣官邸



小川平吉閣下

緘

信州より内郡  
黒川山

川島浪速

おれはよくわかん

後よりよくわかん

阿久比よりよくわかん

中可龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

龍石有書

故也 痛之至耳  
有 今 此 也  
之 也 之 也 也  
之 也 之 也 也  
之 也 之 也 也  
之 也 之 也 也  
之 也 之 也 也

昭和三年

九月

三月廿四日

川島浪連

故郷

山川鐵相諾

東京麹所区内幸町

小川平吉様



親和

丁巳三月

和歌山県  
東城貞洞  
関元植

科啓

時下各書信者極多

交契之於年中

余改程同是

不一方法亦記也

うき事等御為本  
年未見御傷程  
為牛目の上  
東の仕積り中書  
問は際も又何分  
有布衣有風流  
配は顔も友仕事  
烟疾有先を大

市子与而生焉

敬具

丁巳年

閔元植

市平吉閣

市侍史



名称	小川平吉文書
標題	韓国合併ニ関セル施設概要

M43.4

綴

分類 番号	

517

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

明治四拾三年四月  
滋賀縣立寺内  
千区付

草玉倉、  
英聯、  
施設  
概要

内田氏より  
本表、  
光生へ

大正  
年  
月  
日

小川平吉法律事務所

東京市日比谷公園前  
電話新橋五五二

○

出港より上り客付り

明治四十三年四月迄理大迄反幸肉子と送付

韓国合併ニ  
關聯セリ施設概要

韓國合併之關聯施設概要

一 合併宣告と同時に現帝ヲ華族ニ列シ特

ニ大公爵ヲ授ケ公債證書共々萬圓ヲ下賜ス

議者或ハ廢帝ハ典ヲ心ニ親王ノ稱

ヲ以テセシム欲ス心ニテハ斷心ヲ不可

二 現皇帝皇太子及太皇帝ノ邸宅ヲ賜ヒテ

東京ニ居住セシムルコトヲ獨ホシテ事ハ琉

球王及内地ノ舊諸藩主ニ於テハ如ク

ス

三、特殊、者ヲ除ク、外一般兩班ニハ爵ヲ

授ケ、全日ヲ下付セ、其処分ニ付キテ

新總督府ニ於テ更ニ詳細研究スヘシ

四、統監府并ニ韓國ノ中央政治機關ハ、之

ヲ之シテ廢止ス

五、新々ニ朝鮮總督府ヲ置キ、一切ノ政治ヲ

司シ、ノ保セテ立法ノ事ヲ委任ス

朝鮮トイフ名ハ昔時遼東迄ヲ包

含シ、今ニ因テ特ニ朝鮮總督府

ト名ヅル韓國ト云ヘ、名ハ可成人

ノ記憶ヨリ除去セ、ト欲ス、トナリ

朝鮮總督府ニ官房及内務部、殖産部、

度支部ヲ置ク

教育、行政、宗教、風俗、警察、其他、  
行政ト密接セシムルヲ要ス。韓國、  
現状ニ於テ最モ其然ニテ見ルナリ。  
殊ニ前途耶蘇教徒ノ手ヨリ國民教  
育ヲ分離スル等、事アルハ故ニ之  
シテ内務ニ合併スルヲ便利トス。又  
司法部ハ獨立シテ一部ヲ置クノ要  
ナシ。其事務ハ内務、一局ニ屬セシ  
ムルハ又ハ總督府、官房ニ屬セシ  
ムルハ不足ニ

總督府ニ總督（軍人）一人、副總督（文

官一人ヲ置テ親任官トシ部長ヲ勅任

官トス

六、参議院ヲ設テ参議官ヲ置キ重要ナル行

政事項并ニ法令ノ制定改廢等ニ関スル

諮詢ノ府トス

参議官ハ勅任トシ日韓西國人ヨリ之シ

ヲ任命ス

部長ハ職ハ最も重要ナルヲ以テ當

合日本人ノ候補ヨリ以テ之シ

任シ韓人ハ参議官ニ任命シテ之シ

ヲ優待シ不平鎮撫ヲ兼テテ國情ニ

通スル政治ヲ行ハント欲ス故ニ参



議院、韓國各方面の人材ヲ招致

七、十三道觀察府ヲ廢シ、更ニ舊時、如ク二

十三府廳ヲ置キ行政、大部分ヲ之シニ委任ス

八、府廳ニ參事會ヲ置キ日韓人ノ參事官ヲ

以テ之ヲ組織シ中央ニ設ケル參議院ノ

如ク府廳事務諮詢ノ府トス

九、稅務警察等ノ行政ハ之ニ付テ地方官ノ手ニ統一スル事

十、按察使ヲ置キ郡任官ヲ以テ之ニ充テ

總督ニ直隸セシメ一般行政司法及會計

等、監査ヲ為シ官吏ノ非違ヲ糾彈スル  
ト同時ニ人民ノ冤枉ヲ伸アル為メ其訴  
願ヲ受理ス

行政裁判所會計検査院等ノ代リ  
ナシ且ツ一般行政司法、監査ヲナ  
シ民心ヲ悅服セシムル機關ナリ此  
ノ機關ハ政治ヲ簡易ニシ地方官委  
任ノ範圍擴大セラル以テ特ニ其必  
要ヲ感ス

十一、新  
等ヲ調査シ行政立法ノ基礎ヲ作ル  
其局員ハ日韓人ヲ以テ之シニ任命ス

十二、合併、上ハ直々ニ全國人民ニ新政、  
趣意ヲ詳細ニ布告シ且大赦ヲ行ヒ無益  
ナル法令制度ヲ廢止シ若シハ慈善的處  
置ヲ執ル等人心、一新ヲ圖ル事

十三、現在韓國ニ於ケル行政、繁文縟禮ハ  
我邦ニ於ケルモノモ甚シ故、此際重要  
ナル官吏ヲ交迭シ行政、方法ヲ根本的  
ニ改革シ司法裁判所ニ在リモ更ニ其數  
ト階級トヲ減サシ且其手續ヲ簡易ニス  
ベシ

名称	小川平吉文書
標題	暴徒檄文才五輯

1832

分類 番号	

518

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

参

秘

暴徒檄文第五輯

目録

二 忠南觀察使

寄スルノ書(文)

三  
湖中ノ倭酋ニ示ス  
(説文)

五  
數  
告  
文

六輪傳文

文訓全書

東韓倡義尊拱大

李

東韓義尊錄

板

全

人

天

一



ゆき

九 通文(詠文)  
檄告文

召討大将  
倡義元帥中軍  
從事

金宗海  
北海正外一名  
二

さる

右 釋文  
通告文(詠文)

南山義將

鄭首龍  
京起陵

うなる

右 諭文(詠文)  
倡義將  
令永平面々長及各里長領任

趙雲植  
外署

かへ

たす

右 詠文

東韓倡義尊援陣  
餉官

李  
かり

い

右 譯文

い  
方も

き

右 詠文

東韓尊援倡義  
中隊長

李愚錫

は

忠心中景從校大將五轉  
あきれ

清々たる義人の教  
湖東左道佐實郡真罪儒生李錫庸忠満南界

山中ニ席蒙露處シ冤ヲ忍ビ血ヲ沫ヒテ百抹

うぶたをて見ても  
大皇帝陛下ニ上奏ス臣伏シテ以テ天下ノ

ひも運窮なり通  
余ヲ受クルハ國家ノ長策ナリ天下ノ事常ア

ひもリ變アリ經以テ常ヲ守リ權必ヨ変ニ如タル  
苦分て通義ナリ善運來事ノ到ルハ

天ナリ其來ヲ受ケ其至ニ應スルハ人ナリ故



天定リテ能ク人ニ勝ツ則チ不虞ノ難无接  
災君臣ハ但當サニ誠ニ盡シテ救フルヲ

惡ナキ然レバ天ニ勝ツ則チ既往ヲ悔ヒ  
新ナル新ナル新民ノ道由

新ハツテ興ル所ナリ然ラハ則チ須ラク其正ヲ受  
先王位ヲシテ故レテ新ヲ待テ有る夫レ君

本手ノ急務タル易カラス不治世ニ在リテ固ヨ  
氷ヲ涉リ時トシテ危ナラサルハナシ人ノ窮

人オハ其義ハ不變スル守見喪ハ是ニ於テ  
力其事ヲ語ラハ則チ常カ先王ノ世西洋ノ舟

力其事ヲ語ラハ則チ常カ先王ノ世西洋ノ舟

少  
= 提ツテ宇宙ノ全幅トナシ而シテ其外西北

新  
= 獲タ許録ノ土地人物アルヲ知ラザレバ則チ  
= 從前治乱運ヲ論ル者或ハ亦之ヲ詳

二セサルモ也夕天下ノ大界既ニ判セリ矣東  
南ハ陽ヲ吸カス氣ヲ專ラシテテ

力  
ナリ故ニ柔體ヲ用テ之が主トナシ文ヲ之  
カ正下ニテ成ルヲ爲ス

水  
陰ニ属スル者蓋シテ夜ニ提テ割キ流弊檀

探  
弱ナリ故ニ強利ヲ用テ之が主トナシ武ヲ

如  
 英義法德  
 營々タル  
 新創  
 轆轤競走

野矢ハ各ガ別フル而シテ今ハ則チ其覇業ヲ衰ヨリナカ  
ク笑何トナレバ覇ハ則チ其覇業ヲ衰ヨリナカ

ト地ヲ全聖蹟  
燦爛紀極アルナシテ聖々賢々衣冠世  
紀極アルナシテ聖々賢々衣冠世

然トモテ陸沈ス則チ陽ノ運氣極マテ夏ノ

テ利ニ至ルモノ之ヲ四時ニ譬フルニ春生夏

此度の榮光に過ぐらう未だ其の輝光が活き

活き山に散る朝花の露に等しく、然るに少くも

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

大に、其の真に大なる魚、小魚も勢いあり、漸く

半  
 天  
 悔  
 禍  
 天  
 所  
 手  
 徒  
 端  
 拱  
 晏

偉ヲ大邦ニ望マンハ無智モ亦タ甚シカ  
 三絶ヲ緋キ乳ヲ治ラセ  
 大邦ニ望マンハ無智モ亦タ甚シカ  
 三絶ヲ緋キ乳ヲ治ラセ

ヤ本  
人カ  
君好  
お龍  
給單  
身ハ  
ルモ  
望ニ  
富勢

ア急  
逼セ  
ザラ  
ンヤ  
小人  
容態  
死ヲ  
誓フ

爲ハナハ小人コノコ豪コウ竊セツ世セヲヲ蓋カフシシテテ起タチスス貪コン困コンヲヲ厭イハミミ

錢  
 樣  
 可  
 錢  
 日  
 本  
 故  
 以  
 夷  
 狄  
 餘  
 孽  
 餘  
 孽  
 餘  
 孽

國の書  
 天下ニ與  
 カルヘ  
 カラサルナリ  
 至尊不  
 二

ベキ郷ナル公論ハ此等事ノ所ナリ幽不獯

人至女政ヲ問フ古昔禹七リ國聖大自強ク國ハ

君ノ威儼ヲ整飭シ賢ヲ求ムル渴スル如ク治

引退後自ラ沮スルノ心ヲ有テ寧ロ一國ヲ奉ケ

ニ爾古息之懷キテ而シテ苟安タルナカルヘ

シ隱然シテ辭ヲ脩メ誠ヲ立テ優然トシテ薪

ニ卧シ膳ヲ嘗メ而シテ後子紀綱ヲ振肅シ號

今シテ鄰國ノ臣トシテ皇太后ノ御  
前ニ侍ルベク

聚珍堂  
百代詩  
十金  
義詩  
卷八

為之舉主。萬廉於博學。以之需。以商。必於。於。

而トテ薄世ハ  
 四ツ  
 怒  
 カ  
 採  
 為

臣等謹將陳賊下以軍性驕恣以爲所欲爲事

司中厚薄  
萬物之靈  
無不歸之  
明師  
守  
本  
後  
為  
公

有島全非下必規德樂多不循連

情レ謹ミ作齊治平精  
思鑒明主出与作の精  
主タルヲ失

此ハ天子ノ御宇ニシテ礼ノ聲ヲ聞キ而シテ不義ノ心ヲ

シテ反シテ薄命ヲ奪何セン坤聖天ニ賓シ萬古於地ス

至尊ヲシテ已ムヲ得ス唐肅宗高ノ故

然虚器ヲ擁シテ百官ニ蒞ミ名位重カラス朝

觀禮ナク賞罰行ハレス威權既ニ已ニ盡ク去

リ而シテ兼子テ且ツ倭髡ヲ被リ洋鞋ヲ着ケ

體貌尤モ不莊ヲ極ム孰レカ我上皇聖子

太祖神孫ニシテ而シテ是アリト謂ハン我國

家ノ大勢ハ膏肓ノ疾アルカ如ク手足毫髮一



琴月

トシテ病マサルハナシ華扁更ニ生スルモ手  
戸下ス可井  
シテ  
況  
未  
必  
疾  
及  
み

ひひ

護シテ醫ヲ思ムナカラス寧ロ身ヲ滅シテ悟  
ルヲモ者ハ則チ治何小申者ハ其ノ凱  
想  
之

の鏡

テカ息マン先公祀ラス上宮久シク鯨シ  
乃弟獨る易不  
則  
是  
宗  
社  
乱  
其  
後  
自  
獲

是

狂シ戦門雀羅シ諫路荆棘スレハ則チ朝廷乱  
ル其重傷儒老師教ヲ魔ナシ痒校草ヲ鞠ス  
レハ則チ士林乱ル矣男女輒別縊充種ヲ繁ク

詠

大膏澤源ヲ竭クセハ則チ閭巷乱ル矣徒タニ  
大ノスニ  
不  
鍾  
之  
天  
地  
以  
其  
運  
化  
也  
機ヲ奪ヒ微ニシテハ草木昆虫誅求ノ害ヲ受

すまび 電車鐵道 砲雨 血氣 我

あふ 額 覺メ而シテ 彼 觀然 文明 開化ヲ以テ 天

うげ 力ヲ優ニシ 人國ヲ七カ者必ラス 頭ニ保護ノ

ス謂フ 自 我レ盜ヲ防クニ 器械何ソ 用ナシ

昨年 自ラ我 中 國 產 物 其 爲 之 轉 手 ス

似 遠 々 大 韓 皇 帝 ノ 日 王 ニ 倅 シ キ ハ 大 越 皇

帝ノ法主ニ等シキが如シ 至尊父子ノ隔越

スル殆ニト咸宜  
業勤事語由之誠  
殊  
越  
己  
愧  
死  
而  
シ  
テ  
曰  
憤  
尸  
國  
勢  
力  
定

困シムアリ又夕清ノ徳ニ典スル所謂魯衛ノ  
政兄ノルニ材紳ヲ以テ立テ其方ニ  
レ面シテ陸下尚ホ或ハ恃ムアルヤ否ヤ噫

春

子

トス

輝々タル淵來應所ニ竊ニ負イテ而シテ起ル、毛寧曰此バ無道ノ世ニ處セラルルヲ思フ

才出  
た七廟人神靈付託既ニ重分天府

艱大ノ責ヲ軫念セズシテ而シテ只ク一身ノ

なる禍乱ヲ憐ミ愚夫愚婦ノ窮廬中悲嘆スル如クハ

ナル可ケン哉古ヨリ人君憂懃ニ玉成セサル

私ハ亦シ然ラズ願クハ冤心果敢知ル我東ノ教弊ト

受クルノ人シキヲ醫セシコトヲ美帝王ノ

経済ハ時中ヨリ廣クハシ細常毎朝乃

而シテ我ガ旧物ヲ守リ其利ヲ興シ其武ヲ尚

治乱相適モハ天下ノ運回ヲ可クシテ而シテ

天下ノ事定ム可ナリ前日ハ然ラス禮太夕崇

七

越越越

飾アリ清名虚譽一せヲ組織シ

以前

終ニ利ヲ信ヒ武ヲ事ヒ便ニ終身坎軻不堤ニ  
坐シテ而シテ國勢本弱シ管轄弱シ遷ニ上

之の源

弱ヲ解ヲ致シ制ヲ外人ニ愛シ之ヲ病ム者又  
結ニ結スル集ルコト秦ノ周ヲ排シ如クハ

倭り

ラ小是レ人ノ冠ヲ思フテ而シテ已シ  
ナシ標トナルナリ今ノ損益ヲ斟酌スルハ

越の國

難カラスヤ設ハ定アリテ一王不易ノ法ヲ為  
其害トモナリ其籍ヲ去ル者又

何也

統監視ウ五ノ百ノ家ヲ單子猶視シ連邦ノ  
殖ハ急先ニ實施シ易種ノ婚嫁ハ次第ニ進

都王行此致所  
乃上皇脚下三名  
臣家子孫五逆七賊  
雄唱雌和  
萬鍾  
世

王臣家子孫五逆七賊  
雄唱雌和  
萬鍾  
世

別動司以夫  
率子爾か調印セシ  
肆然予奪ス此  
點賊ヲ

とぞ  
而シテ二十萬同胞  
忠君死長ノ心ヲ含ム

下ノ是非  
是其  
寵ヲ治リ揚々意溢レ氣

誰力讀マバ則チ焚書ノ請臂ヲ攘フテ大ニ談  
畏レサル先ッ我カ心ヲ獲タリ東國通鑑後人  
謂ク金陵ノ

書  
易  
代  
氣  
冠  
彈  
見  
女  
相  
慶  
不  
閨  
門  
外  
交  
料

單于ニ望ム君ヲ視ル芥ノ如ク奪ハス厭ハス  
 謀ル事ニ親シテ犯ス隠ス  
 名譽  
 財  
 廉隅安シ  
 相ラ  
 暗室欺ク可久  
 十目

後何人視之蛇起生胸氣越城還步國

刻ヲ踰エスシテ而シテ莽草ノ集豈ニ亦タ衆  
怒ヲ興ニ勝ルヲ待ツ人ハ安ク秦を破ラズ  
ホス者ハ楚ニシテ而シハ實ハ則チ趙高ナリ

今宋  
 以之  
 實者  
 以有  
 實也  
 則必  
 道十  
 九代

病守母朝時當米樣雪

由天得子而子必不報之

美秋大子親華ノ正風十カニカニ最ル者ト君

祝日波無舞子自迷道守

所統樣世世賢伯天詩為悔有

則千覆載ノ間彼ノ影響ナキ久シカラシ今ヤ



力

白話

福壽

須臾之ヲ忘レシ武國ニシテセビザルアル

古都金

何人ニシテ未ダ死セザルアラス而カモ  
 我ノ身ハ則チ誠ニ天下ノ至

32

飛鳥志  
則才識天下大才

6

中  
水行通  
付  
汗辱ニシテ尚

わ

陛下前日燕閒、暇倘シ

書決人續  
ヲ  
燭  
セ  
ハ  
集  
廣  
東  
人  
書  
局  
印

京都念同の意ハサリキ今ハ

草莽播越朝ニ非ラサレバ則チハ聖躬威ハ  
親シ老此ノ罔測ノ變ニ當ルヲ慮カズ則チ寧

戎戎正ニ死ボルハ得モ為スナカラ  
ヤ抑モ或ハ懷王會盟ヲ之レ愈レリト為ス乎

梅阿彌の倒ルカキ下手絶モ總モ胸見シ  
テ羣吠四ニ起ル戰ハント欲スルモ兵ナク死

軒の玉を欲スルモ地中ニ墮ル君臣ヤ壓ヲ押

シテ援ヲ請フ我カ膝已ニ屈シ交隣ニ納賂ス  
彼ノ計奪ヲ得大に控ヒテ問ハル中ヲ流シ

語也シ私意我ノ君臣ヲ國師ノ獻靖元老ノ盡  
瘁相立ノ殉節ヲ以テスト魚ハテ而モ猶ホ

十

其ノ机皇ヲ救フ能ハズ但タ結飛血誠ヲ天日  
病ヲ村ニ賜神シ而シテ志ヲ奮  
地ニ入リ途

干ト伊ヲ為スノ義旅ヲ興ル亦タ多カラザ  
ルニ非カズ而シテ只タ器械ヲ利ニ縁リ羽

翼未タ成ラズ奔敗相繼然レモ十ヲ其國ノ  
為メニ料の念ハ肺ニ銘シ既ニ鑄可ナラハ

此ノ肉食ニテ謀遠ナキニ賢ラン或ハ公然討  
策の趣心私ハ為メニ公ハ為メニスシテ

而シテ義師ノ累ヲ為ス者ハ則チ蓋シ草澤ノ  
病ヲ多カクシテ南カモオオ林ハ倡絶ニシテ

僅カニ有ルナキノ故ナリ國朝士ヲ養フク盛  
病ヲ世ニ為スルニ合ニ絶ニ但タ憂々虎禍ヲ

梅雨の 經テ元氣漸衰病父其子ヲ訓ミ况其弟ヲ誨シ

軒の玉軀ヲスル心トナシテ我トナシ風節

シ專ラ門ヲ保持スル天也トナシ風節

且瑣屑シ肌ヲ淪シ髓ニ浸シ胎胎オナシ挽迄

ル又タ何シ其レ多キヤ故家ノ骨鯁僅カキ其

所收系而シテ廢存セラルレ替ナ死ス忠ニ死

源ノ葉以降死シ葉系トシ太事ト太存リ鄭一ニ首系

市收ノ無論自ラ好ナル者但タ死アルヲ知ツテ固

忠未一人、是二近似セルヲ見ズ皆十道理

未善ヲ美サハケ者カ申テ其時素ハ

其心も下非ニテ丹者死ヲ輕ム人曰母

免中者ニシテ行而シテ安意ニ叔下ヲ經綸

ル者ナリ附庭ヲ去ルサルニト二十餘年父祖

周大義ヲ解キ間々或ハ正ニ就キ道アリ而

二國邊必事東嶺ニ堅坐シ異論ヲ諒ナク

毛身ニ倭絲洋布ニ才ニ毛身ニ着タリ

理怨ノ界分ヲ明得シ華夷ノ防閑ヲ判得シ聖

中々國ヲ糟粕ノ有得下而シ母流俗ヲ黜ル

元祐ニ賦テ人ヲ完フセシテ欲ス竊カニ自

才



スルコト亦タ一級ニ過ク我人ノ隕縮且ツ三

梅雨の餘其戰績ヲ著シテ其功ヲ明クシ實ニ戰

ヒ五タヒ南原ニ戰ヒ再ヒ長水ニ戰フ且ツ全

軒の功ヲ著シテ鎮守ヲ龍潭ニ各使流の戰ヲ而

レハ勝ハ終カニ三四ニシテ敗ハ則チ十餘身

リハ勝ハ終カニ三四ニシテ敗ハ則チ十餘身

許ハ勝ハ終カニ三四ニシテ敗ハ則チ十餘身

くハ勝ハ終カニ三四ニシテ敗ハ則チ十餘身

又タ罪ヲ聲ラシ狄ヲ膺シ義ヲ陳ベ衆ヲ激

常取ルルノ舉ヲナシテ問有筆討ニ後生ヲ飛入カ

うかひ執事此カ以テ速ニ生禍穢ヲ兆ム目知ラ

時ニヤ冬ヨリ春ニ及ンテ賦怒慙々甚シク大ニ  
討伐ヲ張リ臣ヲ擒ニスル者ト賞スル者ト軍部

母々々太厚國ヲ持テテ國生勅降リ上

居々々山ニ水ニ家ニテ進々々号抵危ノ踪ヲ尋

有々々又是事以テ用ノ實ヲ諱ミ、又ハ同効ニ若

有々々又屬事不願鬼自シ云清脱々乃片臣

急用々々以テ能事ナセザルナシ偏裨卒伍時ニ

日ヲ傳執セテ皆ナ氣出シ賊ヲ罵リ輒々



極刑ニ断タル無識婦孺無辜切實省ス網  
羅ナル巧密ニ保護スルニ海陸ナセ

高飛遠走スルモ能ク免ル所ニアラズ幸終  
夕水始及失ハルハ閨里ハ死ニ抵ルモ感戴ヲ萬

猶ホ掩護ヲ思ヒ生ヲ全フスルコト積年  
當否無事ニシテ解ト是ニ由ル也

時ノ再ヒ謀ラサルヲ恨ム衆ヲ鮮キ而シテ倭  
因ハ暗殺ト上圖外元有ニ思裁後氏文報シ

のりノ竊ム新トナル所ナリ厥後六日痛哭シテ

定

毫下ヲ窮遣シテ更ニ為シテ遠延ヲ慰諭ス中路

ち

始テ臣ヲ識テ罪ヲルハ覺ル所ナキハ嘆息

中

能ハズ臣ノ佐品也知裁衣御ヲ能ハズ

も

家豈ニ有ルヤ勇ハ敵ヲ摧ク能ハズ敵蓋

と

大將ヲ奮リテ齊ニ勇ヲ示シテ解ヲ懼ルハ才難キ也

また

運籌多シ錯ニ難シ列陣ヲ觀望スルニ獨

い

三難ヲ所懐地ニ失テ奉乃筆詔ヲ辨テ衆威烈

り

三難ヲ所懐地ニ失テ奉乃筆詔ヲ辨テ衆威烈

り

三難ヲ所懐地ニ失テ奉乃筆詔ヲ辨テ衆威烈

富

富而シテ厚福ニ至リ人々之ヲ慕フ  
已ル分元省ル已ニ此ノ如ク之カ時局ニ参ス

子

子ス臣ヲ市ニ鉗スル者アラシ木石伍ヲナシ

先

先ス標顯親ヲ養ヒ庶幾クシク之ヲ棄輪の牧田ニシ

事

事スルニテ犬馬カ微沈素ヲ忠時偏ス君ヲ愛シ國  
ヲ愛スルコト孝子ノ目ヲ愛スルカ如ク恬寐

人

人ヲ愛スルニ進シ國權ノ日ニ復スルヲ祝シテ瞑目  
ニ進シ國權ノ日ニ復スルヲ祝シテ瞑目

を

をスルニテ忠臣ノ誠地ヲ盡スルカ是レ其趣乃

先

先ス而シテ志退カザレナリ敏テ古大有為

復

復タ忠ヲ謀

復タ忠ヲ謀

復タ忠ヲ謀

復タ忠ヲ謀

復タ忠ヲ謀

おれはるるおれはるる  
君タラニラ欲ハ當サニ先ツ大有為ノ志

の勢も我多ク前言行ハ性行ハ識ハ外誘ハ痛

天ナ絶シ統資ヲ涵養シ德性ヲ薰陶シ誠内ヲ積累

の公謙ヲ博採シ諱ヲ善クシ功而シテ死疆ノ裁

ナ天ナ義ヲ知リテ清高トシテ強鄰ノ僭辱ヲ謝

シ生殺ヲ掌握シ逆アルハ必ラス斬リ忠義ヲ

崇獎シ寛リシテ伸ビサルナク徳ヲ輕クシ賦

宅ハ薄々シテ民加チテ將天武ヲ講テ射ヲ禁モ

以テ兵威ヲ蓄ヘ時務ヲ敏達ニシ才貴賤ヲ問

然ル後庶官庶政ハ一ニ正ニ出テ邪氣ノ其間

その品ニ在ルナ後得後得ル皆十吾カ有ト十  
リ厚載ノ外ヨリ來リ見ル身ヲ駐シ王

後ノ為メ後ノ雪キ朝服到リ同ノシ五季ノ半息ム

其ト也ニ代立聰明譽臨ル可キナリ天功アリ

味極ル謙ニ謙ニ未タ違ラスト姑ク退託ヲ為スカ

必シ才ニ至リ計ル心ヲ降下今ノ月ヲ起リ七

國ノ君ヲサレカ試ニ之ヲ思ハル則チ

千朝廷果シテ降下朝廷人民果シテノ降下

差シテノ地果シテ降下自專力ヲ竊ガル

暇乃

以有書ニシテ其有難スル聖人ヲ難ヤトタル

トコロ然レトモ一ニ言ニシテ而シテ天下ニ辞

リ近日合國問題ト伊藤ノ慈悲ニアルカ

呼吸存此ノ一着ニアリ上皇勅約ト時ニ

シテ八字ノ一ヲモ許ス可カラザランヤ

金在フ邊リ神明モ感セザルヤ不逆党之

ヲ視テ茂如カリ碁ヲ豫目スルカ難萬古追レ

難モ陸下此ニ當リテ別ニ他策ナク教然ト

彼人ノ抑ヘルトコロトナルモ内ハ以テ倉生

[illegible]

かしつけの お 付しりひ

た 世に盛衰ありては 意實 其中ニ寓セシヤ 帝ヲサカス

も 利ハ此路ヲタリ 開以遠シヨシテ巡セサルナ

富 富ニシテ 警國ノ東面京邑ニシテ 至尊ノ統御所ナリ

今 今ニシテ 追ニシテ而カモ 權ホ之ヲ七

光 光ニシテ 提婆漢ノ意ニシテ 自ラ範

大 大ニシテ 提婆漢ノ意ニシテ 自ラ範

テ 提婆漢ノ意ニシテ 自ラ範

何 何ニシテ 小人ヲ寵スル畢

十七 利益ヲ而シ



留沙今夫戚朕不義弘範以爲庶擢力

考人列邦金盛ノ君臣ヲ見ニ異日間闕ノ時何ノ辞

はたぐり先生易謝の力た先角長本の天満市吏

ハ本後統中世名庭ヲ顛ハマ後代も微々清平

分をり市必シテ而も其賊謀此症ルモ患ノ奥メ

爲カラス先割ヲ荒墜シテ眞罪ノ重キ春山猶

あふあふ舞休兵ノ初角中角の角入角大角一事

志心配天ヲ仰キ太息シテ止ム今ハ則チ果シテ誰

岡あし力事  
あれむべき

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

あはで裁疏  
徳壽宮  
矢勝  
其時陳情

列傳 王情事 君父前は暴白セサルヲ  
得サハナリ唐時ノ男子猶ホ等ヲ關門ノ外ニ

古自藏自亦聖明ノ朝ニ於テ此等ノ人モ

忠言ハ耳ニ逆フモ治日猶ホ乱セラ戒ムカ  
如利口種々覆シテ日常ニ祥瑞ヲ奏ス故ニ

名康尹煌ハ丙子チ禍根ヲ植信不有ニ論者  
評見以テ先以不祥ノ語ヲ為ス今臣目前ノ

通表ノ陳ノ少少ハ東顧シテ見テ然レト

モ逆臣ノ輩或ハ摘シテ口實トナサハ則チ所ハ

少也請ニ罪臣ノ少少ハ東顧シテ見テ然レト

サハルナリ尚シ舊テ歸順セサルモ

其ノ罪案ヲ勒成リ而チ倭カ復舊ハ計ハ為

ひる日姑國を起し先王ノ警ヲ果シテ誰レカ

急ニ衆シテ爾等もあや賜命も以テ彼ノ鮮嚴

丙枕乙夜ニ雷神澄省シテ以テ臣ノ

窮乏憐ミ臣妻賜抱便あまきガシ難カク

可アラバ亟カニ王章ヲ施サレヨ臣天ヲ瞻

末れ乞雨月廿五日誅にいしせき次

つむす許許様とめ店様ひる

古自忠南觀察使閣下金華ヲ柱トシ風雨ニ

湖南倡義士ナリ十九

櫛ルコト茲ニ三車兵ハ義戦ヲ以テシ筆ハ聲  
討ヲ以テシ百敗踪ヲ危フシ畢竟釵ヲ解ク區

々タル血誠斯ニ於テカ盡ク矣但シ身既ニ國

天ノ為タレ其功績乃チ腐臭君ヲ告月ルハ  
文字ナシ若シ罪ナクシテ然シテ徑テ退クハ

天甚タ謂カシテ其功績乃チ腐臭君ヲ告月ルハ  
シ闇ニ味フ豈ニ快治ナル義氣ニアラザラン

彼の敵ヲ討シテ元機摩スル者ハ存ス已ム

天越ル縣道封章ノ計ヲ為ス而シテ地地方ヲ  
越ル縣道封章ノ計ヲ為ス而シテ地地方ヲ

は無最中沮セラル是レ忍ハント欲スルモ孰  
は無最中沮セラル是レ忍ハント欲スルモ孰

富人カ忍ハ可カラザラン而シテ敢テ

厩閣下ニ精アルモ其ノ非ハ其ノ非ナリ其ノ非ハ其ノ非ナリ

ナカラシテ獨リ明公ヲ舍テザルモノ竊ニ以アルナリ即地光

明ヲ布聞スルハ或ハ其時ニアラズ則チ雍容

啓建スル所以ヲ圖ル好キニ似タリ設ヘ或

ハ彼ノ中ニ漏洩シテ誅罰セラルハ僕ニ在

リ

公何ソ預ラン國ヲ辱メ師ヲ喪ヒ耻雪カンモ  
東海ノ盡キ難キカ如シ甸宣分憂責泰山ト俱

ニ重シ死生相恤ミ窮通相資スルニ當リカヲ  
邦難ヲ濟ヒ民溺ヲ拯フノ萬一ニ致シ而シテ  
秦ノ越ノ脊ヲ視ルカ如ク一箇書生ヲ度外ニ  
置ク可カラザルナリ唐虞千古夷齊九原踴涼  
安クニ歸ラン痛哭ノミ

巳酉三月 日

生 李錫庸再拜

(三)

湖中ノ倭酋ニ示ス

嗚呼人ノ國ヲ得テ而シテ已レノ國ヲ失フハ  
王者ノ不祥ナリ人ノ財ヲ奪フテ而シテ已レ  
ノ財ヲ費スハ盜者ノ不智ナリ天下人ヨリ神

ナルハナシ而シテ日人ノ愚ナル獨リ禽獸ノ  
ミ大韓ヲ以テ大韓ヲ伐チ自ラ謂フ計ヲ得タ  
リト而シテ東洋ヲ以テ東洋ヲ伐ツ未タ誰カ  
術中ニ墮ツルヲ知ラサルナリ之ヲ譬フレハ  
則チ西洋バ釣ガリ日本ハ餌ナリ清韓ハ魚ナ  
リ餌ナケレハ則チ釣モ其域ヲ施ス能ハス魚  
モ亦タ其毒ニ中ゼス而シテ漢功豈收ル地餌  
獨リ其ノ金ヲ得難キナリ手噬餌カ何リ其ハ  
愚ナルヤ我ハ即チ大韓湖南ノ義兵將ナリカ  
五回ノ血戦我カ誠力ヲ竭シ萬言ノ筆討爾カ  
罪惡ヲ聲ラス外國瞻聆應サニ了然自ラ在ル  
ベシ善ハ我カ為ノニ爾カ君相ニ辭セ日天下



無道鬱々安分ニ居ラン今日吾西の方山ニ入  
ラス則チ必テ不東の方海ヲ蹈マ

巳酉三月

白ハ

義將

李錫庸

右大皇帝上疏外ニ通ハ一封ノ紙色トナシ  
忠清南道公州郡邑内古山街西方喪葬庫ハ  
壁上ニアリタルヲ公州警察署巡查カ道  
修繕用ニ供スル石塊收集ハ舊メ今所ニ至  
リ發見セシモルナリ

四

廣告

廣告ト云フモノハ之ヲ哀情ニ告ケ而シテ人

一計ナリ然ル後民僅カニ命ヲ保ツ彼レ或ハ  
 唱ヲ止ムルレハ則チ義ト民ト相當的ニシテ  
 綏ニ妨ケナシ故ニ人心ヲ照ラス實ニ是ニ如  
 カガルノミ古人云フ長歌ハ慟哭ヨリ甚シト  
 今ノ事勢ヲ揆ルニ以テ一大長歌ト謂フ可キ  
 ノ時ナリ悠々タル蒼天此レ何ソヤ日暮レ道  
 遠ク人間何世カ之ニ過ギザレノミ嗚呼何ヲ  
 以テ則チ民弊ヲ祛シ敵勢ヲ消セシ敵勢消ス  
 レハ則チ民弊怯セスシテ而シテ自ラ怯ス義  
 起ノ地弊ナカルベカラス大陣行クノ地當チ  
 ニ財穀ノ費アルベシ而シテ横難ノ輩隙ニ乘  
 便ヲ候ヒ村巷ニ出沒シ義藉ヲ侵索シ深

常ニ痛嘆ス出タル愚漢以為ラク義ナシ  
 ト亦ク此ニ其歸ヲ究ムルナクンハ則チ弊ハ  
 敵ノ之ヲ致スアルニ起リテ義ニ起ラヌト我  
 以為ラク此ノ敵ナケレハ則チ弊ナシト國家危  
 急ノ境民得テ以テ安堵スルハ天ニ非ラサル  
 ナリ敵黨猖獗ノ際義得テ以テ舉テサルハ民  
 ニアラサルナリ義ト敵ト相戦フノ日民得テ  
 以テ弊ナキハ理ニアラサルナリ蓋シ天心ハ  
 即チ民心ニシテ即チ理ナリ萬姓ノ我カ天  
 順ヘ我カ心ヲ守リ其ノ理ニ從ヘハ則チ前路  
 稍々明カナリ天ニ久陰ハ理ナク人ニ久至ノ  
 數ナシ當サニ國家中興ノ運更ニ天日太平ハ

象ヲ賭ルヘシ

談面各里ヨリ一々輪示シテ漏賢ノ地ナク

シハ幸甚

巳酉榴月十四日

湖南義士 李鳳安

先鋒 朴永化  
中軍 鄭兩相  
左部長 李云集

(五)

檄告文

大凡國泰民安豈事勢之所固然也即國家不安  
則為其民者豈可以安堵即主辱臣死豈職分

臨御以後互取謂曰皇明治倍義專姿立正逆天  
違命復為猖獗之意立水遂設開化之名立水至  
於亡未十月前所條約之定外環東土為臣民者  
何取不忍聞何立不忍言之地也外呼嗚痛矣此  
五百阜宗社外一朝一夕何胡至於此名閔名之  
刺腹外趙國近飲藥外金奉學之狗蘇外良以此  
也外今日皇之請也許之也立亦也外立亦許亦  
七外以國勢如是茂葉而八諸君子外誰非無倡  
義之舉而徘徊矐慙立水至若肩錚鎬赴湯火則  
寥々未聞立水此曷故焉立水方今國執多艱立水  
王事未監立水若父坐針氈之立水豈非  
人臣死節之月外何由矣外在塗之伸立水政值

之所當為也。臣主上見辱則為其臣者，爰暇以厥身，引豆思之，則一身之憤，亦歲難裁。臣言之，臣而眼之，血泪不止，臣呼鳴，臣三千里疆土，臣為人附庸，則先王之宗社，豈置之伊地？臣億萬命，臣民，臣為人奴隸，則乃祖之家，廟豈對以伊顏？臣豆噫彼島夷，七素以犬羊之徒，豈敢為豺狼之志？臣外昔在龍蛇，川無端構募，臣外不意動兵，臣外犯宮闕而犯先陵，臣外焚太廟而焚聖殿，臣外此及不共戴天之誓也。臣孰不切齒腐心乎？臣外于時川羽檄交馳，臣外義旗爭起，臣外忠武公之英畧，臣外創造龍船，臣外李提督，臣外援兵未到，龍濟臣外剿滅凶賊，臣外與復舊都，臣外臣速至我聖上。

英雄立功之秋。以膏腴復誓。是。一國之所願。以  
 丘束手受辱。是亦百世之恥。以若五百年倍  
 養之化。豈無二三豪俊之士。引義之所在。以  
 死不敢辭。是以壬辰之亂。金應甲倡義於海  
 西。李士馬如雲。李郭在佑。七起兵於嶠南。李  
 永施旗蔽日。以遂掃群凶。李郭清大都。李  
 以平秀吉。清正億萬大兵。且一朝散之。李永  
 令甲以還。以。况今公磨一小醜乎。伏願諸  
 君子。七伏以春秋大一統尊周之義。李勿為新  
 齊之汨。李特設葵邱之盟。李一以問賣國之  
 罪。李以一以復戴天之誓。則家國幸甚。以。臣民  
 以。

隆熙三年 月 日

東韓倡義尊攘保護將 洪元裕

右譯文

凡少國泰分ハ民安キハ事勢固主リ然リ  
トスル所ナリ國家安カシハ則チ其民少  
ル者ハ豈以テ安堵シ可シヤ主辱則チ臣  
死天職余ハ當テ然ニ思ヘ未所ナリ  
主辱シタルハ則チ其臣タシ者爰シ暇  
スニ厥身ヲ歎天ニ思ヘ然則チ一身素憤  
歳コト月日裁シ難察之ヲ言ヘ但西眼血泪  
ヲ不鳴呼三希畢ハ疆土外ニ附庸トテ事ナ



則先王ノ宗社ハ之ヲ伊地ニ置カシ億萬命  
ハ臣民人々奴隸トナサバ則テ祖ノ家廟  
ハ対スルニ伊顔ヲ以テモシ境彼島夷ノ素  
太羊ノ徒ヲ以テ敢テ豺狼共志ヲ為テ黃龍  
ニ在リテ端ナク募ヲ擣ヘテ不意ニ兵ヲ動シ  
宮闕ヲ犯シ先陵ニ犯シ太廟ヲ焚キ聖殿ヲ焚  
キ此ノ所及テ其ノ天ヲ戴カザルハ聖王ノ熟  
力切テ蕭腐心々其ノ不時羽檄交々馳ヤ  
テ義旗争ヒ起ル忠武公ノ英畧ハ竜船ヲ創造  
シ李提督ノ援兵龍灣ニ來到シテ凶賊ヲ剿滅  
シ旧都ヲ興復セリ我々聖王臨御以後ニ至  
ルニ遠ニテ取謂日皇明治ハ義ニ倍キ姿ヲ專

ニシテ天ニ逆ニ奉ニ違ヘ復テ猖獗 意ヲ爲  
シ遂ニ開化ノ名ヲ設ケ七未十月ニ至リ新條  
約ノ定メテ如キ壞東土ノ臣民タル者聞クニ  
思ヒス言フニ忍ビナルノ所ナリ嗚呼痛イカ  
ナ五百年ノ原杜ク一朝一夕ニシテ胡ハ此ニ  
至ラシタル閨宮ノ刺腹平趙關ノ飲藥ト金奉  
學ノ殉節トハ良市計此ヲ以テナリ今日皇天  
請之ヲ許スモ師久知之ヲ許サハルモ亦夕  
七カ國勢是リ如ク發葉少カテ八道諸君  
子誰カ獨義ヲ舉ホキニ非ラナク然ルニ排  
徊腫鬱シテ鋒鏑並肩湯火ニ赴ク如キニ至  
クハ則チ變シテ未タ聞キ世何ノ故

方今國勢多難ニシテ天子事未分監セズ、君  
 父細針紐々此處坐臥豈安人臣節ニ死スル至  
 日生靈塗炭中旱在ルニ非テサレカ族廿ニ英  
 雄々四安少少秋葉値下膳日嘗人警衛復  
 添止々是レ一國々願力所ニ諸カ手カ康海辱  
 知受以信々亦身百世耻以中レ中カ五  
 百年培養人他々以所三豪俊、其力元々  
 中義正在ル所死敢之辞々是天以元壬辰人  
 乱ニ公金應西義、海西ニ偶々元吉馬雲人如  
 以郭有佑兵、嶠南最起、元旗旗日々較へ遂  
 三群出、掃除々大都々廓清、太平秀吉清正カ億  
 萬々太兵々以天スルモ一朝々百カ之、散々

令甲十シテ以テ遷シム況シヤ今此リ一  
小醜ヲヤ伏シテ願フ諸君子伏シテ春秋  
大統尊周ハ義ヲ以テ新齊ハ泪ヲ為ス勿止  
特ニ葵邠ハ盟ヲ設ケ一々以テ賣國ハ罪ヲ問  
上ハ以テ戴天ハ誓ヲ復セバ則チ家國ハ為  
臣民ハ為忠幸甚ナリ

年月日

氏名

(六)

翰示

去四月三十日桐寧郡日本分遣所憲兵隊長伊  
藤松吉ハ補助員無名ヲ特派シ本陣ニ書ヲ送  
来

日本陣大將、其理由、論責、其外、彼倭賊、侮辱  
ス、實ニ痛慨ニ堪ヘサル所ナリ

凡ソ我韓人民ハ愚夫愚婦ト虽片磨養擦掌シ

彼倭賊ノ肉血ヲ飲喫スルノ覺悟ナカルヘカ

ラサレ、時ニ當リ、談憲兵長ノ帰順勧告ハ是

以、抑モ何意ナヤ解スル能ハス

感慨此及、父覺誓ス、戦ム氣ヲ催テ、力

我、我同胞、此、今文ヲ鼓舞、坐忍奮發、

テ、増進、氣ヲ養成シ、一敗決シテ、挫折スル力

外、再三、再興起、矢、矢、猛烈、奮、前進、試ミ、

救度、人、轉敗モ、遂ニ、空、勝、天、制、不、陽、春、再、興、

来ルノ目アハルニ財非スヤ

近日所謂前義兵長朴鍾漢ト稱スルモリ自賊  
ト付托シ自ラ平和先生ト稱シ各陣大將ノ印  
章ヲ偽造シ自巳ノ印章ト共ニ揮捺シテ各郡  
方面長ニ先ニ各郡ノ義兵ヲ帰化セシメタリ  
云々ト妄説ヲ流布シ唐國耶噫林所為ヤ實  
ニ憤慨ノ至リナリ然レトモ彼等ハ后日必  
ス法廷觸罪スルヲ由テ壯烈ニ討公我同胞ハ宜  
シテ彼等先賊ノ奸計術中ニ陥ルコトナク自  
巳ノ精神ヲ強固ニ持シ以テ瑞士ノ建國ト萬  
歳ノ独尊ト各道ノ念頭ニ警キ越南波蘭ノ  
民同ニ境遇日陷スルコトニ努ムヘシ



如何何時火燒也元レリ力何時水中に墜落  
セシ力實ニ危機一髪ノ境ニアハ是ト我國  
現今ノ狀態大ニ此時ニ當リ如何汝等手暇  
施スヲ以テ案當ト申ス力本大將毛我韓國  
二十萬中ノ一倭分子嗚リ今亡君破國ハ眼  
前ニ迫リ憤慨ハ愈因疾治日破滅耳義ヲ旗  
掲ケテ日ハ既三三屋霜子無々ト又ル毛未  
其効カヲ發現スル能ハス僅ニ聖王陛下  
御心ヲ悩マサ世世給蓄下ル生民塗炭ノ苦  
ル是ハ生民強弱同シ力ヲササレ仁出テ  
ル毛ノ夕天ヲササレ切而久彼等不義賊臣  
世受以共ニ知ル所也新天理ニ謀以所  
三十



ナ非如何力義ヲ以テ彼等死賊ニ當リ得  
ル子トスルヤ何時カハ彼等死賊ヲ再  
以能ク其境遇ニ至ルヤハ其日ヲ  
本陣中治ハ何等野蓄ノ財其力加  
費用ハ其財多キヲ加ハ其勢力  
此ヲ以テ我同胞ニ金權セシメ  
三浦口ヨリ川三萬兩百圓徴收  
金ニ施シテハ其弦長發訓以令到  
謀ヲ開キテ二萬兩ノ軍需金ヲ直  
多若シ其悲勢力ヲ籍シテ軍需金  
心場盛興ハ軍律ヲ施行スルニ  
心知ハ其和其理ヲ辨ハ軍律回  
觸ル中力加ハ其

コトナク速ニ來納スヘシ

隆熙三年六月三十日

東韓倡義尊撫大將 延

追テ軍需金來納日ハ東月十日  
自標ハ鞍山店里東山洞ト定ム

(七)

敬テ啓大時維民中秋

尊體百福頌祝分僕等天頂地ヲ履ム

共ニ天ヲ戴カサハ警アヒ以テ此ノ默ハス可キ

對テ此ノ如ク說ス我々或ハ今茲仲告ス庶外ハ深

拜撫ル可キヲ惟大司我環三千里東方ノ一偏

三十一

邦洲小擡筆天宮以下  
禮義文明教君臣父  
子倫中  
其元越元長王在リ  
誓々島夷陵也  
旌旗即鐵劍滅也  
今與天至  
リ又爲此獨振  
少人民  
本性  
宣  
習  
懲  
ア  
リ  
ヤ  
僕等積鬱ノ恨  
勝ヘス  
丁未定約ヨ  
リ以後特ニ義旗ヲ起シ四方雲ノ如シ  
而シテ  
在朝ノ諸公心ヲ同フ  
以テ  
誠ナカラシヤ  
且金彼  
草ノ壓制ノ中  
局セ  
テ  
東自韓  
由テ  
得サ  
辦大  
致ス  
如カ  
方今公ハ總  
理人  
職ニ  
居リ  
必  
ラ  
ス  
卧薪嘗膽ノ苦  
アラシ  
而  
モ  
亦  
夕  
見聞ニ  
局セ  
ラ  
レ  
心ヲ  
叩シ  
道ニ  
向フ

能ハサルノ致ス事コトナル僕等豈ニ其赤  
心ヲ知ラサランヤ然ルトモ僕等遠ク郷曲ニ  
在リテ情素ヲ仰希スル能ハス且少公ハ城堞  
ニ居シ又夕明白國通及方ル能ハサレナリ嗚  
呼慟シキ哉何リ盡シ白不可言シ顧フニ今民  
事秋ニ當リ以テ時ヲ奪フ可カラス又夕軍中  
ノ需ヲ推用ス可カラス即チ仲秋ノ望ニ於テ  
幸ニ令姪ト期セサルノ中ニ逢ヒ方サニ軍中  
ニ留繫ル公然喬林協世臣外以テシテ豈ニ犬  
馬ノ誠トカラシヤ惟フニ我秋ニ當リテ軍用  
萬調度ノ理大シ公ハ君ヲ愛シ姪ヲ愛スルノ  
心ヲ以テ特ニ百萬田ヲ金ヲ賴シ以テ家國以

事ヲ全フ也バ千萬幸甚也哉  
今曰東形地  
ヲ省ヨ遂ニ是ト誰家ノ措慶  
隆熙三年八月  
東韓倡義尊攘保護將洪元裕

(八)

夫一人ノ倫義ヲ默ト共ニ  
不可カラズ中華  
以テ夷ニ變スバカ  
ラズ故ニ臣子  
蘇ナリテ外  
賊ヲ討ツバ天地間  
ニ一大義理  
ナリ一度晦冥  
ナリト自天地  
ノ為メニ傾覆  
ス人類  
公為メ  
殄滅ス夫上下  
数千稔其  
言ヲ  
著書  
ニ從ヒテ其  
踵ヲ繼  
キ苦心  
極力  
シテ鞏固  
者ヲ

扶持スル之レ義ヲ唯々我ト東方ノ僻隅下  
虽トモ其ノ舊疆ヲ以テ中夏ヲ遺章ヲ守リ一  
葉ノ青ヲ得テ五百年茲ニ至リ不韋ニシテ運  
否ニ妖孽盛ニ臻テ外夷猖獗ニ内賊横行  
ス甲申ノ變ヲ履ミ翌ハ甲午ニ堅氷シテ今日  
ニ至リ其極度ニ達ス形外頗倭形ニシ服裝  
倭着ニシ官モ亦倭官ナリ堂々外礼節  
國ヲ以テ小洋原倭ヲ作為法國母ハ首世ノ報  
警ヲ被リ君父ノ辱古ノ凌辱ヲ受テ能ク之  
如何ニ止テ朝宇ヲ保ハ閣巷ニ至ルマデ一  
人ノ雀ヲ逐ク鷹鷂ニ死然首ヲ低ルテ今  
聽ク數行涙子ハ職蔵出テ此ノ如シ山林外

澤戸簿財籍その他俸役指揮悉夕彼林倭  
人ノ掌中透入書讀幅泥共名保以太今今  
道所蒼生悉降臣僕奴隸小附慈三至小始上  
聖人倫ハ禽獸ハ異カル知世天地將世是傾  
覆ヤ心ハ心ハ願將世珍滅因世上香之々當  
世如何言ス不ク亦ハ傳ハ里多吾未名義者  
之變又聞在又里多乱臣賊子先ツ其党未治  
之中又曰君父誓ハ基三天戴カス上各  
曰ク宋葉尊上義狄又攘曰ク孰上之  
世成ツハ待ス上此と春秋大義ニシテ  
綱目及上東史主有大小丙申之變六教翁ノ  
奉持リ上已ノ禍ハ此レ三戒ノ為大リ未

人慘雲亦夕此ヲ以テナリ今日尚ホ義ヲ継ク  
モハ天ニ應シ國變ニ隨ヒテ觀感頻リニ起ル  
強秦ハ蚕食既ニ久シク愚宗ノ金謀測ル可カ  
ラス我カ國郡ノ江南一區ハ變事常ニ加ハル  
モ楚囚ノ悲慰スヘキノ辞ナク而シテ會誓ノ  
宿耻臥薪嘗膽ノ志ヲ共ニスルナシ河北ノ將  
卒舉テ皆ナ沈船破釜ノ計ヲナシ而シテ義ニ  
仗ル仲連ノ如キ却テナシ田單カ齊國ヲ復セ  
シ勢ヲ得一麾兵ヲ千里ニ募リシニ聲ニ應ス  
ルノ意アリテ而シテ謀ラス人心亦タ觀ル可  
シ古ヨリ彼ノ賊我カ國ニ盈滿シ今ハ其駐屯  
スルコト愈々甚シゲレモ天ハ必ラ不返復セ



ニ況ンヤ我々之ヲ視聽スルニ於テウヤ虎前  
ニ俵鬼ノ甘心以テハ皆是レ亂賊ノ甚シキモ  
ハニシテ固ヨリ先ヲ誅スルキハ亦夫レ天地  
間ノ大義ハ華ホ為ル果夷ホナラズ人トナリ  
テ默シナラズ其特臣子ノ道ヲ尽シ天ト應シ  
変ニ隨ヒ人心ニ從ヒ而シテ容レサル者其レ  
皆ナ来

永曆五巳酉五月初吉 召討大將 金宗海謹檄

二〇

嗚呼即唯我元帥部中軍將李殷瓚氏名痛我二  
千萬同胞ノ盡為倭賊ノ犧牲古立五百年宗社

小將為丘壘故忠義所在不可坐視卧首唱義  
旅以四方響應處々雲屯到如勝捷事將垂成矣  
卧卧天運不助時事不利見欺於陰譎附賊之類  
玄卧被控於倭賊多月在囚卧小不屈節玄已竟  
死於獄中玄卧萬事已矣旺運衰矣卧為我同胞  
者聞此事變玄卧就清流涕痛恨哉卧噫彼附倭  
車某卧咱於倭賊卧行賂玄卧行此萬古凶細不  
忍之爭玄卧至今頭足尚全玄卧豈可曰天理乎  
唯我三人卧後事於中軍部下三年服勞一心奉  
行矣卧卧遭此萬古意外之變玄卧義理卧在卧  
不可不復誓而顧此力卧勢孤玄卧忍痛含冤玄  
卧遷延歲月卧以待機會玄卧全陣近境玄卧聲

罪誅戮為計矣。日月時日。漸久。事多不諧。惟我中  
軍在天。忠魂外似不可。雷魂於地下。故中夜研劔  
外。天人同謀。哀此萬死之計。外。挺身突入  
外。誅彼附倭。幽賊。外。雪我二人之積冤。之萬一  
亥。牛。嗟我。一洞大小民人。長勿為驚動。外。已勿以  
為。恠。亥。外。少有棄。棄之心者。孰不見。爽快乎。今我  
二人。外。炮殺申賊。外。已若無數字。公佈則噫。彼洞  
民。莫知事端。故把筆。泣血。外。以此檄告。亥。外。嗚  
呼。痛憾。外。外。

光武十三年八月十五日

倡義元帥部中軍從等

柳海正  
鄭宗實

右譯文

嗚呼我が元帥部中軍將李殷璜氏、我が二千  
萬同胞ノ盡ク倭賊ノ犠牲トナリ五百年ノ宗  
社將サニ丘墟ト為ラントスルヲ痛ミ故ニ忠  
義ノ在ル所坐視ス可カラストシ首トシテ義  
旅ヲ唱ヒシニ四方響ノ如ク應シテ如クニ雲  
ノ如ク屯ホ到処勝捷ス事將サニ成ルニ岳  
トシテ天運助ケス時事利ナラ不陰譎附賊ノ  
類ニ欺カレ倭賊ニ控セラレ多月ノ間、囚ニ在  
リテ少シモ節ヲ屈セ不竟ニ獄中ニ死シ萬事  
已ミ旺運衰ウ我が同胞タル者此ノ事変ヲ聞  
キテ孰レカ流涕痛恨セカラシ哉噫彼ノ附倭

申某ハ倭賊ノ行賂ニ咎ヤラレ此ノ萬古迄細  
忍ビ州ノ事ヲ行ヒ今ニ至ル頭足尚ホ全  
シ豈ニ天理ト曰フ可ケシヤ我ニ人ハ中軍部  
下ニ從事シ三年服勞シ一心奉行セリ此ノ萬  
古意外ノ變ニ遭ヒ義理ノ在ル所復誓セサル  
可カラズ而シテ顧フニ我カ力縮レテ勢孤ナ  
リ痛ヲ忍ビ冤ヲ含ミ遷延歲月以テ機会ヲ待  
チ陣ヲ全ラシテ境ニ近ツキ罪ヲ聲ラシテ誅  
戮計ヲ為サントスルモ時日渺久ラシテ事多  
ク諧ハズ惟フニ我ハ中軍在天ノ忠魂冤ヲ地  
下ニ雪ク可カラサルニ似タリ故ニ中夜ニ劍  
研キ二人同謀シテ此ノ萬死ノ計ヲ出シ挺身

突入シテ彼ノ附倭ノ凶賊ヲ誅シ我二人が  
 寛ノ萬一ヲ雪カントス嗟我が一洞大小民  
 ハ以テ驚動ヲナスナカレ以テ恠トナナ  
 レ少シク憂ヲ集ルノ心ナル者孰レが爽快ト  
 曰ハヤランヤ今我が二人が申賊ヲ炮殺スル  
 王若シ之ヲ公怖スルナクハ彼ノ洞民ハ  
 端ヲ知ルナカルヘシ故ニ筆ヲ把リ血ニ泣キ  
 此火檄告ヲナラズ嗚呼痛憾々々  
 年月日  
 氏名

敬通告  
 三二  
 敬

嗚呼痛哉東國ノ運ヤ天ノ能ク人ヲシテ諭  
 ス知ナキハ痛嘆スベキ事ナラズヤ我朝五百  
 年來礼樂法度燦然トシテ設備セラレタル箕  
 子ノ遺風ナルニ國運ハ不幸ニシテ甲午以後  
 倭狄ニ侵サレ無相無法ニ自行自施シ而シテ  
 臣モ亦タ甘味ヲ受ケタル故ニ十年間喪風  
 敗俗シ三綱五倫之ヲ絶チ内ニハ良將ナク外  
 ニハ勲ク人逆臣アリ止ハ聖主ノ德化ヲ扶キ  
 下ハ殘民ノ生余ヲ害シ皇室ノ威權ハ倭ニ任  
 セテ擅ニ之ヲ用ヒシメ一朝夢ノ如ク國ヲ失  
 ヒ三千ノ疆土ハ生存スルニ依ル知ナク居ル  
 知ナシ豈ニ痛憐ノ至リ哉ラズヤ吾ハ元南海

ノ者ニシテ才鈍ニ質簿ク海島ノ中ニ飄泊シ  
今年四月ニ故郷ニ歸レリ密ニ世界ノ動靜ヲ  
探リタルニ是亦タ天運ノ致ストコロナリ然  
ルニ我朝鮮世々食祿ノ臣ハ外交誤學ノ輩ト  
共ニ倭人ト交リ我ヲシテ我ヲ救シ以テ滅没  
ニ至ラシメタルハ尤モ痛憤ノ極ナリ此ノ時  
ニ當リ先ツ彼倭ヲ滅センカ為メ兵ヲ舉グル  
コトヲ布告ス依リテ有志ノ士ハ此ノ意ヲ悟  
リ發憤勇起シ全カラ盡シテ止ハ社稷ヲ保全  
シ下ハ蒼生ヲ濟ヒ然レテ後各々麟閣光榮ヲ  
揚グルコトヲ千萬幸甚トス  
一各道内義人至レバ好ク之ヲ保護シ決シ



ヲ遑滞ナキ様ニスベシ  
一金満家ハ糧食ヲ周旋シ軍内ニ送ルコト  
一義兵陣中ニ萬難事故アレハ直チニ報ス  
ルコト

南山義兵將 鄭首 龍  
右ハ隆熙三年九月忠清南北兩道ノ各地ニ  
散布モノナリ

二三

告諭文

嗟我二十萬同胞ハ皆余ノ言ヲ聽ケ  
君ハ何ヨリモ尊ク何ヨリモ重キ位ナルニ今

ハ乃チ荆棘ノ下ニ座セラル國民トシテ誰カ  
憂恤セザル哉。然ルニ余乱レテ  
五百年来仁義礼智信五常ハ道ヲ以テ為スル  
我國ヲ漸チ中シテ犬ノ如キ外國ノ鳥獸ノ域  
ニ入レキ是レ病ム者ノ之ヲ治スル道ヲ講セ  
カシテ自ラ刀斧ヲ按ヒテ死ヲ效スカ如キヲ  
テラ廻メ義声ヲ播シ同志ヲ募リ共ニ中ノ  
君ノ耻ヲ雪キ次ニ諸大忠死シ冤ヲ雪キ以テ  
然ル後チ死ニ瀕シタル命ヲ濟ハントス伏シ  
テ希タル各邑ノ同胞ハ各々忠憤ヲ勵ミ共  
ニ来リ應ル也。實ニ國家ノ幸福ト云フベキ因  
以テ賤生小身ニ吾々忠憤ノ歎如所ヨリ今

日ノ舉ナルニ至ル況ニ貴高家世祿臣ノ今  
日來ノ苛酷煩雜ナル漢律ノ帝ニ在ルハ畢竟  
我民ヲシテ孫ヲ絶ツ者至リ貴族ハ亦死  
所謂面長ハ日來ハ勢力ヲ藉シテ人民ヲ害  
加フ也日本ハ文録トナリテ威ヲ張レテ是  
我が國人生云テ苛キカ思大ニ面長ハ精神ハ  
倭寇ヨリモ尚ホ甚シク因ツテ是等天立ハ捕  
撲滅シテ後々已ム夫々生命ハ愛スル事ナリ  
余當サニ義典ヲ起ス於テ沈黙シ熟慮ル  
ケレヤ固ツテ權ニ據告タル所以ナリ諸君  
自ヲ競フテ後悔ナカラシム事ヲ望ム  
大朝鮮開國五百年巳酉

倡義將  
右翼將  
左翼將  
護軍將  
組練官

趙雲植  
韓凍海  
朴漢成  
李仁禹  
金龍泰

三三

令永平北面々長及各里長領任

為悉舉行事今當島夷肆虐市上生零炭之際市  
昨儲穀之政重莫重焉市上家儲里蓄以一以濟  
貧民市上以供軍饋市上現今無食利之輩市  
東輸船槽市上昨斥賣於警敵市上  
是外齎冠糧而

內實七國之北也。且以嗚呼。外生茲三千里疆土。  
女以蒙其五百車國。愚者是豈忍為之事乎。外如  
此不義之輩。豈歸之於前例。女且不為之禁。則  
宗社之亡。豈可立而待也。豈不懼乎。叫豈不痛哉。  
外中夜思之。則心身俱戰。故臣茲以發訓。女以陸  
路之東馬。外沿江之船隻。豈自其訣洞。且嚴為  
禁飭。則若有一向不援。旧習。女且不遵訓令。  
則談地。女面長。豈難免重律矣。則以此知悉。舉  
行事。

已酉八月二十九日

東韓倡義尊攘陣餉官 李

右譯文

今ヤ島夷虐ヲ肆ニシ生靈塗炭ニ苦ムノ際ニ  
當リ儲穀ノ政ヨリ重キハナシ家儲ト里儲ハ  
一ハ以テ貧民ヲ濟ヒ一ハ以テ軍饋ニ供スル  
モノナリ現今利ヲ貪ブルノ輩アリ東輸船灣  
シテ作ヒテ警敵ニ賣ルハ是レ外ハ冠ニ糧ヲ  
齎シ而シテ内ハ實ニ國ヲ亡スノ兆ナリ嗚呼  
炫ノ三千里ノ疆土ニ生レ其ノ五百年ノ國恩  
ヲ蒙ル者は是レ豈ニ之ノ等ヲ為スニ忍ヒンヤ  
此ノ如キ不義ノ輩ハ之ヲ前例ニ歸シテ之レ  
カ禁ヲ為サズンバ則チ宗社ノ亡フル立テ  
待ツ可キナリ豈ニ懼レザランヤ豈ニ痛マザ

ランヤ中夜ニ之ヲ思ヘバ心身俱ニ戰ハ故ニ  
玆ヲ以テ發訓ス陸路ノ東馬ト沿江ノ船隻ハ  
其ノ洞ヨリ嚴ニ禁飭ヲ為セ若シ一向ニ回習  
ヲ竣サス訓令ヲ遵ハサルアラハ諛地ノ面長  
ハ重律ヲ免カレ難シ此ヲ以テ此旨知悉シ  
テ舉行ヲナス事

年月日 氏名

二四

全

為知悉舉行事夫以今之事勢言之則國不可以  
無義兵也兵不可以無齎糧也此當此擾攘之

時方作上無漢家太倉之儲粟丘中空魏氏陳蔡  
之苑而事之成敗名遠矣外難期盡腫之飢飽是  
近矣外有時山川然則軍糧一歉外最為難引  
即然外以實血氣外生茲土者痛皇上之受辱  
方且憤生靈之塗炭方若有一半分勉若憂民  
之血誠外此雖是耗裏之儲外五毫無吝惜向以  
迎以饋外外此雖有糧乏以事不濟之歎外引五  
外七顧民現情外外貪寒之民勿論外外饒戶富  
屋名山積丘蓄此一無顧念而坐視秦脊外外痛  
矣外外外國運衰而人心敗而然軟外外邦無學識  
而不知憤然外而然軟外外亦一也外外何其相  
尤之如是也外生於不得止外外今茲突剽外外



本土富人倉庫之儲引京人番名舍法日家蓄是  
自其談洞也臣這執留京昨無至糧之事不濟  
之歎刊刻則若有違越之嘆也該面里長難免重  
律矣引引以此惕念舉行事

已酉八月二十九日

東韓倡義尊懷陣餉官 李

右譯文

伏以今人事勢多似臣之身言於八則安國  
以二藏兵十力此可力口兵無八以云齊糧  
力此可力口此ノ擾攘以時當口上ノ漢  
大倉ノ儲決口下ノ魏氏陳蔡ノ屯口空ノ平

シ而シテ事ノ成敗ハ遠クシテ期シ難ク帥ノ  
飢飽ハ近クシテ時アリ然レハ則チ軍糧一  
之レ最モ難シト為ス然レトモ血氣ヲ稟ケ  
土ニ生ル、者ハ皇上ノ受辱ヲ痛ミ生靈ノ  
塗炭ヲ憤リ若シ一半命モ君ヲ愛シ民ヲ憂  
ルノ血誠アラハ是レ既裏ノ儲ト虽此毫モ  
惜スルコト向キミ以テ迎メ以テ饋ラハ豈ニ艱  
乏シクシテ以テ事ソ濟サルコト歎アラシ然レ  
此民ノ現情ヲ顧ルニ貧寒ノ民ハ論ナキモ饒  
戸富屋ハ山ノ如ク積ミ丘ノ如ク蓄メ内カラ  
一モ顧念スルナクモ手素ノ瘠ヲ坐視スルハ  
痛シ哉我々海内ノ黎民運衰ヲ而シテ人心敗

レテ然ルヲ種々學識シテ而モ之ヲ憤然スルヲ  
知ラス云テ然ルカ人モ亦夕一ナリ何ソ其ノ  
相差ヲノ此ノ如クナルヤ止ムコトヲ得サル  
ニ出テ、今茲ニ訓ヲ發ス本典ノ富人倉庫ノ  
儲ト京人番名倉番家舊トヲ談洞ヨリ這々執  
畱シテ以テ糧乏シクシテ事ノ濟サルノ歎ア  
ルニ至ラシムルヤカレ若シ邁越ノ弊アラハ  
難面長ト里長トハ董律ヲ免カレ難シ此ヲ以  
テ惕念シテ此ヲ舉行スベシ

年月日

名

今皋浪三浦口塩商小任處

嗟我二十萬同胞亡生乎外死乎外國殘民弱女  
日取謂大韓人民以外三尺童子即立豈不寒心  
哉外國瘵民七川喬木世臣者外撰天子為政  
工仇讐兒日本外漢立喜々樂々外叶合心同  
力女工故豆嗚呼二十萬同胞亡日人外奴隸外  
分明女工三千里疆土亡日本外屬國外丁寧外  
如此愚民立不勝忠憤外外外外外外外外外外  
豈不可痛哉外延土官一延起初一外二次令飭外到  
聽而不聞女工見而不見女外日人外勢曷挾女  
工外外外外其故曷未和是外如甬蒼生亡外外  
大韓外人民外外云女外外外外外外外外外外  
施行宮外宜

當官小百分恕諒外茲以列名更飭官土去  
春違令罰金四十三萬兩音今月十日內呈來納本  
陣引引若違令則不商不農屯是外引卧軍律  
施行官引引以此惕念舉行官事

金輔運 權巡在 趙慶書 權聖一 河古

五 金聖樂 金謹汝 洪鐘五 韓謹永

以上都合二十五萬兩

金愚敬 許善職 尹敬令 崔聖敦

以上都合十二萬兩

咸聖玄 崔治善

以上都合六萬兩

隆熙 三年九月二日

東韓尊攘倡義中隊長李愚錫

右譯文

嗟我が二十萬同胞ハ生ニ乎死ニ乎目残り  
民弱ケレバ恥謂大韓人民ハ三尺童子ト勇生  
豈ニ寒心セサラン哉國廢レ民世升レニ喬木  
世臣者天子ヲ援ニテ政ヲ為シ仇讐タル日本  
人漢ト喜々樂々トシテ合心同ガセリ故ニ二  
千萬同胞ハ臥轉人奴隸外戚大ト分明ニ三  
里疆土ハ日本ニ屬國タル日ト必然ナリ此ニ  
於テ愚民西忠憤ニ勝ヘズ況ンヤ英雄建士ニ  
於テハ豈ニ痛ム可カラザラドヤ進止官ガ二

次令飭スル所アリシニ聽テ而シテ聞カズ見  
テ而テ見サズ真似スルハ曰人ノ勢ヲ援ン  
我然ルカ其故タルヤ未タ知ラズ爾チ蒼生ノ  
如キ如何ハ大韓ノ人民ト云フヘケン軍律ヲ  
以テ施行スルコト宜シク至當ナルベシ然ル  
ニ百分恕諒シテ茲ニ列名ヲ以テ更ニ飭ス去  
春違令ハ罰金四十五萬兩ヲ今月十日内ニ本  
陣モ來納スルヲ欲シ令ニ違ヘハ則チ商トモ  
ノ農トモナク軍律ヲ施行スヘシ然レバ此ヲ以  
テ賜念シテ此ノ令スル事ヲ舉行スベシ  
以下省之

名称	小川平吉文書
標題	白韓合併建議 他四矣

2 綴

分類 番号	

519

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

参



明治四十年七月

一日 韓令併建議

一本子容九書稿

合併關係

一對李廷翰(加門)

# 日韓併合建議（併合前三年）

明治四十年七月政府並に伊藤親王に京城

に於て提出

## 覚書

日本帝國外交上急要の問題たる對韓策に甘吾人は當局者如左の二案の一を擇み是を斷行せんことを望む

### 第一案

韓國皇帝とて主權を我帝國に禪讓せしめ日韓兩國を合併するべし

## 第二策

韓王皇帝を以て其の位を皇太子に譲らんとせんと同時に  
其の統緒権を我帝國に委任せしむること

## 理由

韓國の獨立保護に付我帝國の努力と忍耐とを以てする  
の道は已に多かり吾人は此上に努力と忍耐とを継続し  
て帝國の利害を洞察すること能はず又其必要を見ず故  
に今回の事變に對して帝國は宜しく過去に鑑み將來を  
明察し断然第一策を採るを上策とす若し第一他の事情  
の爲第一策を採る能はずとすも必ずや第二策を断行

せざるべからず吾人は確信し且断言す事既に此に至れり  
 猶且つ優柔糊塗敢て一時を苟且する如きは當に帝  
 國將來の禍惡を胎すのみならず亦韓國人民を塗炭の境  
 より救ふ能はざるの難局に陥る少下策なりと

明治四十年七月

日

河野 廣中

大竹 貫一

小川 平吉

國友 重章

五百木 良三

頭山 満

一進會長李容九氏書翰

謹啓、錦城花開、子規腸迴、當此之時、老萱之、道節何如、伏惟萬  
福、生自極、唱合邦之後、既逾半歲之久、唯紡指敬待天命而已、  
令近好見祥風送楓、瑞雲呈慶、此望、昨  
老萱下同道、唱和之力乎、感謝曷已、唯祈高聲合力、致期于大  
目的、必達、會取陳、某願旦祝、候  
道體為奈、直時局、千萬、擾護、

六月九日

李容九

小川平吉老萱下

一進會長李容九氏書翰

謹啓者日月逾萬歲聿云暮矣高堂拳觴西窓剪燭時昔之懽  
今果何如哉伏而

臺下信崇明德蹇々匪躬果當復握手相慰蔡向之情遙望東  
風祝一陽萬福耳

日韓合邦之議一出也貴邦新聞謬傳訛說靡知耶底止於兩  
國關係最後之最大最重事或將眩惑於兩國耳目使大事致  
遑起扞格不通夫敵邦輿論雖容九微笑有一容九亦足以一  
定之唯繫於好爵之徒上自內閣元老下至觀察郡守拳懷一

朝之景遺萬代之計極力墮沫民意以為新聞之力可以撲滅  
 原燎何知其不可嚮導于此唯恐失之鄰各寧不怨而愠之而  
 已雖然合邦之事利在救邦而貴邦不與焉救邦豐無豐產  
 工無巧技商不可以通世界士不可以致千里江山不見一塞  
 海島不浮一艘以之合子貴邦適足以加貴邦貧弱而已甚矣  
 貴邦輿論之不揚也而至貴邦人在京城新聞記者固次議絕  
 對併吞之夫容九蓄志五年回首過此大事將欲以置社稷  
 人民於萬安之地永賴一家翕樂之慶也  
 非將欲以四千載故國一千五百萬韓民族為貴邦奴隸也客  
 北為奴而生乎不若一與百萬會復七十三萬祿貢商及儒生

外教徒自經溝瀆而死矣胡為汲々乎復論國利民福哉客  
 九龍思之往日之拳觴剪燭也臺下之志決無欲奴客九之意  
 也轉將有如弟撫之情也然則京城記者團之決議非貴國  
 輿論而何貴邦輿論之不揚由有未喻乎利也客九請為貴  
 邦論之夫敝邦以一小弱介于強之間其勢炎付塞難裨楚  
 其情國無自強之意民無自立之志是以東洋之禍機未曾有  
 不先動于敝邦也若使列國永無交際則白馬江可以止笑既  
 有交際僅二十年间經世界二大戰役此敝邦齊楚之情實  
 不得已而致不得已也然則合邦者豈非為東洋壅振古不涸  
 之禍源者乎貴邦之秉和柄於東洋豈可為一世之利而遺萬



代之累哉唯敵社稷以之永存敵人民以之永安永免其每作  
 戰衛之苦則民志一定而不動矣民志不動而後自立之意始  
 生焉然後始可以貪者自富而弱者自強也此豈非為敵邦拔  
 古貧弱之病本者乎夫絕二強以長白之大屏捍之以鴨綠豈  
 們之灣口則舞鶴之港與天馬之浦可以高枕而制東洋之海  
 權四海絕虞而民業起之人族文血而民產殖之兄弟既翕和  
 樂且湛則東洋之不揚波豈非萬邦平和之吉祥乎今貴  
 今上天皇陛下以堯舜之至德放湯武之勲業為敵邦拔四千  
 年貧弱之病本為世界空前絕後之鴻謨非待於貴  
 今上天皇陛下而誰乎待哉客九噪呼唯恐不及時寔為此也

臺下請毋論貴邦小不利屬發貴邦輿論以必起斯閉開無前  
之供業若其合邦條件惟貴

今上天皇陛下聖謨之耶丕顯容九等景仰唯一家同慶之寵  
光而巴敢茲披瀝肝膽唯臺下察納焉時歲冬端祈道體為國

葆重

隆熙三年十二月二十八日

李容九再拜

小川平吉老臺下

# 宋秉畯子爵跋


右書翰者故一進會長李容九與小川平吉君耶贈答也容九  
 為人剛毅談笑死生之間夙與余共首唱曰韓合邦之事盡卿  
 忌軾遂勸伊藤桂渚公決定廟議而小川君亦不盡努力焉隆  
 熙二年容九自東京歸京城斯然發表合邦之事羣議罵之曾  
 根總巡遂巡不決將抑壓之容九焦心苦慮遂寄此書以披其  
 衷實三年之冬也越四年八月合邦成矣蓋容九之力居多其  
 翌年五月容九以病沒此書散逸不知所在小川君頗惜之余  
 偶獲其稿本故更字贈君以爲紀念又足以見當時之情勢矣

回顧伊藤桂雨公曾根子及峇九相踵長逝不可復見往事茫  
 々如一夢臨書感慨不知聊惜

大正三年三月

於東京

友人

宋秉畋  併書

拜啓 小身 去月末鎌倉に閑居讀書致居使爲数日前に至り  
 始めて芳翰に接し候先以て御壯健愈々疾之候不憚欣  
 喜復回歎すれは熱也之客舎に置酒高論せしより以來既  
 に一閱年今や千里袂を今より亦當日の歡を盡すことを  
 得ざるを憾亦然れども貴兄は四面囂々反抗脅迫之裡に  
 立ちて合邦の大義を唱道し毅然としし處也亦小身亦遠  
 く之に和し東西呼籲しと將に宿昔之素志を遂げんとす  
 此の如くんば則ち千里袂を分つと雖も亦一堂の中に見  
 し所信の貫徹に努力せんのみは東書中の高論は悉皆

我意を得たり。抑、日韓合邦の議は自然之大勢に――恰も  
 旭日の東より昇りて西するが如し。誰か得て之を遮らん  
 又討論の如きは事理を弁せざる至愚の論に――取擧の  
 價値なし。彼の故伊藤公卿の優柔を以てし、射ら尚且ら  
 昨年五月精養軒に於ける日韓親交團招待會の席上に於  
 て日韓の關係は一家の關係なり。其の向ひは開放するべき  
 門戸なり。と明確に断言せし。昨未だ一家とは合邦の謂  
 たること勿論なり。果して然らば吾人か速に其の當に到  
 るべき所に到らんと欲するは當然の義なり。毫も怪し  
 むに足らざるなり。小島去冬公會の席に合邦の議を詳論

りとす。以來、我國情を察するに、國民一般の希望を  
 合併に一致せし、來書中京城記者團の決議に賛成せし  
 れたれども、其措辭行文の如何に不拘彼等の本意に即つ  
 ても必要ありと吾人と相違するもの、に明るるや、と信ず  
 此の点に關し、不日同者會より派遣せる五橋水大谷  
 二氏の渡韓すゝきに付、此を機として、双方の意思充分疏  
 通するに即せんことを要望、一候要するに吾人の議論  
 は東洋の大勢に基き、兩國の福利を本とせる正々堂々確  
 乎不拔の議にして、其の動くや恰も天體の循環する如  
 し、常人之を望めば、其の運行の状を觀ずと雖も、潜運默移

一と必其の處に到るべき處に到らずんば止まざるは  
 り天下何物か得ざるを逃らん彼の群育の後果然として  
 仰りて吾人に感嘆するの日は料りに爲に遠きにあらず  
 るや一教めくは加養自愛せられよ書を終るに喘み併せ  
 て一進會祿賣員商儒生教徒其の他同志諸君の健康を祈  
 る 草々不備

明治四十三年一月

鎌倉 山 平 光

李仁兄侍史



明治四十三年一月(併合前八月)桂首祠と寺内

統監とに交付せる韓國合併に關聯せる施設概要

一、合併宣言と同時に現帝も華族に列し特に大公爵を授け公債證書一千万圓を下賜す

識者或は廢帝に興るるに親王の称を以てせんと歎するものあるも之は道理上共に事實上断るる不可也

二、現皇帝皇太子及太皇太后邸宅を賜ひて東京に居住せしむるゝと猶舊事の琉球王及内地の舊諸藩王に於ける如くす

三、特殊の者を除くの外一般兩班には爵を授けず金貨を  
下附せず其の處分に付きそは新總督府に於て更に詳  
細研究すべし

四、統監府並に韓國の中央政治機關は總て之を廢止す

五、新たに朝鮮總督府を置き一切の政治を司らるの條で  
て立派の事を要す

朝鮮と云ふ名は昔時遼東をも包含したるに因  
りて特に朝鮮總督府と名づく、韓國と謂くゝ名称  
は可成人の記憶より除去せんと欲するなり

朝鮮總督府に官房及内務部、殖産部、度支部を置く、

教育の行政は宗教風俗、警察其の他の行政と密着せ  
 ざるを要す韓國の現狀に於て最も其の然るを以  
 るゆへ疎に前達耶蘇教徒の事より國民教育を分離  
 する等の事あるが故に之を内務に併合するを便利  
 とす又司法部は独立したる部を置くの要あり其の  
 事務は内務の一局に屬せしむるか又は總督府の官  
 房に屬せしむれば足る

總督府に總督(軍人)一人、副總督(文官)一人を置く親任  
 官とす部長を勅任官とす

大審院を設け大審官を置き重要なる行政事項並に法

令の制定改廢等に関する諮詢の府とす

参議官は勅任とし日韓兩國人より之を任命す

部長の職は最も重要なるを以て當分日本人の優待の

みを以て之に任し韓人は参議官に任命して之を優待

し不平鎮撫を兼收し國情に通ずる政治を行はんと欲

す故に参議院には韓國各方面の人材を招致すべし

七、十三道觀察府を廢し更に舊時の如く二十三府廳を置

き行政の大部分を之に委任す

八、府廳に参事會を置き日韓人の参事官を以て之を組織

し中央に於ける参議院の如く府廳事務諮詢の府とす

九、税務警察等の行政は總て~~地~~地方官の手に統一すること

一〇、按察使を置き勅任官を以て之に充て總督に直隸せしめ一般行政司法及會計等の監査を爲し官吏の非違を糾弾すると同時に人民の冤屈を伸ある爲め其の訴願を受理す

行政裁判所會計検査院等の代りを爲し且一般行政司法の監査を爲し民心を悦服せしむる機關なり此の機關は政治を簡易にし地方官委任の範圍拡大せしむるを以て特に其の必要を感ず

一一、新たに調査局を設け韓國の習慣典故を調査し行政立

法の基礎を作ると、其の局實は日韓人を以て之に  
任命す

一、合併の上は直ちに全國人民に新政の趣旨を詳細に布  
告し且つ大赦を行ひ無益なる法令制度を廢止し若く  
は慈善的處置を執る等人心の一新を図る事

一、三、現在韓國に於ける行政の繁文縟禮は我邦に於けるよ  
りも甚し故に此の際重要なる官吏を交代し行政の方  
法を根本的に改革し司法裁判所に在りても更に其の  
数と階級とを減少し且つ其の手續を簡易にすべし

一  
台 碑 施 改

一  
李 家 九 德 改

明治四十三年一月(併合前八月)桂首相ト寺内統監

トニ交付セル韓國合併ニ關聯セル施設概要

一、合併宣告ト同時ニ現帝ヲ華族ニ列シ特ニ大公爵ヲ授ケ公債証書一千萬円ヲ下賜ス

議者或ハ廢帝ニ與フルニ親王ノ稱ヲ以テセント欲スルモノアリトモ之レ道理上并ニ事實上斷シテ不可ナリ

二、現皇帝皇太子及太皇帝ニ邸宅ヲ賜ヒテ東京ニ居住セシムルコト猶ホ往事ノ琉球王及内地ノ舊諸藩主ニ於ケルカ如クス

三、特殊ノ者ヲ除クノ外一般兩班ニハ爵ヲ授ケス金員ヲ下附セス其處分ニ付キテハ新總督府ニ於テ更ニ詳細研究スヘシ

四、統監府並ニ韓國ノ中央政治機關ハスヘテ之ヲ廢止ス

五、新タニ朝鮮總督府ヲ置キ一切ノ政治ヲ司ラシメ併セテ立法ノ

事ヲ委任ス

朝鮮ト云フ名ハ昔時遼東迄ヲモ包含シタルニ因ミテ特ニ朝鮮總督府ト名ツク韓國ト云ヘル名ハ可成人ノ記憶ヨリ除キセント欲スルナリ

朝鮮總督府ニ官房及内務部、殖産部、度支部ヲ置ク

教育ノ行政ハ宗教風俗警察其他ノ行政ト密接セシムルヲ要ス韓國ノ現状ニ於テ最モ其ノ然ルヲ見ルナリ殊ニ前途

耶蘇教徒ノ手ヨリ國民教育ヲ分離スル等ノ事アルカ故ニ之レヲ内務ニ併合スルヲ便利トス又司法部ハ獨立シタル

部ヲ置クノ要ナシ其事勢ハ内務ノ一局ニ屬セシムルカ又ハ

總督府ノ官房ニ屬セシムレハ足ル

總督府ニ總督(軍人)一人 副總督(文官)一人ヲ置ク 親任官ト



ス部長ヲ勅任官トス

六、參議院ヲ設ケ參議官ヲ置キ重要ナル行政事項並ニ法令ノ制定改廢等ニ關スル諮詢ノ府トス

參議官ハ勅任トシ日韓兩國人ヨリ之ヲ任命ス

部長ノ職ハ最モ重要ナルヲ以テ當分日本人ノ俊材ノミヲ以テ之ニ任シ韓人ハ參議官ニ任命シテ之ヲ優待シ不平鎮撫ヲ兼ネテ國情ニ通スル政治ヲ行ハント欲ス故ニ參議院ハ韓國各方面ノ人材ヲ招致スヘシ

七、十三道觀察府ヲ廢シ更ニ舊時ノ如ク二十三府廳ヲ置キ行政ノ大部分ヲ之レニ委任ス

八、府廳ニ參事會ヲ置キ日韓人ノ參事官ヲ以テ之ヲ組織シ中央ニ於ケル參議院ノ如ク府廳事務諮詢ノ府トス

九、稅務警察等ノ行政ハスヘテ地方官ノ手ニ統一スル事

一〇、按察使ヲ置キ勅任官ヲ以テ之レニ充テ總督ニ直隸セシメ一般行政司法及會計等ノ監査ヲ爲シ官吏ノ非違ヲ糾彈スルト同時ニ人民ノ冤枉ヲ伸フル爲メ其訴願ヲ受理ス

行政裁判所會計検査院等ノ代リヲナシ且ツ一般行政司法ノ監査ヲナシ民心ヲ悅服セシムル機關ナリ此ノ機關ハ政治ヲ簡易ニシ地方官委任ノ範圍擴大セルヲ以テ特ニ其必要ヲ感ス

二、新々ニ調査局ヲ設ケ韓國ノ習慣典故等ヲ調査シ行政立法ノ基礎ヲ作ルコト其局員ハ日韓人ヲ以テ之ニ任命ス

三、合併ノ上ハ直ニ全國人民ニ新政ノ趣意ヲ詳細ニ布告シ且ツ大赦ヲ行ヒ無益ナル法令制度ヲ廢止シ若クハ慈善的處置ヲ

執ル等人心ノ一新ヲ圖ル事

三、現在韓國ニ於ケル行政ノ繁文縟禮ハ我邦ニ於ケルヨリモ甚シ故ニ此ノ際重要ナル官吏ヲ交迭シ行政ノ方法ヲ根本的ニ改革シ司法裁判所ニアリテモ更ニ其數ト階級トヲ減少シ且其手續ヲ簡易ニスヘシ

拜啓 小弟去月来鎌倉ニ閑居讀書致居候為數日前ニ至  
リ始メテ芳翰ニ接シ候先以テ御壯健愈御盡瘁之段不堪  
欣喜候回顧スレバ熱海之客舎ニ置酒高論セシヨリ以来已  
ニ一閱年 今ヤ千里袂ヲ分チテ亦當日之歡ヲ盡スコトヲ得ザル  
ヲ憾ム然レドモ貴兄ハ四面囂々反抗脅迫之裡ニ立チテ合邦ノ大  
義ヲ唱道シ毅然トシテ屈セス小弟亦遙カニ之ニ和シ東西呼應シ  
テ將サニ宿昔ノ素志ヲ達セントス此ノ如クンバ則チ千里袂ヲ分ツト  
イヘドモ亦一堂之中ニ望シテ臂ヲ把テ歡談スルノ想アリ唯當サニ  
相共ニ自愛シテ所信ノ貫徹ニ努力センノミ 来書中ノ高論ハ  
悉皆我意ヲ得タリ 抑モ日韓合邦之議ハ自然之大勢ニシテ恰  
モ旭日之東ヨリ上リテ西スルカ如シ誰カ得テ之ヲ遮ラン 反對論  
ノ如キハ事理ヲ辨ゼザル至愚之論ニシテ駁撃ノ價值ナシカノ

故伊藤公爵之優柔ヲ以テシテスラ尚且ツ昨年五月精養軒ニ於  
ケル韓人觀光團招待會席上ニ於テ日韓之關係ハ一家ノ関  
係ナリ其ノ間ニハ開放スベキ門戸ナシト明確ニ断言セシニ非スヤ  
一家トハ合邦之謂タルコト勿論ナリ果シテ然ラバ吾人が速カニ其當サニ  
到ルベキ所ニ到ラント欲スルハ當然ノ議ニシテ毫モ怪シムニ足ラザルナリ  
小弟去冬公會ノ席上ニ合邦之議ヲ詳論シテヨリ以来 熟ニ我國情  
ヲ察スルニ國民一般ノ希望モ亦合併ニ一致セリ 来書中 京城記者團  
之決議ニ付キ云々セラレタレ共思考ニテハ其措辞行文ノ如何ニ不拘彼  
等之本意ニ至テハ必スシモ吾人ト相違スルモノニ非ルベシト 信ス此ノ點  
ニ関シテハ不日同志會ヨリ派遣セル五百本大谷ニ氏ノ渡韓スベキ  
ニ付キ此ヲ機トシテ双方之意思充分疏通スルニ至ラン事ヲ要望致  
シ候 要スルニ吾人ノ議論ハ東洋ノ大勢ニ基キ兩國ノ福利ヲ本

トセル正々堂々確乎不拔ノ議ニシテ其動クヤ恰モ天体ノ循環スルガ如  
シ常人之ヲ望ムバ其運行之状ヲ觀ズト雖モ潛運默移シテ必ズ其當  
サニ到ルベキ處ニ到ラスンバ止マサルナリ天下何物カ得テ之ヲ遮ラン彼ノ  
群盲之徒果然トシテ仰イデ吾人ニ感嘆スルノ日ハ料ルニ應サニ遠キ  
ニ非ルベシ願クハ加餐自愛セラレヨ書ヲ終ルニ臨ミテ併セテ一進  
會祿員商儒生教徒其他同志諸君之健康ヲ祈ル草々不備

明治四十三年一月八日

鎌倉ニテ

小川平吉

李仁兄 侍史

# 日韓併合建議（併合前三年）

明治四十年七月政府並ニ伊藤

統監ニ京城ニ於テ提出

## 覺書

日本帝國外交上急要の問題たる對韓策に付き吾人は當局者が左の二案の一を撰み之を断行せんことを望む

### 第一案

韓國皇帝をして主權を我帝國に禪讓せしめ日韓兩國を合併すること

### 第二案

韓國皇帝をして其位を皇太子に譲りしめると同時に其統治權を我帝國に委任せしむること

## 理由

韓國の獨立保護に就き我帝國が努力と忍耐とを以てするの道は已に至れり吾人は最早此上に努力と忍耐とを繼續して帝國の利害を閑却すること能はず又其必要を見ず故に今回の事變に對して帝國は宜しく過去に鑑み將來を明察し断然第一案を採るを上策とす若し万一他の事情の爲め第一案を取る能はずとするも必ずや第二案を断行せざる可からず吾人は確信し且断言す事已に此に至れり猶且つ優柔糊塗敢て一時を苟且するか如きは實に帝國將來の禍惡を貽すのみならず亦韓國人民を塗炭の境より救ふ能はざるの難局に陷るの下策なりと

明治四十年七月 日

河野廣中

大竹貫一

小川平吉

國友重章

五百木良三

頭山滿

一進會長李容九氏書翰

謹啓者錦城花開子規腸迴當此之時老臺々道節何如伏惟萬福生自極唱合邦之後既逾半歲之久唯紛持敬待天命而已令近好見祥風送楓瑞雲呈慶此皆堂非

老臺下同道唱和之力乎感謝曷已唯祈高聲合力致期于大目的必達僉敢陳其願且祝道體為奈直時局千萬擾護

六月九日

李容九

小川平吉老臺下

一進會長李容九氏書翰

謹啓者日月逾邁歲聿云暮矣高堂舉觴西窓剪燭疇昔之懽今果何如哉伏而

臺下信崇明德蹇々匪躬果當復握手相慰蔡向之情遙望東風祝一陽萬福耳

日韓合邦議一出也貴邦新聞謬傳訛說靡知耶底止於兩國關係最後之最大最重事或將眩惑於兩國耳目使大事致遑趑趄扞格不通夫敝邦輿論雖容九微矣有一容九亦足以一定之唯縻於好爵之徒上自內閣元老下至觀察郡守拳懷一朝之榮遺萬代之計極力塗抹民意以為新聞之力可以撲滅原燎何知其不可嚮導乎此唯惡夫

之鄙吝寧不怨而憫之而已雖然合邦之事利在敝邦而貴邦不與焉敝邦豐無豐產工無巧技商不可以通世界士不可以致千里江山不見一塞海島不浮一艦以之合于貴邦適足以加貴邦貧弱而已甚矣貴邦輿論之不揚也而至貴邦人在京城新聞記者團決議絕對併吞云々夫容九蓄志五年回首遇此大事將欲以置社稷人民於萬安之地永賴一家翕樂之慶也

非將欲以四千載故國一千五百萬韓民族為貴邦奴隸也容九為奴而生乎不若與一百萬會員七十三萬祿員高及儒生外教徒自經溝瀆而死矣胡為汲々乎復論國利民福哉容九熟思之往



日之舉觴剪燭也臺下之志決無欲奴容九之意也轉將有加第撫之情也然則京城記者團之決議非貴國輿論而何貴邦輿論之不揚由有未喻乎利也容九請為貴邦論之夫敵邦以一小弱介于二強之間其勢炎付塞離齊楚其情國無自強之意民無自立之志是以東洋之禍機未曾有不先動于敵邦也若使列國永無交際則白馬江可以止矣既有交際僅二十年间經世界二大戰役此敵邦齊楚之情實不得已而致不得已也然則合邦者豈非為東洋壅振古不涸之禍源者乎貴邦之東和柄於東洋豈可為一世之利而遺萬代之累哉唯敵社稷以之永存敵人民以之永安永

兌其每作戰衝之苦則民志一定而不動矣民志不動而後自立之意始生焉然後始可以貧者自富而弱者自強也此豈非為敵邦拔振古貧弱之病本者乎夫絕二強以長白之大屏捍之以鴨綠豆們之灣口則舞鶴之港與天馬之浦可以高枕而制東洋之海樞四海絕虞而民業起之人族交血而民產殖之兄弟既翕和樂且湛則東洋之不揚波豈非萬邦平和之吉祥乎今貴

今上天皇陛下以堯舜之至德放湯武之勲業為敵邦拔四千年貧弱之病本為世界空前絕後之鴻謨非待於貴

今上天皇陛下而誰乎待哉容九噪呼誰恐不及

時寔為此也臺下請毋論貴邦小不利厲發貴邦  
輿論以必起斯閭闔無前之洪業若其合邦條件  
唯貴

今上天皇陛下聖謨之耶丕顯容九等景仰唯一  
家同慶之寵光而已敢茲披摠肝膽唯臺下察納  
焉時惟嚴冬肅祈道體為國葆重

隆熙三年十二月二十八日

李容九再拜

小川平吉老臺下

宋秉峻子爵跋

右書翰者故一進會長李容九與小川平吉君所贈答也容九爲人剛毅談笑于死生之間夙與余共首唱日韓合邦之事盡瘁忘軀遂勳伊藤桂諸公決定廟議而小川君亦參畫努力焉隆熙二年容九自東京歸京城斷然發表合邦之事群議囂々曾根總監逡巡不決將抑壓之容九焦心苦慮遂寄此書以披其衷實三年之冬也越四年八月合邦成矣蓋容九之力居多翌年五月容九以病歿而此書散逸不知所在小川君頗惜之余偶獲其謄本故更寫贈君以爲紀念又足以見當時之情勢矣回顧伊藤桂兩公曾根子及容九相踵長逝不可復見往事茫茫如一夢臨書感慨不知所措

大正三年三月 於東京

友人宋秉峻 跋併書

(印)

名 称	小川平吉文書
標 題	明治四十二〜三年小川平吉、李容九 往復書翰について

九. 3. 3

同文 2 也

分 類 番 号	

520

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

右書翰者故一進會  
長李容九共小川  
平吉君所也贈答容  
九為人剛毅談笑  
于死生之間夙興余  
共首唱日韓合邦之  
事盡瘁忘軀遂動  
伊藤桂諸公決定廟  
議而小川君亦參畫  
努力焉隆熙二年

容九自東京歸京  
城斷然發表合邦  
之事群議置置  
統監曾根荒助逡巡  
將抑壓之  
不決容九焦心苦慮  
遂寄此書小川君以披  
其衷實三年之冬也  
越四年八月合邦成矣  
蓋容九之力居多其

翌年九月容九以病  
歿而此書散逸不知  
所在小川君頗惜  
之余偶獲其謄本  
故更寫贈君以為記  
念又足以見當時之  
情勢矣回顧伊藤  
桂西公會根子及  
容九相踵長逝不

可復見往事茫茫  
如一夢臨書感慨  
不知取措

大正三年三月於東京

友人宋秉燠跋併書



右書翰者故一進  
會長李容九與小  
川平吉君所贈答  
也容九為人剛毅  
談笑于死生之間夙  
與余共首唱日稀合  
邦之事盡瘁忘軀  
遂動伊藤桂諸公

決定廟議而小川君  
亦參畫努力馬隆  
熙二年容九自東京  
歸市城斷然發表  
合邦之事羣議譴  
曾根統監逡巡不決  
將抑壓之容九焦心  
苦慮遂寄此書以  
披其衷實三年之冬

也越軍八月合邦成  
矣蓋容九之力居多  
其翌年五月容九以病  
歿而此書散逸不知  
取耳在小川君頗惜之  
余偶獲其謄本故更  
寫贈君以為紀念又  
足以見當時之情勢

美田顧伊藤桂西公  
曾根子及容九相踵長  
逝不可復見往事  
茫茫如一夢夕臨書  
感慨不知所措

大正三年三月於東京

友人宋東陂跋併書



名称	小川平吉文書
標題	日韓合併と其前後

1892

分類 番号	

521

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

○日  
終  
合  
併  
上  
其  
前  
後

日韓合併と其前後

所謂日韓合併事件の

明治三十九年の春日韓合併事件は

の利便を受け、相違なく支那朝鮮等の南進に

其の勢力を統制し、遂に四十一年五月朝鮮

對韓國の要請

京城に於ける日韓合併の要請

日韓合併

吾輩は 韓國  
を以てあつたのをあきらめ、是より先、朝鮮の内務大

臣宋世駿並に一新屋と長李容九とが他と異に

韓意を通じ、朝鮮の將來に對して心配し、一日

建武に曰韓併の實行を固く約束せしむる如き百

事無算に之の心ある如く併せしむる伊波統監も元



未對外政策に於ても所謂軟派の總大將とす謂

ふくし、事毎に慢柔乃敵の機を失ふありと云

近衛系は對外硬派

今日本常川市也果にさるものを見做され

計

事は中々面白く行きさうにふた

韓四

枕し、資金はる独立を回復せんとする所

秘案

たのて

都の町にあり、其の實情を内地に知らしむ

吾の事は一公承知し、居る所のあり、又智所

の轉國皇帝力是等の輩と由々辭教を通じ、

田中日本に後援の態度を表明せしむ、實は及

の態度を指し、若うに事のほかにあり、

自今も伊藤公に面會し、對峙の策を説き、速に

に對峙する處置を執るやうに陳きせぬといふ

を考へ、萬般に當るやあるに伊藤公を解回し

縛々断行の意見を述べ、木戸大少保の事柄を

引用し、維新の大業は智慧を以て是問ひしは、只大断

るに意外の好

後、是既に轉回に於ける独立運動の事情

は勿論

いふに、此の點は、

皇帝の不穩す 全国等より皆て明瞭に是を認識し

乙辰とて、その由情を詳しく 吉紫に 打たれり 帝國 皇帝とて

ふに 多き事なり 運命と云ふ事と云ふや 又も其情あり

つと、機層なり ありか 断乎たる 處星を動かすこと

極内々

吉紫は家にて 且つ素人にて

おこととて 明言せられ 名わら 何故に計

統陸

3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100

帝國の爲、又東洋全局の爲、幸福があらん、聖蹟

以場人  
た  
い  
と  
と  
讀  
辭  
長  
最  
一  
に  
信  
心  
あ  
う  
に  
伊

腹藏なく

歸長力

種々  
多  
龍  
也  
也  
也  
也

宋秉俊王客九の人と爲るを責む

乙  
 あるが  
~~事~~  
 是れ  
 時衆儀  
 院に於  
 て  
 又内訖の談止ニ違ふ出ん

粵省

獨  
照

歎くは事<sup>こと</sup>の<sup>が</sup>白<sup>しろ</sup>く<sup>の</sup>白<sup>しろ</sup>く

何れもふものゝ組織として、河野廣中、尾崎行雄、花

大竹豊下

と共に

井草蔵、早速、高とふやうに連中、無類りに名

部より時とあらうから、伊藤、今此の調印と付

るは、頗る興味を興へて居る、今、吾等、名は、豪傑、梅

高橋

ハ、  
東、  
下、  
文、  
お、  
や、  
う、  
は、  
こ、  
と、  
も、  
言、  
う、  
と、

政界の状況

中、  
也、  
の、  
秋、  
初、

及侍奉に付て侍奉

向帝 親任人

就き

包と諸と

後 話と主権

短カ

三四

不 高 滞 松 中 國 會 談 一 七 東 京 江 歸 一 七 東

大 政 加 間 由 出 七 月 の 初 日 に 終 了 所 謂 密 使 事

件 と 名 前 あり 加 越 七 七 東 京 七 七 韓 國 皇 帝 加

和 蘭 ノ ハ ー 加 七 七 韓 國 平 和 會 談 七 七 韓 國

独立の爲に密使を送つたところから露顕した

つてあつた。

是より先き吾が輩は朝鮮より内地に歸ると

當時の大竹貫一氏等より他の同僚同志と共に

何部系中

無誤也

大同志

城に於ける諸般の報告として、伊藤公が亦大代



吾々の針と同じやうに穿つて来た。彼曾か市に

は、新所あると云ふ考へ、かあると云ふところの

を、  
 吾々の針と同じやうに穿つて来た。彼曾か市に  
 吾々の針と同じやうに穿つて来た。彼曾か市に

のれ部、  
 吾々の針と同じやうに穿つて来た。彼曾か市に

吾々の針と同じやうに穿つて来た。彼曾か市に

被提

解

とて根本的に決する世界を以て相対り由

韓國問題を

直に

とありとあり。●總理大臣西園寺公使、外務

河野大竹お目玉

大竹君等と共に

大臣林董氏と仰りて

ある木、頭山達谷の地を以て

一、日韓關係と朝鮮ありとあり

現皇太子を二院

財政

公債

二、金貨不可統一の病を以て、歩馬、郵便、電報

洋の系図  
推由を  
切

切  
切

陳集せし  
事

とある高橋の覺書に夢りと誤判をうけ、その時

西園寺公方諸氏は大政職を執るは外濠から

しと漸次暖めを祈くとある  
方法  
もあつた

あきなりとこれ  
林外務大臣  
中野下側を  
か

これあら、**西**人との間に在る既に**外**に諸が

あつた事だ、**我**は一帯に城を築りたいが、**外**に諸が

せう、**我**の心元、い感じかいた、**外**に諸が

も、**外**に諸が、**外**に諸が、**外**に諸が

と、**我**の心元、い感じかいた、**外**に諸が

平定、**外**に諸が、**外**に諸が



東京を歩き、一、東京に何うな、増東也道

生

水害、一、東京に何うな、増東也道、神石に上陸

杯

一、東京に何うな、増東也道、神石に上陸

一、東京に何うな、増東也道、神石に上陸

一、東京に何うな、増東也道、神石に上陸

韓國の君例に於ては宋秉世等は總理大臣李完

用と歩むへに密使事件に對する善後處置と

日本に對する申譯の意味、  
 一、線りの方針を遂行するに韓國皇帝の

退位を要せし、當時宮内大臣ありし朴永春等の

執断を

妨碍を排除し皇帝の強き反對ありしを拂

夫死  
2 是悟心之事に當り、遂に

18

鳴

進修

詔書  
12  
御  
靈  
七

望

乞ふ

帝 14 年 太皇太后 尊 稱 也 上 7 乙 陽 居 也 乙 乙

タチバナ

子事  
以  
何  
う  
な  
ま  
う  
鷗  
糸  
は  
割  
に  
通  
記  
—  
—  
あ  
る。

情  
由  
子  
子  
子  
子  
子

金山隱士上陸才出

迎へり人か皇帝位を退くの新南郭外を指し



東之  
号水  
九修  
白安  
之  
画  
号  
心  
~~一~~  
~~一~~  
京  
城  
心  
卦

白分伊藤公やうたふと 足ひ

宋城略奪を難儀に  
 伊藤長と語り合ふ  
 伊藤長は「  
 信濃一俣峠の好時様は、いふ事はいれど、  
 三河伊藤の地は、  
 密使事件共にか、  
 伊藤長は「  
 望方殿は、  
 前項の豊蔭をかし、  
 日 韓 台 備 を 妙 手

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

是如多日  
經同知悉  
悉上東京  
分千里在  
卷

見述在錄

しと世あ——来れ津りあまあり。是から毎日柳

米穀りや柳面屋を柳龍あうう——に——んいり

とあり

とあり

伊藤公も笑うて扶

おから

皇弟の過位に就いては自分には決然と聲

諸せられ、殿と諸と聴くとあり

①而し即時に併に就えんまを玉撫たか公の意を

櫻指すれぬ。今日最早や右併を——の列回

ふた<sup>10</sup>×<sup>20</sup>事ふ

ふた<sup>10</sup>×<sup>20</sup>事ふ



あゝ  
か  
明  
け  
に  
や  
う  
ん  
わ  
ら  
ず  
お  
半  
は

大休

満ちし  
~~有る~~  
今日の上菜として、  
は、即時に何  
か、  
地元の佐料で、  
金のかかるの意見と

今日既に朝鮮に於て獨立運動の

の如く殿、陛下、  
 所々、  
 居る、  
 中、  
 皇帝自ら如く、  
 経

畢竟

保護政令なるものか

とある限を金と左と右といふに所謂地の出来

数にあらう。徳を一一何とわたりたるは所

去か出来やうかと云ふやうな希望を懐かしむ

るに餘地があるから斯様目々々々あるのではあ

る。生殺しより中穿る一刀両断に右側の影射を



即ち朝鮮自傳の形勢から見た。又對外関

係から見た。今日から最も關係を斷行するに適

況んや公の如き信望勢力、絶大なる政

策が統監の手に當らう。今の日本は

その時機がある。このことを諸君に執

念談し、このあき、伊藤公の新政を明かに大

と変

伊藤公の考へ、今日の場合

行軍に  
好む  
心算

方が善くはなふ

以て終るは傳り鳥りな  
いともなふ  
考へを以て居り

前記の如く

従つて韓國政府に對し  
ては伊藤公使は自分と彼

等と對し  
ては一考の希望はほ文に在り  
てあり

彼等自身はあり  
て相ある數星を付けた  
り

實の如く  
とある事と述べて、決點  
として彼等と唯



④  
つたから特に  
婦人に担はれ  
たふで扱ひさ  
たえうにか  
男女一同結  
束してつた  
まは彼れ幾  
せはさる新  
倒さるといふ  
勢が實に頼  
つた  
つた

兒めと居るはカ  
常は着るはカ  
つたはカ  
大變な事  
訪問はカ

おが輩の到着する前に總理大臣が宛用は独立

わの人々の多に其の邸宅を焼かれとある是後

は引続き者少りおりと市後あるは

人心向を特に日本は所有するは  
人向を特に日本は所有するは  
人心向を特に日本は所有するは

（この地をたからしめ）

おが輩の到着する前に總理大臣が宛用は独立

南山河の宋系暖の即

南山河の宋系暖の即

又後に暖なり

門

門内玄關先

巡査憲兵等

巡査憲兵等

門

物

剣の光

とる

看様

あり

た

門

宮内

には

朴系

氏

が

顔

つ

年

は

大

臣

の

身

は

後

急

を

銘

を

以

ス

ト

不

夢中  
每日  
一回

宋永暖及一新會の領袖選定の會合に経

事  
○  
の  
難  
移  
に  
背  
て  
相  
談  
と  
進  
め  
る  
居  
る  
に  
~~お~~  
り  
あ

る、  
人  
候  
し  
~~と~~  
同  
係  
と  
名  
お  
こ  
と  
人  
は  
到  
り  
あ  
い  
所  
く

保女護  
所謂  
第二の  
條約  
の  
出来  
方

1801-1802

兵種を我國に収めし

韓國政府の軍隊を解散し、司物權をも日本

に委任するところなり。即ち純然たる外資財政は、前より委任

保護國にあり、その約束は出来ぬものあり、余

約は出来ぬ。是の翌晩伊藤侯爵が華盛頓に参

城滞在の大同首途その他の人々を招いて晩餐

會を用ゐる。その席上保護契約の締結を報告し、

終つて隣席の吾可安と願ふ。先づ斯う云ふ以

平のあゝと云ふ。右の如く云ふ。右の如く云ふ。

「吾輩の

自家は、~~……~~希望の如くは、行かぬ。

か、係、~~……~~絶對反對、ある所、今晩は出席

しあいの

しあいの

あやを

笑

あやを

其の

晩は非常に款待を受け、卓の後又更

長崎同

如きふい

飲談も

ついでに

酒を

飲

りし

痛飲し

送る

家人

診らるゝ

たの煙草

宿に

かり送

られ

歸つ

た

お仕

事を

あ

急がふ

迷

急がふ

氣

を

あ

帰

つ

れ

子以偶以自爲韓國陸軍解散軍隊

留北年か

暴動を起し、南大門の停車場を占拠するに至る

類

城壁 9 方面等 11 號 9 銃 1 南 出 考

師承

萬有東山  
 松和  
 萬有東山  
 斯標  
 以  
 公  
 平  
 公  
 安  
 安

今日讀新

何處山既  
如遠  
如  
子  
將  
來  
に  
あ  
る  
今  
を

徳と才の徳の

一、いゝとあゝあゝにやうと屋とあゝゝゝゝ

明かにやうにからやうは実の國家のやうに悦んた

うやややややややややややややややややややややや

如くやややややややややややややややややややややや

やややややややややややややややややややややや





以手也拍 ㄣ 快哉也 𠂇 𠂇 𠂇 𠂇 𠂇 𠂇 𠂇 𠂇

新橋の時は、今更に、  
朝野に、

一 准 令 長 宗 九 氏 九 令 佛 滿 之

旋心

朝鮮名國

うは瑞香も幾度かあうんりれり、お氏も

左心勝といふべき

時代を透見するの鉄

て思ふ大層と透視し日韓兩國の如く

はあはれと透視し日韓兩國の如く

いふと

時又

洋の大局のるに朝鮮の野望を人民の将来のる

執る次氣を續けたるは

は合併論を

高木

いふと

客れ氏や如跡か出た。襟を正して「あの男は実

に偉い人物じゃ」と言つて愛嬌一れ付ひあつた。

及赤東暖

吾が輩は常に同族と共々籍名を通し

終始

秋山

大村

日本は旧田五郎末孫

日

に若てん

而

屋係事件のうちに努力しあつた。あつた。

去年一時中用がうつたが、其間に清國視察をした。

明治

秋

冬

四十九年 秋 冬 風車並同文書の断事と



那朝野民  
上知是上  
知一  
唐之，  
碑在

日本  
旅行  
了  
明  
天  
回  
大  
名  
加  
二  
人  
由  
同  
行  
一  
人

のりあふり、  
 大衆民共ニ因テ  
 大衆民共ニ因テ  
 大衆民共ニ因テ

鉛多細川兩儀

是の儀、  
御領より  
贈る土産の

三仙甲由り等

きほ雲に事流れ善美を極めれりうが  
清國より金と銀と大分寄つて見まふ  
と和文

各地到る所に銀と大分寄つて見まふ

此汽車は無痛特別室を備へて迎へて

に山馬車と浮山と有はし

お下り入する所は

馬の如くか好勢前後を繋ぎするところなり

田舎の

一個の私  
人  
定に

鄭重に極められ、當時奉天に

は東三省総督として陳世英の府にあり、その概

力も頗る絶大であつた。又其の待遇は小島

も驚くべきであつた。天津に押しつけられ、

子島を離れ、進出し、北平に入り、





光緒皇帝の

時代のことか

二印高橋を線使した

半

新

西太后が金華の政を龍りして居った。増と花

先いあり 又皇儲皇帝が不華に病氣に罹り

これ 皇太子行は一旦停泊の日か決まらんのを聞

病氣のたけに延期 ~~とふり~~ 又その延期の

拜福を止め

不例のなるに延期にあらんのか 已むはく北東を

新しき汽車の横口に向う、此の汽車中を

両宮と云ふに不華に、一と崩御せられ、此と云ふ

との報道を得たと云ふやうな誤解がある、何

と斯の如く後、~~（国）~~官邸の公式訪問を見合

~~（国）~~

総督等と

せし、各が輩が一列の代表として訪問をするに

止めたのがある、斯くして楊子江を降つて上海

に到着し豫乞警の強襲して居る東亞同文書

院を視察し中外人と交歓を盡して歸朝しては

りある

細川候爵と云ふ人由久く佛蘭西に滞在し

と居るに 佛蘭西流の紳士は 非常口元氣の良

人であつたか、却年の時より 諺を好むが 二百番

と暗誦し得るものとあつた、

~~山崎素行~~

因行の 侯爵の家扶

~~武田~~ 武田某は 諺曲の名人が 清浦子爵の 諺を好

むとあつた 彼が 歸りの 船中が 頼りに 諺を 好むあり

これ、吾々の輩は青年の時代東京に居て先輩渡

辺、又、~~吾~~う輩りに謙を御められ、~~如~~如、謙められ先

の四十歳、いかに悔いられ、いかに悔いられ、いかに悔いられ

いと吾々の輩を言つて居たのを、ある人、丁度と

の年、数へ、年の四十、か、あ、い、わ、ら、御められ、る

終に船中で初めて鶴を簪き、その後細川家へ

らの世語り傳へ林某と云ふ先主を寄紙にて

水に有る者と云ふ鶴を簪き、これと云ふ記念す

事ありあつた

明治四十二年に伊藤公良露田に参り途中

朝鮮人

雨度に於て刺客要重根の手に暗殺せられたの

は實に遺憾千萬の事であつたが、斯様では

北軍は當時尙ほ朝鮮の内地に数回入り、運

動を継続して居つたのであるが、吾々は一

月連日回轉空回を断行し

有るの同には特に合併等も  
從つた節と云つた  
朝鮮



9年 宋永隆と号し 伊勢田火部に在りて日  
大社の檀越神官

轉任係と祈願し 又李管九は

~~あき~~ 前年の暮 春に掛りて東

方に東へ帰れし 居て 種々協議 西第へ絶

（金部）の事 にお答ふし 居りて 遂に公衆と同

を糾合して密啓を以て一國の者か各條の諸君

是れが

素と上ると云ふことには、  
この請願書を出した日に若輩は宋  
末と云ふに神武天皇降臨に奉拜す

吾輩等の運命は安んずる熱心に継続し奉り、同志の士とて、  
宋が

伊藤辰以<sup>辰</sup>の朝鮮の副統監<sup>から</sup>より、  
宋が

と云ふ所の曹福亮の氏名中々各條に賛めし

故に、  
考は

~~考は~~

意々多数朝鮮人の名

通と受ける身命の危険に遭遇して、  
 此の如き事

乃か、係母から御尋問受し居ても、  
 事能く遇へ

此の如き事に感嘆の餘りある事と  
 あり、

後に於て他の7名に曾位を授け  
 たり、

氏9名は、其の先に曾位を授け  
 たり、

吾等は管内ありに討てて五張一にせれども、朝鮮に

は雨<sup>112</sup>班の<sup>名</sup>に派して、あつて

あつて事情と一と音信~~を~~ ~~あつて~~ ~~あつて~~ ~~あつて~~

他の方物を以て御に御中る所ありたりとあ

之は餘談だが、此處に幸う事には西園寺内閣

より、~~事務進捗~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~ ~~あり~~

その後を察した

疾くも

結理大臣に程々~~に~~ ~~固く~~ 合條の決断を

后に事つて公は

貸りて、~~後~~に曹弥鏡の病を治し

乙子に職を罷りし也孝内伯と一と孝に代りし

孝に代りし

めれ、~~孝~~の輩は度々提公と●~~孝~~に代りし

明治三十二年の春に至つて、

おろそか也孝と取し、~~孝~~に代りし

見書と作成し、~~孝~~に代りし

◎ 五松田とあるに

贈つて置いたの

で原よりよく言

併と <sup>桂</sup> <sub>カ</sub>

付いたと見へて

吾輩が五月歐洲

に出発する前

夜桂と遇つた

時に桂の言ふに

東は全済はる對

なが何とあして

災いといふ事

一と聖四十二年の五月に暫か華は對國議會

キ

に列席するをト東京と出発ししより此

の春華が華は八年後りむ政友會に復政し其の

政友會は松田と久とを政友會として西國寺公孫親下  
政友會を統率して居つた、系は手帳を以て勝り、松田は人格を以  
て別れて居るに、吾輩は松田と親しかつたから、東京も彼も之を以  
紹介し、且つ二回に亘り熱心な所が必也と説いた、松田は吾輩の

結果財勢の膨脹することを憂ひて居たから、其の心算の事  
詳論して、遂に合併に賛成した、其後韓國信託會の設立、  
是より先同類の人々と頻りに新朝鮮の樹立

是より先同類の人々と頻りに新朝鮮の樹立

吾輩は

むづかき事  
時間かふかつた  
えかした回によ  
れ一たから  
大丈夫と思  
ふたかある  
ほ松田に頼  
む所あり  
けな祭した  
道に後  
つたさう  
つらう

を金に度々會合協議等と続行を求めの事あるが

とうとうと早く所々に故に國家の存に微力

を盡し、その力を實現するに矢張り政友會に

復帰して政友會の内部に居ると居るべき所を

宜うと云ふ所から聲明書を發表して政友會に





説明

事情と音が異なり、大伴に送る

金屏に書かれたり、

藤原氏の事、

とは細かく説き及ぶ

に、南に、建礼書に

大に、  
あるが、昔の事、又、藤原氏は、  
金屏の

決何と困くしと 君れとは知お福かなあうん Pや

うへ

此の時んあうと 桂公の決意を知り

容易に

後係 此の 意に ありやうは事ん

抹まい

あうた

吾が輩か 歟羅巴に 必覆する 前

日に 桂公 とうの 能に 何ああ 十分 焚ゆ 一と 辰

うぬやうぬ口吻のあらうとあるやうにとを記

方法

き、阿氏を説く所の~~文章~~を種々考察して自白は

出発したものである、而して九月一日に自耳教に

ううせん府の新聞紙に出席中、丁度日替

金條の電報が到着して外國の議員等より授け

敬意を表す。それと共に、貴族院議長に謝意を表す。

た。おら。一。二。自分。中。東京。の。政府。並。に。寺。内。総。督。

に。対。し。て。祝。電。を。發。し。た。や。う。な。次。第。に。あ。る。

蓋し日韓関係は曠古の大事件であり従つて

その関係者に對し、如何なる方針を以て行ふべき、又明

此以來歸國のことに努力し有力なる人々に

對して追進せしむるものとあるが如き留神を要す

柱心善の腹い

少軍の如き由無事なり賜ふるとあるやうな

流

があらうといふに、行費は自ら國役料あるから履

歷取調への照會せしめあらうが、要の事は此の

何  
いらたう

場合韓國の事以て餘の幾少一も行費は之を

是金也多方加算からうと云ふ考へで、推心に

しれ然、<sup>其後</sup>公も<sup>と人へて</sup>無考せられ行費のことは

一切是金也ることにありて、單に總理大臣、宮内

大臣その他二三の者に止められ次第である

村西蓮節

村西公

一 爲 院 子 井  
也

一 爲 院 子 井

一 爲 院 子 井

一 爲 院 子 井

一 爲 院 子 井

一 爲 院 子 井

一 爲 院 子 井

名称	小川平吉文書
標題	日韓合併策(未定稿) 二部

M38~43

2部

分類 番号	

522

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

(参)



日韓合併策

未定稿

日韓合併案（未定稿）

日韓合併ヲ敏活ニ且ツ圓滿ニ實  
行スル為メ約改正後成ル速ニ合  
併ノ名ヲ唱ヘ明後五十年 天皇陛下

御即位五十周年 奉祝ノ世皇博覽  
會開設マデニ合併ノ實ヲ遂ケル時  
備ニ此カム以下ニ記ス所ハ其ノ政略ナリ

一 韓國ヲ日本ニ合併スル事

一 日本及韓國ヲ日本帝國ト總稱スル事

一 朝鮮ハ日本ノ正朔ヲ用ル事

一 天皇ハ朝鮮ニ於ル外交、軍備、裁判、

通信、交通并ニ官位、勅章、祭典授

賜ノ大權ヲ統攬シ給フ事

一 帝國議會ハ朝鮮ニ施行スル法律ヲ

議決スル事

一 韓國皇帝ヲ朝鮮國王ト爲シ 天皇

ハ國王ニ朝鮮ニ於ル内政、民政、財政、

司法、行政權ヲ委任シ給フ事

一 統監府ヲ韓國内閣ト合併スル事

一 朝鮮ノ勅諭而、後遺詔及ル、通信管理局ハ朝鮮郵政省  
之ヲ直轄スル事

一 朝鮮ノ内閣總理大臣ハ日本ノ大臣兼

一 大將<sup>シテ</sup>タリシモノヨリ内閣大臣ハ二人ヨリ

日本人ヨリ二人ヲ朝鮮人ヨリ 天皇之ヲ任命

シタル事

一 宮内大臣以下朝鮮ノ官吏ハ國王之ヲ

以テ命ズル事

一 朝鮮ノ吏老ニ三名ヲ樞密顧問官ニ任命

スル事

一 朝鮮人ハ在ノ資格ニ準ジテ資格ヲ賜フ

事

公卿

近來ノ皇族

侯爵

遠近ノ皇族及平朝以前ノ王統

伯爵

各姓ノ本系及名族

子爵

明治九年ノ條約以後ノ新系

日韓條約ノ新系及日韓親

善ノ新系及日韓親

男爵

日露戦争後ノ新系及日露親

總理大臣ノ子孫及日露親

三名士偉人

一公侯爵ノ直ニ貴族院ノ議席ニ列シ伯

子弟ハ直ニ同族選舉權被選舉權有  
スル事

一明治五十年後ハ貴族院多額納税議  
員互推規則并ニ衆議院議員選舉等  
法ニ各道ニ施行スル事

一兩班ニシテ日韓合保ニ基順スルモノニテ桑田  
購入費ヲ下附スル事

一國王ハ上奏裁下シ經テ臨時警察公ノ場  
合ニ朝鮮ニ法律ノ効力ヲ有スル命令ヲ發  
シ又朝鮮ニ施行スル命令ヲ發スルヲ

得ル事

一國王ハ其ノ御璽ヲ鈴スルヲ得ル事

一親衛隊ノ日本軍隊ニ代スル事

一明治五十二年コデニ箇師團ヲ駐屯セシムル事

一明治五十二年コデ五千人ノ軍隊ヲ駐屯セシムル事

一全國各面ニ日精進堂一ヵ所以上ヲ設置スル事

一佛教各宗ニ命シて其ノ布教セシムル事

一明治五十二年コデ日韓人ノ立寄官ニ文官任

用令ヲ適用セズ判任官ニ試験ヲ以テ任用シ

在官者夏候採用シテ資格ヲ附与スル事

面ハ日本ノ  
村ナリ

一 歌字便及心振要ナル地ノ府尹郡守ハ尺シ  
日本ノ人ヲ任用スル事

一 十三道ノ歌字道ハ其儘トシ郡ノ管ハ轉替  
系ニ具ノ度合ヲ行ヒ大ニ定ム地方官展ニ  
置ル事

一 明治五十年ヨリ國會ヲ開テ國ノ政務ヲ議  
決シ道會ヲ開テ道ノ政務ヲ議決スル事

一 明治五十年ヨリ都制・邑制・面制ヲ制定  
スルハ改正シテ自今改メテ布ル事

一 法典ハ及附屬法ハ民法ノ親族相続ノ二篇



并いそ分轄法を朝鮮人に適用せんを制定  
し夏他ハ直ニ日本ノ法曲ヲ施行せん事

一高等法院ヲ大審院ニ合併せん事

一行政裁判所ヲ法務省<sup>又</sup>海陸省<sup>又</sup>施行せん事

一日本<sup>又</sup>韓国ニ税関ヲ設ケ不輸出税ニ合併  
ノ結果ハ之ヲ廢止せん事

一明治三十四年三月ハ日本ノ税法ヲ適用せん事

一明治三十四年三月ニ全國ノ地押調査ヲ行フ事

一朝鮮人ニシテ陸海軍ノ各種學校ニ入學シ去

願シ又兵役ニ充テられ者ハ試験又ハ検査ノ上

之ヲ行ス事

一 韓國ノ教育救済ヲ瘥シ日本ノ教育救済ヲ以テ之ニ代ス事

一 明治五十年後ニ至ル時教育ヲ施スル事

一 日本民團ノ日本人會、學校並ニ明治五十年まで之ヲ繼續し且後ハ日韓人トモ同一地ニ創設スル事

一 海外諸國ノ振興ハ明治五十年まで暫時見計セ決メス事

一 列國ノ實地ニ京城駐劄ノ總領事ヲ設メ

領事々うしんるす

一 清國と通商の爲に於ける通關手續の簡便

一 並に通商貿易の便しを爲し移住する

一 明國と通商するに於ける人々の移住を行ふ

一 明國と通商するに於ける輸出・輸入の統計ニ

一 依りて之を貿易の増進せしむる事

一 政府はたノ力大に計り確立し且つ之を實行す

期スル事

鉄道方針  
航路方針  
移民方針

金融方針  
貿易方針

# 鐵道方針

一帝國ノ國是ハ 確實ニ日本人種ヲ東亞大陸ニ扶植スルニ在ル事

一政府ノ政界ニ滿韓移民ニ在ル事

一今日ノ現状ニテハ 最早二三万人以上ハ朝鮮ニ移住ニ固執スル事

一移民政策ヲ完全ニ實行セシムルニ於テハ 鐵道ヲ敷設シテ交通ヲ便スル屬國ノ外他ニ

他政策ナキ事

一 鐵道ハ羊嶋横斷線タルヲ修

一 政府ハ而勤ヲ拂シ内外債ハ千三百四十萬

圓ヲ明次五年マデニ充テハ而哩ノ鐵道ヲ

敷設スル事

一 清津會堂用ノ鐵道

一 咸興ヨリ甲山、惠山、長湍、江界、雲山、

南浦ヲ經テ多獅嶋、至ル鐵道

一 鐵道兩平壤線ヲ延長シ咸興、惠山、咸

永興、咸興ヲ經テ南浦、至ル鐵道

一 京元線ノ平康ヨリ今改メ春川、原州



韓西土内、左記ノ直通般路ノ向キ事

一長崎ト本浦郡山内

一唐津ト三ヶ浦、馬山、釜山内

一境ト釜山、竹邊湾内

一舞鶴ト元山、西湖津内

一敦賀ト唐津城津内

一此所ニ前記ノ般路ニ向テ明後五十年ヲ補ル

金シ下付スル事

一三千兩、竹邊湾、西湖津、向キ事

一前記ノ各港ニ海上保護會社、代即タリ設置スル事

移民方針

一 朝鮮に於ける移民は明治二十年より大に  
數に達する事

農業移民 十万人

水産移民 十万人

工業移民 五万人

嶺南移民

一 嶺南移民は自然の力による事



一 目下鑛業ノ許可ハ五省有餘ナルモ其母日本  
人ガ實隆採鑛ニ着手セハモノ三十二端々不而  
テ至ノ節又原因ハ鑛業ノ欠乏ニ在ルヲ

一 朝鮮鑛業會社ナル大鑛業ノ會社ノ設立  
シ又鑛業家ヲ勸誘シテ未ダ着手ノ鑛山ヲ  
買収セシムル事

一 鑛務局、鑛業會社、鑛業家ヲシテ各技師  
ヲ派遣シシ全國ニ亘テ鑛山ノ採掘調査ヲ  
為サシムル事

一 鑛物運搬ノ便利ノ圖ル為メ鑛山用ノ

鉄道軌道、車道、橋梁等ノ建設ニ政府  
ヨリ極力補助保護ヲ加ふる事

一 全国ノ採鑿鑛山數ヲナクモ一千ニ増加シ  
其ノ移住者ヲナカレバ、遂ヤせん事

一 鑛

鑛山ニ從事スル日本人乃其家族

五千人

平均

鑛山ノ為メ運送、電氣、郵便、高、飲食店  
等ヲ設ケル日本人ノ數 五千人

合計百八人

千餘

ナリ人

一 陸田、鑛山ニ富ムルヲ米田トカリタルニヤ州府  
並ニ鑛山移住ニ依リシコトニ効フ事

# 水産移民

一漁船ノ冬季帰國ヲ止メシメ水産移民ヲ奨励シテ漁村ヲ設置セシム事

一政府ハ本邦及諸島ノ海岸ニ少クモ石留所以上ノ漁業用漁船庫ヲ設置シテ漁業字ニ貸付カル

一政府ハ朝鮮海水産移民ニ補助シ漁獲物月別品ヲ運送スル漁業母船ヲかりセシメ且以上製造運航セシム事

一政府ハ日露両国共同命令航路ノ汽船ニ必ス

突如二白嶺以上、涼花臺より造還せし事  
一政所、左ノ三箇所ニ完全ナル治世あり  
政所定レ朝解東西南ニ海而、治世あり  
記入る事

天山 日本海

馬山 朝鮮海

群山 萬海

一政所、周西二十府解ノ水産物合ニ入ル  
以テ、年止ニ左ノ割合ヲ以テ、其ノ治民ヲ  
解ニ招集せし事

一、所領 一千戸 五ヶ人

二、所領 二千戸 十ヶ人

一、魚類ノ需要ハ日増而ト、鉄道延長并ハ

安奉鉄道吉房鉄道ノ敷設ニ依リ是等

加ノ傾向アル事

### 四、農業概況

一、農業概況ハ全国中一カ所村ヨリ一箇年

ニ一カ村田戸五十人ヲ移住セシメ別カ五ヶ年

マデニ一カ村人スラ移住ニ至ラセシムル事

一、移轉ノ原因ハ農業概況ニ遠近均一化シテ

施る事

一 移住ノ周旋ニ力ヲ用テ官署ヲ設ケテ  
命ヲシテ之ヲ掌ラシムル事

一 各地方ニハ勸解ヲ以テ民ヲ安シテ  
勸解ノ難地ヲ四々散セシメ移住ラシテ漸次  
之ヲ獲得スル事

一 各地方ノ地主ラシテ所方地ノ買方ヲ以テ  
却シテ勸解ニ土地ヲ買取ラシムル事

一 移民ノ小忌撫養ニ力ヲ用テ買取  
成夫令其地主ニ立替セシムル事



佐幣ハ日本銀行ノ兌換券ヲ用ヒタル事

一 京都平信太郎元山ノ貯銀本支店

今日銀支店ニ改メ更他ノ貯銀本支店出法

一 一カ一銀り乃レ更他ノ銀りニ支取スル

一 東京板金會社ハ支店止シテ新銀本支店

行ハ支店止シ東京板金會社ハ支店止シテ

ハ

一 東京銀行ハ支店止シ日本銀行ニ株主

ハコトヲ得セシメテ支店止シテ

一日五人以上ノ位居タルハ不支店



務也

ノ五者出所ヲ定むべし

行  
 於  
 融  
 通  
 也  
 以  
 心  
 子

34

公府

マデニ在にノ穀、達セシムル原保カ以獎勵

ヲ加フル事

一米穀 二千力石 一大空 五石力石

一穀穀炭産物 五石力石 一棉花 一千力石

一生絲絹 一千力石 一打卷 五石力石

一水<sup>生魚</sup> 一千力石 一穀塩魚 五石力石

一生牛馬 五石力石 一修山物 二千力石

一工作品 五石力石

### 合計一億圓

一輸出税一億圓ナレハ輸入之ニ伴フ一億圓ニ

二ハソリ

百萬移民ノ一事ノミヲ以テ既

ニ合併ノ實ヲ等クルニ足ル

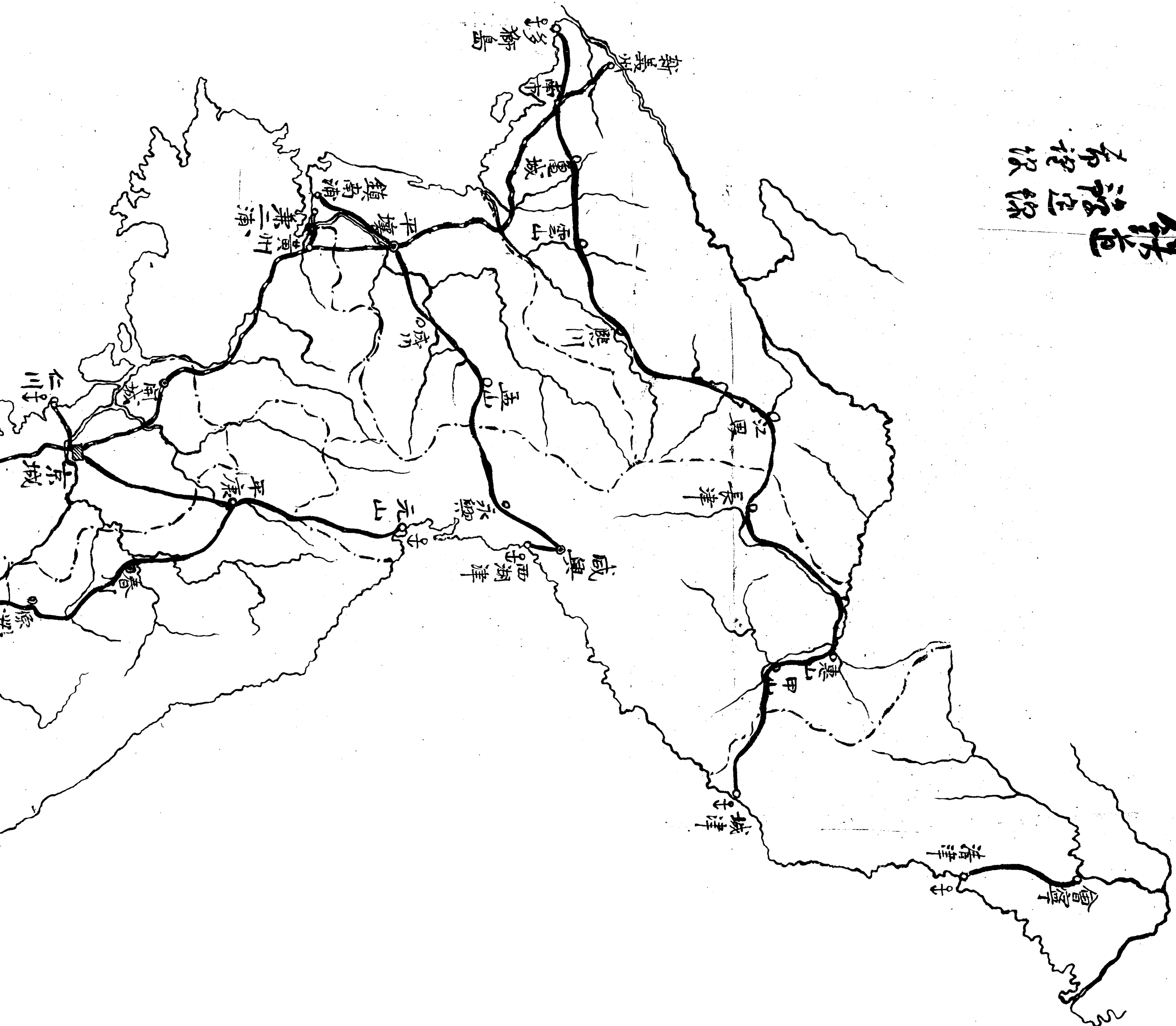
世界博覧會ノ最優等局ハ

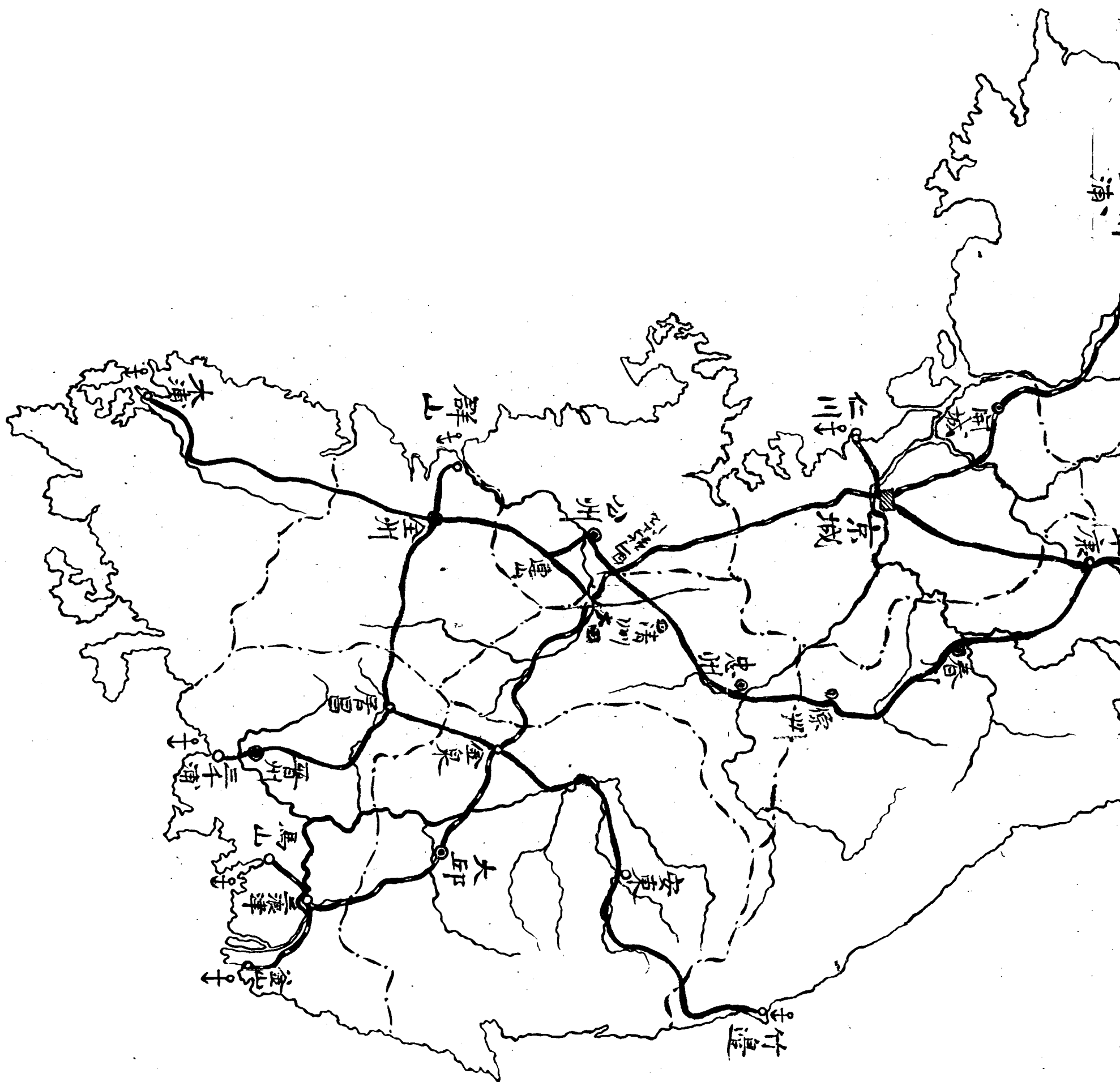
場内ノ出品ヲラヌシテ合併後

朝鮮ナリ

合併後、朝鮮ハ市面位五十五年奉祝ノ  
最大献土者ナリ

# 铁道 希望线路





日韓合併策

日韓合併策 未定稿

一 日韓合併ヲ敏活ニ且以圓滿ニ實行ス  
東洋為メ條約改正後成丈速ニ合併ノ名  
ヲ唱メ明治五十年天皇陛下御即位  
五十周年奉祝ノ世界博覽會開設マテ  
ニ合併ノ實ヲ舉グル準備ニ努ム以下  
一 記ス所ハ其政略ナリ  
一 韓國ヲ日本ニ合併スル事

一 日本及韓國ヲ日本帝國ト總稱スル事  
一 朝鮮及日本ノ正朔ヲ用フル事

一 天皇ハ朝鮮ニ於テ外交軍備裁判通信

交通并ニ爵位勲章榮典授與ノ大權ヲ總攬シ給フ事

一帝國議會ハ朝鮮ニ施行スル法律ヲ議決スル事

一韓國皇帝ヲ朝鮮國王ト為シ天皇ハ國王ニ朝鮮ニ於ル内政民政財政學政ノ行政權ヲ委任シ給フ事

一朝鮮ノ裁判所鐵道管理局通信管理局ハ東京政府之ヲ直轄スル事

一統監府ヲ韓國内閣ニ合併スル事

一朝鮮ノ内閣總理大臣ハ日本ノ大臣大將若クハ朝鮮ノ大臣タリシモノヨリ内閣



大臣ハ二人ヲ日本人ヨリ二人ヲ朝鮮人ヨリ天皇之ヲ任命シ給フ事

一宮内大臣以テ朝鮮ノ官吏ハ國王之ヲ日韓両土人ヨリ任命スル事

一朝鮮ノ天老二三名ヲ樞密顧問官ニ任命スル事

一朝鮮人ニ左ノ資格ニ應ジ資格ヲ賜フ事

公爵 近系ノ皇族

侯爵 遠系ノ皇族及李朝以前

ノ王統

伯爵 各姓ノ本系及各族門閥

子爵

明治九年ノ條約以後日

韓條約日韓協約日韓合

併及日韓親善ニ勲功ア

リシ者并ニ其子孫

男爵

日露戦争後参政大臣内

閣總理大臣タリシ者及

其子孫并ニ名士偉人

一公侯爵ハ直ニ貴族院ノ議席ニ列シ伯子

爵ハ直ニ同族ノ選舉被選舉權ヲ有スル事

一明治五十年後ハ貴族院多額納税議員互

選規則并ニ衆議院議員選舉法ヲ各道ニ

施行スル事

一 西班牙ニシテ曰韓合併ニ恭順ナルモノニ  
ハ桑園購入費ヲ下附スル事

一 國王ハ上奏裁可ヲ經テ臨時緊急ノ場合  
ニ朝鮮ニ法律ノ効力ヲ有スル命令ヲ發  
シ又朝鮮ニ施行スル欽令ナルモノヲ發  
スルヲ得ル事

一 國王ハ其ノ御璽ヲ鈐スルヲ得ル事

一 親衛兵ヲ日本軍隊ニ代ユル事

一 明治五十年ヨリ二箇師團ヲ駐屯セシム

ル事

一 全國各面ヨリ日韓巡查一名以上ヲ配置ス

ル事  
一 宗面ヨリ日本ハ村ナリ

一 佛教各宗ニ命シ盛ニ布教セシムル事

一 明治五十年マテ日韓人ノ高等官ニハ文官任用令ヲ適用セス判任官ハ試験ヲ以テ任用シ在官者ハ其終採用シテ資格ヲ附與スル事

一 觀察使及ヒ樞要ナル地ノ府尹郡守ハ盡ク日本人ヲ任用スル事

一 十三道ノ觀察道ハ其儘トシ郡ノ管轄替并ニ其ノ廢合ヲ行ヒ大ニ重ヲ地方發展ニ置ク事

一 明治五十年ヨリ國會ヲ開テ國ノ豫算ヲ議決シ道會ヲ開テ道ノ豫算ヲ議決スル

一明治五十年ヨリ都制、邑制、面制ヲ制定、若クハ改正シテ自治制ヲ布ク事

一法典及附属法ハ民法ノ親族相續ノ二篇并ニ戶籍法ノ一、朝鮮人ニ適用スルモノヲ制定シ、其他ハ直ニ日本ノ法典ヲ施行スル事

一高等法院ヲ大審院ニ合併スル事  
一行政裁判所ヲ設ケ、又訴願法ヲ施行スル事

一曰韓西土間ニハ税関ヲ設ケス、輸出税ハ合併ノ結果トシテ廢止スル事

一明治五十年マテハ日本ノ税法ヲ適用セ

サル事

一明治五十年マテニ全國ノ地押調査ヲ行  
フ事

一朝鮮人ニシテ陸海軍ノ各種學校ニ入學  
ヲ志願シ又兵役ヲ志願スル者ハ試験又  
ハ検査ノ上之ヲ許ス事

一韓國ノ教育勅語ヲ廢シ日本ノ教育勅語  
ヲ以テ之ニ代ユル事

一明治五十年後ニハ義務教育ヲ施行スル  
事

一日本民團日本人會學校組合ハ明治五十  
年マテ之ヲ繼續シ其後ハ日韓人トモ同

一地方制度ノ下ニ支配スル事

一法外法權ノ撤去ハ明治五十年マテニ時機ヲ見計ヒ決行スル事

一列國ニ交渉シ京城駐劄ノ總領事ヲ罷メ領事タラシムル事

一清國ト間島以外ニ於ル越墾韓民ノ保護并ニ國境貿易ニ関シ條約ヲ締結スル事

一明治五十年マテニ百萬人以上ノ移民ヲ行フ事

一明治五十年マテニ輸出一億輸入一億合計二億圓マテ貿易額ヲ増進セシムル事

一政府ハ左ノ五大方針ヲ確立シ其ノ實行

ヲ期スル事

鐵道方針

航路方針

移民方針

金融方針

貿易方針



# 鐵道方針

一帝國ノ國是ハ確實ニ日本人種ヲ東亞大

陸ニ扶殖スルニ在ル事

一政府ノ政略ハ滿韓移民ニ在ル事

一今日ノ現状ニテハ最早二三萬人以上ハ

朝鮮ノ移住ニ困難ナル事

一移民政策ヲ完全ニ實行セント欲セハ鐵

道ヲ敷設シテ交通ヲ開キ富源ヲ開ク外

他ニ良策ナキ事

一鐵道ハ半島横断線タルニキ事

一政府ハ百難ヲ排シ内外債八千萬圓ヲ募

集シ明治五十年マテニ左記八百哩ノ鐵

道ヲ敷設スル事

一清津會寧間ノ鐵道

一城津ヨリ甲山惠山鎮長津江界雲山

南市ヲ經テ多獅島ニ至ル鐵道

一鎮南浦平壤線ヲ延長シ成川孟山永

興咸鏡ヲ經テ西湖津ニ至ル鐵道

一京元線ノ平康ヨリ分歧シ春川源州

忠州信州烏致院公州ヲ經テ連山ニ

於テ湖南線ニ接續スル鐵道

一群山ヨリ金州居昌金泉安東ヲ經テ

竹邊灣ニ至ル鐵道

一鐵道ノ工夫ニハ窮民并ニ暴徒歸順者ヲ

使役スル事

一鐵道敷設ニ暴徒ノ鎮壓國內ノ靜謐ニ必要ナル事

一航路方針

一移民ノ渡航商業ノ發展ニ便ナラシムル為メ日韓兩土間ニ左記直通航路ヲ開ク事

一長崎ト木浦群山間

一唐津ト三千浦馬山釜山間

一境卜釜山竹邊灣間

一舞鶴卜元山西湖津間

一敦賀卜清津城津間

一政府ハ前記ノ航路ニ向テ明治五十年マ  
テ補助金ヲ下付スル事

一三千浦竹邊灣西湖津ヲ開ク事

一前記ノ各港ニ海上保險會社ノ代理店ヲ  
設置スル事

## 移民方針

一朝鮮ニ於ル移民ハ明治五十年マテニ左  
記ノ數ニ達スルヲ期スル事

一鑛業移民

十萬人

一水産移民

十萬人

一農業移民

百萬人

一鑛山移民

一鑛山移民ハ自然的ニシテ最モ容易ナル

事

一目下鑛業ノ許可ハ五百有餘ナルモ其内

日本人ガ實際採鑿ニ着手セルモハ三十

ニ満タス而シテ其ノ重大ル原因ハ資本  
ノ欠乏ニ在ル事  
一朝鮮鑛業會社ナル大資本ノ會社ヲ設立  
シ又鑛業家ヲ勸誘シテ未着手ノ鑛山ヲ  
買收セシムル事

一鑛務局鑛業會社鑛業家ヲシテ各技師ヲ  
派遣シ全國ニ亘テ鑛山ノ探檢調査ヲ為  
サシムル事

一鑛物運搬ノ便利ヲ圖ル為メ鑛山用ノ鐵  
道軌道車道橋梁等ノ建設ニハ政府ヨリ  
極力補助保護ヲ加フル事

一全國ノ採鑛鑛山數ヲ少クトモ壹千ニ増

加シ其ノ移民數ヲ十萬人ニ達セシムル  
事

下鑛

鑛山ニ從事スル日本人及其家族五十人  
鑛山ヲ為メ運送農業雜貨商店

平均

等ヲ營ム日本人及家族五十人

合計百十人

千鑛

十萬人

一韓國ハ鑛山ニ富ムヲ以テ米國「カリホルニ  
ヤ」州開發ノ鑛山移民ニ依リシコトニ做  
事

## 水産移民

一 漁船ノ冬季歸國ヲ止メシメ水産移民ヲ獎勵シテ漁村ヲ設置セシムル事

一 政府ハ本土及嶋嶼ノ海岸ニ少クモ百箇所以上ノ漁業用冷蔵庫ヲ設置シテ漁業家ニ貸付スル事

一 政府ハ朝鮮海水産組合ニ補助シ漁護物及用品ヲ運送スル漁業母船ヲ少クモ五十隻以上製造運航セシムル事

一 政府ハ日韓両土間命令航路ノ汽船ニ必ス容載二百噸以上ノ冷蔵庫ヲ造置セシムルコト



一政府ハ左ノ三箇所ニ完全ナル漁業港ヲ  
設定シ朝鮮東西南三海面ノ漁業ヲ支配  
スル事

元山 日本海

馬山 朝鮮海

群山 黄海

一政府ハ關西二十府縣ノ水産組合ニ命シ  
明治五十年迄ニ左ノ割合ヲ以テ其漁民  
ヲ朝鮮ニ移住セシムル事

一府縣 一千戸 五千人

二十府縣 二萬戸 十萬人

一魚類ノ需要ハ日韓兩土ノ鉄道延長并ニ

安奉鐵道吉清鐵道ノ敷設ニ依テ益増加  
ノ傾向アル事

### 農業移民

一 農業移民ハ全國中一萬町村ヨリ一箇年  
二 一町村四戸二十人ヲ移住セシメ明治  
五十年マデ二一百万人以上ヲ朝鮮ニ土  
着セシムル事

一 移轉ノ汽車汽船賃ハ遠近均一法ヲ實施  
スル事

一 移住ノ周旋ハ府縣農會郡農會村農會ヲ

シテ之ニ當ラシムル事

一 各府縣ニ朝鮮移民會社ヲ設立シテ朝鮮ノ耕地ヲ買收セシメ移民ヲシテ漸時之ヲ獲得スルノ方法ヲ設ケシムル事

一 各府縣ノ地主ヲシテ所有地ノ幾分ヲ賣却シテ朝鮮ニ土地ヲ買換ヘシムル事

一 移民ノ小屋掛費中馬買入費等ハ最初成丈會社及地主ニ立替セシムル事

一 移民ノ耕作地トシテ一戸五人ニ田畑三町歩即チ二十萬戸百萬人ニ六十萬町歩ヲ割當ツル事

一 移民ノ薪炭採取地トシテ一戸ニ付キ官

山五町歩ヲ貸付ル事

一 移民ノ利益ヲ保護スル為メ朝鮮ノ鐵道  
ハ農産物ノ運搬ニ限リ其運賃ヲ遠近均  
一法ニ據ラシムル事

### 金融方針

一 韓國銀行ヲ日本銀行ニ合併シ朝鮮ノ貨  
幣ハ日本銀行ヲ兌換券タラシムル事

一 京城平壤大邱元山ノ韓銀支店ヲ日銀支  
店ニ改メ其他ノ韓銀支店出張所ハ第一

銀行其他ノ銀行ニ賣却スル事

一東洋拓殖會社ヲ廢止シテ朝鮮勸業銀行  
法ヲ發布シ東拓會社ヲ勸業銀行ニ改ム  
ル事

一農工銀行法ヲ改正シ日本人ヲシテ株主  
タラシムルコトヲ得セシメ且ツ増資ヲ  
行フ事

一日本人五十戸以上住居スル地ニハ必ス  
産業組合ヲ組織セシムル事

一各府縣ノ經營ニ係ル盛大ノ移民地漁業  
根據地并ニ各府縣ノ開港場ト港路ヲ聯  
絡スル朝鮮ノ開港場ニハ必ス其府縣ニ

在ル銀行ノ支店出張所ヲ設立セシムル  
事

一朝鮮ニ於ケル生命保險ノ保險金ハ必ズ  
朝鮮ニ於テ融通セシムル事

貿易方針

一政府ハ朝鮮ノ輸出貿易ヲシテ明治五十  
年ヲテニ左記ノ額ニ達セシムル保護奨  
勵ヲ加フル事

一米穀 二千萬圓 一大豆 五百萬圓

一雜穀農產物 五百萬圓 一棉花 一千萬圓

一生糸繭 一千萬圓 一柞蚕 五百萬圓

一生魚 一千萬圓 一乾塩魚 五百萬圓

一生牛肉皮 五百萬圓 一鑛山物 二千萬圓

一工作品 五百萬圓

合計 壹億圓

一輸出既二一億圓ナラバ之レニ伴フテ輸

入モ一億圓ニ上ル可キ事

百萬移民ノ一事ノミヲ以

合

算

事

ハ

テ既ニ合併ノ實ヲ擧ケル  
ニ足ル

世界博覽會ノ最優等品ハ

場内ノ出品ニアラステ

合併後ノ朝鮮ナリ

合併後ノ朝鮮ハ御即位五



十年奉祝ノ最大献上品ナ

リ

名称	小川平吉文書
標題	射山樓秘聞—韓國皇帝退、保護 条約締結顛末 小川平吉述 小島誠速記

M40.9.

1 綴

分類 番号	

523

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

参

小川第一ノ二

韓國皇帝退、保護條約締結願求

射山樓秘聞

明治四十年九月

小島誠連記

韓皇退位保護條約顛末

原

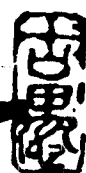
小

島

誠

速

記



廷臣無個策殊勲八  
 道鷄林事太紛一卷  
 叙來當日跡想  
 氣捲風雲

君


溪南小島誠拜題



# 韓國皇帝退位新保護條約顛末

明治三十九年

今度（今度は、朝鮮の政情を視察するに因り）私が朝鮮へ参りましたのは、其前六月中に朝鮮の政情視察に行つたのが原因となつて七月に再び渡韓するやうになつた譯であります。六月中朝鮮に参りましたのは豫てより同志の人々と共に心配して居つた所の朝鮮の政治界に於ける大改革が出来たからである。其大改革と云ふのは乃ち吾々の豫て交りを結んで居る一進會の領袖宋秉畯が、李完用と共に内閣を組織して、統監の伊藤侯も昨年来宋秉畯と度々會見をし相談をした結果宋秉畯に依て新内閣を組織して大に施政の改善を断行しやうと云ふ考へになられたと云ふことを知つて居りますから、ソコで朝鮮の政況を視察し合

せて伊藤統監共種々談話を交換したいと思つて朝鮮に参つたのであります。然るに豫期の如く朝鮮に於ける政治の改革は着々歩を進めて、内閣の官制を改革し又皇帝の我儘を制するやうな方法を着々と立てまして、是迄とは餘程面目を改めた貌ちでありました。殊に新内閣は其組織する初めに當つて、正面より堂々と韓國が何處迄も日本に依頼して行かなければならぬと云ふことを細かに且つ露骨に皇帝に上奏をして、さうして内閣を擗へ又官制をも改革したのであります。すからして、従前の内閣の如くに表面は日本に親しみ裏面に於ては貳心を持つと云ふやうなことは無かつたのでありますから、此点に於て大に従前とは趣きを異にして居つた。現に其頃私は屢々人にも話した如く、朝鮮政府の大臣等は火曜日に伊藤統監の官邸に集合して相談してゐる、の方針を定める、水曜日には其統監邸で定めたことを又朝鮮の内閣員だけが寄つて、皇帝の前で御前會議を開

いて形式上確定すると云ふ貌ちであつた。餘程面白いエ合に行つて居つたのであります。併しなから皇帝の陰謀と云ふものは以前に比して少しも断ゆることなく、新内閣が改革をして皇帝の権限を縮めやうとすればする程、皇帝の側<sup>がわ</sup>に於ける陰謀の力と云ふものは益々強くなると云ふ貌ちであつたのであります。駐韓軍司令長谷川大將の如きは陰謀を以て皇帝の天性であると評せられた位である。又甚だしいきは宿場女郎の古手であると云ふやうな評を聞いたこともあるのであります。

初め伊藤統監の韓國に赴任する頃には統監は自分の伎倆に依て施政の改善をすることが出来ると云ふ考へで居つたのであります。が、之は吾々同志の者は甚だ危ふんで到底伊藤侯の如き考へを以て韓國に臨みましても其目的を達することは出来まい、早晚手を空しくして追けて帰ると云ふやうなことになるはせぬかと云ふことを氣遣つて



居りました。然るに先般伊藤侯爵に逢つて種々話をして見ると云ふと、段々長い間經驗をした結果到底此朝鮮に對しては普通の手段方法を以てしては施政の改善をするのが出来な、日韓協約の趣意目的を達することは出来ないと云ふことを考へられたと見へまして、今度面談して見ると皇帝の陰謀其の他の事に就て種々様々なることの話があり、又皇帝に對して其陰謀を質問し又ハ詰責した場合に於ける皇帝の挨拶が何時でも、無責任を極めて居ると云ふやうな事柄の細かい話がある、ありました末に、統監は歎息して、此頃に至つて初めて自分も當初の考へが過まつて居つたと云ふことを感じた到底以前の如き考へで朝鮮に臨んで居つた分では決して目的を達することが出来ないと云ふことを近頃初めて悟つたと云ふことを言われたのであります。ソコで私は侯爵が以前の考へが間違つて居つたと云ふことを自覺せられたのは実に我國の爲に幸福である、

侯爵が前の考へが過まつて居つたと云ふことをは覺らるゝ以上は、  
是から後の遣り方と云ふものは推して知るべきのみである。之は日  
本の爲に幸福であると祝辭を述べた位でありまして、私は此韓國新  
内閣の勇氣勃々たる所に榮じて必ず見るに足る程の仕事を仕出かす  
であらうと云ふことを考へて居つたのであります。夫で後々の事  
等も侯爵とは種々談合をし又一方には宋秉畯とは無論度々會合もし、  
會飲もして種々前途に就て相談して歸つて参りました。

然るに間もなく彼の海牙に於ける密使事件と云ふものが起つて参り  
ましたからして、私は之は実に面白い事が起つて來たと考へたので  
あります。是迄既に皇帝は日本に對して不誠実な事が沢山あつたの  
であつて、或は自分から金を出して地方に反亂を起さしめるとか、  
或は外國の領事館に手を廻して種々な事を訟へ出づるとか云ふやう  
な事は統監の手元にみな確証のあることで、其他是等に類似した事

が澤山あるのでありますからして、早晚是等の事柄を集めて而して其処分をしなければならぬと云ふことは伊藤侯は無論考へて居つたのである。吾々も亦考へて居つたのであります。然るに端なくも此海牙に於ける列國代表者の會合の目前に於て、日本に對する反抗の趣意を明かに演出したのでありますからして、之は最早捨置くことは出来ない場合と相成つたと考へた、否好機會到来と考へたのであつた。夫で其當時世間では最早朝鮮の事を半ば忘れたやうな貌ぢでありましたからして、新聞其他政治家の仲間等に於ても海牙の問題は餘り重きを置かないやうな感があつた。或は之を以て滑稽なりと冷笑する者もあり、或は亦不埒だと云つて眞面目になつて怒る者もあると云ふやうな譯で、兎に角新聞紙上の問題にもならな一位であつた。然るに吾々の同志はどうか此機會に乘じて朝鮮問題を根本的に解決したいといふ考へを持つて居りました。ソコで私は取敢へず

伊藤侯爵に郵便を出しまして斯う云ふことを云つてやった、お分れてから以来未だ日尚浅きに誠に面白い事が起つて来た、昔は豊太閤の遺臣には石田三成などいふ随分才智のすぐれた輩が澤山あったけれども、是等の人々の小才に依て遂に天下を徳川氏の方にやつてしまつたのであるが、古今何ぞ其事蹟の相類するの甚だしきや、今回密使事件の如き好機會が到来したことは日本の爲に仕合せであるし又閣下の爲にも幸福である。私は閣下が必ず此機會を利用して對韓問題を根本的に解決さるゝと云ふことを信じて疑はないと云ふことを書いて郵便を出した。夫からヨリ／＼友人又は同志と話をしまして、一方に於ては衆議院に於ける同志の猶興會が集會を開きまして、其席に於て朝鮮に於ける新内閣の組織の事及び皇帝の從來の陰謀の事並に伊藤侯の考へも餘程以前とは變つて居つて、早晚朝鮮に向つて鉄鎚を下す考へがあると云ふことを細かに話を致しました所

か其結果猶興會に於ては、一面は伊藤侯に向つて此機會を以て對韓問題を根本的に解決することを望むと云ふ電信を發し、又一方に於ては總理大臣外務大臣等に向つて意見を述べると同時に私に、朝鮮に行つて出来るだけ吾々の希望を貫徹するやうに運動をせよと云ふことであります。其理由はどうしても此今度の對韓の談判は、假令内閣に於て如何なる相談を決めても伊藤侯其人が承諾しなければ夫を行ふことが出来ない、又大方針がきまつても伊藤侯の考へ様一つて以てどうにでもなる、侯の少々の加減に依て朝鮮に向つて請求することゝも或は嚴重になり或は寛容にもなる、つまり伊藤侯の方寸に依て此解決方法と云ふものが非常に差異を來すのであるからして、どうしても朝鮮に行て伊藤侯其者を動かすと云ふことが時局に就ては最も必要である、假令内地に於て如何に内閣員に強硬なる決心をさせても之を實現させやうとすればどうしても伊藤侯其者を動かさ

なければ駄目なのである。のみならず今回の解決方法と云ふものは恐らくは内閣に於て決議をすることは出来まい、多分伊藤侯と相談するか或は侯の意見に任せるといふことになるに違ひないと云ふ考へで、乃ち朝鮮に行くと云ふことを決定になつたのであります、夫で伊藤侯を動かすに就ては、元より種々様々なる法もあるに違ひない、けれども其相手たる所の朝鮮の内閣と云ふもの、考へ如何に依て——決心如何に依て伊藤侯の考へと云ふものも多少の変化を来すと云ふことは、之は豫め想像の出来ることでもありますからして、朝鮮の内閣員中に重きを爲して居る宋秉畯と親交あり又對韓問題從來の關係のある私が渡韓すると云ふことは最も必要であると云ふことに衆議一決した譯である。ソコで其時は丁度七月の孟蘭盆に際して居りましたので、殊に長い間朝鮮に旅行して歸つて来たばかりの私は再び朝鮮に行くと云ふことは餘程困難であつたのであります、が、

併し同志の勧めもだし難く、又十年來苦心し來つた朝鮮の問題が今回旨く行けば十分なる局面の進展を見る事が出来るといふ場合であつたのでありますから、萬障を抛つて渡韓しやうと云ふ決心をいたしました。夫から渡韓する前に林外務大臣を訪ふて吾々の希望のある所を述べました。私は豫て大竹貫一君等と共に、具體的の案を作りまして、「日韓兩國を合併する」と云ふことが第一の案、第二は「現皇帝を廢し之と同時に統治權全部を我に委託せしむること」、いふ此二つ案を作つて行つて外務大臣に談判をしたのであります。我々は眞さに韓國皇室及韓民の日本に反抗する実狀を述べ此俟放任するに於ては火の手は益々強くなつて日韓一家の形勢は逆轉して日露戦争前の状態に還元するかも知れない、どうぞ此際一刀兩断の處置に出で、貰ひたい、蛇を生ま殺しにして置けは反て其蛇に反噬せらるゝといふやうな話をした處が外務大臣も林董といふ人は至つて淡泊の人で

大觔吾々の趣意に賛成して種々打ち解けた話があつたが其中に豊臣  
徳川から石田三成の話も出て徳川氏のやり方で行けば韓皇の如き人  
に種々陰謀をさせておい／＼といろ／＼な要求をするといふ事にな  
る。そして遂に天下は徳川氏に帰するやうになるといふやうな話も  
出た。そこで我々は大坂方の陰謀は今回の密使事件を以て絶頂に達  
して最早やり盡したのであるからこちらでは最後の決断を下しても  
よい時機であるといふ事を述べた處が林外務大臣も自分も固より今  
日の事態は大坂城の外濠を埋めさせるか又は本丸まで取つて仕舞ふ  
かといふ處まで形勢が切迫して居る事は認めるが只其の遣り方を如  
何すればよいか方法に就いて我々は苦心して居るのであるといふ事  
で大觔我々と同心意見であることが分つた。我々又西園寺總理大臣  
に面談した處が西園寺總理も平生に似合はず打ち解けて話をされた。  
私は其頃まだ侯と親しくなくて長く國事を談じたのは之が初めて。



あつて明治四十三年政友會に復歸した時は侯が總裁であつて私は直に幹事首席となり親しくなり非常の知遇を辱うした。其れはさておき此時西園寺總理も亦徳川氏の例を援いて、家康が石田三成を助けて置いて而して三成をして種々の細工をさして、豊臣氏を亡ぼしたと云ふことであるが此辺のやり方は餘程考究ものである。其緩急の順序が考へものであるといふ事で外濠埋め立て云々の事も話されて是亦大幹に於て我々の趣意を<sup>良</sup>諒承されたのである。茲に我々の面白く感じた事は私が伊藤侯にやつた手紙に徳川家康と石田三成の事を引例したと同じく林外務大臣も西園寺總理大臣も同じ例を援かれて外濠埋め立ての話をされたのは妙であつた。殊に兩相の口吻で見ると両者會議の際に此話が出たに相違ないと感じられた。かやうな次第で政府の希望といひ方針は我々と大同であることが分つたが、且又兼ねて先般李完用内閣組織の際には皇帝退位等の場合

をも豫想して組織をしたのであり又宋秉畎（内務大臣）は伊藤公に  
麻立の事を話した事がある程のことだから、皇帝廃止は必ず出来ると思  
つたが、さて肝腎の伊藤統監はどうであるか、林外務のいはれる通  
り方法如何といふ實際問題になればどうしても伊藤公の方寸と其の  
手腕に待つより外に致方がない、そこで山座政務局長などもやはり  
此際伊藤統監を衝くことが必要であるといふ意見であつたから私は  
断然渡韓を決心したのであつた。屢が生憎東海道の汽車線路が破壊  
したと云ふことであつた。且つ出發の準備も出来ませず、又政府筋  
から聴きましたのに、四日か五日の間には問題が解決は出来なさう  
であるといふことでもありますから、十四日を延ばして十五日に<sup>再び</sup>總理  
大臣にも逢つて十五日の午後三時の汽車で行く積りでありました屢  
が又鐵道が壊はれて不通となつたので、其日の午後三時横濱を出帆  
する郵船會社の船に中野天門氏と兩人で急遽乗り込むことにしたの

である。此時郵船會社は近海航路にはお客を乗せない事になつたが永井支店長に談判して承諾を得てやつと小舟を漕ぎ付けたら船は己に錨を巻き上げて仕舞つた處であつた。海上一詩あり、曰く

海風吹送火輪船　千里神飛落日辺

多事我憂人社稷　一年西度入朝鮮

東京を立つ日に林外務大臣が急に朝鮮に行くことになつたと云ふことを聞きました。神戸に着いた所で林外相は昨日己に東海道を強行して今朝京城に向つたといふ事を聞きました。我々は午後の急行で直行したから着韓は林外務大臣より一日後れたのであります。

翌日の午後船が釜山に着くと出迎の人々の中を押分けて相撲取りのやうに肥へ太つた鳴門の女將が（之も朝鮮取りの熱心家）新聞の號外を持って来た、皇帝退位の號外である。また詳しいことは分らなかつたが、私思ふに之は朝鮮の内閣員等が皇帝の退位に依て責任を

兎れやうと云ふ考へから進んでやつたのでありはせぬかと思ふたのであります。若し伊藤侯に遣られたならば皇帝の讓位だけで止む筈はない、更に同時に何か政治上の處置をしなければならぬ、筈である。と考へて居りました。夜になりますると京城に騒動があると云ふやうな電報が理事廳に参つたと云ふことで人心恟々と云ふ有様であります。翌朝京城へ向つて出發する前に梅博士、松井理事官等に逢ひました處が皇帝の退位から京城は中々の騒動で總理大臣李完用の宅は暴徒から焼かれて仕舞つたといふ事で汽車の途中も危ないやうな話であつたが構はず出發した、途中大邱の駅からは警部巡查が十人ばかりも乗込んで京城に應援に行くといふこととでありまして、追々京城に近寄るに従つて不穩の報道が益々参つて居ると云ふ次第であります。京城を距る二つばかり手前の駅に行きました所が、知人の出迎ひに来て居る者があつて京城到底騒がしくて且つ危険であるか

らして此處へ泊れと云ふやうなことを云ふ者もあります。又汽車の車掌が来まして京城は大騒動で危険であるからして今夜は多分城内に這入ることは出来ないでせうから南大門外の辺に御泊りになるだらうなど、いふ位でありましたが幸にして無事京城に着き望月、佐瀬其他の人々の出迎を受けて巴城館に落ち着きました。迎ひの中には宋秉暎初め我々同志の常に會合する料理店で只だ一軒朝鮮人街の真中に在る清華亭の女將も来て居つた。同家は無論騷擾の爲に商賣は休んで居るけれども未だ格別の異変もないと云ふことであります。時々朝鮮人が喊聲を揚げ石など投げるが百使共の決死の勢に恐れて何も手出しはしませんといふ事です。ソコで私は同志の友人達といろ／＼話したいと思ひましたけれども、宿屋は混雜して話をすることが出来ませぬから、人々の飛意に従ひ清華亭に行くことにしまして物騒の中を物ともせず望月龍太郎、江南哲夫、佐瀬熊鉄など

と云ふ豫て一進會に深い關係を持て居りまする同志の人々と共に清華亭に行つて晚餐を喫しながら種々様子を承はり又打合せをも致したのであります。そして夜の二時頃になつて巴城館に歸つたのであります。清華亭の召使三四人が仕込杖又は抜刀を以て護送して呉れるといふ有様です。丸で戦争です。日本人町を通る時分には十かく日本人は元氣が良いものですから老人も女も皆表へ出て何か事あれかしと見て居るやうな塩梅であつた。他の地方で見ると京城は大騒動で皆震へ上つて居るかと思ふと、其間の日本居留地に於ける日本人はナカ／＼元氣がよくつて店の戸を締める所か皆戸を明けて表へ出て居ると云ふやうな次第である。乍併朝鮮町の方に行て居る日本人や又は暴動のあつた王城附近の日本人は餘程危険であつた様子だがみな中々の元氣で其れ／＼防禦敵對の方法を講じて居つたのです。私の泊つた宿屋でも若い者は皆武器を持て徹夜宿直する有様であつ

たのでありますが、併し私の泊つた巴城館は日本町の方にあつて少し小高い所であるし朝鮮の暴徒があつた辺迄襲ふて来る氣遣ひは萬やないといふて居つたが、然し警戒は中々嚴重であつた。

翌朝伊藤統監に面會を申込むと快諾せられ早速訪問した處が喜んで迎へられ「老爺さんとう／＼やめた」といきなりいはれましたやうな次第で、直ちに對韓問題に入り、私は歸朝後の模様から同志と相談の結果席の暖かなる暇もなく再び渡韓した事を話して我々同志の決議文を提出して第一には此際断然韓國を日本に合併する事、若し不可能ならば第二に皇帝を退位せしめ（此点は着韓以前に實現したか）すべての主權を我邦に收むる事といふのであつて、第二條に付ては如何なる名義如何なる方法でも宜しいから統治權の実權を我に收むるやうにしたい。斯様な二個條の注文を出しました。其理由として朝鮮問題は我國に取つては二千年來の久しい間の問題であると

云ふことからして今回が最も此の根本的処分を爲すに適當な時である  
と云ふことを述べ明治維新改革に於ける木戸、大久保等の英断を引  
例して侯の決心を促した。其の理由の第一には日本の世界列國に於  
ける國際關係が今日の如く親密にして無事であることは是迄未だ曾  
て無いことである。英米は勿論露獨佛でも今日ほど我國と親善なこ  
とはない。維新以来琉球処分でも日清戦争乃至日露戦争でもいざと  
云ふ場合には歐米列強からいろ／＼な苦情や故障が出たのであるが  
今日は外國方面は先づ面倒があるまいと思ふ。第二は韓國方面の實  
状である。韓國方面も是れまで長い間千変万化して清國や露國の勢  
力が盛んであつた事もあつたが、今日は幸ひにして統監の盡力に依  
つて最も日本に都合のよい内閣が出来て居る。かゝる内閣は實に是  
迄亦珍らしい内閣であつて今後如何に日本に親しむ人間が内閣を組  
織するとしても此宋秉世、李完用の如き者が何時でも出て来ると云



ふことは望むことが出来ないものである。李も宋も嘗に親日ばかりではない、意志の強い決断のある誠に珍らしい人物である。か様な人間が何時も朝鮮の内閣に出て来ると云ふ事は到底望むことが出来ない。今日は実に此点からも最も朝鮮に対する根本的處分を為すには都合の好い時である。第三には統監——乃ちアナタの身からだと云ふものは最も此根本的處分を為すに就て適當である、夫は度々アナタ自身からも云はれる通りで、アナタの主義は穩和主義であるとか懷柔主義であるとか云ふことはモウ内外に認められて居るのみならず、朝鮮の頑固派の奴等ですへも日本の事を悪く言ふ前に當つて伊藤さんは良いけれども他の者はいかな々と云ふことを言ふ位である、乃ち日本も世界各国も朝鮮の頑固党迄も統監は穩和主義である或は懷柔主義であるとか云ふことを認めて居るのである、之に加ふるにアナタは内外に對して重望を荷うて居らるゝお方であるからして同じ事をし

一つ処分をして其遣る人の如何に依て、世間の人と云ふものは非難をもし又首肯することもあるのである。今懷柔主義者で且つ内外の重望を負うて居る所のアナタの手で韓國を処分すれば、如何なる処分をして内外盡く異議を唱へないのである。アナタのやうな統監が此後にも出て来ると云ふことは到底期することの出来ない、夫であるからしてアナタが統監である時に朝鮮の最後の問題をどうしても解決して貰はなければならぬのである。第四には此海牙に於ける密使事件と云ふものは実に芝居に荷へたやうに旨く出来て居る。丁度世界各国の代表者が寄集つて居る前で國王が日本に不誠實であると云ふことを表白したのであるから之より以上に朝鮮の處分をする好き機會と云ふものは無いのである。是等の四の理由の一つあったならば以て朝鮮問題を根本的に処分する理由になるのである。夫が四の理由共に尽く備つて居る譯であるからして実に之は天與の好

機會である。此の如き時に断然たる處分をしないと云ふことは却つて災ひを招く基であると云ふことを話しまして乃ち琉球の処分でさへも最後に裁判権の引渡を受けると云ふ場合には遂に九州から派遣した兵隊を王城内に入れて多少力を用いた場合があつた位であるから、朝鮮の處分に就て元より多少の混雜を惹起すと云ふことは覺悟しなければならぬことであるが敢て大した騒動も起るまいと思ふ。兎に角此際が最も根本的処分を断行すべき時である。若し第一案も第二案も行ふことが出来なくて姑息な事をするると云ふやうなことになるれば、益々朝鮮人に反抗の機會を與へて多くの罪造りをするやうなものである。恰も蛇の生殺しのやうなものであつて朝鮮人に罪を犯させる機會を與へ朝鮮の爲にも日本の爲にもならないのである、と云ふことを長々と熱心に話しました所が伊藤侯も充分打合けての話があつて、良く其趣意は分つた、若しどうしても遣れと云ふなら

は、今日は列國の關係は無論面倒な事はないから、隨分合併もやる  
ことが出来る。又主權を全部委託させると云ふことも夫は六づかし  
いことではない。容易く出来る。出来るけれども乍併合併と云ふや  
うなことを遣ると先づ第一此際非常な金が要る、且又台湾や何かの  
やうに寄留して居る人民が寄集つて居る処と違つて鬼に角古來一國  
を成して居る朝鮮であるからして、餘り急に極端な處分をするに云  
ふと、後に至つて種々な困難を残して却つて不利益を招くと云ふこ  
とがありはせぬかと云ふこととけ之が餘程考へものである、と斯う云  
ふ話である。依て金のことと付ては私も元より金の掛かると云ふこ  
とは承知であるし、日本の國民は必ず金を出すであらうと思ふ。も  
と／＼朝鮮の爲には大戦争までしたのであるから金は必ず國民が出  
すであらう。戦争がモウ少し長引いたと思へば五億万円位は直に要  
つてしまふから其利足を拂う積りならば二千万円や二千五百万円は

一年々々に出るのであるから之は差支へないと思ふ、のみならず、  
元来今日でも統監府が使ふ所の金は餘り少ないぢやないか、苟くも  
韓國を保護國とした以上は百五十や二百万円ばかりで朝鮮の保護が  
出来る譯はない、金は假令日本の財政が如何に困難であるとしても  
夫は財政の計畫の立てやうに依て他の金は減らしても朝鮮に金を注  
ぎ込むと云ふことは出来ないことではない。斯う云ふ話を致しました  
所が、成程今日も実は金が少な過ぎる訳である、モツと金を使つて宜  
いのである、金の事は都合つくかも知れんけれども兎に角大金を使  
ひ且一方に於て非常に困難があると云ふことがあれば、之は餘程考  
へなければならぬと云ふ話であつた、夫で皇帝の讓位のこと、就て  
も種々話した所が、果して之は朝鮮の内閣員等が初めたことであつ  
て、伊藤侯は無論知らぬことではない、知つて居たのであるけれども、  
知つて只だ見て居つたに過ぎないと云ふ貌ちになつて居るのである。

夫で皇帝を辱したら夫で宜いと云ふ訳には無論いかなからして相當なる慶分は無論する積りであるが、夫に就ては外務大臣も東京の内閣の相談の結果を齎らして来て居るからして、之も能く話をきいて見やうと思ふ。又朝鮮の内閣の者もア、して君も知て居る、通り大分心配して居るやうであるから、マア彼奴等おやつらのする所を見て緩々とやらうと思ふ、斯う云ふ話であつた。夫で随分長い間談話を交換した結果、伊藤侯は先づ朝鮮の内閣員の決心如何と及び其他の各方面の状況如何を見て而して自分の腹をキメル考へであると云ふことが良く明瞭に分つたのでありますから、私は益々吾々の目的を貫くやうに盡力する餘地があると云ふことを信するやうになつたのであります。夫から私は統監に向つて今回は此爲に態々来たので、是から後は總べて此吾々の希望を貫徹することに就て盡力する譯であるからアナタにも度々是から申上げねはならないから今後毎日伺ふか

も知れまさんと豫め断つた慶侯は微笑して「よからふ」といはれたのであります。丁度此日に新聞記者の大會があつて私の泊つて居る巴城館の中に開かれましたので、釜山、平壤、仁川あたりから皆寄つて来て大分盛會であつた。其席に私にも出ると云ふことであつたから、出て演説をしました。朝鮮の側から今回の問題を見ては朝鮮國が誠實に日本と相携へて行くと云ふ考へであるならば皇帝を廢したから夫で宜いとして、責を免れやうと云ふやうな不誠實な考へではない。何処迄も日本と一緒になつて行くと云ふ誠實を標榜する爲には、今一つ進んで誠を現はすだけのことを示さなければならぬ。又日本の方から時局を觀察しても同じことで、將來施政の改善の妨げとなり、日韓協約の趣意を妨げることは根本より断ち切らなければならぬと云ふことを充分に話しました。夫から其席に於て、みな種々相談の結果三名程新聞記者の總代を撰んで、伊藤統監の許

に行つて、而して今回は是非根本的に對韓問題を解決するやうに願ひたいと云ふ趣意を陳述して、若し此結果が面白く往かない場合には日本の國民の怒りはポーツマス條約の時分に劣るまいと云ふやうな趣意を以て充分に強く統監に話をするやうに談合しました。夫で三名の總代が行きまして種々統監に話をしたのであります。是等も多少統監の参考になつたらうと思ふ。夫から私は熟々考へまして、矢張此場合に於て伊藤統監に充分な事をさせるには元より國民の輿論と云ふものも大切であるが一方に於て朝鮮の内閣に於ける唯一の働き手たる所の例の宋秉畎と云ふ者の考へをスツカリ決めさせて置かなければいけない。此者の心如何に依つて変ると云ふことを豫て



より考へて居りましたが京城へ行つたら益々之を信するやうになりまして、逢はうと思ひましたけれども、其日は時間もなし、又宋秉畯郎は非常の混雜でありますから、翌日逢ふことに致しました。宋秉畯の家と云ふものは吾々の宿から極近い処にあるのであります。西洋館まがへの日本造りの畳も敷いてあり西洋間もある家でありまして、皇帝の讓位事件以来朝鮮の内閣員は皆宋秉畯の家へ来て泊り込んで儘で、晝も夜も自宅へ帰らない。晝は相談してから宮中へ出て大問題を決める。随分遅くなると夜の明る迄掛るやうなこともあつて、夫が済むと皆宋秉畯の家へ引取つて来て居る。門前には日本兵が居る、巡査が鉄砲を持つて居る。門内には朝鮮の憲兵が居る。日

本の巡查も居る朝鮮人の奴こしもも居ると云ふ譯で実にゴタ／＼混雜を極めて居る。夫で彼等は二階で以て閣議を開いて相談して、出る時には護衛の巡查や兵隊や朝鮮の奴こしも送付いて、餘程不思議な扮装で行くものですから一程種の見物かものである。尤も宋秉畎の如きは平服の巡查位を連れて二人挽きの人力車でズツと走らせるのでありますが他の大臣は朝鮮の巡查、日本の巡查、朝鮮の憲兵又冠を冠った朝鮮の奴等まで尾いて行きますから恰も芝居を見るやうなものである。兎に角大臣等は讓位問題以來一身が危険であるから皆宋秉畎の宅に集つて居る。之が大問題を決行するに就て誠に便利であつた。内閣員が銘々家へ帰ると云ふことが出来たならば今度の事を行ふに就て種々様

々な不便があつたに相違ない。今日の内閣の中にはヤハリ頑固派の方を代表して入居る内閣員もありますから、銘々彼等が自由に家に帰ることが出来て居つたならば、十カノ閣議を纏めるのに容易でなかつたらうと思ふ。銘々自分の身が危うい所から宋秉畯の宅に纏つて恰も袋の中に居る鼠の如くであつたから、多少例へ異論があるとしても餘り甚だしき異論を吐いて然らばお前歸つて行け、お前大臣を罷めて家へ歸れと云はれ、は其身が危ういから例へ異論があつても甚だしく抵抗することは出来ない。俗に言ふ毒を食はゞ血造と言ふ様な譯で、道連れになつて皇帝讓位の事をやつたのでありますから、一人や二人で異論を唱へることは出来ないやうなハメにな

つたのであります。之は誠に結構なことであつた。私が宋秉峻と種々話しました際にも宋は其事に就いて話したことがある。彼の云ふのに此の騒動があつて危険が多くて、此處に皆集會して居る中に大事を總て断行して仕舞はなければならぬ。彼等皆家に歸つて妻子の顔でも見ると、弱い考へが生じて来る。のみならず又ソレには様々なる事情が纏綿して来るとか或は様々な人間がくつ付いて来ると云ふことが生じて来て、到底大事を断行することが出来ない譯になる。今此の危険の中、騒動の中、此處に集つて居る中に大事を決行しなければならぬと云ふことを宋が云ひましたので、なか／＼宋と云ふ男は目先の見へる男であると感じた位で、實に此處に集つて居つ

たのが今度の新協約が早く出来た一の原因だらうと思ふ。で翌日宋秉畯に逢ひました。普通の人が尋ねて行つても門の前で兵隊が調べる。中へ入つても内閣の會議があるとか何とか云つて所詮取次をしないやうな譯で、このゴタ／＼する最中へ各省の次官に相當する協弁と云ふ役人が来る。他の役人も来る。非常に混雜して居つた。然し私の友人の佐瀬熊鉄と云ふ者は一進の顧問で宋とは深い仲で始終相談相手になつて居りましたから、毎日宋邸へ行つて手傳つて居つたのです。そこで私は先づ宋秉畯の考へを探つて見やうと思つて佐瀬熊鉄に話をした。

佐瀬は私より先きに宋秉畷に遇つて小川君等の考へでは皇帝の讓位位では仕方がない、問題はそんなものでは治まりはせぬと云ふことを云つて甚だ不平であつた餘程注文を持つて居るらしい向きである

と云ふことを一寸云つて見た所が宋秉畷更に驚かない様子であつたと云ふことでありました、夫から私が宋に逢ひまして光づ此皇帝讓位のこと、に就て、「旨くやつたな」と云つて褒めました先生も「やつた」と云ふて聊か得意の色ありであつた、更に此後どの位の考へを待て居るかと云ふことを知らうと思つて種々話して行きますと

皇帝の讓位に関する種々詳しい話をしたのであります、又此後に来るべき最も大きな問題があると思ふがどうも内閣員の中には其んな事は少しも考へないやうな者があつて甚だ困る、是迄のことは第一をやつた譯で未だ是から第二第三と云ふ大きいヤツがあると云ふことを云ひましたから之れは餘程の決心を持つて居ると云ふことが分

りましたので、夫から其日は大体の是迄の話を聴くことを主として  
將來に就ては餘り細かな話をせずに分れた、ソレは二十二日であり  
ますが然るに此皇帝讓位問題と云ふものは十八日に一般に讓位と云  
ふことが済だ譯になつて居るけれども其実は十八日にはナカ／＼済  
み切らないのであつてアトがナカ／＼六かしい問題が起つて落着が  
つかない、結局二十二日迄と云ふものは実は未だ全くの讓位と云ふ  
ことにはならなかつたのである此讓位問題が落着して然る後初めて  
新協約の談判と云ふのが初まるのでありますが、此讓位問題と云ふ  
ものは二十二日迄繼續して居つたと云ふことが事實である。  
茲に宋秉畯のことを少しお話し致します、宋秉畯はナカ／＼目先き  
も良く見へるし餘程決断に富だ、意思の強い男で今回のやうな大事  
をやるには極めて適當な人間であつた、夫で内閣を組織する時分に  
でも皇帝に向つて何も彼も隠さずに總て露骨に自分の意見を上奏を

した。「元來朝鮮の獨立と云ふことは日本がしたのである。日本と交際を結ぶ以前は陛下はどう云ふことをせられたかと云へば清國よりして左程でもない役人が来ると云ふと、夫を城外迄迎へて殆ど家来のやうな禮を執つて居つた、全く屬國であつた、然るに之を獨立國の皇帝と云ふことにしたのは之は日本の力である、今日の東洋の大勢上から見てどうしても日本と共にくつついて行かなければならない・然るに日本に背いて獨立すると云ふことは之は大勢に反したものである」と云ふことを少しも憚らず充分に申上げて、<sup>陛下</sup>陛下は甚だ氣に入らなかつたけれども其れに頓着せず初めより明白あかりさまに自分共の主義を陛下に上奏すると云ふやうな男で、官制改革の場合なども陛下の権限を隘せまめるのであるから陛下の聽かないことが澤山あつたけれども種々陛下の言ふ所に反對して何処迄も極論して、内閣員の云ふことを通したと云ふ実狀であつた、或時の如きは皇帝が宋秉畯



が酷く喧ましい事を云つて歸つた後で、李完用が残つて居た所が李完用に向つて、アノ男は朕の傍に居つた時には大分人にも可愛がられて良い男であつたけれども此頃は十カゝ酷ひ男になつたとか云はれたと云ふことである、ソコで李完用は宋は陛下に対してさへアノ通りガミゝ云ふのですから内閣會議等に於ては如何とも仕方がありませんと申上げたと云ふやうな話であつて、何でも勇往邁進と云ふ勢ひの男である、然し非常に伶俐な男で、目先もよく見へる、伊藤侯が実に感嘆して居られた、ソコで今回の密使事件が起つたに就ては其以前より先刻話しました通り皇帝廢立の事と云ふものは宋秉燾が曾て伊藤侯に献策したこともある夫は其一進會の會員を利用して多数の人を京城に入れて廢立を行うと云ふ策であつたけれども元より伊藤侯は宜しいと云ふ答へはしなかつたが心中に於ては十分肯づかれて居つたらしいので、前々からの關係上宋秉燾等は伊藤侯の考

へと云ふものも大抵察して知つて居つたに違ひない。又伊藤侯も敢て自分が廢立のことに關係した訳ではないけれども皇帝を廢するのことに就ては不同意でなかつたと云ふことを信ずべき理由が羣山ある、ソコで先生達は先づ此際に一つ皇帝を廢すると云ふ考へを起して内閣の會議に掛けた、中には反對の論者も随分あつたさうであるけれども結局今日迄の皇帝の所爲と云ふものは總て宜しくないものでありますからして此際に於て皇帝に退隱を請ふて、而して一面には日本の要求を柔らげ一面は政治の改革をすると云ふことが必要であると云ふので、随分議論もあつたさうであります。結局今日の皇帝たる李熙、即ち皇帝李熙の身が重いか社稷が重いかと云ふやうな議論になつて社稷は重い李熙の方が輕いと云ふやうな事になつて廢立することに相談が定まつた、夫れに就ては朴承孝の方も曾て相談をしたことがある、先きに朴承孝を宮内大臣にすると云ふ相談があつた

時に朴泳孝も相共に應じてやううと言つたのである、依て朴氏にも相談した然るに朴泳孝は三個月ばかり待つて貰ひたい、さうすれば自分の手に於て必ず廢立を行ふ今遣ると云ふことになる、と日本の爲にやつたと云ふことになつて甚だ宜しくない機會であるからして、モウ少し待てと云ふ論であつたらしい、けれども内閣員の方の側から見れば三個月は扱て置いて三日も待つことが出来ない場合であつたから鬼も角廢立を断行することになつた而して十六日の晩に陛下に申上げた、所が聴かない、十七日の晩にも亦各大臣が参内して申し上げたけれども決して聴かない、十七日の晩の如きは、朕は死すとも聴かない、と断言せられた、一方伊藤統監の方には元より宮中の事情を平生探る機関があつて事情を探り知る又内閣に於ても恐らく左様なことを統監に対して秘して居らなかつたと見えて統監には一々其事が分つて来た、二晩繞いてやつたけれども出来ない、と云ふ場合

であつたから、十八日の朝、統監は宋秉畷を呼で衣服を改めて平生と違つて熟章などを着けて儼然たる態度で宋秉畷に向つてお前達は金方もないことを仕出かす奴等だと云つて、廢立を行はんとすることに就て叱言を云つたさうです、之は伊藤侯の話です、思ふに夫れは統監が之は餘程面倒だと思つてやり損なつたら大変な事になるといふ考へから殊更に自己の關係ないことを示すが爲に左様なことをやつたと見へるのであります、話し變つて内閣の方は最早後ろへ引くこともどうすることも出来ない、一大事件に着手し始めたのでありますから此處で少しく力を緩めてしまへば直ちに自分共の位置は勿論のこと生命迄も危ういと云ふことでありますから最早急進直入して廢立を断行するより外に仕方がないと云ふ場合になつて来た、然るに一方に於て皇帝は内閣員が頻りに讓位を迫るものでありますからして十七日あたりには頻りに伊藤統監を呼ぶ、然るに統監は密使事

件以後是迄も度々呼ばれたけれども行かなかつたのでありますから  
今度も決して行かなかつた、けれどもひどく呼ばれるものであります  
からして初めて十八日に初めて参内して皇帝に逢つた、所が密使事  
件の申訳ワケ話も多少あつたから統監は自分はみな知つて居ると答へ  
た。それから皇帝の言ふには、内閣は頻りに朕に讓位を勧める、聽  
く所に依れば統監も其事に就て與つて居ると云ふやうな話もあるが  
果してどうであるか、又讓位に就て統監の意見はどうであるかと云  
ふて問うたさうです、ソコで之はみな伊藤侯の話でありますが伊藤  
侯の答へに、怪しからんことを云はる、讓位のこと、云ふものはア  
ナタの方の國の内事である、拙者は日本の皇帝の命を受けて統監と  
して韓國に来て居る訳であるアナタに対しては日本の陛下に盡す所  
の忠実を以て、移してアナタに忠実を盡すだけのことで自分は決して  
アナタの臣下でも何でも無い、臣下でも何でも無い者がアナタの

内々<sup>うちうち</sup>のことに干渉すると云ふ謂はれはない、自分は西洋の書物も読  
み東洋の書物も一通り讀で居る依て大義名分の何たるを心得て居る  
アサタの方の内々の事迄干渉すると云ふやうな名分に反したことは  
拙者は断じてしない、怪しからんことを云ふもので誰人が左様なこ  
とを云ふたか其者を此處へ出して御覧なさいと迄切込んで怒つたと  
云ふことである、所が皇帝は傍に居つた侍從武官長を顧みて「統監  
名空しからず」といつて自分の机の上に「統監名不空」と漢字で書  
いたそうです、マーさう云ふやうな誤で讓位の問題に就ては統監は  
何等のことも云はずに歸つてしまふた、依て皇帝の方では此讓位の  
問題と云ふものが統監が勧めたものでないと云ふことになつた。ソ  
コで皇帝は愈々讓位と云ふことに就ては聽かない考へであつたらし  
いのみならず日本から問罪の爲に林外務大臣が来ると云ふやうな  
報道があつたけれども十七日には未だ来ない、其中に林外務大臣の

が来ると云ふのは嘘であると云ふやうなことを宮中に傳へて歩く奴がある、ソコで皇帝の方は益々強くなつて来た、處が十八日の晩になると林外務大臣が愈々京城に這入つて来た、茲に於て内閣の人々が益々いらだつたので、愈々十八日の晩と云ふものは最後の大決心をして宮城へ参内したさうである、宮中には無論現内閣に反対の奴等が充満して居るので上から下迄盡く反対の奴等が多いから、<sup>あきらまへ</sup>普通でも餘程内閣員は氣を注<sup>つ</sup>けて居る訳である、宮中では何の話でもすぐ反対の者の耳には入るといふやうな訳で殊に斯くの如き重大の問題に対して之が長い間決しないと云ふことになる、と非常に危険な訳である、宮中には兵隊も居る、其兵隊は王さんが自由にすることが出来ると、兵隊の頭らなどはやはり内閣の連中に好意を持つて居らぬのであります、現に今回の暴動は兵隊のお頭<sup>かしら</sup>など日本に留学した青年の士官が教唆をしてやつたと云ふやうなことで、実に内閣員の身

は危険である、殊に朝鮮のことでありますから暗殺する杯と云ふことは容易であります。内閣員は元より憲兵巡査を連れて充分注意をして居りますけれども問題が長びくといふことは実に危険であつた、ソコで吾々の殆ど想像の出来ないうなことであるけれども宋秉畷の如きは十八日の晩はピストルを持って、自分の身を堅め又最後の決心をして、どうしても皇帝の聴かぬ時には此処が乃ち決心の付けどころである、乃ち社稷重きか李熙重きかと云ふ問題である、社稷は重しであるから社稷の為に此際断然と事を決行しなければならぬと云ふ考へを持って参内したそうであります、夫で或は皇帝が王璽がないとか云ふやうなことを云ふて、折角詔勅を拵へて持て行て出ても王璽がないとか云ふやうなことで逃がられてしまつて、王璽を押されないと云ふことでは困る、夫で是非共どうかして印を押して頂かなければならないといふことで、夫々細かい事迄も打合せをして参



内したさうです、而して皇帝に拜謁の前に玉璽の有り處を確かめる必要があるので種々工夫の末に一つ口実を得た即ち今回皇帝に申し上げることは事重大であるから其辺に雜輩などが立聽をして居ると困るといふので兵部侍郎はよく調べて置くが良いと云ふことで、豫ての打合せの如く侍郎が皇帝の居る近辺を調べて見て、其時に玉璽のあるかないかを調べろ、玉璽があれば斯う云ふことを云ふとか咳拂ひを何とか何とか合圖をすることにした、ソコで兵部侍郎が行て調べた所が平生の袋の中に玉璽があつた、玉璽があると云ふことで安心して然らばどうしても今夜決行して詔勅に玉璽を押して頂かうと云ふことで夫から事に取りかゝつたのである、是より前き既に政府の方では王さんが外へ電話を架けることの出来ないやうに電話線などを切つて、どう云ふ場合でも宮中で電話を架けることの出来ないやうにしたと云ふことで是等は非常に祕密なことで世間に擴ま

つては困るけれども、さう云ふ細かいことまでして話を初めた、どうしても此際陛下は譲位しなければ此國が立往かぬ日本の要求を承らげることは出来なない林外務大臣は現に今日来た、斯う云ふ場合になつて来たと言ふので実は譲位の詔勅を二通り書て持て行つたりしい、充分に話が往つたら充分な方を出して、充分に往かなかつたら不十分な詔勅に印を捺して貰はうと思つて持て行つた所が何分皇帝が六つかしくて思ふやうに往かなかつた、乍併是迄と云ふものは疑問の中に在つた林外相が現に京城に入つたと云ふのであるし、此際皇帝が退位なければ日本の怒りを緩和することが出来ないと云ふことであつたから、結局不十分な方の詔勅へ皇帝が玉玺を捺することになつた、夫が乃ち十九日に世間に発表した所の詔勅であるのですが、併しアレには新皇帝が代理と云ふことになつて居るので、代理は決して讓位其物ではないので元より両者は相遠して居る、乍併アレを

譲んで見るとやはり位を譲つたらしくも見へるのであります。がなぜあんな曖昧なものを出したかといへば此代理と云ふ文字を入れなければ皇帝がどうしても承諾することが出来ない、と云ふので已むを得ず、云ふ風にしたのでそうです。併し一方に於ては譲位の事は既に日本へも其事を通知するし又外國の方にも通知することを總監に依頼したと云ふ次第で、外から見れば明かに譲位と云ふ<sup>こと</sup>に見へて居る、十九日には即位式をやつて其即位式といふものも簡短にやつたのであります。がナカ／＼混雑の中であつて他の大臣は大禮服を着けて居つたが宋秉燾は忙がしい為にフロックコートで十九日の晩に即位式をやると云ふやうな誤であつた、この即位式を行はうといふ時に朴永孝は宮内大臣になつて居り、又宮内大臣の印を宅に持て歸つて出て来ない文事秘書官長に當るやうな役目で弘文院學士と云ふものがある、其南廷哲と云ふ人が矢張り後に縛られた人であるが夫も出

て来ない、式をやることが出来ないやうな誤であつたけれども、様々な殆ど儀式には背くやうな遣り方即ち宮内大臣の朴泳孝も居らず、弘文院学士も居らずして大臣もフロックコート交りで即位式を無茶苦茶にやつてしまつた、其混雜サ加減は想像することが出来ぬ位である。この十九日の即位式の晩と云ふものが餘程危ない晩であつた、京城の市中に於て暴動が起つたのみならず宮中に於ては即位式を機會として内閣大臣を盡く殺して仕舞うと云ふ計画があつた、其れが幸に内閣の方に分つたものですからソコで此の幸に城内に起つて居る暴動を静めると云ふことを名として法部大臣の趙重應氏が伊藤統監の処へ駈付けて行つて、皇帝の詔勅であると云ふことで統監の力に依て暴動を鎮壓して貰ひたいと云ふことを傳へた、其詔勅が傳はるときなどと云ふものは餘程大急ぎで少し遅れると大臣等が鑒しになるといふ誤で趙重應が飛んで行つて伊藤統監に傳へた、統監

の話に親しく私は聴いたのですけれども、総監が自分の前で趙重應の云ふことを書かして而して之に遠ひないか、遠ひないと云ふので夫から趙重應に印を捺おさせてモウ一通の方へは自分も其尾へ之を見たと言ふことを書いて、之を持て行て宮中へ行て皇帝の印を取て来いと云ふたので、趙法部大臣は宮中へ駆け戻つて皇帝の印を取て来たと云ふやうな話で暴動鎮壓依頼の詔勅はさう云ふ手続で以て出来たのである。この詔勅が出来る時分に兵隊が既に動いて京城内に日本兵を入れてしまつたと云ふ話である。其後の宋秉畷の話に依て見るとモウ一二時間遅れれば皆内閣大臣が殺されてしまつたのである。幸に暴動が起しない中に日本兵が早く入つたから鑿殺さるゝことを免かれた。さて即位式も済んだが朴承孝は一向出て来ない。即位式は總理大臣の李完用が宮内大臣処理と云ふことにして式を終つたのであります。其時にも皇帝に申上げて李完用の宮内大臣の処理を解くと

きには必ず李完用の方に話をして貰ふといふ約束であつた。其翌日廿日には伊藤統監を初めとして各國の領事等も宮中に参賀すると云ふ訳で、勅任官より日本の役人は奏任官あたりまでも宮中に行つて御祝ひを申し上げたと云ふやうな次第であります。さう云ふ次第で祝賀も済んで李完用が家へ歸つた後で皇帝は忽ち李完用の宮内大臣處理を解いた。之は朴泳孝が宮中へスツと出て来て彼は以前に既に宮内大臣になつて居つたけれども未だ親任式がなかつたのを二十日に皆知らぬ間に朴泳孝は宮内大臣親任式をやつたと云ふ訳である。斯う云ふ事が朴泳孝の縛られる基になつた。其れで二十日には(さ)(う)前にいふ通り統監初め文武官が参内して即位の御祝ひを申し上げたのであるけれども、乍併皇帝の讓位の問題と云ふものは、実はまだ解決して居らなかつた。皇帝の方では位を讓つた積りではない、マハリ已れが皇帝の積りで以て万事万端指揮をするし仕事もして居ると云

ふ澤で余程妙なものであつた、所へ日本の天皇陛下から皇帝の即位を祝すると云ふ御親電が来た、一方に於ては陛下既に位を譲つた以上は陛下は太上皇帝の称号を奉りなければならぬ而して皇太子は即ち新皇帝であるからして新皇帝に向つて陛下の尊号を奉りなければならぬ又新皇帝の云ふことが即ち詔勅と云ふことになりなければならぬ誤である然るに夫等のことを舊皇帝は一も認めて居られない、ソコで愈々日本の天皇陛下に向て返電を出し一方に於ては太上皇帝の尊号を奉り新皇帝を陛下と称し詔勅と称すると云ふことに就て前皇帝との間に全く意見の衝突が出来て来た、ソコで二十一日には内閣大臣が随分頭腦を痛ましめた、一方宮中方面を段々探索して見ると云ふと暴動に關係して居る青年士官には朴永孝の處に常に出入して朴永孝の手足となつて居る李岡と云ふ人など這つて居る、初め朴永孝が歸韓した時から同人の進退は問題であつて私が六月朝

鮮に旅行した時にも朴はまだ京城に帰らず釜山に居つて最早政治には絶對干渉しないと私にも明言したが世人は之を信せず余程問題になつて居つて、伊藤総監も頗る朴泳孝には警戒を拂つて居つた、宋秉畯の如きも無論さうであつて朴泳孝の餘りに宮中の御機嫌を取るのと朴泳孝が朝鮮に歸るに就ての費用などは宮中から出て居る形蹟があるので余程警戒して居つたのであります、然し今度は朴泳孝もマサカ明治二十八年の時のやうなことはあるまいと信じて居つた、そこで宋秉畯も勸め李完用も朴氏に勸めて、而して伊藤総監も兩人が賛成するならば已も同意すると云ふて宮内大臣にした位の間柄であるのに、どうも遣り方が甚だ怪しい、即位式の日の如きは内閣から三度宮中から四度も使ひをやつたけれども宮内大臣の印を持て行て而して出て来ない、誠に怪しからぬ話であるから之を罷めて逮捕しなければなるまいと云ふ相談があつた、而していよく廿一



日には朴泳孝捕縛の事を上奏して許可を請ふ積りで一方に於ては日本の天皇陛下に対する御親電の返答及び太上天皇として官報に発表すると云ふことに……（乃ち讓位に就ての形式上最後のことがある）、御裁可を得る爲めに総理大臣が先づ参内した、午後五時頃に参内した所が是より先朴泳孝が宮中へ行つて居つて総理大臣の謁見を妨げてトウ／＼夜の九時頃になつて初めて李完用が謁見することになつた。其時朴泳孝は李完用に向つて非常な権幕を以て声を荒らげて李完用を叱つた、ソレは「全体誰れが皇帝の位を譲つたと云ふことを日本に向つて通知したのである皇帝は決して位を譲つては居らない詔勅の文字に明かなる如く皇太子をして代理をせしむると云ふことに過ないのである然るに皇太子を以て恰も皇帝であるかの如く或は之を陛下と称し或は詔勅と称すると云ふことは怪しからぬことである内閣の者共が日本へ向つて嘘の通知をしたのであるか或

は統監が此の如き嘘を通知したのであるか統監はヨモヤ嘘の通知をする誤はあるまい内閣の者共が左様な嘘のことをやつたのであらう」と云ふことで余程大きな聲をして怒つた、宮中の役人共は前にも速る通り皆内閣に反対であるから非常に喜んで側へ寄つて来て聽いて居たと云ふことだ、乍併其時は既に總理大臣の懷中には朴永孝を捕縛する所の上奏の書類を入れて居つたと云ふ誤で、李完用は敢て甚だしく争はなかつた、夫から朴永孝は退出して家に歸つたさうであります、が途中から又一遍歸つて来て十一時頃老皇帝陛下に謁見したと云ふ、其話の如何は能く分らぬけれども兎も角讓位のこととは決して聽いてはならぬと云ふことを堅く言ふて行つたに相違ない、此時一方では内閣員が宋秉畷の家に寄り集まつて居るが、宮中に行つた總理大臣の返詞が中々手間取る、ソコで宋秉畷が又例の如く出掛けて宮中へ行つた、所が王城に近い處で李完用の歸つて来るのに逢つた、

此時も宋秉畷は寡兵、巡査等四十人程を連れて行つたさうであります。途中で李完用に逢つた、所がヤウやつと日本の天皇陛下の御親電に対する返答だけは新皇帝陛下の名を以てキヤンと立派に出すと云ふことの承諾を得なければならぬ。太上天皇として明日官報に発表すると云ふことはどうしても聴かない、決して自分は位を譲つたのではないと云ふて聴かないのである、ソコで宋秉畷は夫はいかぬ此終で罷めて仕舞うことは出来ない、又位を譲らぬものを日本に向つて位を譲つた如く吹聴して皇帝でないものを皇帝であるかの如く粧ふと云ふことは不信の甚だしきものであつて左様なことをして國が立派くものではない此際断じて讓位の事迄も確定して仕舞はなければならぬと云ふて夜の十一時頃又李完用を引返へとせて共に宮城に向つた。そして宮城内には入らずに宮城の門の入口の座敷に休んで居つた、無理に入ることは出来ないし又入りぬ方が宜いと考へて其処に

居つた、而して取次でもつて老皇帝とイロ／＼推問答をして、老帝は夫れならば新皇帝にも陛下の名称を用ゆることを許さうと云ひ出した、そんなことではいかぬ二つ陛下がある譯はないからどうしてむいかぬと頑張る、老帝は又新皇帝に詔勅を出すこと丈けを許さうといはるゝも、そんなことでもいかぬ何処迄も新皇帝は新皇帝、太上皇帝は太上皇帝の尊号を奉ることになければいかないと云ふ推問答でトウ／＼夜明の五時になつて、ソコで初めて仕方がないものであるから老帝の方でそんならば太上皇帝と云ふことを止めて大皇帝と云ふことにしやうといふ、夫はいかぬ大きい皇帝ならば尚更本統皇帝であるやうになる、二つ皇帝のある道理はない、既に日本に対して新皇帝が皇帝として電信を出し各國に通知した以上はどうしても皇帝が二つある訳はない又皇帝の上に大きい皇帝と云ふものがある

つた日には尚更不都合である、斯ふ云ふことは道理上に於てもあるべき筈でなし外國に對しても、左様なことがあるべき筈のものではない、どうしても太上皇帝でなければいかないからと云ふことを云つたけれどもどうしても太上皇帝は聴かない、遂に太上皇帝の太の字を用ゐて太皇帝と云ふことで官報へ発表しやう而して新皇帝は無論皇帝陛下で、皇帝の位に登つたに違ひないから皇帝で宜い、前皇帝の方は太皇帝と云ふ尊号を奉ると云ふことにしようといふ事で折合がついて初めて午前五時過に問題が落着する一方に於ては朴泳孝を夜半に日本の警部が巡查を連れて行て而して捕縛して来た、十カ  
く朴泳孝は聴かなかつたさうです、元來皇族の位置にある人ですから詔勅を持つて来たか杯と云つてナカく聴かなかつた、ソコで詔勅は持つて来なかつたけれども吾々を信用して是非同行して下さい

と云つたさうだがお前達に連れて行かれる人間ぢやないと云つてな  
かゝ聴かなかつた、けれどもどうしても聴かなければ力を用ゐて  
引致して行くと云ふことで随分長い間押問答をして漸う午前三時頃  
に不性無性に承諾して、警務廳へ引張つて行かれたさうである、其  
朴泳孝を捕縛する理由と云ふものは即位の時に病氣と偽つて勅命に  
應じなかつた新皇帝に対して不敬であると云ふやうな大体の趣意で  
ある、之を捕縛することの決議の時には趙重應は元と日本に久しく  
居た人であり朴泳孝とは非常に仲の良い人であつて其趙重應が法部  
大臣であつて朴泳孝が病氣でなかつたと云ふことを充分に確かめて  
居つたから、法部大臣が其証人である病でないものを病であると偽  
つた事實の証人である、と云ふやうなことで趙重應も困つたさうだ  
けれども己をを得ないから賛成して捕縛したさうである。朴泳孝は

実に久し振で國に歸つて間もなくア、云ふ目にあつたのは甚だ氣の毒であります私は此前六月行つた時に丁度彼の歸國した時で釜山で一緒になつた、京城では私の隣り部屋に泊つて居つた、度々逢ひもしました、依て朴永孝は良く知つて居る、<sup>此人</sup>人は、帝に事に當つて狐疑躊躇して存外大勢を見る明がないと評する人がある、現に茲に面白い話は私が出立する時に、國友重章君が<sup>手</sup>葉紙に此事を書いて寄越したソレは朴永孝は性質暗愚にして執拗である何時でも彼は貳心を持て居るからして今度若し皇帝を廢することが出来た場合には彼は旧皇帝と日本との間に立て蟬幅のやうな荷子を占ることに尽力するに相違ない夫であるから幸ひ新皇帝を立てることが出来た場合には彼を宮内大臣若くは内務大臣の荷子には決して用ゐべからずと云ふことを書いて寄越したことがある、朴永孝の捕縛された後に私が宋秉畎に

逢つた時に丁度其書いた物のことを思ひ出して其話をした所が、  
宋の曰ふに突に此八卦は良く當つて居ると云つて大に笑つたことが  
ある、元来朴永孝は帰國する時には已<sup>をれ</sup>は政治部面には當分顔を出さ  
ないと云ふことであつた私共に明言したばかりでなく一方には伊藤  
統監に向つて自分から進んで誓約書を入れて居る、其事は私が前に  
行つた時に細かに統監から聴いたのであります、今後<sup>レ</sup>の行動は一  
々閣下の指揮に依て行動する、と云ふ細かい誓約書を、伊藤さんか  
ら言ひもしないのに自分から認めて差出した、さうである当時宮中の  
方では非常に朴永孝を歓迎して居るのに宮中の方へはわざとより  
つかず伊藤さんは泊る處は自由であるから何処へでも行けと云ふて



監視的態度を避けて居るのに朴はワザ／＼日本の宿屋へ泊つて、護衛を付けることも統監はお前が要らなければ付けなと云ふのに是非付けて貰ひたいと云ふて疑を晴らす道を講ずるといふ工合で王様に謁見するのはお前勝手にやれと云ふてもヤハリ伊藤さんを頼んで謁見すると云ふやうな訳で非常に日本の嫌疑を避ることを努めて居つたのみならず、實際其頃は政治界に出ない考へであつたらしい、然るに後の時勢は彼を蹴かて政治界に出させるやうにして仕舞つた故に於て彼の平生の性質が現はれて遂に不幸を見ることになつたのであらうと思ふ、乍併朴永孝の云ふたことは韓國人としては一理なきにしもあらずであらうと思ふ。

私の旅館の巴城館は其位置が統監府及び宋秉畎の家に近くして便利である爲に、毎日多數の新聞記者有志家等が集つて参りまして皆對韓問題を根本的に解決する希望を持つて居るのでありますからして種々相談もしましたのであります。何分伊藤侯の考へを動かすに就ては別に好き手段もありませぬから様々苦心を致しました幸に大同俱樂部の横田君は之より先き京城に入て居られました政友會の森肇君も平壤からして出て來られて所謂時局に就て心配をすると云ふやうな有様でありました所へ幸ひ二十二日には大岡君が京城に來られましたから直に同君に逢ひまして詳しく今日の狀況を話しまして是非共統治権の全部を獲得しなくてはならない朝鮮政府の方の側でも之を部分的に分けて主権の一部分を日本で取ると云ふやうなことになれば却つて種々な困難面倒を醸すのみであるからして伊藤侯の爲にも甚だ取らざる所であるから是非共歩を進めて主権全部を日

本に預るやうにしたい。今日の問題は全部の主權を收めるか一部分に止まるかと云ふ問題である。若し一部分に止まるやうなことであれば朝鮮政府の人が困るのみならず伊藤侯爵も殆ど非常なる國民の反抗を受けて餘程困難な位置に陥るであらうと云ふことを詳しく話しまして、大岡君も其意を諒して統監に其話をしやうと云ふことを約しました。且又一方に於ては吾々代議士が一つ袂を連ねて統監にモウ一度逢つて話をしやうと云ふことも計畫を致しまして、二十三日の朝は大岡君も森肇君も横田君も私の處に集會しました。大岡君よりは統監にも面會した結果の話がありましたけれども不幸にして來客等の爲に充分な話をする事が出来なかつた。乍併先づ内閣の決議と天皇陛下の聖意のある處に基いてやるより外仕方がないと云ふことを統監が云はれたと云ふことでありますから、さうすれば先づ餘程強いものであらうと云ふ想像はソコでついたのであります。

尚代議士打揃うて統監を尋ねやうと云ふ話を致して置きました、之より先き私は最も時局の解決を良くするにはどうしても朝鮮の内閣の方の決心を付けさせると云ふことが第一の急務である、夫さへ付けば統監の方は無論吾々の思ふ通りになるといふことを考へましたから、既に宋秉畯にも其考へを以て入京以來段々と相談を致しましたたが尚ほ二十二日には内田良平氏とも充分相談をしまして宋秉畯の方に話をさせたのであります。内田良平氏は御承知であらうと思ふ統監府の囑託と云ふ名義で、詰り伊藤侯の幕賓のやうな位置に居る人間で、年來私共と共に東洋問題に就て熱心に盡力して居った人間で、昨年来一進會の矢張り顧問のやうな有様になつて居った。宋秉畯とも最も親しい人間である。宋秉畯が獄へ繋がれた時に之を救ひ出すに就ては内田良平氏が最も與かつて力があつたのであります。且つ内田氏は頗る熱心に一進會の爲にも奔走をし又對韓問題を根本

的に解決して早く兩國合併を遂行しやうと云ふことに就ては少なからず盡力をして居った人間でありますから、渡韓するや毎日のやうに私の所へも來て共に事を相談して居ったのであります。此時には生憎く一進會の會長李容九等は要事の爲に南方に出張して居りました。たゞ時局を解決する都合上或は一進會を利用する必要があるかも知れぬと云ふ所から、内田が宋秉畎に相談をして既に電報を發して會長を喚戻したのであります。で會長は二十二日か三日かに歸つて來たと云ふ次第であつた。ソコで内田氏は宋秉畎の所へ行つて充分な話を致して此際主權の中の一部を渡すと云ふやうなことであつては日韓兩國双方の爲に宜くない。若し統監と話でも初つた時分にさう云ふ誠に筋道の立たないやうなことがあつては困ると云ふやうな思ひ切つた話をした所が、宋秉畎の考へは矢張り私が前日話した時の通りであつて充分に其趣意は吞込で居つて、少しも疑ふに及ばな

いと云ふ様子であつたのでありますからマア餘程吾々も心強く考へて居りました。尚ほ私は老婆心の餘りに鶴原總務長官を訪ひまして鶴原君は此時局の問題に就ては恐らく統監の相談相手にはなるまいとは考へて居りましたけれども夫でも或は同君でも多少役に立つ場合があらうと思ひましたから同君を訪ふて矢張り此問題に就て一通り話を致しまして時機を見て統監に充分勧めることに願ひたい殊に韓國政府の方の側も無論此の主権全部を渡すと云ふ位のことには心得て居る、政府全体は率知らずであるけれども其主なる者に於て既に充分承知して居る以上は少しも困難なく行はれるであらうと云ふことを話しました。鶴原君も元より賛成でありまして、承諾されたのであります。夫で二十四日には大岡君初め代議士諸君と吾が旅館に會合して統監を衝かうと云ふ順序でありましたが二十四日になりますると云ふと、前晚既に宋秉畯が統監の處に喚ばれて行つて多

少の下話しが初つたと云ふことであつて四日には既に正式の談判を  
韓國政府即ち宋秉畯の宅に於ける内閣に向つて正式に談判を申込ん  
で來たと云ふことを宋秉畯の宅に居る佐瀬君が來て報告をせられま  
した、且つ報じて云ふのに先づ宋に逢つた顔色及び語氣に依て察す  
れば大抵吾々の希望する通りのやうな提案であると見えると云ふこ  
とでありました、且つ之より内閣の者は評議に取掛ると云ふことで  
ありました。ソコで吾々代議士の會合することは自然と見合せるこ  
とにして其儘にして仕舞つたのであります、此時には既に京城の  
警戒の爲に北韓よりして若干の兵隊も到着を致し、又追々内地から  
も兵隊が繰込むと云ふ話でありまして、京城の模様は一種の戒嚴令  
でも施いた時のやうな感じがありました、最も府中の警戒と云ふも  
のは軍隊が之を司つて居るのでありますから戒嚴令の時と少しも違  
はないやうな有様であつた、夫で談判が既に初つた以上どう云ふこ

とになるかと皆氣遣つて居つたのであります。が二十四日の午後、内閣會議を初めて夕方參内をして、李完用は條約を締結する全權を帶ぶることになつて、全權を帶びて歸つて伊藤統監の方へ行くことになり、他の大臣は其晩直ちに伊藤統監の宅に寄集つてすらく存外早く條約の締結が出来たのであります。夫で元より此内閣員の中多少の異論は出たさうであります。けれども忽ちにして其異論は潰れて新協約と云ふやうな統監よりの提案を是認と云ふことになった、聽く所に依れば統監は此案を示した際に自分の方では此案が若しいかないと云ふことになれば場合には依てはお前達の方とは相談をせず、自分だけで以てやる途もあると云ふことで、暗に此最後の場合には合併をする合併と云ふことになれば敢て相談には及ばぬ此方で宣告をすれば宜いと云ふやうな意味を多少ほめかしたさうである。内閣の人々もヒヨツとしたら合併をされはせぬかといふことを恐れて



居るが爲に新協約と云ふものが存外早く是認せられたと云ふ事情であつた。皇帝の方はどうであつたかと思ふと皇帝の方も矢張り合併と云ふやうな事になつては大變である又自分が東京へでも連れ歸られるやうなことがあつては大變であると云ふ點を甚く恐れて居つたが爲に先づ其一番恐れる處の事柄を免れたので存外早く新協約と云ふものを是認されたと云ふ情況であつた。宋秉畯より其後聽きましたのに、皇帝も新協約を存外早く是認されましたが夫は未だ其際に最も恐れる最もイヤカル事が二つも三つもあるものであるから夫れだけを免れると云ふことを申し上げたので存外早く濟んだのみならず協約が出来上つた後に誠に御苦勞であつた之れだけで濟んで良かったと云ふことを云はれたと云ふことであります。夫は宋秉畯も云ひましたが元來ナカ／＼お世辭のうまい人であるから衷心果して喜んで居つたかどうかは問題である。夫で茲に新協約と同

時に取極めをした事に就て多少困難であつたらうと察せらるゝ事柄は、彼の皇帝の別居の問題であります。元より此新協約が出来まする以上は舊皇帝が擬令どのやうな陰謀を企てゝも之は殆ど恐るゝにも足らず又何等の事も仕出かすことは出来ないと云ふことは當然でありますが、乍併舊皇帝が常に以前の如く新皇帝の側に居つてイカゞラをすると云ふことであると、多少施政の改善の上に於ても障害を及ぼす譯でありますから、皇帝の別居と云ふことは萬人が認めて最も必要であると考へて居つた所であります。ソつて協約が出来ました時に矢張り此問題が起つて、宮中を肅靜して皇帝は別居すること、夫れから皇帝の側に仕へる人の數の制限若くは淘汰をして無用の雜輩を罷める、又皇帝の宮中の費用を一定の金高に取極めると云ふやうな問題も種々起つた際に、皇帝はどうか是非自分の倅と一所に置いて貰ひたいと云ふことを内閣員に向つて懇願せられて、涙を

流して其事を云はれたさうであります。且つ大變氣の毒のやうな話  
でありますが、此時には皇帝も全く今回の事は朕が悪かったのだ  
ある。責任は何處迄も朕にあるのであるが然し實は朴泳孝等に誤ま  
られたのであると云はれたさうである。夫から此の今日の如き成行  
になつたのに就て種々な話があつて、全体是迄の遣り方が宜くない  
から斯様な場合になつたのである。夫は一に朕の責任であると云ふや  
うな話があつて段々の物語りがあつたさうであります。其間に最も  
面白い話の一節と云ふものは、一統ての政治向のことが腐敗して居  
つて賄賂公行で、第一皇帝からして官職を賣ると云ふやうなことを  
盛んにやつた事などは最も政治を腐敗せしむる源になつたのである。  
其賣官の事に就ては皇帝の話に一寸面白い話があるのであります。が  
皇帝の云はれるのに、賣官のことは實は朕が初めた譯ではない。閔  
泳駿が詰り朕に勧めてア、云ふことを初めたので賣官の爲に得た收

入の金と云ふものは一萬圓のものは王妃の方に一千圓位寄越すだけでアトは皆閑泳駿が取込んだやうな次第であつて、自分が敢て貴官を初めて金を取つたと云ふ次第ではない、閑泳駿がやつたのが初まりであると言はれた。又皇帝にも少し許り貴官と云ふことを慰みの爲にさせられたのであるが之も其侍臣共が自分勝手に盛んに官を賣つたさうであるけれども是亦侍臣共の遣り方が悪いのであつてソレ迄に悪い結果を來さうと云ふことは朕は考へなかつたのである。乍併責任は朕にあるのであると云ふやうなことを昔話を種々されたさうで、兎に角件と一所に置くだけのことに計らへと云ふことであつたさうでありますが、内閣員等は然し陛下の云はるゝことは是迄のことに依て見ると云はれたゞけでは信用する譯にいかない、實行せられた上でなくては信用する譯にいかないと、是迄の例に照して其事を諄々と申し上げて、やう／＼別居すると云ふ事柄は承知をせ

られたのだそうであります。然し皇帝の泣かれると云ふやうなことは吾々が聴くと非常に驚いて一種の感に打たれるのでありますけれども平生屢々虚言を吐くことを何とも思はない又マルで人を欺くやうなことが屢々あるのでありますから内閣の人達は話を聴いて見ても左程に感じない。或は又此の涙と云ふものは所謂虚涙そらなみだでありはせぬかと云ふやうに考へて居るらしいので、此邊のことは吾々の殆ど想像の出来ないうやうな事情である。

茲に新協約の成立に就て記憶して置かなければならぬことは、一進會其物も日韓兩國を此際合併すると云ふことに就ては絶対に反對の意見を持つて居つたのであります。一進會は是迄も述べた通り最も進歩した、随分勇氣もあり見識もある者が之を率ゐて居りまして、會員の數は殆ど百萬に垂んとするやうな盛んなものであつて、其元氣の盛んなことは丁度日本の昔の自由黨とても云ふやうな有様で、

會長李容九の如きは先達でも遊説中に要撃されて殆ど殺される目に逢つたと云ふことであります。左様なことは何とも思はない。水火を履むことも辞せずと云ふやうな勇氣があるのであります。ナカナカ盛んな者である。而して大勢を見る明がありますからして日本と何處迄も一緒にやつて行かなければならぬと云ふことは確く信じて居るのであります。けれども然し此際朝鮮を全く無くして仕舞つて日本に合併すると云ふことは絶対に反對である。若し左様なことになれば何處迄も反對をすると云ふ有様でありますからして、既に其事は統監の方へも書面を以て云ふてあると云ふことであります。從て此際強て合併をすると云ふことは餘程の困難であつて京城を初めとし全國に於て随分長い間非常な紛擾騷動を見ると云ふことは免れないことであつたらうと思ふのであります。夫で若し此合併を断行するならば實は一昨午日韓協約を締結する時分に乃ち戦争の熱の

醒めないゴタ／＼して居った際に引續いて合併を断行して仕舞った  
ならば多少の紛擾はあつたかも知れないが、所謂断じて行へば鬼神  
も之を避くて、或は彼等も何をする暇もなく遂に一時の騷動位で治  
まつて仕舞つたかも知れぬ。既に今日になつてから時遅れの密使事  
件のみを奇貨として合併を断行すると云ふことは如何にも目に立つ  
て、如何にも事々しくつて朝鮮人の反抗を招くと云ふことは免れな  
いのでありませうから、當時の狀勢に於て合併と云ふことは先づ餘  
程大勇氣を振はなければ出來ないことであつたらうと思ふのであり  
ます、又果して合併をするのが得策であるや否や、吾々は統監に向  
つて注文する方の側でありますから第一に合併すべしと云ふことを  
冒頭に掲げて主張したのでありますけれども合併當局者は果して合  
併することが善いか悪いかと云ふことは之は餘程考へ物であつたら  
うと思ふのであります、若し合併と云ふものが出來たとしたならば

今よりモツと多くの兵隊を朝鮮に入れて而して全國に引續めて起る所の暴動を鎮壓する準備をしなければならぬ。日本人の彼の地に入つて居る者は先づ當分の間事業を廢めて安全の地に引揚げて來なければならぬと云ふやうな事になったかも知れないのであります。朝鮮人は殊に形式を重んずるやうな、名義を重んずるやうな風がありますからして、此の如き騒動をして迄も名義上の合併を断行する必要があるかどうかと云ふことは之は餘程考へ物であつて、寧ろ今日の場合としては其合併の名を避けて而して政治の實権を我に收めて合併の實を行ふと云ふ方が賢い遣り方であつたらうかと考へらるゝのであります。

夫で一つ驚いたことがあります。之より先き六月中渡韓しました場合に長谷川大將に逢ひまして長谷川大將と朝鮮の問題に就て隨分立入った話迄も致したのであります。長谷川大將の考へも明瞭で



あつて無論今日の如き皇帝は廢めて仕舞はなければならぬのみならず朝鮮は斯う云ふ日韓協約と云ふやうなものでやつたのであれば遣り切れない根本的に一つ處分しなければならぬと云ふ考へを大將は持つて居られたのであつて、従つて統監の遣り方に就ては大事に付ても小事に付ても多少大將の考へと違ふやうなことが明かに見えたのであります。夫で今回参りましたも矢張り又直ちに大將を尋ねました。伊藤統監と朝鮮の大問題に就て常に膝組みして話す位置にある人は兎に角大將である。政治上に於ては無論長谷川大將に相談を掛けると云ふことは之はないのであつて、伊藤侯は自分が充分に知識と職権とを持つて居りますからして統監が長谷川さんに相談すると云ふことは無論ないのでありませうけれども兎に角大事件に就ては常に話合ひする身分の人でありますから、長谷川大將を動かして置くのは随分大切であると思ひましたからして今回も大將に向つて

私の再び渡韓した趣意を述べ是非共又後の災ひを残さないやうに今度一つ處分するやうに、アナタも折を見て一つ統監に話をして貰ひたいと云ふことを云つて置きました。が、無論私の云ふ迄もなく大將は常に其意見を統監に話されたと思ふのであります。要するに内外全般の形勢と云ふものが新協約を締結するに最も都合の良いやうになつて來ました、之に加ふるに伊藤統監の遣り方が最も其の處を得て居つた爲に容易に且つ速かに此問題が解決されたと云ふことは吾々の大いに喜ぶ所であります。二十四日の晩は到底一夜では此問題が纏るまいと思つて居りました所が、夜中二時三時頃から新聞記者諸君などが電話を掛けて寄越して寢て居る所を起された、出て見ると協約が出来たが内容を知つて居るなら教へろと云ふやうなことで、所で協約の出来たと云ふことは知りましたけれども内容に就ては元より具体的に聴きもせず又話すべき話はありませんせぬから話しませぬ。

兎に角早く出来たので私は餘程喜んで居りました。二十五日の朝初めて協約の内容を承知しました。其當時は未決であつたけれども殊に内々の談合又は覺書もあると云ふことを聴きました。二十五日の朝は早速宋秉畎を訪ひまして、先づ無事に協約の出来上つたことを祝し且つ大体の事實を聴取りました。其事實は先刻來お話するやうな事實であつて存外速かに出来て仕舞つた。是から新協約に取極めた事を實行するに就ては又多少の騷擾は免れない又多少の危険も免れない夫は元より覺悟して居るが之から着々實行する積りであると云ふことであります。其取極めの事柄と云ふものは乃ち軍隊を解散するとか或は宮中の肅靜をするとか云ふやうなことが主要なる點である。其他内閣の大臣は當分朝鮮人にさせるとか云ふやうな事柄も取極めであるか話合ひであるか兎に角話が分つて居つたやうに認めました。其他は協約に現はれて居るやうな譯であつた。宋秉畎の

云ふには、今日以降は統監が事實上朝鮮の國王である云ふことをと云ひましたから、私は如何にもさうである他の内閣諸公もさう云ふ風に心得て居るかと問ひました所が、無論其心得であると云ふ話でありましたから、朝鮮の一般のものは協約の文字の穩かなる爲に左迄に思はんかも知らぬが内閣の人々は彼の協約で以て實権が統監の手に移つたと云ふことを良く吞込んで居ることが分つたのであります。之がただ文字にばかり書いてあつても意味が徹つて居らないと餘程後日困難を生ずるのでありますけれども、ソコ迄意味が徹つて居ると云ふことになれば殆ど新協約は完全に出来上つたものと云はなければならぬ。ソコで伊藤統監の所へも一寸挨拶に行つて、其日には種々都合がありますから名刺を置いて歸つて來ました。處へ新聞記者が集つて來ました。その當時は新聞記者諸君は未だ軍隊を解散すると云ふことは知らなかつたし其事は又非常に秘密にして、若し分れば暴動

が生ずると云ふので嚴重な秘密であつて、誰にも話さなかつたのでありますから私も話す譯には往かなかつたけれども乍併多少夫に類したやうなことがあるに違ひない位のこととは話合つてお互に協約の批評を初めました。所が記者諸氏は大体結構な條約であると云ふことに一同談合があつたのであります。夫で其の翌日か統監が外務大臣と代議士連中だけを呼で御馳走されました時に、食卓で伊藤侯が大体協約の趣意竝に締結の順序等を話された後に、特に私の方に向つて、まづかう云ふ次第だが君どうかと云ひましたから、私は夫は吾々の方は注文する人間であるから自づから局に當つて事をする人とは違ふのである。然し甚く此協約が不満足であれば私は幾ら統監が御馳走を供へて招いても此席には出ずに東京へ歸つて仕舞ふのであつたと云ひました處が、侯も陪席して居つた連中も大に笑つて且つ喜んだやうな譯で、大岡君の如きは無論政友會の人ではあるし

伊藤侯の乾兒見たやうな關係であるから大喜び林外務大臣も大變喜んで、豫期以上の結果であると云つて居られました。恐らくは外務大臣も東京に於ける内閣の諸公も伊藤公がア、云ふ人であるから充分なことを遣らないぢやないかと氣遣つたこと、思ふ、然るに旨く往つたから外務大臣は既に顔色に現はれて非常に喜んで居つた。之より一步進めば合併と云ふことより外仕方がないのであると云ふことは外務大臣も伊藤侯も鍋島外交總長の如きも口を揃へて云はれた如何にもさうであつたらう乃ち吾々の第一案は行はれなかつたけれども、第二案は乃ち巧妙なる言葉の許に全部行はれたと云ふことになつたので、實は餘程喜んで居つたのであります。正面から餘り喜びを云ふのも御世辞になるから云ひませぬ。伊藤侯の喜びと云ふか氣餒と云ふかナカ／＼當る可からざる程であつた。ソコで其席に於て石田三成の話も出た。又私が朝鮮に行く道中餘程急いで行

つたけれども林外相に遅れたと云ふ話もした、林氏も亦餘程急いだ  
が大井川が渡れないで船を上流に引揚げて渡つて、餓々甚い苦勞をし  
て行つたけれども却つて遅れた方が宜かつたと云ふやうな話で、餘  
程困難されたと見える。然し大いに喜んで歸られました。  
是れが新協栄締結の顛末であります。

わが松尾氏に此の松を

昭和五年十月

貸し其の読後の

禮状添付も

必要とす



名称	小川平吉文書
標題	日韓併合建議

1綴

分類 番号	

524

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



# 小川第二ノ一

日韓併合建議（併合前三年）

明治四十年七月政府並ニ伊藤

統監ニ京城ニ於テ提出

## 覺書

日本帝国外交上急要の問題たる對韓策に付き吾人は當局者が左の二案の一を撰み之を斷行せんことを望む

### 第一案

韓國皇帝をして主權を我帝國に禪讓せしめ日韓兩國を合併すること

### 第二案

韓國皇帝をして其位を皇太子に讓らしめると同

時に其統治權を我帝國に委任せしむること

理由

韓国の獨立保護に就き我帝國が努力と忍耐とを以てするの道は已に至れり吾人は最早此上に努力と忍耐とを繼續して帝國の利害を削却すること能はす又其必要を見ず故に今固の事變に對して帝國は宜しく過去に鑑み將來を明察し断然第一案を採るを上策とす若し一カ一他の事情の爲め第一案を取る能はずとするも必ずや第二案を断行せざる可からず吾人は確信し且断言す事已に此に至れり猶且つ優柔糊塗敢て一時を苟且するが如きは帝に帝國將來の禍患を貽すのみならず亦韓國人民を塗炭の境より救ふ能はざるの難局に陷

るの下策なりと

明治四十年七月

日

河野廣中

大竹貫一

小川平吉

國友重章

五百木良三

頭山 満

小川第二、二山一進會長李容九氏書翰

謹啓者錦城花開子規腸迴當此之時老臺々道節何  
如伏惟萬福生自極唱合邦之後既逾半歲之久唯紛  
時敬待天命而已今近好見祥風送楓瑞雲呈慶此  
臺非

老臺下同道唱和之力乎感謝曷已唯祈高聲合力  
致期于大目的必達僉敢陳某願且祝候  
道體為奈適直時局千萬擾護

六月九日

李容九

小川平吉老臺下

一進會長李容九氏書翰

謹啓者日月逾邁歲聿云暮矣高堂舉觴西  
憲翦燭疇昔之懽今果何如哉伏而

臺下信崇明德蹇々匪躬果當復握手相慰心  
蔡向之情遙望東風祝一陽萬福耳

日韓合邦議一出也貴邦新聞謬傳訛說靡知  
耶底止於兩國關係最後之最大最重事或將眩惑  
於兩國耳目使大事致遭起扞格不通夫敝邦輿論  
雖容九微矣有一容九亦足以一定之唯縻於好爵  
之徒上自內閣元老下至觀察郡守摹懷一朝之  
榮遺萬代之計極力塗抹民意以為新聞之力可  
以撲滅原燎何知其不可嚮導乎于此唯恐失之鄰

吝寧不怒而愼之而已雖然合邦之事利在敵邦而貴邦不其焉敵邦豐無豐產工無巧技商不可以通世界士不可以致千里江山不見一塞海島不浮一艦以之合于貴邦適足以加貴邦貧弱而已甚矣貴邦輿論之不揚也而至貴邦人在京城新聞記者團決議絕對併吞云々夫容九蓄志五年圓首遇此大事將欲以置社稷人民於萬安之地永賴一家翕樂之慶也

非將欲以四千載故國一千五百萬韓民族為貴邦奴隸也容九為奴而生乎不若與一百萬會員七十三萬裸賈商及儒生外教徒自經溝瀆而死矣胡為汲々乎復論國利民福哉容九熟思之往日之基

觴剪燭也。臺下之志決無欲奴容九之意也。轉將  
有加身撫之情也。然則京師記者圍之決議非貴國  
輿論而何。貴邦輿論之不揚由有未喻乎利也。容  
九請為貴邦論之。夫敝邦以一小弱介于二強之  
間。其勢炎付塞。離齊楚其情。國無自強之意。民  
無自立之志。是以東洋之禍。械未曾有不先動于  
敝邦也。若使列國永無交際。則白馬江可以止矣。  
既有交際。僅二十年间。經世界二大戰役。此敝邦齊  
楚之情實不得已而致不得已也。然則合邦者。豈  
非為東洋盛振古不涸之禍源者乎。貴邦之秉和  
柄於東洋。豈可為一世之利而遺萬代之累哉。唯敝  
社稷以之永存。敵人民以之永安。永免其每作戰衝



之苦則民志一定而不動矣民志不動而後自立之意始生焉然後始可以貧者自富而弱者自強也此豈非為敵邦拔振古貧弱之病本者乎夫絕二強以長白之大屏捍之以鴨綠豆們之灣口則舞鶴之港吳天馬之浦可以高枕而制東洋之海權四海絕虞而民業起之人族交血而民產殖之兄弟既翕和樂且湛則東洋之不揚波豈非萬邦和平和之吉祥乎今貴

今上天皇陛下以堯舜之至德放湯武之勲業為敵邦拔四千年貧弱之病本為世界空前絕後之鴻謨謨非待於貴

皇帝陛下而誰乎待哉容九噪呼唯恐不及時寔

為此也。臺下請毋論貴邦小不利。屬登貴邦輿論  
以必起斯開闢無前之洪業。若其合邦條件。唯貴  
今上天皇陛下聖謨之耶。不顯容九等景仰。唯一  
家同慶之寵光而已。敢茲披瀝肝膽。唯臺下察  
納焉。時惟嚴冬。尚祈道軀為國葆重。

隆熙三年十二月二十八日

李容九再拜

小川平吉 老臺下

小川第二

宋東坡子爵書齋跋

右書翰者故一進會長李容九與小川平吉君耶  
贈答也容九為人剛毅談笑于死生之間夙與余  
共首唱日韓合邦之事畫瘁忘軀遂動伊藤桂  
諸公決定廟議而山川君亦參畫努力焉隆熙二年  
容九自東京歸京城漸患癸表合邦之事羣議囂  
々魯根總監逡巡不決將抑壓之容九焦心苦慮遂  
寄此書以搜其衷實三年之冬也越四年八月合  
邦成矣蓋容九之力居多其翌年五月容九以病  
沒而此書散逸不知所在山川君頗惜之余偶獲其  
贄本故更字贈君以為紀念又足以見當時之情勢  
矣回顧伊藤桂兩公魯根子及容九相踵長逝不可

復見往事茫々如一夢臨書感慨不知所措

大正三年三月 於東京

友人宋秉燠

張併書

印

拜啓 小弟去月来 鎌倉ニ閑居讀書致居候為數日  
 前ニ至リ始メテ芳翰ニ接シ候先以テ御仕健愈御尽  
 瘁之段不堪欣喜候回顧スレハ熟海之客舎ニ置  
 酒高論セシヨリ以來已ニ一箇年今ヤ千里袂ヲ分テ  
 亦當日之歡ヲ尽スコトヲ得サルヲ憾ム、思レトモ貴  
 兄ハ四面囂々反抗有月迫之裡ニ之ヲ合邦ノ大義ヲ  
 唱道シ毅然トシテ屈セヌ、弟亦遙カニ之ニ和シ東  
 西呼應シテ將サニ宿昔之素志ヲ遂セトス此ノ如  
 クンハ則チ千里袂ヲ分ツトイヘトモ亦一堂之中ニ坐  
 シテ臂ヲ把テ歡談スルノ想アリ唯當サニ相共ニ自愛  
 シテ所信ノ貫徹ニ努力セシメハ来書中之高論ハ  
 悉皆我意ヲ得タリ抑モ日韓合邦之議ハ自慙之

大勢方ニシテ恰モ旭日之東ヨリ上リテ西スルカ如シ誰力  
 得テ之ヲ遮ラシ。反對論ノ如キハ事理ヲ弁セザル至  
 愚之論ニシテ駁撃ノ價值ナシ。力ノ故伊藤公爵之  
 優柔ヲ以テスル尚且ツ昨年五月精養軒ニ於  
 ケン韓人觀光團招待會席上ニ於テ日韓之關係ハ  
 一家ノ關係ナリ其ノ間ニハ開放スベキ門戸ナシト明確  
 ニ断言セシメ非スヤ一家トハ合邦之謂タルコト勿論ナ  
 リ果シテ然ラバ吾人カ速カニ其當サニ致到ルベキ  
 所ニ到ラズト欲スルハ當拙ノ議ニシテ毫モ怪シムニ足  
 ラザルナリ。今冬公會ノ席ニ合邦之議ヲ詳論  
 シテヨリ以來孰ラハ我國情ヲ察スルニ國民一般ノ希  
 望モ亦合併ニ一致セリ。来書中京城記者團之決議

ニ付キ云々セウレタレ共思考ニテハ其措辞行文ノ如何ニ  
不拘彼等之本意ニ至テハ必スシモ吾人ト相違スルモノ  
ニ非ルハレト信ス此ノ點ニ関シテハ不日同志會ヨリ派  
遣セン五百木大谷ニ氏ノ渡韓スツキニ付キ此ヲ概トシ  
テ双方之意思充分疏通スルニ至ラニ事ヲ要望致シ  
候要スルニ吾人ノ議論ハ東洋ノ大勢ニ基キ兩國ノ福利  
ヲ本トセン正々當々確乎不拔ノ議ニシテ其動クヤ恰  
モ天体ノ循環スルカ如シ常人之ヲ望メバ其運行之状  
ヲ觀スト雖モ潛運移ニテ必ズ其當サニ到ルハキ處ニ  
到ラスンバ止マヤンナリ天下何物カ得テ也ヲ遮ラニ彼ノ群  
盲之徒呆愚トシテ仰イデ吾人ニ感嘆スルノ日ハ料ルニ  
應サニ遠キニ非ルハレ願々ハ加餐自愛セウレヨ書ヲ

終ル臨ミテ併セテ一進會祿員高儒生教徒其他同  
志諸君之健康ヲ祈ル 草々不備

明治四十三年一月八日

鎌倉ニテ

小川平吉

李仁兄 侍史



明治四十三年一月（併合前八ヶ月）桂首相ト寺内統監トニ

交付セル韓国合併ニ關聯セル施設概要

一、合併宣告ト同時ニ現帝ヲ華族ニ列シ特ニ大公爵ヲ授ケ  
公債証書一千萬圓ヲ下賜ス

議者或ハ廢帝ニ與フルニ親王ノ稱ヲ以テセシト欲スルモ  
ノアレトモ之レ道理上并ニ事實上断シテ不可ナリ

二、現皇帝皇太子及太皇帝ニ邸宅ヲ賜ヒテ東京ニ居住セシ  
ムルコト猶木往事ノ琉球王及内地ノ舊諸藩王ニ於ケルカ  
如クス

三、特殊ノ者ヲ除クノ外一般西班ニハ爵ヲ授ケズ金員ヲ下附セ  
ズ其処分ニ付キテハ新總督府ニ於テ更ニ詳細研究スベシ  
四、親監府並ニ韓國ノ中央政治機關ハスベテ之レヲ廢止ス

五、新々朝鮮總督府ヲ置キ一切ノ政治ヲ司ラシメ併セテ立法ノ事ヲ委任ス

朝鮮ト云フ名ハ昔時遼東迄ヲモ包含シタルニ因ミテ特ニ朝鮮總督府ト名ヅク韓國ト云ヘル名ハ可成人ノ記憶ヨリ除去セエト欲スルナリ

朝鮮總督府ニ官房及内務部・殖産部・度支部ヲ置ク教育ノ行政ハ宗教風俗警察其他ノ行政ト密接セシムルヲ要ス韓國ノ現状ニ於テ最モ其ノ然ルヲ見ルナリ殊ニ前途耶蘇教徒ノ手ヨリ國民教育ヲ分離スル等ノ事アルカ故ニ之レヲ内務ニ併合スルヲ便利トス又司法部ハ独立シタル部ヲ置クノ要ナシ其事務ハ内務ノ一局ニ屬セシムルカ又ハ總督府ノ官房ニ屬セシムレバ

足ル

總督府ニ總督(軍人)一人副總督(文官)一人ヲ置ク親任官トス部長ヲ勅任官トス

六、參議院ヲ設ケ參議官ヲ置キ重要ナル行政事項並ニ法令ノ制定改廢等ニ關スル諮詢ノ府トス

參議官ハ勅任トシ日韓兩國人ヨリ之ヲ任命ス

部長ノ職ハ最モ重要ナルヲ以テ當分日本人ノ優材ノミヲ以テ之ニ任シ韓人ハ參議官ニ任命シテ之レヲ優待シ不平鎮撫ヲ兼ネテ國情ニ通スル政治ヲ行ハント欲ス故ニ參議院ニハ韓國各方面ノ人材ヲ招致スベシ

七、十三道觀察府ヲ廢シ更ニ舊時ノ如ク二十三府廳ヲ置キ行政ノ大部分ヲ之レニ委任ス

八府廳ニ參事會ヲ置キ日韓人ノ參事官ヲ以テ之ヲ組織シ  
中央ニ於ケル參議院ノ如ク府廳事務諮詢ノ府トス

九稅務警察等ノ行政ハスベテ地方官ノ手ニ統一スル事

一〇按察使ヲ置キ勅任官ヲ以テ之レニ充テ總督ニ直隸セシメ  
一般行政司法及會計等ノ監査ヲ為シ官吏ノ非違ヲ糾  
彈スルト同時ニ人民ノ冤枉ヲ伸ツル為メ其訴願ヲ受  
理ス

行政裁判所會計検査院等ノ代リヲナシ且ツ一般行  
政司法ノ監査ヲナシ民心ヲ悅服セシムル機關ナリ  
此ノ機關ハ政治ヲ簡易ニシ地方官委任ノ範圍擴  
大セムヲ以テ特ニ其必要ヲ感ス

二新々ニ調査局ヲ設ケ韓國ノ習慣典故等ヲ調査シ行

政之法ノ基礎ヲ作ルコト其局員ハ日韓人ヲ以テ之ニ任命ス  
二合併ノ上ハ直ニ全國人民ニ新政ノ趣意ヲ詳細ニ布告シ  
且ツ大赦ヲ行ヒ無益ナル法令制度ヲ廢止シ若クハ惡善  
的處置ヲ執ル等人心ノ一新ヲ圖ル事

三現在韓國ニ於ケル行政ノ繁文縟禮ハ我邦ニ於ケルヨリ  
モ甚シ故ニ此ノ際重要ナル官吏ヲ交迭シ行政ノ方法ヲ根  
本的ニ改革シ司法裁判所ニアリテモ更ニ其數ト階級  
トヲ減少シ且其手續ヲ簡易ニスベシ

名称	岩倉具視文書 西川本
標題	明治元年ヨリ七年マデ 朝鮮修好 事件原稿 全

分類 番号	
	347

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

232286

3-1

昭和26年6月30日

十号 四柱方板

明治元年

口七年二迄

朝鮮修好事件原稿

全



明治元年三月十三日 宗對馬守、達

令般祓廢幕府、王政仰一新萬機、御宸斷ヲ以テ被

仰出候ニ就テ、今後朝鮮御取扱之事件等、經テ從

朝廷可被仰出候條、此旨朝鮮國へ可相達御沙汰候事

口 元年五月十日

各國御文隆之儀、一切外國官所轄ニ候間、朝鮮國之儀

是迄伺出候件、太坂外國官へ可申出事

口 元年六月廿八日

任左近衛權少將、叙從四位上

口 元年十月

朝鮮國振興、願奉朝鮮國、報知、便第差渡候ニ就而

者、前以先問、書契差新新印押着、義等及告知御政

通報、事實及演說候、更彼國、經譯訓導、稱、朝鮮國工



日本列事ト稱一傳語ノ者三十買有之其内訓導則差

任官共相唱任譯候

書契寫相受取總テ西國間規外ノ書契佐所ノ義

即東萊府使工傳達廣尚道東萊郡府使不取敢府使

ヨリ都表工内報狀差出候趣返答申出

先問書契寫辰十月告王政復古之狀ナリ

本邦頃時勢一變政權一歸

皇室在貴國隣誼固厚豈不欣然哉迺差別使具陳顛末不

贅于茲不佞縉奉

勅朝

京師

朝廷特優舊勳加爵進官左近衛少將更命文隣職永傳

不朽又賜謹明印記要之兩國交際益厚誠信永達罔渝

倭一本作倭

敷慮所在感佩曷極今般別使書翰押新印以表朝廷  
誠意貴國亦宜領可舊來受國書事其原由全出厚誼所  
存則不可容易改者雖然即是係  
朝廷特命豈有以私害公之理耶不佞情實在此貴朝幸  
無體諒所深望也

十一月

書契

王政維新之報告ナリ。封抄執政殿ノ者大修  
使、使名ヲ以テ渡韓ス。

我邦

皇祚聯綿一系相承總攬大政二千餘歲矣中世以降兵馬  
之權舉委將家外國交際并管之至將軍源家康用有於  
江戸亦歷十餘世而昇平之久不能無流弊事與時乖戾  
爰我

皇上登極更張綱紀親裁萬機欲大修隣好而貴國之於我  
也交誼已久美宜篤懇款以歸世不渝是我

皇止之裁意也乃差使价以尋舊姻惟希照亮

——年餘保渡韓顯承及、廣津以信陽國尋其同區、  
過日差越置候先問之書契捧出可致旨退、役筋ヨリ  
訓導工及應接候處年内月迫來陽ヲ待可議之趣強而  
相断リ候ニ付申立之通承諾

——己巳正月

當春ニ至有無之返答不申聞傳語官ヲ以屢及談判候  
處當時於政府專ラ高議ヲ盡シ候ニ付京報相達候迄  
暫相待吳候様申出爾後訓導御病託下來不致

——二月

本月初旬ニ至リ返答向度ニ相促シ候中大島友之允  
渡韓國許指揮ノ旨モ有之訓導不來方及嚴達同十六  
日罷下リ候ニ付退ニ事遲緩ニ至候時ハ兩國之大事

我朝議不可測。又旨趣韓傳官

則傳語官其長タルモノ

ヲ以切

直為及應接尚館守幹事官

對品ノ役員專任文官候モノ

以嚴重

及掛合候處書契異例ノ譯ヲ以テ彼是異難申立候ニ

付其次第仔細辨白訓導ニモ半發明致シ孰レ不日京

報可相達ニ付返答方當月中相待吳候様自然夫迄音

信無之時來月二十日ヲ期シ書契捧出スベキ事

同二十九日訓導入館幹傳官宅ニ至リ申聞候所昨日

京報相達候様廷議甚難ク其大意書取ヲ致シ置候也

真文一通差出候所幹傳官一見ノ處書面ノ次第條

理不相立其上展忽不遜ノ文體ニ付右等ノ書面役筋

工難取趣ヲ以即坐及返却候處訓導ヨリ右ノ僕等存

意ニ付候事ニ無之則都表廷議ヲ以命セラレ候事故

書面ノ不被相立不遜ノ文體等用捨致シ趣意柄ノ處

ハ是非上官聽聞ニ達シ吳侯楸及懇願候ニ付先ッ  
幹傳官限リ相預リ役筋ニ於テ内見致

直文

蓋自責弊兩國交好以來義同兄弟之孔懷信如南山之  
帶砺設置和館專務相憐固是大經也大法也伊后三百  
年之間何嘗少忽於經法之上乎此非但上行而下効也  
亦未必不由於兩國幹旋人之服膺經法不渝前修則為  
今日居其職掌其事者捨此何求而今自順付書契到館  
後積月公幹不啻屢直然蔽一言曰書契往復所重自別  
陳非違大格式焉可遲滯不擇乎貴耶來往例為轉達朝  
廷則賁來書契亦當上送南宮故僕等先為取見則外面  
上職銜之與前有異雖知級之稱而至於姓字下朝臣二  
字是何格例耶後此甲若之亦倣此例雖似無間恐取嘲

於各國聽聞此猶第二件事也。且書契文字亦多拾外之  
語。甚至於私害之句。而至於我國傳送圖書還納之說。  
又不覺只舉不合。舌拳不下也。厥初請鑄不惟貴邦之願。  
為亦關我國之寵錫。而忽焉變改。要著新造之印者。此果  
率由舊章。益敦隣好之意乎。此皆不可捧出之大旨。故已  
即稟告于本府。釜山西使道前。同為舉論於來。船啓聞中  
矣。及伏見回下。非但退却。可也之教。又有無難煩聞之責。  
僕等情地之惶。預待罪。顧不足恤。而雖以和館僉公言之。  
且即援據事情。通報貴列。無至遽著新印。轉生無限公幹。  
徒損事面之地。是所深望耳。己巳二月日  
訓導訓導  
同晦日。館守韓事官訓導。一面接訓導。以別翰請取方  
之義異例。書式捧出。致問數趣。今以  
朝廷。嚴令有之。候得者。府使初任譯。至可絕掃無

之既ニ來ル三日捧出ノ堅爲相定置候得共右ハ自然  
京報無之時ノ要置ニテ今日確報相達候上ハ朝命遵  
守ハ外無之趣申出候付書式ノ義先日以來開論ニ及  
候通ノ聊異例ト申ニ無之次第及復辨論ニ及候得共  
然ニ議論不相決既ニ鶏鳴ニ至リ免ニ角來ル三日  
兼約ノ期限ニ付其節ニ於テ余論可相盡申渡訓導出  
館差免任所工退出任所ハ任  
所ハ任

三月

本月三日訓導韓傳官工申出候ハ此程差出候真文之  
趣意柄都表廷議ヲ以テ僕等工嚴令ノ大要ニ有之然  
ルニ退却ト成リ候而ハ不得已義ニ候處文籍無之而  
ハ府使聞取テ慥ニテ都表啓問ニ於而的據無之候  
故真文ノ大趣意ヲ通候返書誘文ヲ以相渡候様

及懇請自一書契改撰之義ヲモ旋力可致抑通  
信之國柄事有告知ノ書契貴國ニ於テ一應之披見  
無之唯書式字章等枝葉瑣々ノ論談ニ空トク日カシ  
費ト候ノミナラス使命ヲ境上ニ差拒候振合隣誼相  
孚スルノ道ト可申哉既ニ堅約モ有之今日ニ至リ違  
約可致極無之是亦書契請取可申趣切迫及討論候處  
渠ニモ種々陳飭終ニ徹夜ノ對論翌四日曉ニ至リ訓  
導ヨリ追々御開諭ノ條理僕ニ於テ十分體諒罷在  
候處何分朝命嚴猛殆周旋ノ道塞リ今更可盡ノ目的



無之候得共此上微力、限差働見度就而、昨日及懇  
請候<sup>修</sup>問釋白、書面相渡具候ハ、右方資下、一周  
旋可致及欲願候、自其意、任セ両負内議、有<sup>レ</sup>趣幹  
傳官筆記ノ體、<sup>レ</sup>諺文書取追而幹傳官ヨリ相渡シ  
出館差免ス左返答來ル六日七日迄ニ可申聞トノ事

諺文

館司幹事官ヨリ宗對馬守家來大島友之允<sup>レ</sup>申飭  
セラレ<sup>レ</sup>辨論<sup>シ</sup>方<sup>ニ</sup>諺文<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>書遣令監<sup>ス</sup>  
交隣之道在要誠信言與真違名與實及不<sup>レ</sup>何以誠信為  
言

朝廷前ニ我君上ノ官階ヲ進<sup>ル</sup>即速以其實朝辭ニ告  
久隣誼當然今訓導請<sup>ル</sup>所ニ從<sup>ヒ</sup>主君既ニ去之舊官  
大稱<sup>ル</sup>苟甘一時穩當内矯朝命外欺隣邦可失信ヲ於

西間亦抑訓導見之權臣者必在吾理不可為  
者十之九況や既三成成不例瞭然タルアリ若其陳不已  
其又朝臣ノ二字ノ如キ是我朝ノ古制以分氏族  
ノ尊卑是故一姓之内朝臣アリ真人アリ其他數名  
各差等有云學姓字連用云云葛心涅建云云  
先聖重氏族之意可謂厚這四朝政復古ノ溫用古  
制訓導朝臣ノ文字ヲ誤解云云其言實ニ無稽  
朝廷ノ臣ト云フ起其疑心似有以之雖普天率土誰在王  
臣ニ非之既云上國諸官銜掲掲何所更ニ朝廷  
ノ臣ト云フ文字ヲ以謂之且雅昔信聘以書式幕府ノ  
執政以朝臣稱タル事則アリ我先君王亦用之訓導不  
明於古而今及此言猶有所疑如キハ檢査其舊藉以テ

事ノ虚ナラサルヲ證ス可シ況ヤ其事元ト係我國制  
於朝鮮何子訓導曰書體大ニ格式ニ違ト又云格外之  
語多ト問其由則曰書契中皇字不可用又字行位置  
失其行是何等之時論ナリ不解事理何如此甚汗實  
ニ不堪驚歎ナリ蓋シ書契之體裁字行之位置固有定  
規文書中所陳ノ如キ交隣誼從其實告其實避國諱ノ  
外無不可書之字無不可言之事苟言ヲ待シ抑我國  
天皇一姓終古不渝君臨億兆拯攬太政至今二千有餘  
年其事實朝鮮固ヨリ聞知スル所ニシテ渠ノ書籍中  
其概畧ヲ書載スルハ更ニ贅セヌ方今本邦政體更革  
天皇親裁萬機即具其實朝鮮ニ告ク道理應然其皇  
字ヲ稱スルニ在テ何有所嫌況ヤ往昔朝鮮贈我列之  
書ニ西土ヲ稱スル天朝皇朝ト云若然ナハ果シテ是

何謂此也字行位置如前幕府之猶室規戶  
況其體裁不言正統可知也又以私害公之言至  
訓導所言尤不當今粗陳之以釋其惑中古我邦兵亂  
之際二膺政府令四方三行一本州一扼一又不待  
公命和三信二朝鮮三通二圖書一傳贈一事元是文際惻  
款之至也所今也卒然似不可革而這回一意要之  
皇朝綱紀一一新一益敷隣交為特命賜印記以表其盛  
朝廷更三修隣好特命印信是則兩國一公義也公文也  
舊來受圖書今日不好革一本州之私文也私情也原公  
義斷私情實君臣大義之所存也是所以不可有以私害  
公之理而本州舊來隣誼一重一事理不得已之意一表  
示一今不審其由更費口吻隣誼相孚之道一及一

ルコト彼ニ在テ可謂失本體

己巳三月

同七日訓導病託不罷下八日夜下來候段相局同九日

訓導入來館幹兩頁ヨリ過日相渡遣候輯白書取其

當否存便ニ於テ如何相立候哉及訊問候處訓導曰其

後又京報有之候處朝議彌込入申シ以館所ヨリノ書

取差登セ可申都合ニ無之免角異例ノ書契出送イテ

之間敷趣ニテ僕心得方等閑之譯ヲ以謹責ヲ受不得

止下來致シ候就夫國情ヲ以露致候段耻入候傳ニ我

國ニテ佛國戰爭以來武臣權ヲ專ラニシ武官未曾有

之兼官等ニ始リ文官之面ニ失望後與之外無之元來

武官ノ義ニ時之血氣ニ仕セ果斷之雄論多ク候得共

國家之長計ニ於テ如何可有之乎是迄日本之文通ハ

全ク文官之取扱ニ候處當節ヨリ、武官之建議不少  
依之只今一已無理之取斗ヲ以書契捧出之時ハ即時  
嚴科ニ敷セテ候ハ眼前ニ有之然ル上公幹ニ於テ  
彌雍塞勿論ニ付兎角事ヲ急遽ニ不謀漸ニ成功ハ外  
無之是等冥<sub>ミ</sub>久聞分兵候極頻ニ懇願過日渡置候書  
而當否ノ有無一言不申聞前後不應之應接振内實勘  
考<sub>レ</sub>所辨白<sub>ノ</sub>書面彼ニ在<sub>レ</sub>此上異難難申立處ヨリ  
國情ニ事ヲ轉<sub>シ</sub>通辭ヲ以一時<sub>ヲ</sub>免<sub>カ</sub>レ候術策相考  
候所<sub>ハ</sub>渠前日之應答不始末之次第議論差詰書契捧  
出致<sub>シ</sub>候迄ハ出館不相協趣ヲ以館所ニ挽留置尚書  
面<sub>ハ</sub>次第及責論候處押詰訓導ヨリ諺文之書取差出  
左<sub>ニ</sub>

和輯  
日前書出<sub>ナ</sub>サレテ新諺文書付ハ要敷拜見致<sub>シ</sub>マシ

テ其緣由ヲ府使前ニ申上マシタニ府使ノ被申マ  
スルニハ然ハ訓導ノ意ハ將欲何為而如是來言耶  
ト被申マスル故僕ノ申マスルニハ今此公幹ハ實  
是内外兩難之事也不可自下左右館中ヨリ簡擧ニ  
被申マスル事情ナリトモ京中ニ御往復被成タラ  
ハ如何哉ト申上マシタニ使道御叱ニ

朝廷ヨリ仰テハ、ニハ兩國文隣之道ハ率由舊章  
遵守約條惟以誠信為主而已デ書契ノ捧不捧ヲ吾  
與訓導能自此任意乎訓導ガ館中ノ叱ト事情ハ我  
ニ参リテ委敷申セトト我が叱ト朝廷ノ處分ハ館  
中ニ行テ委敷申サヌト見テハ是如何ノ譯哉ト被  
申テ嚴責被致マシタ行悚然下來致シマシ外

己巳三月日

訓導

去歲九月十四日奉旨訓導滯館中付置其間幹傳  
官以下通詞中又恐情態探索三及日候覲只恐鬱悶氣  
屈八振奮聊中間三在武弄操山衙計有之共不相見只  
管在所定日與館取計吳侯樣懇願三及日候覲三其身  
命有限努力可致趣心腸三叩三退三相歡候有爾後  
多日滯館申有候時甚難無之放出其機三當三可鼎三  
決在滯館中館中幹事官論談三次第傳語館中內話三  
越三至煩雜多端三涉候有略各三三三三三三三三  
同十四日訓導三館守三此度三公幹三三三三三三三  
勢相對候三三三三三三三三三三三三三三三三三  
四五日三三內僕茶禮相整宴廳三於三諸向三及面議日  
限相定可及三三三三三三三三三三三三三三三三  
昨此度我國三朝政一新三三三三三三三三三三三  
使第三渡候有



規外、使者柄貴邦之間、驚、慮、其顛末前廉  
別翰、以及告知候處別翰之書體等枝葉、論談、  
三、涉、徒、時月費、大體新政通報、旨趣、取失候  
梯、行候而、不相濟次第、有別翰上有無、論、暫  
閣、大修使、書翰捧出可致此第、使第、全規外、  
義故舊幕文際、規則等、可相拘極無之別段府使出  
廳致、書契相請取、候、何、急便權宜之道被  
取計度、然後兩國之交際萬般之體、式、追而可及講定  
方今字肉之形勢事、實用、主、易簡質略、尚、  
此場、自萬般迅速、便候梯申渡候趣訓導、  
判、主意、恭、候得共知同之別翰、未、相運、  
其止大差、義、是、例格有之一、已難及、即答、  
申達候上可相答、事、  
置其間、

同日訓導出館差免ス

同十八日訓導入館館守茶禮ノ義東釜面使道

東萊府使釜山

吏病氣出廳不相協候間日取之義當分差延吳候様申

出候ニ付然時ハ條約外ノ義ニ候得共時宜不得止候

ニ付東釜面所内ニ推考可致相違候處訓導ヨリ而使

道出廳難相成程ノ病症假令御出張有之候時御面議

不相整候付少快迄ハ何分猶豫方申出且ツ大修使書

契受取方是又例格モ有之候付當時猶豫吳候様ト事

同日訓導ヨリ傳語官中ヲ以テ申出候者大兵

品地ヨリ

申越ノ品ニ依リ來ル廿一日ヨリ奏進可致越ニ付右

大丘行ノ招未勘考ノ所是迄間ニ大丘ノ唱ヲ以都表

ニ罷登候義モ有之候相聞ハ大兵監使ノ義一道ノ司

ニハ其職掌重ク候得共兩國交際ハ大事件歟決無

之ハ勿論之義ハ都表呼登共ニ無之哉其次第ハ訓導  
挽留ヲ始メ茶禮ノ懸合大修使書翰之義等彼是ノ手  
都合ヲ以テ彼國ニモ大ニ切迫ノ振ニ相見ヘ何レ訓  
導大丘ヨリ帰府ノ振合ニ依リ當所置ノ品有之事

二年十一月

左近衛少將

因功增秩想或有此而行之本國可也至於交隣文字自有講定不易之規則何可遽加幾字於此字若我國禮曹參議原是右侍郎東萊府使例與禮曹參議而自前冊而不書貴國何獨惟意增減不遵前例乎

一平朝臣

歷考往牒雖高官大職之人未有官職之贅於姓名中間者此亦格外

一書契押新印

貴國封疆之臣想當原有印章行之本國而貴州之必用我國印章於書契者欲為憑信之意乃是不易之規今欲改以他印則決不可受也

一 禮曹恭判公

公是君公之稱首於五等侯伯之爵則較諸大人實非貶降蓋此書契之稱以大人三百年已行之例今忽稱公係是格外也亦當依前而已

一 白室

皇是統一天下率土共尊之稱惟行之於貴國而貴我間往來書契中則交隣以來未有之事如此字句決不可受

一 奉勅

勅是天子詔令此惟貴國人尊奉之說而蓋自交隣以來初見之字也不須更論

一 厚誼所存有不可容易改者

貴州之世受我印非私伊公而歸之厚誼所存微有以此

為私誣底意而至於下以私害公之句大覺駭異當初受印何嘗私自與受而乃以私之一字抑入其中乎貴國典刑之官若私受印章於隣國則貴國之事豈不異哉一大抵兩國約條即金石不刊之文也書契往後非汙漫文字而苟其一言違格一字碍眼必無容受僂接之理雖百年相持徒傷隣好而已豈有濟事之期乎想貴國亦有深識事體道理之人而終不知悟察為之深慨

己巳十一月

訓導後師安僉知

別差景文李王傳

館司尊公

一貴國之於契邦誼同兄弟禮以賓主自夫交隣以來諸凡所懇除非大違格例有乖義理則可謂無言不從無願不遂而至若今番書契中一二字句與印章改易之說此誠

三百年以來所無之舉也。惟我兩  
邦之率由舊章。永以為好者。為其誠信之不可渝。約條之  
不可違。則今日之事。謂之誠信。字約條中。想亦自揣其必  
不見施而尚此。澤留。一向執抑。密為貴邦慨之。近日  
朝廷處分至嚴且重。本府便道方在悚惶待勘中。則不  
能幹事之任官。罪尤何居。藉使十年淹留。萬般為說。此無可  
行之日。幸勿希俾。幡然改圖。務歸要當之地。是所深企。  
：苟有一分可圖之望。則為任官地曷不極力。轉旋以副  
遠人之心哉。言止。此笑。庶可諒焉。

己巳十一月 訓導 倭鄉 安靈知

同上

三年三月

大抵

貴國之稱皇稱勅天下無異辭則行之某國自當挈然而順苟其不然則此重寶之所不可喻衆力之所不可脅貴國亦知契邦之必不許受而輕試以此無亦不諒之甚歟夫以三百年金石之盟至今彼此無戢而徒費無益之辭欲行難強之事非所以永而為好也恐不如及茲改國務循常舊不至失和之為貴至若左近衛朝臣等字國書換用之說太人之改書以公又不可曉也立降之道貴在一尊舊規則契邦之不肯唯之不亦宜乎哉欲申講舊好使千百年如一日則諸凡建契之中何患酌宜遣辭之為難而苟然持名矣遙想

貴國之中亦多通曉漢書之人尚且計不出此良可慨也



統希

臨悉不備

庚午三月日 東萊府伯

大差使公

館司公

佐田白茅建議

朝鮮王

皇使ハ華族ニ若クナシ士族ニテハ宜シヲ其譯

朝鮮固陋ニテ頻ニ名門右族ヲ競ニ賢愚ヲ論セ

ス徒ニ上佐ハ人ヲ貴ニ下佐ハ人ヲ卑ムヲ以ナリ右

華族モ上佐ノ人ニ若クナシ差當リ上佐華族ニ乏

使節ヲ勤ムルノ間四位ハ三位ニ進メ三位ハ二位ニ  
進メ害ナキ此實ル處臣等客冬十一月朔日當年正月迄  
東西京ノ時務更ニ拜聽也既ニ皇使人頭一定カハ  
知テ萬一士族ニ決定相濟共伏冀ハ朝鮮ノ俗情ヲ  
顧ミ事宜ヲ慮リ更ニ其位華族外人ヲ精選初則以  
且皇使ヲ隨使ハ朝鮮交際受持嚴原藩知事臣等  
仰命ス所先ニ妄議死罪庚午三月

臣等同前

謹白 臣 奉

奉朝命入朝鮮探討其狀情謹將此等情  
奉貢探索紙若干今又條上臣等之要論敢採進止  
朝鮮近年大興武官練兵制製器械諸方作兵營諸道畜  
金穀文官則超然不問也嚮以

天朝下一新之書、文官皆曰宜以結交答之、武官皆曰結  
交則止、大興元年、日本遣使來朝、天皇命結交、答之、  
日本終以我為藩屬、須擯卻其書、國王採武官之說、以有  
不遜之文字、擯卻之、嗚呼、其擯卻之、是朝鮮辱

皇國也

皇國豈可不可

皇使以問其罪乎哉、

朝鮮知守不知攻、知己不知彼、其人深沈狡獪、固陋傲頑、  
覺之不覺、激之不激、故斷然不以兵力誑焉、則不為我用

也、况朝鮮蔑視

皇國、謂文字有不遜、以與耻辱於

皇朝入賤一

皇國、君辱臣死、實不戴天之寇也、必不可不伐之、不伐之

則

平壤

之

國

之

三

三

三

三

三

三

皇威不立也。非臣子也。連下

皇使一名。又撰大將一名。少將三名。引卒三千。大隊

皇使舉太美。問所以辱。則進。則退。則止。則無。則

皇國者。彼必屯。遭。蹢。踴。不。能。降。伏。謝。罪。唯。命。是。聽。焉。於是

皇使忽去。大兵遽入。其大隊向江華府。直攻王城。大將

率之。其一少將率守大隊。進自慶尚。全羅。忠清。三道。其一

少將率四大隊。進自江原。京畿。其一少將率十大隊。溯鴨

綠江。自咸鏡。平安。黃海。三道而進。遠近相待。緩急相應。角

之持之。必可不出五旬而虜其國王矣。若不然。而徒下

皇使。雖百往復。實下策却法。不若征討之最速。決非浪舉也。

朝鮮仰正朔於清國。而其實不欲事之。以其清祖興守夷

狄也。然苟仰正朔。則患難相救。義當然。故當

天朝加<sup>兵</sup>之日。則遣

皇使於清國說所以伐之者而清不聽之出援兵則可在  
清而伐之、  
朝鮮有太殷君者、國王之實父也、丙寅之年、朝鮮與佛蘭  
西戰爭之後、專握政柄、擅威福、唯好武而無深謀遠慮、厚  
稅歛、畜金穀、下民莫不怨對焉、一日舉我三十大隊、以蹂  
躪彼之巢窟、則土崩瓦解、一夫之太殷亡、繼七擒、實易易  
耳、全  
皇國為一大成、則若蝦夷、呂宋、琉球、滿清、朝鮮皆臣  
皇國之藩屏也、蝦夷輩既創開拓、滿清尚文、朝鮮可伐、呂  
宋、琉球可唾手而取矣、夫所以朝鮮之不可不伐者、大有  
之、四年前佛國攻朝鮮、取敗衄、懊恨無限、必不使朝鮮長  
久矣、又普國窺其動靜、墨國亦有攻伐之志、皆垂涎乎  
得金穀云爾、

皇國若失斯好機會、而與之於匪人、則實失我辱而我、  
必寒、故臣痛為

皇國唱撻伐也、

今桑土師之論、則人必以糜財蠹國、破其編、臣謹按伐朝  
鮮、有利而無損、一日雖投若干金穀、不出五旬而得其償  
矣、今

大藏省每歲出金九二十萬圓於蝦夷、未知幾年而或開  
拓矣、朝鮮則金穴也、米麥亦頗多、一舉拔之、徵其人民與  
金穀、以用之於蝦夷、則大藏省不唯取其償、省幾年間  
開拓之費、其利豈不浩矣、故伐朝鮮、屬國強兵之策、不可  
容易、以糜財蠹國論却之也、今

皇國實憂兵之多、而不憂兵之少、諸方兵士未足東北之  
師、頗好戰鬪、尅足思亂、或恐釀成內亂之憂、幸有朝

鮮之舉用之於斯而洩其兵士鬱勃之氣則不唯一舉屠  
朝鮮大練我兵制又大樞兵之大端矣其未取東北  
皇威於海外豈可不神速伐之乎哉  
庚午三月

譯外務卿朝鮮三贈書

日本國外務卿譯宣嘉奉書

朝鮮國禮曹判書某公書聞

大儒我

朝廷命知對馬州事宗重正謀興

貴國尋舊交迄今三年未有所面奏顧

貴國諸賢或有未了

本邦尋文之旨者故

特重陳以告我

國家中世以降兵馬之權季之將門而疆域之政亦管之

今也世運一變我

朝廷更張綱紀革弊除害政令維新元夫與

貴國隣誼之源業既三百有餘歲宜更尋舊誼令兩國之

盟愈篤愈固永遠弗渝矣加之海外諸邦星羅密布修文

講武舟楫之便碩礪之利罔適罔遐靡所不至當此時凡

有國土人民之責者豈得不遠慮而深謀乎哉而

貴國之東即我之西其相距僅一葦有如唇齒相依存亡

相關者焉是最所以要其

隣誼之愈篤愈固也

閣下高明其必有所見焉誠信所在言辭衷出冀

閣下鑒裁尋之誠意為

兩國良圖明致覆音不宣

明治三年月日

九山外務大臣朝鮮贈書



日本國外務大丞丸山作樂、奉書

朝鮮國東萊峯山兩令公閣下

嚮我

朝廷命知對馬州事宗重正致與

貴國重修舊好之意重正至今尚未復

命故我

外務卿特致書

貴國禮曹判書某公備告

本邦政權復古之情狀商量

兩國尋盟之事委之吉岡弘毅森山茂廣津弘信齋赴

貴國兼命拜晤

兩公閣下陳叙

本邦誠意之所在冀

善款接其使員

聽納其所陳述其所齎

外務卿之書為

轉達

禮曹判書某公而

兩公閣下亦

周旋其間使

兩國尋盟萬世弗渝幸甚幸甚

明治三年 月 日

四年

大修理使渡韓顛末及上廣津私售歸國尋文目達ノ

建議大要條目左

第一條、此起元ハ明治元辰三月外國事務輔ノ心得ヲ

事以テ朝鮮御用可相勸条宗氏へ被仰付

同月又幕府ヲ廢セラル候ニ有テハ朝鮮御取扱事

從朝廷可被仰付候方朝鮮へ可相達御以テ事

同六月朝鮮國へ改メテ大政一新ノ御達被仰付候事

同十二月大修理使一雨新報知トシテ朝廷御草案ノ

書契ヲ齎ラシ渡韓セシメ候事

大修理使渡韓後ノ顛末

信メ文句止ニ就ニテ議ヲ起シ其末訓導ヨリ機密内

話三月中旬中三日今日本開白ヲ廢シ一新ト云フト

一 是彼カ壽對款主ヲ  
望ム所

二 是彼カ拒絶ヲ好マサル  
所

三 是彼カ疑懼スル所

一 是實ニ大臣相當ノ官ニ任シ交際ノ職ヲ置カハ豈不  
然ノ理アラシヤ今日本ト和ヲ失スルトキハ長策ニ  
非スト雖トモ今此ノ難

三 皇ヲ稱スルハ必ス漸ヲ以テ我ヲ臣隸スルノ奸謀ナ  
シハ始メテ慎ニテ許スヘカラズ

第二條 佐田森山齊藤渡韓彼レカ大修使所齎ノ書ヲ  
受サルヲ以テ東萊府伯ノ書ヲ出サシメ宗氏ヨリ之  
ヲ朝ニ奏スルヲ約ス滯韓ニ十日許リテ返國

第三條 獨乙船中馬渡外務次丞及ニ對州人中野許太  
郎童組ニ居タル義彼レカ疑訴ヲ加ヘテ後大島正朝

ヨリ浦瀨最助ヲ以テ渡韓セシメ訓導ヘ應接ノ結末  
政府壽對交際内談ニ及ヒテ事終

第四條 再渡韓内意ヲ蒙リシトキ森山茂廣津弘信ヨ

以從前對所ヨリ朝鮮へ輸送滞リ品及テ負債アリト  
認持渡亦宗氏自ラ腹韓尋交幹難ヲ議シ建シ事ヲ  
第六條 四條建議中浦瀨最助上京第三條訓導應接  
旨趣ニ付テ見込ニ申立ニ由テ省議アリ外務省ト禮  
曹ト考對交際方ヲ議試シ力ヲ為メ吉田昭武渡韓  
先ヨリ書契ハ彼トニ示サズ唯外務官眞面晤シ事ヲ韓  
傳官ヨリ傳ヒルメ又ハ處彼一以ニハ大修使徐東某  
ハ單簡ヲ得テヨリ後天猶故ヲク徒ラニ滞在スルヲ  
以テ外務官員ニ面會ハ必ス前書契ヲ傳達セサリシコ  
トヲ難シ論セラレシヲ謀リニシテハ對馬市州府  
出スラ之ニ給與スル事許多況ヤ其親交ヲ納ルハ  
日ニ采ラ公素ヨリ奪フテ厭ハサレハ國策レハ費用實  
ニ不可支ヲ疑ヒニ以テ舊幕未運々トキヨリ日本

人々對州ニ非ハ者異國様船ニ乗ジテ釜山ニ來リ又

明治辰冬及ニ其翌春南海濱ニ碇ヲ投シ地清官ニ

面謁ヲ乞ヒ又濟州ニ至リテ屢貿易ヲ謀リレコト等

ヲ照シテ我ニ或ヒハ歐州ト謀ヲ協セ内外剛柔相應

ルテ彼ヲ圖ルカ所懼シ此等疑懼ノ念腐索ヲ地ト誤

リ水鳥ヲ兵ト認ルハ類見聞悉ク其念ヲ增加ス是改

警官員モ又修使ソ類見聞悉ク其念ヲ增加ス是改

論難ヲ起シ來ルナラシム而シテ兩國間斡旋シ

小吏又私情アリテ彼疑訝ヲ破リ我誠信ヲ納ルハ

術ヲ得ス是ハ彼ヒカ官員接待ハ期ヲ遷延謝辭スル

緣由ナリ且

第六條 滯韓中情彼我兩聞ハ公誼私情ヲ探索シ之ヲ

嚴原藩前知事殿ニ諱諱ハ所知參事與トモニ舊冬家

役辭表決上ツテ見毛符節ヲ合セタル如ク弘

信卿今韓地言蝶亦テ之ヲ舊卿公ニ陳兵し且先月  
來建議スル所以趣旨ナリ

第七條舊彼ト内情我ト拒絶恩意不レ示非然然微バ

李氏大祖公遺訓禮信ヲ東西ニ失セシメテナリ戒ル

故ニ豐公大舉ス後モ遂ニ徳川氏ノ約ヲ納ムルハ是

第一以テ火修使渡韓ス後モ唯ハ皇勅書文字ヲ奉送スルハ

元ヨリ一等ヲ下ラサルヲ得ス且ツ後末臣錄ノ名義

ニ移ルノ謀アルヲ疑ハ舊規古格ヲ主張ス之ヲ受

ケルト雖トモ毫モ尋文ノ意ヲ拒ムノ口氣アルト云

是ニ訓導機密内話<sub>條三</sub>ニ相當大臣ヲ以テ交際

ノ職ニ置カセヨ是ニテ吉岡森山少林三名訓導ト

内面謁ノトキモ唯對州人ヲ以テ公幹ヲ傳ヘ<sub>時</sub>云

フテ敢テ尋文ノ旨ヲ拒ムノ意アルヲ見ズト云是四

ツ名官員ニ務スルハ若大修使ニ純テ論難  
ヲ起サハ之ヲ納ルトキハ後來ノ臣屬ヲ疑ヒ之  
禍拒アルモ四ハヘカヲサレテ其終未如何ノ加之ハ  
ミ類ラズ方今清國孱弱ニシテ援ヲ求ム心欲由ナシ  
豈三故意ト至近至接舊誼ノ國ヲ敵視スルヲ好ス  
理アリヤ而レテ今ニ我約ヲ容ル、人情態ヲ見サ  
ルハ何ソヤ方ニ大ニ疑懼スル所アリテ我厚意ヲ了  
解セサルヲ以テ大ニリテ且ニ對未自疑ハス

第八條又第五條陳スル所ハ大修使書契論ニ為メセ

然ルニ慶意ト出張官員ニ款接セザルヲ責ルニ非ルニ

意トテ真知セシメ大ニ修使力ニ官員モ一應且ハ大政

一新舊弊悉ク除キ對州公貿易亦公平ハ條理ニ及

本心所アルヲ以テ之ヲ廢シ彼力奪無厭リ又舊幕未

分時ヨリ異國權船ヲ數ニ彼海岸ヘ往來セ思ハル



朝廷ノ意ニ非ズ今ヤ政體復古海内一家後來遷海僻  
島非至心ヲ示レ已輕舉妄動ハ徒ア累政トナキヲ論  
止安レシ宗氏既ニ對州知事職ヲ免セラレタトモ

朝廷誠信ヲ篤キ猶數百年ノ文情ヲ推レテ以テ外務  
大臣ニ任レ自ラ渡韓ニテ從前中途壅塞ノ情実ヲ疎  
通シテ以テ對ニ當ニテ終ニ時節ニ當テ實情ヲ示シ

朝廷尋文ノ盛意ハ實ニ枝葉文句關鎖ノ論ヲ置テ不  
正大公明唇齒舊誼唯是此ノ如クナラサレ可テサレ  
誠信顯出ルヲ明辨レ彼カ疑懼ノ念入ラ漸ク解クル  
トキハ隨テ文情ハ真面目露出シ來ルハ必然ノ義ニ  
存候事

第九條 從前宗氏ノ使船ヲ韓地ニ遣ヒヤ日本國對馬  
州大守右近衛中將平某云々 文面ヲ以テ書契ヲ差

ト渡リ來リ所今般藩ヲ廢シ知事ヲ免セテ是冬ハ  
此事實ヲ告ケ後來交際ノ條約規則外勢者名ヲ以テ  
講シ候半テハ徒ラニ邦ヲ差シテ交際ノ名義職主ナ  
リテハ彼ト受サレハ論ナシ況ンヤ今日萬國ト正大  
ノ和親條約ヲ結ビ至近至接ノ朝鮮ノ邊境ハ往  
來ヲ為サハ後來御國威ノ張不張ニモ關係スヘキカ  
然ラハ此儘往來セサルトモハ三百年ノ舊誼我ヨ  
リ絶スル理ニ當ツテ後年如何ニ富强ノ實切ヲ奏セ  
シ時ニテモ我ヨリ手ヲ下ス所名分相立申サレハ是  
等重大ノ議論固陋賤微踰職ノ罪恐懼ノ至ナカク愚  
直ニ任セ奉陳上候  
第十條 第七條彼ニ拒絕ノ意ナキハ案知シ第八條下  
順序ヲ以テ裁答可布モ候所ハ尋支成功ヲ奏望ル所

必然ト存亡候得共若萬一別ニ拒絕ノ確論アリテ彼  
ヨリ我ヲ絶スル我今彼力納レサレテ前知ルテ  
此儘捨置キ我ヨリ絶交ノ姿ヲ見エマシト之ヲ並ニ論  
スルトキ現今曲直名分ノ明スル所ト後未寛猛實施  
ノ舉ル所ト孰レヲ力得タリト此孰レヲ力失フタリ  
トセシ蠢愚ノ實ニ辨セザル所謹ニ明諭ヲ垂ル玉  
ニコトヲ乞フ

皇朝内諭

一朝鮮ハ接壤舊交殊ニ方今既ニ官員ヲ派シテ親交ヲ  
求ルニ當ル然ルニ其國ニ事アラントス須ラク其法  
榮ヲ盡シ其國ノ危急ヲ憂フルノ意ヲ表シ其害ヲ避クル  
コトヲ勸メ以テ其意ヲ察スルニ當ル  
皇朝隣接ノ親情ヲ顯示スベシ

一米利堅ハ舊交ナシト雖モ既ニ政府ト公然友誼ヲ結  
ニ朝鮮ハ未タ政府ト交友ノ誼ヲ表セサルニ當テ公  
然タル

皇朝ノ處分ニ至リテハ米ヲ助リベキノ義アリテ鮮  
ハ援フノ理ナシ故ニ今ハ  
皇朝鮮ト友誼ヲ結ハザルニ先ッテ一旦事起ルトキハ  
我

皇朝ハ之ヲ傍觀シテ米ノ為ス所ニ委子歟テ之ヲ防  
リルコトヲ欲ハス而テ米トハ友親ノ誼欽ウコト欲ハス  
一朝鮮ハ接壤舊交加フルニ先ッテ文リヲ促ス未タ公  
義ニ存セサルモ尚私情アリ米ニ至リテハ公然タル  
友國加フルニ其間ヲ所應理アリテ其破々無所  
則我其正鵠ヲ同ス

皇朝ニ在ル西國ノ關係是ノ如シ而シテ若シ一方我  
ニ依リテ以テ其情願ヲ通スルヲ請ハ、其末々公然  
交リテ其宗即公然ノ友誼ヲ表セレノ然レテ其間ニ  
處シ其請ヲ充スルコトヲ務ムベシ若シ然ラバ謹テ  
方今宇内ノ形勢ヲ洞察シ普通ノ公理ヲ助ケ以テ其  
處置ヲ誤ルコト勿ルベシ然レトモ亦我

皇朝目今ノ形勢ヲ熟慮顧念シテ務メテ自カラ其間  
ニ投ジ好ニテ其事擔當シ以テ他ノ責ヲ已レニ招ク  
コト勿シ

一朝鮮當日ノ意米ノ望ム所ト恰モ相及セリ我モ亦米  
ト交際ヲ欲スルノ義ヲ同フス然ラハ則チ一朝攘外  
鎖國ノ議決セハ我モ亦猜疑ヲ免レズ其極遠ニ危キ  
ヲ招クニ至リ害アリテ利ナシ謹テ友國ニハ信義ヲ

守リテ他方ニ猜疑ヲ避ケ其危殆ヲ我ニ招クコト勿  
一方今ノ形勢一旦朝鮮之ヲ拒クモ永ク之ヲ守ルコト  
能ハズ必テズヤ開國セサルヲ得ズ宜シク今ニ處ス  
ルニ將來ヲ熟慮シ取テ妨碍ヲ遺スコト勿ルベシ  
以上方今米鮮ノ間我

皇朝處分ノ大綱ナリ汝輩宜シク知之ヲ領承シ敢テ其  
措置ヲ誤リ後患ヲ招クコト勿シ明治四年末三月

七月二十九日

外務卿

任外務大臣

後四位宗重正

八月四日

外務大臣宗重正朝鮮國ニ派遣ス

同十九日

大日本國外務卿源具視ニ奉書

朝鮮國禮曹副鄭某公閣下  
啟者本朝一統之北  
我朝並維夏外水  
國家中世以降兵馬之推委之將開而疆域之政亦管之  
今也我  
朝廷廢幕府而收政權  
維新若夫各國文  
降置外務省管之  
特任  
其外務  
降太正命趣  
貴國拜昭

閣下備告其故兼陳述

本邦誠意之所在

本邦與  
貴國降誼之源業既三百有餘歲又境壤之近僅一葦耳  
固宜更尋舊誼今固亦

兩國之盟愈篤愈固永遠弗渝也

閣下高明其以諫之誠信所在言繇衷出冀一  
閣下親聽納某所陳述深鑒裁尋文之誠意與之高量  
善隣良圖以致覆音不宜

季任案

曩者

朝廷欲與朝鮮尋舊文命汝幹之又差外務官員使陳述  
本邦誠意之所在而彼國不肯款待之顧者彼國或有未  
了本邦尋交之旨者既往復何論矣今也世運一變廢  
幕府止封建政權復古百度維新如各國交際總管諸外  
務者若是汝所知也從來朝鮮交際汝世職之今免汝職  
廢汝歲遣船更任汝外務大丞命汝齎所贈禮曹參判書  
而觐彼國面晤禮曹參判備告知本邦一新之狀又陳述



彼此隣誼之深層蓋之密宜尋舊文講新盟之故且詳說  
方今海外諸邦修文講武其富強非昔日之以苟有土地  
人民之責者不渴不遠慮而深謀之勢與彼我兩國素為  
痛痒相關之地乃商量永遠良圖使兩國之交愈篤愈  
固焉汝深體

朝廷尋文之盛意往矣勉之

四年八月十五日

大日本國從四位外務大臣平義達呈書朝鮮國禮曹參  
判某公閣下

我

邦自戊辰之年國制一新以來到今歲又蒙  
天子親政廢幕府置  
太政官華封建為郡縣於是世襲之官皆罷其職如義達

亦解對馬守任及左近衛少將官並與我其領時美

邦典

貴國文隆將命之職更以義達任外務大丞矣今又蒙令

外務卿傳

旨曰嚮

朝廷欲與

朝鮮國尋舊盟而命汝幹其事但至外國文隆之事則既

置

外務省管之故昨年十月特遣外務官員某等往晤東

萊峯山而使以令陳述

本邦誠意之所在而於彼國尚未領悉之今雖解汝世職

以其旧文有素任汝現官更令汝告尋

兩國舊文之事汝須克體認

朝廷之盛旨速差使以語其狀由并說彼此唇齒之間宜  
修舊交講新盟之理以達此意

國家善隣之誠意以改永遠不渝之良圖義達敬奉其  
命既從其事乃使家人某以報此事

閣下其明諒焉義達有故改名重山合併拜告肅此不  
宣

大日本國從四位外務大臣平重正呈書朝鮮國東萊金  
朝縣國東萊金山而令公閣下

我

邦政體一新之狀及重正不能自司計於利重之公  
兩國交際將命之職等情乃曾使家人某報知之諒  
而公閣下已賜垂鑒焉益

本邦與之國之深業誠三百有餘歲重正歷經為之幹旋今

朝廷免重心之職猶念數百舊文之情好特任重心外務  
太丞命告

兩國尋文之事之

本省更令原差官負吉罔強毅等拜晤之事之  
西公閣下備語其委曲又陳述尋文盛意之所在其惟  
西公閣下以

兩國良圖為重從善款接吉罔強毅等聽納其所陳述為  
勿反拂

本省懇篤之情誼為幸誠信所在言歸衷出伏冀  
西公閣下其諒之矣肅此不宜

附錄

臣伏テ見ルニ均與之小人必ス將ニ相復ツテ  
 用ヲ為シテ故ニ交際ハ天而ト通情案内ニ公理固  
 然ル一人一國ハ能ク獨リ沮隔停息スル所ニ非ルナ  
 順天ハ造化無窮ニ運且ヲ逐テ舒ニ集ヲ追テ闢ガ  
 毛ハ今古民物沿革遷流之間曆々其徴ヲ觀ルニ足  
 方今神州政紀多一新レ四方ニ臨ム是ニ於テ海西諸  
 國皆既ニ交款ヲ容ル夫豈清氏ハ如キ其地襟縁ニ會  
 三居川嘗ニ隣誼ヲ約スル例ナレト雖モ亦則テ各  
 國通信ノ國諸方屬藩ニ例ニ在リ然ルナリ獨リ朝鮮  
 孤偏ニ以テ土境ヲ接シ而シテ通信杳絶問道至ラズ  
 德川氏開政以來或ハ時ニ聘禮ヲ容ル然レト有レ雖  
 天モ其來ヲサレモノ亦既ニ五十年餘年今ヤ公洲

天皇親御ノ日ニ遇ヘル往日對藩ニ屬略其間

盛意ヲ示ス彼亦即チ宜シク答ヒ來テ款謝ヲ奉ズ

キ因襲委託舊習外僥倖レ輒亦對藩ニ因リ漫リ

文筆ヲ弄ビ夸誕偏証交道ノ理情ヲ辨セ敢テ

國ヲ抗ゼン欲ス是レ其愚惑カルニ定テ并トモ

其狀則チ諸君ニ報タリ然レテ前事專ニ對藩ニ委セ

復舉テ其得失ヲ問ハザモ可ナリ倘レ尚後更ニ公

伶ヲ以テ之ニ接スル所至所彼レ執拗ニ所猶其レ

前及如空加ニ神洲彼ヲ待ツ自古遺轍アリ亦以テ

默止ス可ラ且彼レ清氏ニ於テ素ヨリ其外藩々

郎ト雖トモ近キ至リテ獨リ其正朔ヲ奉ズ然レ

自今ニ至ル其要撫ヲ仰ルヲ聞ク其狀ニ對シ

神州ニ於テ

大化ヲ被ル跡ナレ雖も交待例ヨリ土境相通勢  
之相磨礪セサルヲ得ス但彼レ頑愚一隅ニ跼蹐  
シテ曾テ外事ヲ知ズ帆檣鑿ニ入テ晉海西  
諸國モ蓋亦之レヲ度外ニ視ルナリ然レハ則チ公義  
ヲ推講シ之ヲ條事スルニ我ヨリ始メシ清氏ト  
雖モ堂ニ其レ之レヲ問スルヲ得ンヤ公義ヲ以テ人  
ニ文辭然天下ノ通業天下ノ通業ニシテ之レヲ拒ム  
モノハ萬國ノ容ナサル所ニシテ氣運混一陰軌ヲ  
曉ラサルモ益ナリ勢力ニ因テ之ヲ動カスモ亦不可  
ナル也臣因テ思フニ一旦言ヲ外國ニ寄セ首尾相  
属セサルハ無限ノ國辱寧ロ其初メ事ヲ起サシム  
ニ若シ且夫レ今ニ至リテハ朝野古ヨリ弱キコト未  
神州古ヨリ強キコト非ズ今ハ朝野古ヨリ弱キコト未

外知也可ラズ雖然朝鮮ノ事勢ハ既ニ騎虎ニ属ス應  
接ノ間萬一彼レ公理ニ服セザルトキハ我亦則チ斷  
然ノ決無ク凡可ラズ故ニ兵賦船艦軍資器械預  
メ緩急ニ備ヘサレバ則チ不可ナリ廟議此ニ出シ其  
初固ヨリ一定ノ略有レシ又何ラ臣力言ヲ待シ然  
レトモ渡海ノ事臣曾テ其重囑ニ具シ伏テ願フハ之  
レ三指教ヲ垂レヨ臣誠感誠荷謹白

九月 花房外務大臣ハ一行ノ出立ニ先立テ入

春日艦ハ十日有地九ノ十二日龍江ニ至兵隊搭載對州

ニ着ス

一行官員十五日黎明對州縣曉同日午後四時春前

坊而艦ヲ着韓ハ

潭民十三名嚴禁ヨリ曳載渡ル一代官ヨリ彼國任官



工渡

右項

稟告來府使道前而後同告公金山金公是布

此一行徑

一春來貴國應接我輩之情狀具陳於外務官員而官員曰  
曩日我外務者奉

朝旨令余輩納尋文盛意於彼國彼國不款接余輩顧彼國  
有未了意我意之所存者故反復鄭重傳致我意有年于

茲彼國輕侮終始以曖昧模糊之語對我毫不應來意今

亦以所聞察之則北辭於左右以拒我尋文之誠意也夫

文降條約曲直名分世界自有公議正論今不更贅余輩

當回報彼國之情態於本者仰處分耳館司其以此告彼

國下國

一昨前某等直入貴府者專使趙漢以來頻傳譯傳致公

韓緊重之情由之閱月不得捧出書契奉使之任館司之

職不堪問迫惶悚之情。至五月念五日訓導始就館曰書契捧出之事將收議於國中而後致決者因問其期則曰不可期。幾年月。嗚呼是何言歟。夫收議於國中當以府使內啓連京師之日直行之。托決議之者於訓導以答我然曠日踰月至今日曰將收議於國中決議之遲速不可期。幾年月也。且貴國之大小人民之多寡大抵可知。貴朝神速下令收議於國中數月可決。安有遲速不可知之理乎。因恐春來任譯之稟告我情實於使道前或有未盡其委面者若文不然則兩國間隣誼友情之所在豈有如此滯使命於境上之理乎。因欲入貴府親接使道陳述本意之委曲以納決議確答之大限。乃告其意於訓導且求其同伴開路訓導曰貴使入府之事非僕所是非然使節之入府非無前例若文同伴護行即任譯職令中之事不敢

辭其命於是乎。大府之議決而其連中每遭村民之抑迫  
公然陳述大府之情由遂得開路聽入貴府者貴國官吏  
之所共承詔也。豈圖軍官所傳差備官所錄書中曰攔出  
館門犯越禁界云云。嗟乎是何誣我之甚乎。  
一書中又曰交際條約堅如金石貴國所幹如條約則從  
之若或違畫約條則斷不聽許此言邊聞之則似有理細  
察之則不通之甚也。何則交際條約盡起於兩國考察時  
勢商酌事體以制其宜苟守之利兩國則當堅守無違若  
至時勢變事體變守舊有障礙之時則不得不相共商議  
以變通更革我邦之交貴國以武將望利氏為始其次豐  
臣氏其次德川氏其間交際約條之變通改革者不遑枚  
舉是自然之理勢不待智者而知也。今本邦時勢大變庶  
政一新宗氏解州守之任止將命之職更任外務大臣則

文隆之體、亦不可不靈通、然而頑然拒之、曰、一守舊約、則  
 斷不聽許、魚類膠柱鼓瑟之喻、卒以貴國之多士、終不通  
 之論、如此、甚堪怪悞、想托辭、以矜擯、我絕文、歟、不  
 一書中又曰、有施措於國中之事、而其所施措、或不便於公  
 議者、云云、我邦亦未嘗不有不便於公議者、  
 天子親政、百度維新、是三千餘年、中國未有之盛事、其公明  
 正大、世東萬國之瞻、所欣然拜賀也、今如書中所言、則貴  
 國者、以為尋常施措之事、無甚也、而所以不聽許者、則  
 一書中又曰、不可容易、議到之事、肆然欲行、於隣國、隣國寧  
 有肯受之理、卒章夫、我邦與貴國、唇齒相保、言百餘年、貴  
 國之幸福、即我邦之幸福、我邦之盛美、即貴國之盛美、是  
 豈可以不以事之實、告事者實、乎、顧貴國得、我邦政體維新

之報宜有慶賀之意。今書中却加以肆然云云之語。是可謂隣誼歟。何不可言隣誼乎。

一書中又曰。沿革事務則不論早晚。只當恭候處分。今問其早晚期。幾年月。則曰。大事十年。若其緊急則六七年。是亦何等無條理之言。史隣國有報告之事。宜速達其書。以酬於來意。若其回答之有趣。在貴國之所決耳。我豈為強之乎。唯天地間自有公論而已。今貴國以曖昧無條理之言。從遷延歲月。春來未見有一言一勾。答及於我。總々傳致之情實者。豈可謂善隣之情誼乎。

一書中又曰。處分回下之前。凡係交際事務。遵守舊約。無一毫盡然。後可有公議決未之目。夫宗氏既解。列守之任。現任外務大臣。及止將命之職。外務省管外國交際云云之事情。春來總々陳述。今不更贅。便道不掃。大臣之書契。不

接大丞之差使却言九百之事遵守舊約假令今欲遵守舊約以既解之州守與不管之州人欺罔貴國則貴國其受其欺罔以為隣誼然乎貴國動輒曰誠信曰金石夫口稱誠信而行勸欺罔貴國以之果為遵守舊約乎

一書中又曰無傷隣好可也是兩國蒼生之福也我輩區區盡力專為之耳夫欲親隣好又遠不渝須言行一致然若使超海以來貴國之過我無大反此語矣差使雖魯無安然待早晚不可期之回答之理故直去此上至東京報超海以來貴國過我之情狀於大丞如異日來取確答仰大丞之處分而已因托某告別請亮之

一某以不肖任館司之職職園交際是以春來頗竭微力於此因深觀貴國過差使之情狀有大反善隣之道者為兩國不堪憂慮乃同差使直至貴府欲見使道以成兩國之

觀好然峻拒不接唯使軍官傳旨所傳旨趣盡遣交隣之  
誼如右所論是以欲去此土報告春來事情於大丞並人  
民尚有滯於此土者不得管理故暫止行李急取進退  
於大丞嗚呼事之至此可勝痛嘆幸不宜

壬申六月口

館司

尋文商量滯之緣由概略

朝鮮文通從來之狀景及ヒ一新報知以來之手續ヲ以  
其事之滯滯スル緣由ヲ考ルニ左之三件アリテ之ヲ  
十之ヤ

第一 往來聘問ヲ等閑ニサシ來レル因循之慣習  
第二 我ニ無限ノ欲望アリ且西洋人ト結ヘルナ  
一ト云フ朝鮮人之疑懼

第三 往々輕リ來ニ重キ歲遣之贈酬ニ害アラシ

コトヲ恐ル、封州吏人ノ俗情

右三件ノ如何ノ事之滯滞ヲ引起スヤヲ判スルニ  
ハ先ツ左之件ヲ有無ヲ考ヘサレバカラス

第一 朝鮮政府ハ我ヲ拒絕逐作スルノ決心ナリ  
ヤ否

第二 朝鮮人ハ日本人ノ往來交通スルヲ忌ムヤ  
否

第三 朝鮮人ハ日本人ヲ輕侮スルヤ否

戊辰以來數回之應答彼之常ニ云フ所違格之事  
ハ不可受又金石之條約不可換ト而シテ毎モ隣  
國ヲ侮ルコトナキヲ可トスルノ意ニテ毫モ拒

絶之語意ナシ其他百般應答中其踴疑ヲ可キニ  
似タルモノ甲ヲ作ケテ乙ヲ接シ丙ヲ陳テ丁ニ親



ム等之策ニシテ決シテ一涯拒絶逐斥之意アル事  
ナシ

朝鮮人日用器具衣裳等之内我送ル所以銅ト金ト

如キハ最不可缺之物ナリ且我交通ハアルタ

祿ヲ保テ作業ヲ得ルモノ數千人皆兩國交通

ノ盛ナランコトヲ欲スルモノ也未タ三人モ兩國

和平之交通ヲ忌ムモノアルヲ聞カス

古來朝鮮人ハ深リ我國人ヲ畏懼セリ近來對州人

之所業彼カ輕侮ヲ招ク事ナキニ非ラス依テ對州

人ハ馴レ速ケ他之思本人ハ隔テ遠クル様ニナリマ

事ニテ去夏差使入府之節府使面會セサリシモ全

ク館中童派アルヲ知リテ乙ヲ納メテ甲ヲ斥テシ

トセシニテ則其輕侮スル所ヲ細シ畏懼之態所ヲ

遠サケントセ也然レハ輕侮スル其對列ニ  
テ固本ト云ヘハ其畏懼スル所ナルヲ今モ替サ  
ル也

之ニ依テ見レハ既ニ拒絕逐斥之決心ナリ又交通ヲ  
忌ムル意ナリ素ヨリ輕侮之念アル非ラ亦唯六十  
年來輿問等閑ナル來ル貿易キニ馴レテ又過  
ハ此ノ煩ニキヲ厭フト我々無限ノ欲望アリ且西洋  
人ト結ヘルナラニ事ヲ疑フヨリ往來之端ヲ開ク  
ハ必ラ餘凌辱ヲ受ルニ至ラニ事ヲコトナシナ  
其畏懼スル所ニモ此ノ遠サケ往來之端ヲ開カサハ  
梯ニ上リ舊來之歲遣貿易ヲ銷<sup>銷</sup>ニ止暗ニ對列人ヲ侮  
後セシニ對列人ハ此歲遣之利ヲ失センコトヲ患  
ルノ倍情熱ヲ終ニ彼ノ術中ニ玩弄セテ上ニ遲延今

ニ至ルナリ然レトモ今既ニ此一大弊ヲ破レリ其他  
之所併之如キハ破ルニ於テ甚々難カラサル所ナレ  
ル

二年

朝鮮國之儀。我降也。新在。テ數百年来通信。往來也。  
ル故。以テ明治。成。底。ノ。歲宗對馬守。ニ命。出。大。差。使。ラ  
派。遣。シ。舊。好。ヲ。修。ム。ヘ。キ。方。ヲ。通。シ。候。處。書。辭。印。章。弄。舊  
、前。ニ。違。ハ。出。東。亞。船。中。テ。之。ヲ。接。受。セ。ル。ニ。付。談。別。數。次  
ノ。末。庚。午。二。月。三。日。至。リ。東。萊。府。使。ヨリ。單。簡。ヲ。以。テ。前。書  
中。文。字。失。體。ノ。儀。ヲ。論。難。シ。及。テ。候。其。後。吉。岡。弘。毅。森。山  
茂。等。ニ。命。シ。外。務。卿。ヨリ。禮。曹。恭。列。ハ。外。務。大。臣。ヨリ。東  
萊。釜。山。而。使。ハ。贈。ル。所。書。ヲ。齎。ラ。シ。メ。彼。地。ハ。赴。キ。而。使  
ハ。面。晤。之。儀。懇。請。ニ。及。テ。候。得。共。更。ニ。之。ヲ。肯。ン。セ。ズ。僅  
ニ。訓。導。ニ。内。謁。ス。ル。旨。ニ。迄。テ。訓。導。モ。只。ニ。新。創。不。可。開。以  
後。百。事。對。外。ヲ。以。テ。應。接。セ。ム。ル。ヲ。非。シ。ハ。決。シ。テ。引  
受。致。同。敷。者。ヲ。主。張。シ。候。ニ。付。同。三。月。宗。氏。ヨリ。別。書。契

ヲ以テ猶又兩使一面晤、儀相但復數月、後至  
以テ外務官負<sup>此</sup>是<sup>此</sup>來<sup>此</sup>ハ無前ノ事況ニ面接  
ノ理ハ無之者ヲ答ヘ終ニ其儀モ不相調兩人ハ空  
ニ書ヲ携<sup>此</sup>歸<sup>此</sup>候同年七月廢藩ノ令出ルニ及テ前  
廢藩知事宗<sup>此</sup>鍾<sup>此</sup>正<sup>此</sup>更ニ外務大臣<sup>此</sup>西國文際  
ノ事ヲ幹ス其年橘被命候ニ有同人伯<sup>此</sup>禮曹<sup>此</sup>希判東  
萊<sup>此</sup>釜<sup>此</sup>山<sup>此</sup>西使<sup>此</sup>考<sup>此</sup>入<sup>此</sup>突<sup>此</sup>行<sup>此</sup>國制一新之景況<sup>此</sup>廢藩置縣  
ノ變革並ニ外國變際之事<sup>此</sup>一切外務省ニ於テ之ヲ  
管スルノ由且派遣セ<sup>此</sup>ル我使臣ニ面晤款待ヲ請フ  
意等懇々<sup>此</sup>陳述セ<sup>此</sup>ル所ノ書札ヲ携ヘ新差使彼地  
ヘ到達<sup>此</sup>ル日訓導ニ應接周旋<sup>此</sup>儀ヲ懇求<sup>此</sup>スル  
殆<sup>此</sup>兩國ニ本<sup>此</sup>田<sup>此</sup>海<sup>此</sup>方<sup>此</sup>七候<sup>此</sup>得<sup>此</sup>小<sup>此</sup>モ<sup>此</sup>病<sup>此</sup>故<sup>此</sup>ニ<sup>此</sup>托<sup>此</sup>以<sup>此</sup>相<sup>此</sup>斷<sup>此</sup>リ<sup>此</sup>遂  
ニ其儘上京ニ及ニ候其後別差官下リ来リ候ニ付前

件兩書ノ寫ヲ寄付シ連ニ回答スルヲ求メ候數  
 十日相過候後訓導下來申出候公幹事國中  
 衆議ヲ盡シ候上ナラズ決答ニ難及尤其期限  
 早晚豫メ定メテ付答ハ候ニ付不得止  
 直ニ訓導ニ係リ差使館司一同東萊ヘナリ親御府使  
 一面謁リ儀ヲ請求候得共一向聽入不軍官ラレテ前  
 同様國議ヲ盡シ候後決答ニ可及候條惟ニ恭テ早晚  
 間ノ要分ヲ可相諒旨申出候ニ付猶其期ヲ相尋子候  
 要先ツ六七等及至十年ト可相心得杯不取留曖昧之  
 答ニ及ビ候其他我漂流人ヲ和館ノ前岸ニ投棄シ或  
 和館司之東萊ニ入リ候事ハ有間敷所業ナリトテ常  
 例之供饌ヲ廢シ或ハ西使ノ嚴命ニ付館中礼式ニ関  
 スル屋宇ヲ急ニ解撤セシムル等之類彼是不修理ノ

所為若不少候殊、又近日草梁館門將小通事等傳令  
也ル揭示書中被雅受<sub>レ</sub>制<sub>ラ</sub>於人不耻其變形易俗此則不  
可謂日本之人不可許其來往我境所騎船隻若非日本  
舊梯則亦不可許入我境亦近見彼人所為可謂無法之  
國亦須<sub>レ</sub>以此意洞諭於彼中頭領之人使不至<sub>レ</sub>妄錯生事  
以有後悔云云等ノ言ニ至リテハ言語ニ絶シ實ニ可  
憎之甚キヲニ候彼既ニ我ヲ目シ無法ノ國トナ  
又ハ我ヲシテ妄錯生事後悔<sub>ラ</sub>ルニ至ラザラシムコ  
トト揭示候梯ノ概先ニ有之候テハ自然不慮ノ暴拳  
ニ及<sub>レ</sub>我人民如何梯ノ凌虐ヲ受<sub>レ</sub>候哉モ難測勢ニ  
有之候抑御一新ヨリ以來彼ノ國<sub>ニ</sub>對セ<sub>ラ</sub>レ候テハ前  
條始末之如ク飽<sub>マ</sub>テ舊好<sub>ル</sub>誼ヲ修メ善隣之道ヲ享  
スル<sub>ニ</sub>從我人民便益ヲ被<sub>レ</sub>為謀度思召ヨリ<sub>テ</sub>強<sub>ク</sub>

彼力不遜ヲ恕レ彼力非理ヲ宥ル只管聖意ノ誠ヲ被  
考盡候得共更ニ一照感通ノ色無之ニ出ナラズ却テ  
漸次ニ驕心ニ長シ遂ニ今日之如キ侮慢輕蔑之至ニ  
列國云々第一朝威ニ関シ國辱ニ係リ最早此儘難間  
断然出師之御處分無之ニハ不相成事ニ候乍去兵事  
ハ重大之儀輕易ニ之ヲ聞カセハナラズ毎之候得共先  
ニ今般不不致我人民保護ヲ為シ陸軍弟于軍艦數隻  
彼地ニ被差置一且有事ハ九州鎮臺ハ神速應援ニ可  
及方ヲ達シ猶此上便宜ヲ派遣シ公理公道ヲ以テ此  
度可及評判探被遊度思召ニ候條爲ハ此方ヲ體シ一  
同協議可致被仰出候事

岩倉方大臣奏議 十月廿三日



臣具視謹

天皇陛下ニ白ス抑各國締交ノ始ニ幕政衰弛ノ時ニ  
際シ條約對等ノ例ヲ得ヌ國權ヲ奪ハレ國威ヲ失ス  
ルヲ以テ人心乖戾ニ國政整頓ス或ハ全蹶ニ赴カシ  
ムヲ恐ル是ヨリ海内ニ教同心協力國權ヲ復シ國  
基ヲ固メ保安ノ道ヲ盡カシ此先帝遺方ニ  
レテ

陛下モ亦神明ニ誓ヒ期ニ至リ所ハ聖旨ニ據リ故ニ大  
政維新ノ初ヨリ忠藩義國ノ士及草莽ノ輩ニ至ルモ  
國事ニ弛不<sub>レ</sub>振作其數幾<sub>ニ</sub>至<sub>ル</sub>知<sub>レ</sub>テ不<sub>レ</sub>竟<sub>ニ</sub>今  
則<sub>ニ</sub>鴻業ヲ致<sub>ス</sub>ヲ得タリ夫レ身命ヲ抛<sub>テ</sub>國事ニ殉  
ズル者ハ皆聖旨ヲ奉體ス心誠意ニ出<sub>テ</sub>サレタリ  
而<sub>レ</sub>天子戈既ニ戢リ名分既ニ正<sub>ニ</sub>皆條理補明ニ各

藩封土人民ヲ奉還シ全國招テ一致ノ治体ニ歸シ尋  
テ廢藩置縣ニ至リ大綱是レ立大權是レ舉リ郡縣ノ  
治全ク成ル於是乎國權ヲ復シ萬國并立ノ基礎ヲ立  
レトスルノ聖旨ニ應事セサルヘカラス<sup>乃</sup>及于幸未ノ  
冬臣一陛下ノ目的期望スル旨趣ヲ以テ特命ヲ奉シ  
歐米各國ニ使シ各國帝王及ヒ政府ノ考察ヲ諮詢シ  
臣カ目擊觀察スル所トヲ參酌シ條約改正等ノ議ニ  
及ハントス抑此舉タルヤ國權ノ復スルト傍セサル  
ト聖旨ノ達スルト達セサルトニ關係シ至重至難  
ナルハ固ヨリ言ヲ俟タス然ルニ臣其實地ニ就キ其  
形勢ヲ察スルニ其改正ヲ議スルノ難キ更ニ意種ノ  
外ニ出テ功ヲ一朝タニ奏スヘキニ非ス實効實力ヲ  
著スニ至ラスニハ竟ニ國權ヲ復スル亦難シ國權ヲ

復<sub>レ</sub>ス<sub>レ</sub>ハ聖旨ニ報<sub>ス</sub>ル能<sub>ハ</sub>ス此<sub>レ</sub>實ニ臣力焦心

苦慮眠食ヲ中セサル所ナリ更<sub>レ</sub>實効實力ヲ著<sub>ス</sub>勉

テ政理ヲ整ヘ民力ヲ<sub>レ</sub>テ厚キニ至<sub>レ</sub>ル<sub>ニ</sub>フル<sub>ノ</sub>

ミ而<sub>レ</sub>テ其之<sub>レ</sub>ヲ為<sub>ス</sub>亦容易ノ事ニ非<sub>ス</sub>故ニ臣歸

朝復命ノ始メ伏<sub>シ</sub>テ望ム陛下能ク聖慮ヲ此ニ留

メ成功ヲ永遠ニ期<sub>シ</sub>驟進速成ヲ求<sub>ル</sub>ナク大ニ之カ

目的ヲ定メ不動不撓政治是<sub>レ</sub>理シ民力是<sub>レ</sub>厚カ<sub>レ</sub>レ

メ以<sub>テ</sub>其實効ヲ立<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>其實力ヲ用<sub>ヒ</sub>以<sub>テ</sub>國權ヲ復

セン<sub>ノ</sub>ヲ然ルニ今臣奉使ノ使命未<sub>タ</sub>其委曲ヲ盡<sub>ス</sub>

ニ暇<sub>ア</sub>テス<sub>ニ</sub>内閣遣朝鮮使<sub>テ</sub>議<sub>アル</sub>ニ會<sub>ヌ</sub>臣寓

所ニ之ヲ考<sub>フル</sub>ニ維新以來<sub>ニ</sub>統<sub>シ</sub>四五<sub>ニ</sub>年<sub>ノ</sub>ニ國基堅

トスルニ非<sub>ル</sub>ナリ政理整<sub>メ</sub>テ<sub>ハ</sub>非<sub>ル</sub>ナリ治具備<sub>ハ</sub>ル

ニ似<sub>タ</sub>リ同<sub>ニ</sub>雖<sub>モ</sub>警<sub>ニ</sub>慮<sub>ヲ</sub>難<sub>ニ</sub>測<sub>ル</sub>今<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>方<sub>リ</sub>テ未<sub>タ</sub>輕<sub>ニ</sub>

ク外事ヲ圖ル可テサルナリ雖然朝鮮國我ト隣好ヲ  
修スル茲ニ數百年彼シ非禮ヲ我ニ加フルハ我安リ  
受テ而止ムヘク且遣使ノ議已ニ略ホ定ル臣亦之  
ヲ然リトス然レトモ之ヲ發遣スルニ至ルテハ之カ  
緩急順序ヲ審ニセスンハアル可ラニ何ヨトナレハ  
彼レ昧頑固結若シ禮ヲ我ヨノ朝使ニ加ヘスニ  
我乃チ之ニ應スルノ要置ナカル可ラス我ヨ之ニ應スル  
ノ處置ナクニ是レ我カ國權ヲ損スルナリ而シテ  
彼レ已ニ其端緒ヲ顯ス故ニ使ヲ發スルノ思ハ戰ヲ  
決スルノ目ナリ是即軍國ノ大事宜ク熟ク慮リ深ク  
謀ラズンハアルヘカテ不且今萬國從衡ノ勢ヲ察ス  
ルニ東ニ形ニテ而其情西ニ在ル者アリ或ハ其端  
ヲ示サスレテ而遠國ヲ動ス者アリ故ニ表面ヲ以

テ其真情ヲ測ルニ不<sup>ラ</sup>足<sup>ス</sup>今也樺太ノ事類リニ起ル是  
乃目前ノ急亦甚注意セズンハアル可<sup>ラ</sup>ス凡ソ是等  
ノ事先其情ヲ審ニシ而シテ朝鮮連興ノ意ヲ絶<sup>シ</sup>テ  
以萬全ヲ保<sup>ツ</sup>ヲナシテ而之カ目的ヲ達メ之カ方略  
廟算<sup>シ</sup>明ニシ其他航艦ノ設兵食ノ具錢貨ヲ備<sup>ヘ</sup>内  
政百般ノ調理等ニ至ル迄豫メ其順序目的ヲ定メ而  
ル后朝使ヲ差遣<sup>ス</sup>來<sup>ル</sup>晚<sup>シ</sup>トセサルナリ若シ之カ  
備ヲナサズ今頃ニ一使節ヲ差<sup>シ</sup>若シ萬一ノ事<sup>アリ</sup>  
テ後事不<sup>レ</sup>堪<sup>ヘ</sup>而<sup>シ</sup>又更ニ他ノ患害ニカ<sup>ル</sup>アラハ雖  
悔不可追<sup>ナリ</sup>故ニ之カ備ヲナサズ今頃ニ一使節ヲ差  
スルハ臣其不可ヲ信<sup>ス</sup>而<sup>シ</sup>万<sup>ク</sup>不得已ノ義アルモ戰<sup>ハ</sup>  
從事スルカ如キ重<sup>ク</sup>テハ基ヲ堅<sup>シ</sup>備ヲナスニ非<sup>リ</sup>  
シハ臣實ニ其不可ヲ知<sup>ル</sup>其議<sup>ハ</sup>顯<sup>ニ</sup>奏<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>陳<sup>上</sup>

養之伏之其跡固陛下事之本末勢之緩急之深淺聖  
斷之是非事之臣具視不勝感激屏營以至昧死上言敢  
惶頓首  
詔書 十月二十四日

朕繼統之初ヨリ

先帝ノ遺旨ヲ體シ誓テ保國安民ノ責ヲ盡サント  
賴ニ衆庶同心協力漸ク全國一致ノ治體ニ至ル於是  
國政ヲ整一民力ヲ養ヒ勉テ成功ヲ永遠ニ期スヘシ  
今汝其視カ奏狀朕之ヲ嘉納ス汝宜レ朕力意ヲ奉  
承

右頃日未各參議辭表或ハ所苦等ニ因リ即日岩倉  
右大臣ノ口演ヲ以テ大少内吏各參議ノ私郎ニ至  
ル

辭又

西鄉隆盛

不許

大久保利通

辭又

副島種臣

辭又

後藤象二郎

辭又

板垣退助

不許

文相重信

辭

江藤新平

不許

過日奉朝野事件、各議語之、  
昇其見、視意見云、者同言、

木戸孝允

三條實義、木戸孝允、  
書翰

然者別紙之通參議四名、辭表被差出右、  
過日以來御

評議之末、不得已、出候事、  
存候殊、西鄉參議一昨

日、辭表昨日、  
初聞召候右別紙、  
一覽候、  
乾而者、  
從是

奏同

宸斷ヲ乞候儀ニハ候得共願之通被聞召可然ト存候  
何分重職之儀容易ニ進退イタシ候儀ニモ無之候ニ  
付一應御内談及候條御賢案モ俊ハ、御可給候

大藏省

參議兼卿

大隈重信

外務省

同

寺島宗則

海軍省

同

勝安芳

司法省

同

大木喬任

工部省

同

伊藤博文

右之通即時御登庸可然ト相考候是以各重事御賢考  
儀沙度且大久保大隈ハ今朝相諮候處異存也之趣  
ニ候可相取ハ速ニ御所置之方可然存候間此者ハ御  
即答可被下自錄ハ尚一兩日中御面訴万事可申承存



候

追石新徑御角召毛有之儀言自吳王連三御答所  
被下假以上

七年

同。三月。廣津弘信持歸。

東萊府使金山僉使等其屬官。而達。諸人所之。示金和館。官門。貼揭。セ。モ。也。

傳令守設門將

邊上設館。專為兩國永好之意。而其所應行之事。不有條約。先定。難保其無累。故原有金石不易之文。諸凡交聘通商。必由和館。而往來留接。止於馬抄之人。設有暫時依附而來者。苟非日本人。則不可而近。聞來接館中。其形白衣服。多非日本人。彼之愛形易俗。非我所嘗。而夫以千百年自大之國。一朝受制於人。以至於此。而為天下所笑。恬不知恥。出而示我人。亦足可慨。而況我堂堂禮義之邦。彼乃奚為而至。示我於彼人。本欲信義相文。一遵成約。則其

於原約之外。猝有洋船洋服之至者。不可謂日本人也。雖  
 晷刻相逐。彼固無辭。而及罵。不已。自作當屈之事。氣  
 何從出。而欲伸其志。於守正之國。不亦愚且妄乎。彼既無  
 然生事。今至使价絕。而饋享不行。則其曰幕榮堅櫓等事。  
 亦當同歸一例。可以不禁而自止也。日昨彼人之對詰通  
 事。又何跳踉之甚也。彼於三百年講好之餘。忽以斷然不  
 行之事。出而相持。亦甚無謂。而前後數人。擔當此事。迭  
 相來問。亦足一笑。彼謂如是。不已。足以逞志。則將無某日  
 矣。雖以文易一事言之。館市出入之外。潛自和賣。無論彼  
 我。人在法當死。近年以來。其弊滋甚。故我則隨其所現。或  
 誅或殺。不少饒貸。而彼人之不治同罪。諸人可見其國之  
 無法。然而斷自今日當添加識捕一例。刑殺汝等。門將通  
 事輩亦不得保其首領。一審令訪之後。第觀下回向事。

名称	岩倉具視文書 西川本
標題	新南抄歌, 万国伝信取扱約書. x9地

分類 番号	
	348

6-2

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

朝鮮部

三年

朝鮮

外務

七十八枚

エリートルニトヘートルスブルク新市中

吉原海に在る魯國に事

魯國師居て在平海内國を領し政事

を大に開化をせしむるなり其内樞を爲す

に取切要なる場ありあり其を東陽と爲す魯國

領、分隊屯可なり。魯<sup>①</sup>と既り其全黨を  
有る。其南方平南之區、日中、順成なり。魯  
國、河府より下河、條河、白河、極た、境界外、小  
其地を擴張せしむる言、得る所、魯<sup>②</sup>を日  
本、河府より照へしむる言、其黨を、其地を  
得る、石炭山、河、それを魯國、河府より、罪人  
を、其工を、其工と企るを、但し  
日、本、人、入、河、を、防、く、多、免、之、充、分、に、兵、卒、を、以、て

見張やや新く石炭とてんやー魯王政  
府と魯人乃び日本人同様に其をなせり  
より争ひ何人をも懸念する様は見ゆ或人  
は嫡初ならずして日本人と地を近き人とな  
るより明瞭あるを世のあらざるを以て之  
能くするや或人急を除く外歐羅巴  
海に意をあつする如く此を隔しある急を  
急を避くやとて驚愕す



おもしろく活動の事務ふふ明々々々品々  
嫉妬のみより起るる金一放り音平  
政府を混新を隔く面々古今今昔を有  
一兵力を以て多きよし正理を修飾し  
ゆる大の平々系とあり古語を在りて  
るるしふ来定せり今も何れも今昔と正  
しき通信をより且辨を好むる者多  
き也おもしろく増加するふふるる

大正八年七月廿一日八月三日持以

入ル中抄存

明夷系釋告之事

日清の事府迄の報告を合せて之を

日清政府に英、國、公使に於ては御策を

果て此の事と米國公使に於ては托

華盛頓政府に通告する事と云ふ

日清の事府迄の報告を合せて之を

と爲し、談判を中止せしむるを日本政府より  
請求せしむるに、趣を聞及り、此條約を  
我々も遂に縁故を尋ねり、先年ハルリス氏  
と反故に、條約中、日本政府と他國と  
間、葛藤を生ぜしむる所、日本國政  
府を日本政府、爲友誼、無計とある  
所、爲掲載、何れも是を趣旨とし、あると  
爲し、葛藤を取締むる爲、日本政府

英使送て——トルスホルグに使節を送りたれ  
其甲に受あう——英王英王公使  
其地に形情を探り察せんと英王公使  
船を送るに其船破損——終り  
其事——を果せり——英王日本政府  
に覆書り——因にせ——御筆を英王公使  
に送り佛王公使に扶助のよろこぶを奉る  
政府に送るに、その力を——とて思ふに

夕霧集

きりや、貴国政府より此等若し再び日本  
のみに不願を多しは、金貨を預けし外金  
人を其端より擯之しと先之を河金  
を必らず以爲を関する外金人に居る地を  
當面より右のきり件を未だし、凡そ通商  
の全く及しなれを日本政府より一件に  
西洋に金貨のきり自由を偏し、外金と  
新法施さる時と、未だ貴国政府より此

此より関一卿と杜助と通じて懇意を交  
ふ通じり人共一子と云ふ通じり識論と云ふ  
寸厚の「其頭論と撰した」と云ふ者  
云々には外に出る事無し口々政府と真  
う其強名と果さんと明じし其論を云ふ  
人等多く同く通じてる市名と出す通じ  
れども此は何等なる例も有りて是れ  
も亦さうして有りて是れ多分の人

其地乃古海國之故  
其地乃古海國之故  
其地乃古海國之故

九  
幕

幕  
九  
幕

幕  
九  
幕

幕  
九  
幕

反譯

千八百六十五年正月十七日世里斯之推

初書中三葉目第十一條

傳信線之事

音信を速く通はるゝに充分費用大に線を

造營し各國通信に差支を省く事

十  
分  
事



戦後、右線と傳信と學術とが極近  
年發明し、古趣と隨ひ取建へ、中絶  
又と引續き通信<sup>社</sup>進める場を、  
一、成<sup>其</sup>業徑立より、  
二、且右線と心く為る通信と、  
三、場を、  
通信と、  
中絶

分二系

場



一

日國といふる各州境之地方に於ては制限を  
都府に制限し見合を以て爲す

四葉目 一般規則

第四條

日國と他國とを以てし萬國傳信を  
爲すに於ては各國と互に（等しく）

第五條

秘ひににたる傳信でんしんに漏はれしる今いまも違ちがふへく  
机き案あん用もちひひ白はく紙しをを用もちひひてて其そののの故ゆゑにに各かく國こくにに

才さい六りく条じょう

萬國通信ばんこくつうしんに附つききてて其そののの事ことをを平へい常じょうにに  
傳でんふふ事ことにに各かく國こくにに傳でんふふ

九葉目

才さい二十にじゅう条じょう

國こくのの安やす危あやうにに係かりり又また國こくのの法はふ則そくをを及およびび

普通に風俗、逆に以て好まざる處、終  
秋に通信と各國にて通達せざるに理ある  
べし然るも其獨立場より其傳信の  
來りし獨立場迄達り其事故報ぜ  
るの各國に役なりとて一境自獨立  
場より其獨立場にて其事故を其報方  
より其獨立場中より理あるに  
右頭取り出たる裁断を以て其獨立

附則の如き

第二十一条

費用の時、當り萬國傳信總局に在り  
又當り三條を爲す或は音信の如き  
萬國傳信の當りし旨を爲す  
理を各政府より當り其都府  
連の約定の各々を報知する  
又當り

十三系

第三十二系

普通傳信料を爲基とする規則を  
各國に設く

如きは必要とする國々を屬する郵便物の  
往來の便に傳信を定債銀を建置  
て、其定債銀を以て郵票を發行  
し、其國々を以て別定債銀を





二十諸し傳信として只債銀を拂ふ  
銀

水三十三条

萬國通信債銀を付し銀を以て元と

算計せしむる約定を以て結ぶる國とある

通信債銀を以て二十諸し通信債銀を

以て算計せしむる約定を以て結ぶる國とある

とある

十四卷目

所為不一

請示一貨銀之便也遠境より國政  
 府に中途より國政府の熟慮を以て  
 國外に移す必要なり極む處に於て  
 幣法は外國と商ふ為め整へる通債の便  
 銀貨此等書函表紙以及極む處に  
 右表中より極む處債銀を何時も各國政

府ノ間熟識ノ旨ニ隨ヒ減少スルヲ得ル  
數モ右債銀減少方ニ既リ此設ル傳信  
線債銀ノ差響ノ如ク根拠ナシ  
存シ見込トシ金ノ債銀ヲ或通信線  
多分ノ半端人爲通信ノ便利ナルヲ  
爲ス

獨ニ債銀減少方ニ反答一般ニ又  
一部分ノ事布告ノ後一月經

或れも之を以て行ふ一も

十九葉目 無債通信

才五十二

約定を以て行ふ一も

約定を以て行ふ一も

才五十一 債銀拂戻

債銀向ふ一も

着目又格外一も

十葉目

易過うつてまゝ為意なくして、  
通信を請けし後、國境に接する處に  
し金や、人々押戻し、名を代へて  
通信中し、何等部分も債銀を収めざる  
し理をあらわすなり

海底線中絶せし時、通信を音信を遠  
りしとの拂上り、債銀の収めざるを  
認め、右音信を収め、遠せし時を以

難易を差引下 右に極むるは徳  
随ふ支配に縁つゝは行ひ難し

# 二十葉目

中廿四条

各岡五ふ立たる賃銀法取高と通違

法

為効定書とテテ銀を以てえと用

中

書通債銀より音信達一方を爲す國  
後之請を乞ふ

各國共最初傳信出たる國に立たる後  
債銀より隣國より引買ひ合ふを而  
て爲國境界より宛名し所なり近き  
勘定を爲す海に於る如き事なり

了すに古海傳信機を以て通する國を爲國  
と爲す所は國界近遠より債銀を以

由より國々隣國に借となる

傳信の條に國々より借銀の定る遠

陽の國々より中間より遠國に於ては

越ゆるより國々より遠國に於ては

越ゆるより國々より遠國に於ては

越ゆるより國々より遠國に於ては

越ゆるより國々より遠國に於ては

越ゆるより國々より遠國に於ては



定と双方符合と一勘定を随ひに極む一

入 抄 十三葉

力 六十二條

此物書上向の時限毎に改正する一其の如き

とや一國より若代人を召出する一此等の事

事多し其の國々々都府各々にあやぐ其若代人の

間を以て其の裁判と一此の如く裁判を午二日七

十日のうちに其の事とある一

# 二十四条

此中五条、他國に於て

此の書に於て、國々及び其國々の相互に

此の書に加入するものたるは、右加入の款收を

國勢を以て扱ふもの、自國の利益に於て

都府に於て、此の國々、各代人に申込む

此の國々、其の國々、報知するものたるは

上と從ての規則、調停、此の書中に掲載

一切の益を以てこれに多くて是れ國  
の強國なるは定貨銀の根を減じざるは  
自に定貨銀の加ふとて國を強く  
定國に之を要する理なり

二十九葉

十葉

國勢傳信は何處に於て勿く是れ  
正なるもの傳信を達す

十六条

本書第二十三条に趣き通信を以て  
引取の又は請求する者より返りせしめ限を申  
ふことは通信を爲し得るもの

二十四条

三十五条

此項裁判するに因り通信を爲す者  
は通信を爲し得るもの

中二

君國の爲めと別れし名代人と送りし我侶と  
やけに其集會より出づとの由に諸子に安んずる

事なかりし

中三

終に災と衆より信ぜられし——集會に出る者

其者一己の存意にかゝるものなりしに過ぎず

中四

集會の頭取を人々安んずる

中五

集會より一國の首長より集會の災の定むる外

國の報知なり

三十一

萬國傳信板所入費金を初年四萬七千  
也過座より取金ありて諸約定國に交付せ  
得るは増はせ座より

納書中二千一系より以て萬國傳信板所  
と委任せし通信局に於て都より金を  
とるは必要なり金に依りて自ら決定せ  
ば其より決定せし傳信板より過

遠是

右ノ書ニ出方ノ所ニモ此ノ書中ノ刀里一國  
多ト<sup>二</sup>~~三~~等ト<sup>一</sup>方<sup>二</sup>定<sup>一</sup>里<sup>二</sup>多<sup>一</sup>部<sup>二</sup>割<sup>一</sup>也<sup>二</sup>以<sup>一</sup>各<sup>二</sup>國<sup>一</sup>入  
費<sup>二</sup>拂<sup>一</sup>方<sup>二</sup>と<sup>一</sup>た<sup>二</sup>お<sup>一</sup>と<sup>二</sup>一<sup>一</sup>則<sup>二</sup>力<sup>一</sup>一<sup>二</sup>等<sup>一</sup>二十五  
力<sup>二</sup>二<sup>一</sup>等<sup>二</sup>二十<sup>一</sup>力<sup>二</sup>三<sup>一</sup>等<sup>二</sup>十五<sup>一</sup>力<sup>二</sup>四<sup>一</sup>等<sup>二</sup>十<sup>一</sup>  
力<sup>二</sup>五<sup>一</sup>等<sup>二</sup>五<sup>一</sup>力<sup>二</sup>六<sup>一</sup>等<sup>二</sup>三<sup>一</sup>

國三十二系

以<sup>二</sup>定<sup>一</sup>國<sup>二</sup>と<sup>一</sup>と<sup>二</sup>中<sup>一</sup>永<sup>二</sup>振<sup>一</sup>振<sup>二</sup>御<sup>一</sup>自<sup>二</sup>諸<sup>一</sup>書<sup>二</sup>付<sup>一</sup>款<sup>二</sup>也<sup>一</sup>

外不通達中下且勤向關係也 事以改正也  
事以正引是又通達中下

萬國傳信者披復和於一般以友等書通  
於外而中下各書通於傳信者中  
於通達中下傳信者中於定諸國  
報知中下

傳信者中於定諸國  
外萬國傳信者中於定諸國



此立場開闢之際、關係、諸通達、萬國傳信  
其後、便、如、之、更、之、及、脚、便、或、之、書、狀、之、等  
中、通、之、一、

各、此、此、之、場、之、是、每、之、如、之、傳、信、書、通、之、一、或、止、之、  
取、調、書、之、也、此、之、場、之、是、通、之、其、之、一、之、教、書、之、也、  
萬、國、傳、信、之、後、之、如、之、報、知、之、一、之、友、之、調、書、之、  
之、萬、國、傳、信、之、後、之、如、之、報、知、之、一、之、友、之、調、書、之、  
之、之、雛、形、之、依、之、編、制、之、一、之、且、各、此、之、場、之、是、觸

出也。布告書し。写我近也。是又右役也。送る。  
①萬國傳信。取扱得也。右役也。知。各経立場。  
身勤。向。種々。經驗。事。振。通達。請。  
ふ。

並。分。三。十。三。条。不。

萬國傳信。取扱得也。右役也。知。各経立場。  
身勤。向。種々。經驗。事。振。通達。請。  
ふ。

書留點一

何時定滿諸國總立場より之依を萬金  
傳信し候旨不明く是の如く之を辨明し及  
し

右の如く之の如く之の如く之の如く之の如く

定滿諸國傳信總立場より之の如く之の如く

右の如く之の如く之の如く之の如く之の如く

會談し之を圖る但し之の如く之の如く

約書中亦余之極、隨以瑞西同盟國、傳  
信、以心之萬國傳信、及後、以心之  
入費、刻合方、後、中三十一、余、指、裁、如、  
約、定、滿、國、之、在、者、之、分、

中一等 北獨逸、澳地利、法蘭西

大額里、泥亞、伊多利、魯西亞、土耳其

中三等 小、中、干、九、國、白、耳、義、和、蘭、二、三、候、國

瑞典

上  
中二等 西班牙

中四等 那威、デンマーク、瑞典、サルデーニャ

中五等 小国、トルコ、希臘、葡萄牙、ベルギー

中六等 法王領、モナコ

此規則を自十九年一月一日施行す

午八月廿九日夜着

尾里外務權少録

名倉文書大佑

鄭文書權正

花房外務權少丞

柳原外務權大丞

外務省大少丞中

本月六日夜十二時東京港費物二日夜吳淞  
口偏流翌九日九時上海着也在波多曼に

小川通商控大領萬兩とありてとて一山形と  
以て迎附ケル新大橋と南英居地第三號  
小川控大領本寓止宿家事と古き跡跡了  
長成縣の爲探家事先なる爲地と云ふ  
吾々衆古多候處の地掛り同古官陳福勤  
道基涂宗瀛と云ふと遠處より來りて  
是れ也成知縣事と道基處と古橋と道基  
せしめ大に迅速と候と云ひ即今丁未の二

十路



丁亥依之先為地著為以及至續之  
輻便以因之至為中至度之為度之傳  
之

庚午八月十七日  
晚下<sup>後</sup>上海村叢

劇成者必公使之轉來之者自為之而為之可速也

湖南地國士之持來者應熟之也但承於金其

小孝國士之為金之者佛之執事之持來之也新

外務省  
納印

我上野の原に於て新市を築き、  
其勝敗多し。其日之大戰に勝つる全勝  
と信じて、公使の愉快の顔を見せしむ。  
一、内地に向て有る。上海新大橋南  
英地三三号と粗房と山根と申すに  
一、支那全國輿地切紙圖ハ幅入より百  
より百散漫して進出  
一、支那の各地方の修路の進出を要する中より

入寺禮佛次使上進呈可也

一 天降接教之件寄編索汝以老說區

融已之難突為以之此去之定事與政府

手儀金銀百兩奉勅差出燒燬之天主坐

寫照回候補上之七月元旨院與佛海

能如海之仙形汝等之是以道路之

之而也取此之形博之正禮初之為考之

一 夢川松大休寓所止山石之起居飲食也

嗽取号以多多近秋由风之用以何廉便利  
宜安若支那人旅店存以诸事不洁淨  
此风似半日之雅白或之静

一今般苏善多於上海系場都名市働之廉  
有之其时鄭文金權正一人之外通年之老  
多市用多是了兼名之可名多之文金司  
中二市採用古孔北系之一日速秋之秋之度  
七時知縣事之以其狀之居要之以牙進之日

知本者ん進進被い義い言いこみ本て常い

宜皮也載跡い言い親政交言い合言い中言い

言い依件 言い場い合い上



夕陽集

とて後來某國經略進取之基卒と云成  
若他先んやうと云ハ 國事家ニ依りて或  
下は近年吾國も彼地も國情を操り知  
く類之を家範ふ者あり既之魯西の如  
が滿洲東北を略す者一之勢能く朝鮮  
を吾んとし是 吾國の一りも輕忽し視  
る者なきを明と稱し然んや 列聖  
御聖慮の他ありと云

一、本政一新、報章の重なるは、此を主として撰作するもの  
各國の政治と之と對するもの、其の  
精神と別々の点、其の精神を一にするもの  
皇國の對國と對するもの、一新の精神  
撰とす

一、毎日佛英米の諸地と南洋とを、照らし  
編む、其の精神は、今佛英米の諸地と  
各國の政治と、其の精神を一にするもの



井狼の國拓政羅巴新礼之際を窺ひ  
豆田豆の中を操果るもの様鋒必る脱  
出し果る處く果米も亦兵と新解に徹る  
の視り是皇國の苟も國柄を益知の  
目何ぞ可るなる

一昨まを果對あつ修後を遣し其我實こ  
を臣佐りる或時百が一の幹後を果せし  
とあひたり新近歳五事此に原し

自分の警省官貢と云ふは海に帆を年一の  
信義を以てする様を言ひ、臨に臨し、懇に  
切に而も國を憂ふ様を言ひ、廣く宇田  
の形勢を論じ、信義を以てするを言ひ、皇位を  
下し、或は其指針を指し、其後、其言を  
信ずる國の習俗多し、皇位を以て  
信義を以てするを言ひ、其言を以て  
爾後、其言を以てするを言ひ、其言を以て

司おとゆ、故に急送先鞭を以て前件  
宗氏を前導し、皇使を市に導明大に  
定り上を一人一回の出立を儀定海へ至り  
寛く極恩威並施して大戦に之に  
復た可成る事あり

一、京と清とを以て後海とて之を結ぶ  
年十を衰弊頗著に對して以て六万金  
の資債あり、是を償ふに洞凡と撥方所

を以てせし曰、嚴系属上下之恩惠を布き、  
其奮興と云ふを禱ひ外、朝鮮、皮府、佐  
義を表し、上、伯明、の根基と云ふ事、下、以、万  
分、勞省、皮負、之をせし、——嚴系属、至  
り、め、を、上下、必、り、以、其、力、を、盡、し、——以、る  
一時、財、を、費、す、を、不、知、る、實、を、め、お、人、々、を、救、ふ  
の、一、大、助、と、思、ふ、事、也、

皇谷筆

辰三月廿三日

宗對馬守

今般 王政は一新總て外國は交際  
儀に 初ては其扱ひを在るを朝  
解國に儀と古より其法に國柄益  
威信を以て多と其治教を以て通  
國交誼を掌り極家役を命と免  
解國法用筋に扱ひ即外事事務補

江の多しとお動も条の原付尤は之威  
お多し原の多し方は少く事

但し及はる動もお多し方へ儀別  
る百多しある口お多し方へ儀別  
は多し方へ儀別

宗對馬守

今程は廣島市府 王政は新万機

法定對表之作出之旨令之旨令解  
法家振之事付等結之旨 朝廷有  
之作出之旨令解國之旨令  
法沙法之事

同五月十日

宗對馬守

各國交際一切外之官所籍之問

經緯之儀並出外大坂外  
國名之書事

日六月廿六

宗對馬守

任左近衛權少將  
叙從四位上

古

宮下之事



同舍人

朝將國文治學年極其  
累息子低通仁叙事

丁六月十九日

一、本人初解不、漂到、多即、於、往國  
百、子、五、招、堂、山、浦、孝、果、頂、地、和、館  
好、室、針、馬、字、家、中、話、合、場、所、送

由漂着より弟書翰より申渡り上  
署妙へ迎ふ漂人へ因所最寄より去寄  
府或大坂府へ送り届くる府より生計を  
川渡り大事

一 初解人本邦へ内所へ漂着者あり  
る自所より行藩縣より本府へ送り  
届くる府へ移し漂流し莫末衣履  
給與船修理し上馬寄り役人

別後又于本府浦宿志之為  
今由葛城取此筆

但浦宿志之為報解人薪水之  
凡彼要友之即給與之可通  
宿志之事

一 傳人本府府之為由之宿志之為  
物之更之使者之府彼國之政廢送  
別筆

一 漂人ノ内死ス者其棺斂ム

送リタル地ニ葬ル事

右ノ通ニ依テ作出ノ間此段申達ス

事

宗第ニ守

今般漂人規則成ノ通ニ

作出タル以テ其方ニテ取扱ハレタル事

同七月

宗萬守

以本歸京處今經初解國大板  
儀方有歸陽也暇事

己十月十四日

外務省

新羅國取扱儀送ありて自儀より  
にりて新羅國より新羅國より  
にりて新羅國より新羅國より  
にりて新羅國より新羅國より

新羅國

今般外防省に於て新羅國より  
儀送ありて自儀より  
にりて新羅國より新羅國より  
にりて新羅國より新羅國より

此順也達事

日本國對馬州太守拾遺平義達奉復  
朝鮮國禮曹參議夫人閣下

曩辱

華翰就諦

啓居珍誌傾慰良深所

不戰聞一款臚列顛末副以所見既

已稟

啓



陳武則

廷議以爲去秋法國之開釁也實出  
不虞

不虞澹澹相惠卿於

鄰睦世敦一詎憂恤那有措哉歛  
復

貴國永計綏安者此

東山盛德所在也不倭在職曷任感

戰今番有

使節至

貴國之

命

東武官員身親開陳時務則在

貴朝豈無宜當之處置耶親縵事

實要在

使節陳述何待多及總惟

照亮肅此不備

慶應三年丁卯六月日

對馬州太守拾遺平義達

日本國對馬州大守珍遺平義達  
奉復朝鮮國禮曹參判大人閣下

遠承

芳緘憑審

興居清迪欣慰良深所

示辭哀斯速轉

啓

東武則其說果是說荒誕虛妄毫無

形迹此等流言囂々殆為煩

責朝於我豈恣然耶抑我

大君殿下不撫區域舊弊斯除百度一新

文武庶員贊成謀議夙夜唯以張皇

國威為目今急購其砲艦器械於海外

給我富國強兵之資者往々皆然安

知非流言之所以由來

本邦之於

貴國世教

鄰好共懷綏寧者其

台慮所以睦之於今日也至暴虎不法  
之訛言不且信也彰之矣及聞法國  
戰鬪事

鄰誼相孚唇齒相依豈可泛視于  
其間耶用是恤念無措欲使  
貴國永燭後來之憂慮也故這回

特余

使節遠至

京畿開陳宇內形勢則在

貴國臨當斟酌時務處置適當者

此

東武盛意所存也

使節既戒行李輶馬俱在近

東武敦篤意實總在陳述則如彼

偽妄無根之說渙然永解

兩國交際永歸不渝

嚴令之下如此不任在職實可感戴餘

冀崇照肅以不備

慶應三年丁卯八月日

對馬州太守拾遺平義達



先問書契寫

告ル者ハ

本邦項時勢一變政權一歸

誼鄰國真在室在貴國隣誼固厚豈不欣然哉近差別使具陳顛末不贅于茲不佞嚮奉

勅朝

京師

朝廷特褒奮勲加爵進官左近衛少將更

先問書契寫

告ル者ハ

本邦項時勢一變攻權一歸

皇室在貴國隣誼固厚豈不欣然哉近差

別使具陳顛末不贅于茲不佞嚮奉

勅朝

京師

朝廷特褒舊勲加爵進官左近衛少將更

命交隣職永傳不朽又賜證明印記要之  
兩國交際益厚誠信永遠罔渝

敵慮所在感佩曷極今般別使書翰押新  
以表

朝廷

誠意貴國亦宜領可舊來受圖書事其原  
由全出

厚誼所存則有不可容易改者雖然即是

係

朝廷特命豈有以私害公之理耶不佞情  
實至此貴朝幸垂體諒所深望也

十一月

書契寫

我邦

皇祚聯綿一系相承總攬大政二千有餘

歲矣中世以降兵馬之權舉委將家外國  
交際并管之至將軍源家康開府於江戸  
亦歷十餘世而昇平之久不能無流弊事  
與時乖戾爰我

皇上登極更張綱紀親裁萬機欲大修隣好  
而貴國之於我也交誼已久矣宜篤懇款  
以歸世不渝是我

皇上之誠意也乃差使倂以尋舊悃惟希照

亮

十二月

入  
文  
書

朝鮮國書簡寫

大抵

貴國之禰皇禰勅天下無異辭則行之  
某國自當稊然而順苟其不然則此  
重寶之所不可啗衆力之所不可脅  
貴國亦知弊邦之必不許受而輕試以  
此無亦不諒之甚歟夫以三百年舍  
之盟至今彼此無戮而徒費無益之  
辭欲行難強之事非所以永而為

朝鮮國書簡寫

大抵

貴國之禰皇禰勅天下無異辭則行之  
某國自當稔然而順苟其不然則此  
重寶之所不可啗衆力之所不可脅

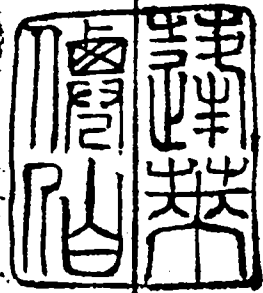
若本國亦知弊邦之必不許受而輕試以  
此無亦不諒之甚歟夫以三百年舍  
之盟至今彼此無戮而徒費無益之  
辭欲行難強之事非所以永而為



好也恐不如及茲改圖務循常舊不至失和之為貴至若左近衛朝臣等字圖書換用之說大人之改書以公又不可曉也交隣之道貴在一遵舊規則獎邦之不肯唯、不亦宜乎誠欲申講舊好使千百年如一日則諸凡書契之中何患酌宜遣辭之為難而苟然持久乎遙想

貴國之中亦多通鍊資畫之人尚且  
計不出此良可慨也紛希  
諒悉不備

庚午三月日東萊府伯



大差使公

館司公

二

覽見

一左近衛少將

因功增秩想或有此而行之本國可也至於交隣文字自有講定不易之規則何可遽加幾字於此乎若我國禮曹參議原是右侍郎東萊府使例魚禮曹參議而自前刪而不書貴國何獨惟意增減不遵

前例乎

一平朝臣

歷考往牒雖高官大職之人未  
有官職之贅於姓名中間者此亦  
格外

一書契押新印

一貴國封疆之臣想當原有印章  
行之本國而貴州之必用我國印

章於書契者欲為憑信之意乃  
是不易之規今欲改以他印則決不  
可受也

一禮曹叅判公

公是君公之稱首於五等侯伯之  
爵則較諸大人實非貶降蓋此  
書契之稱以大人三百年已行之例  
今忽稱公係是格外也亦當依前

而已

一 皇室

皇上是綏一天下率土共尊之稱雖行之於貴國而貴我間往來書契中則交隣以來未有之事如此字句決不可受

一 奉勅

勅是天子詔令此雖貴國人尊

奉之說而蓋自六父隣以來初見之  
字也不須更論

一厚誼所存有不可容易改者

貴州之世受我印非私伊公而歸之  
厚誼所存微有以此為私誼底意  
而至於下段以私害公之句大覺駭  
異當初受印何嘗私自與受而乃  
以私之一字排入其中乎 貴國典

州之官若私受印章於隣國則  
貴國之事豈不異哉

一大抵兩國約條卽金石不刊之文也  
書契往復非汗漫文字而苟其一  
言違格一字碍眼必無容受僨  
接之理雖百年相持徒傷隣好  
而已豈有濟事之期乎想 貴國  
亦有深識事體道理之人而終不



知悟切為之深慨々

己巳十一月日訓導俊卿安僉知

署

別差景文李主簿

署

館司 尊公

# 覺

一貴國之於弊邦誼同兄弟禮以賓  
主自夫交隣以來諸凡所懇除非大  
違格例有乖義理則可謂無言不  
從無顧不遂而至若今番書契中一  
二字句與印章改易之說此誠三  
百年以來所無之舉也惟我兩  
邦之率由舊章永以為好者為其

誠信之不可渝約條之不可違則今日之事謂之誠信乎約條乎想亦自揣其必不見施而尚此遲留一向執拗竊為貴邦慨之近日

朝廷處分至嚴且重本府使道方在悚惶待勘中則不能幹事之任官罪尤何居藉使十年淹留萬般為說此無可行之日幸勿希倖幡然

改圖務歸妥當之地是所深企  
、苟有一分可圖之望則為任官  
地曷不極力斡旋以副遠人之心  
哉言止此矣庶可諒焉

己巳十月 日訓導 俊卿 安僉知 (署)

館司尊公

朝鮮歷世略書  
交隣事考  
及再倭の事  
原律弘信  
赤松山茂  
了  
三  
五  
五

# 朝鮮開國

檀君王倭元年 唐堯廿五年  
共一千二百十二年

朝鮮元虞國內ニテ  
堯王倭此地ヲ主リ

允王倭ヨシ国民ヲ懷テ威勢自カニ盛ナリ

燕ノ勢ニ衰ヘ竟ニ分國トナシ初テ朝鮮

号ケ自ラ王號ヲ称ヘ都ヲ平壤ニ開ク

但神人今慶尚道眞宝太白山檀木ノ下ニ降り是  
檀君也ト云

朝鮮

箕子姓子名屠餘元年即周武王元年共九百三十九年

朝鮮開國王侯未至箕子ヲ封セラレ

子氏四代國ヲ存ニ箕子准ニ迄ニ三韓ト云

三韓

馬韓

辰韓

弁韓

漢惠帝元年

三韓内強

辰韓

秦

七人衛滿辰

韓起共八十七年

新羅

朴赫居世ヨリ起九百九十二年今慶尚道慶州都ス

高句麗

高朱蒙ヨリ起共七百五十年今忠清道扶餘ヲ都トス

百濟

溫祚ヨリ起共六百七十八年今忠清道稷山都人

百濟新羅降リ高句麗唐將李勣

降リ

高麗

王建ヨリ起共四百七十五年今京畿道開城府ヲ都トス

高麗太祖姓ハ王氏名建秦國臣下ニ新

羅高句麗百濟ヲ一メ王トス此時後梁均

王貞明四年ト云即王建ヨリ三十三代恭讓王

ニ迄即明洪武二十二年自檀君元年至

十

高麗恭讓末年共三千七百廿五年ト云

今朝鮮国

明太祖洪武廿五年ニ起ル

但本朝自明德三年至明治三年庚午共四百五十七年

太祖ノ起ル処元朝鮮国咸鏡道ノ内咸興

人姓李名成珪初ニ咸鏡道内安邊地万

戸ヲ勤メニ大志ヲ起シ都ニ出終ニ軍門ノ將ト

ナル恭讓王暴漫恣ニシテ民均ニ失ヒ成珪

百歩勢日ニ盛也此際恭讓王成珪篤行



羨後害ヲ惴レ密ニ之ヲ害セシト計レ其  
臣却テ成珪ニ告ク珪忽テ高麗ノ祀ヲ斷  
恭讓王在位四年珪ヲ推テ王トシ群臣恭讓  
王ノ惡ヲ迎ラ鳴シ珪ノ德ヲ揚ケ表文ヲ大明  
ニ捧ケ竟ニ王位ニ昇レ今清ノ臣ト稱スト虽  
凡衣服ハ明ノ制度ヲ用ヒ国体ヲ改ルル国  
ト共ニヒント云リ又國ニ太祖ノ掟アリ西不失礼  
東不失信ハ国体損ミ李氏萬代可

保國ト云

京畿道 忠清道 慶尚道 全羅道

黃海道 江原道 平安道 咸鏡道

八道戸数 一百五十二万四千。五十七戸當今二百萬

軍丁 二十三万四千九名

交隣事考

對州交誼ヲ朝鮮通ニ使聘來往スル元典刑ヲ少

輔宗慶

本朝後光嚴院忘安元年 戊申 足利義滿代

始ル

明ノ洪武元年

高麗

恭讓王十七年 崇宗宗慶遣使ヲ送ル是使价

未往初其石宗貞盛時至嘉吉三年癸

本朝後花園院足代義勝代  
明正統八年朝鮮莊憲王時

始歲遣船五十隻又約

其他九州使船往來宗氏文列受

文引用  
元印章

彼因王ヨリ贈ル  
圖書シラ今猶存

其後永正七年庚午

本朝後柏原院足利義  
植代明正德四年朝鮮

恭僖  
王

金山使李友曾威以金山居住倭

人ヲ制セシ

倭

鞭撻

加

倭人之忿

浦

熊川  
郡内

居人謀

夜乘

城

陷

彼

又

將ヲ出

戰

聞

遂

三浦

朝鮮慶尚道熊川郡内  
蔚浦東萊郡内金山

蔚山郡内 塩浦トニテ可  
和館ヲ置任ス故ニ三浦ト云  
居住スル能ハス隣交ニハラク

絶エタリ其後宗盛長代足利氏使者僧弼

申ヲ再三渡韓セシメ旧交ヲ復ス此時条約ヲ更メ

三浦ノ和館ヲ廢ニ館所ヲ莽浦ニ設テ接待ヲ

減ニ二十五船トス天正十六戊子年  
本朝後揚成院明万曆二十二年朝鮮賜敬王五年

豐臣秀吉對州令ニ通信使ヲ迎ハム對州使

渡韓之ヲ謀ルト虫氏朝鮮敢テ止月セス因茲

宗義智自ニ朝鮮ニ至リ懇心ニ説テス柳川

調信以酏菴長老之從久シク東平館留リ翌  
年通信使ヲ率ヒテ京師入り大德寺館スル  
時秀吉東征シ數月ノ後信使謁シ礼畢テ

歸ル返翰中難問ノ事アリ兵端頗見ル文

祿元壬辰年

明万曆九年  
朝鮮昭敬王五年

果シテ兵皎ラ彼土

ニ及ス故ニ隣交コニ絶ニ慶長三戊戌八月秀

吉世ヲ去リ兵權徳川家康歸ス翌己亥年

家康宗義智ニ命シテ和交ヲ議ラシム義智

家臣ヲシテ彼地ニ渡ラセテ使价ニ面シテ漸ク邊將

ノ答書ヲ得テ其文意ハ我國一存ニシテ再交

ヲ肯ル能ハス朝廷

明國ヲサシテ  
云ナリ

処置ヲ仰キ其来

意ニ随フ旨ヲ以テス羽立辛丑年義智伏見

上リ書簡ノ旨趣ヲ家康ニ述フ家康重テ

使ヲ下シ和議ヲ整フモトラス義智又使臣ヲ

遣ヒ百術ヲ盡シ終ニ開諭セシメ壬寅年西名

ノ官吏ヲ對列ニ来ラシメ和議ヲ計リ歸リ甲辰

年重子ヲ三名ノ韓人對州ニ入リ尋テ上京セシ家

康謁セシム家康彼国王ニ書簡

此書翰本文イカン  
今實テ吏跡ヲ見テ遺憾

授ス翌丁未年彼国王ヨリ使价ヲ渡シ國書

捧ク書曰

朝鮮國王李昭伯奉復

日本国王

殿下

交隣有道自古而然二百年來海波不揚何  
莫非天朝之賜而弊邦亦何負於貴國也

哉壬辰之變無故動兵構禍極慘而至  
及先王丘墓弊邦君臣痛心切骨義不與貴  
國共載一天六七年來馬島難以和事為講  
實是弊邦所耻今者貴國革舊而新  
問札先及謂改前代非者致款至此苟如  
斯說豈非兩國生靈之福也茲馳使  
介康答來意不腆土宜其在別幅紆  
希盛亮



此時始テ舊怨ヲ捨新好ヲ修ス慶應十四  
己酉年彼地開市ノ事起ル元和三丁巳年又  
信使ヲ來ル田書ヲ捧ク文中曰今日貴国  
平安大阪紛合日域豈非彼此生靈之福也

云々ト掲載セリ又宗氏ハ書曰日本ノ大阪ヲ  
勦滅スル誠ニ我國ノ為ニ怨ヲ報スニ非スト

虫凡天ソノ隣ヲ害テ年ヲカリテ之ヲ滅ス力如  
キ故ニ使价ヲ馳テ喜ヒテ陳スト云リ從是文

化ハ辛未年年ニ至ル迄圖書ヲ齎シ信  
使ヲ来スルナニ對州ニ使价ヲ渡スル凡  
五十回餘及ヘリ往昔入貢ノ度數ハ別冊ニ  
詳録ス故ニ是ニ畧ス

朝鮮通文始記

神功皇后如之新羅を征するも其の服を  
得ず御船の前へ降るも其の服を  
得ず永く其の服を  
得ず

隋書 新羅西隔海以倭為大國多珍物並敬仰  
之桓帝使往來之 明の世法錄 倭の属  
有五十餘新羅西隔海莫非属國ト云

應神天皇七年秋九月高麗人來朝也二十八年

高麗王使貢遣人貢表狀云礼多云云表を被

仁德天皇十二年七月高麗國鐵着て貢る五十六年

九月入貢

仁明天皇三年九月高麗二通て貢る

嵯峨天皇十年高麗使來朝

欽明天皇元年八月高麗使貢職二十五年

九月高麗人歸化山此月四國貢る安國云々

三十一年四月厚く王使を賜ふ 三十二年三月

高麗物系に表に敵に

敏達天皇元年五月船史王辰余鳥羽の宮に造る

二年三月高麗使人船に越海を破る 三年五月

高麗使人を召す

推古天皇三年五月高麗僧来 朝 十三年貢金

十八年三月貢僧二人 二十六年八月高麗物を

回して美を大隋揚帝三十万衆と與ふ 本蕃

王改元終、永為、破、氣故、俘虜二人及、鼓吹、弩、  
枕石、類、十、物、駝、一、疋、三十三年正月  
偶、善、

斜明天皇二年三月高麗大使入、夏、

皇極天皇元年二月高麗入、夏、二年六月遣使來

朝、

孝德天皇即位大化元年七月高麗國遣使調貢、二年

高麗王、偏任、新羅、遣使貢、調、貢、曰、三年

及西雄元年高麗調貢 年貢 天皇崩御高麗

新羅遣使吊儀ヲ奉ん

新羅天皇元年曰二年高麗貢獻六年正月大使某等而

餘人至

天智天皇元年唐人新羅人伐高麗々々援て 朝請

よりて極附之下々之を給ふ唐人新羅人哀と爲る

又能く人 五年正月曰十月之奉使来 朝

七年七月高麗遣使来貢 遣使来貢 仲年王國を述テ

十

天智天皇元年  
唐ノ子勅國ヲ奉  
別ニ勅國ヲ奉  
又故ニ新羅  
朝貢セリ  
聖武天皇神聖  
四年 始テ入貢  
スルヲハ神皇  
年ノ外ニ出ス

天武天皇即位元年 高麗大使二年八月言罷入貢

四年九月入貢 十月<sup>九</sup>前拘留<sup>七</sup>言罷人<sup>十九</sup>人<sup>七</sup>下

國<sup>三</sup>還<sup>七</sup> 十一年貢方物

持統天皇元年三月<sup>八</sup>叙<sup>七</sup>化<sup>七</sup>言罷<sup>五</sup>十六人<sup>七</sup>言<sup>七</sup>唐<sup>七</sup>陸<sup>七</sup>安<sup>七</sup>還<sup>七</sup>關<sup>七</sup>授<sup>七</sup>業

元正天皇<sup>三</sup>聖武<sup>七</sup>二年<sup>九</sup>月<sup>八</sup>高麗<sup>七</sup>限<sup>七</sup>子<sup>七</sup>言<sup>七</sup>言<sup>七</sup>十九人<sup>七</sup>言<sup>七</sup>武<sup>七</sup>別<sup>七</sup>子<sup>七</sup>殺

高麗<sup>七</sup>邪<sup>七</sup>言<sup>七</sup>還<sup>七</sup>言<sup>七</sup> 聖武元年十二月高麗<sup>七</sup>言<sup>七</sup>倚<sup>七</sup>三<sup>七</sup>國<sup>七</sup>士

氏<sup>七</sup>本<sup>七</sup>國<sup>七</sup>礼<sup>七</sup>言<sup>七</sup>還<sup>七</sup>言<sup>七</sup>依<sup>七</sup>款<sup>七</sup>言<sup>七</sup>殺<sup>七</sup>の<sup>七</sup>者<sup>七</sup>を<sup>七</sup>捕<sup>七</sup>へ<sup>七</sup>て<sup>七</sup>死<sup>七</sup>身<sup>七</sup>を<sup>七</sup>給<sup>七</sup>を

聖武天皇神武四年八月<sup>八</sup>高麗<sup>七</sup>邪<sup>七</sup>使<sup>七</sup>入<sup>七</sup>貢<sup>七</sup> 五年<sup>八</sup>高麗<sup>七</sup>邪<sup>七</sup>使<sup>七</sup>其<sup>七</sup>王<sup>七</sup>書<sup>七</sup>言



方物 書中

大王天朝ホノ文ヲ以テ  
我ニ表ナス

四ノ月 王書ニ 答フニ中ニ

天皇敬問渤海郡王云ハ、文體ナリ

十一年七月渤海郡

王使来ハ十二月拜 朝吏王書ニ奏ナリ書中

伏惟

天皇聖殿王德遐暢亦天皇聖光

十二年正月渤海鉄利人

千石餘口化ニ慕フテ来リ出羽州ニ安メテ衣糧ニ給フ

春倭天皇天平勝宝四年八月御使聘使輔国大將軍基族崇等

至九月施景崇等拜 朝奏曰渤海王言

日本照臨聖天皇云ハ 六月聘使来リ日本國即付 聖書曰

天皇致同海國王朕以嘉德之、但未啓無程臣名仍尋高壽  
旧記同年之日表文之、旋惟足才美則君臣式之授兵或賀踐祚  
休朝聘、恒式知恩款之懇誠故、先朝善其貞節待以  
殊恩之、王親恩之、亦賜物如別

淡路帝天平宝字二年九月海國大使入、朝三年正月受

朝、奏曰本國王欽茂言某國昇臨八方聖朝皇帝登遐

天宮、言高壽王途同、先朝升遐、大使楊某度、

正三位副使楊泰師、從三位下授、

是等の後朝貢絶せしむ

桓武天皇九年藤原田中筆者より所太政官書上牒

上るる如きなり此後歴代知事より絶て

陽成天皇

宇多天皇

醍醐天皇

朱雀天皇永承元年より延暦元年迄神祇等絶し

より後醍醐天皇長祿元年より興徳元年迄

と云ふは唐の通國を奪つた百済を  
亡し、明宗を建て、高麗國を封じ  
以後、布勢使人を遣はし、海に渡りて

高麗集 勉觀自

唐神武天皇六年、正統元年、高麗王高句麗王

引聖王、高麗王、高麗王

朝鮮世表を以て考ふと、高麗太祖神聖王建、

即位、後梁均王の貞明四年とあり

後梁皇帝永平二年高季起居念人漢皇来る

是、元國の主理宗の才と稱し、まづつる焉とあり

六月、都とありとあり 同九年とありとあり

使とありとありとありとありとありとありとあり

口十二年とありとありとありとありとありとありとあり

子人西邊と稱とありとありとありとありとありとありとあり

後光曆天皇貞治二年とありとありとありとありとありとありとあり

後園融天皇永祿三年 朝鮮國大使來聘到元世宗  
揮題同丁酉

後少祚天皇明德三年 朝鮮國大使來聘陳如之  
休

法明天皇兼主王氏合テ三十三世四十六年

子臣才成桂成望日盛人<sup>り</sup>と<sup>り</sup>中<sup>り</sup>外<sup>り</sup>心<sup>り</sup>を<sup>り</sup>保<sup>り</sup>と

明<sup>り</sup>方<sup>り</sup>他<sup>り</sup>三<sup>り</sup>十<sup>り</sup>五<sup>り</sup>年<sup>り</sup>才<sup>り</sup>氏<sup>り</sup>遂<sup>り</sup>に<sup>り</sup>即位<sup>り</sup>して<sup>り</sup>朝鮮

の<sup>り</sup>改<sup>り</sup>正<sup>り</sup>如<sup>り</sup>之<sup>り</sup>元<sup>り</sup>と<sup>り</sup>止<sup>り</sup>年<sup>り</sup>り<sup>り</sup>と<sup>り</sup>島<sup>り</sup>嶼<sup>り</sup>と

頼一海賊言多く之と知解との刃界を侵そ  
或は官廨を毀ち或は格殺す此故を之を  
知解に令し好を通し河家と共せんと  
請ふ方の使くる

應永十六年知解が使来る 口三十九年  
舟使經と贈る 口三十九年 二十四年  
三十二年 後松平使とよきと

是のころはあつたし

初解其後心切方并直接一

修其極多之方確定

蕭其方性亦現之其意

口以之出為其陳

一初解其後之事而後

其目能其多之方

其中心之方而後





大考を承り就て只彼の借法のものなり  
似つ訓余多し。然し本年故に流に又  
字と均帯て流に月とを延延

新延公初に大の思考を起し流務を修め

事とあり。能くふふ氏に彼の流に且

言もふふ集と般再後節に子氏を

海雲として流釋せしむ。然し流に流て

石上の其こと流の心務に當りてあり

宗氏渡韓儀

第三策文端

附録

一宗氏渡海と云ふは、一昨の事なり

船中をばして、宗氏使を遣う、一昨も海を

り、一昨も海を遣う、一昨も海を

宗氏使を遣う、一昨も海を

宗氏使を遣う、一昨も海を

宗氏使を遣う、一昨も海を

宗氏使を遣う、一昨も海を

宗氏使を遣う、一昨も海を

事を以て養ふ人おるは保海也。  
修也を修む。政を成る海也。  
情を之と成る。安んずる也。  
海は多海に似て

朝廷に親交の事なすは日か入の取  
得也。安んずる海に似て多海に似て  
以て況海の情は似て安んずる也。  
均也。海に似て多海に似て

先王陛下を尊ぶことを以て解

詔あり

一 弘治帝は建永二年

相違うは名 弘治元年は

弘治元年は弘治元年は

弘治元年は弘治元年は

弘治元年は弘治元年は

弘治元年は弘治元年は

十餘年

陽面ふあやのほろをさす。玉を重  
き女はほろは川に民常交相の  
問答を給ふ。然れどもあはれなるは  
時

節は少しく固はたす。是れは  
世に其方をけり。世の梅はほろを  
さす。さすはあはれ。然れどもあはれ  
なるは時。是れは少しく固はたす。是れは

るのさへもおきこ都々一節は  
の例に任便す我々も其の如く  
我

往々交る往々交るのさへも

るを希ふは其のさへも

一室氏とて此の或は其の

其のさへも其のさへも

其のさへも其のさへも



望 望 望 望 望 望 望 望 望 望

一 芝 訓 唐 子 聖 人 其 德 如 日 其 明 如 月

一 源 之 如 水 之 如 水 之 如 水 之 如 水 之 如 水

懷 之 遠 之 大 之 上 邦 竟 仁 教 之 子

風 之 雲 之 雨 之 雪 之 霜 之 露 之 日 之 月 之 星

一 以 系 下 之 時 日 之 月 日 之 月 日 之 月 日 之 月

何 如 也 之 如 如 之 如 如 之 如 如 之 如 如 之 如 如

瀛 海 之 如 如 之 如 如 之 如 如 之 如 如 之 如 如

赤甘玉にうき性と云ふ所、東疆は  
地を改む風俗、諸君と云ふ、  
地、  
白乳や、故、  
其、東疆と云、  
然る、  
ある、  
ある、  
海、  
海、

五

もあらん王城のりれ也萬事の能なり  
 時城と後より其所布と并に事を以  
 ちの所とものと今と事とものと均しく  
 ありあらばより由ことと所と一之と并に  
 皆かるべきことなりとの方今と事と  
 事初より時を以てし王城と事と  
 りたりとことなり能れ事の中と事と  
 事の事とことなり其は事と事と事と

十

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

あゝ知るゝもぞ存や ねんぬれと

この国を以て新羅と云ふ事

サキニ佛国ノ韓国江華島ヲ據ルカニ名魯國韓ニ内據スルト云説ナリハ  
深ク韓々探ルニ未嘗テアナルト是蓋シ支那在西亞洋人ノ時輕浮  
新聞紙ヨリ出タルヲカ然共彼カ魯國ヲ看ル眼其言語ニ就テ青白  
ヲ分明ニ足ラシカ

一 新羅

皇朝の親交をなして同國に在る新羅國

も亦其の申明の後を之と名ふ事有

る事と云ふ事ある事ありと云ふ

事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

多岐の言を論じ

一 彼等の民我の海流を以て年々記  
事する人其海流を以て年々記  
山陰海流を以て年々記  
多岐の言を論じ  
山陰海流を以て年々記  
多岐の言を論じ  
山陰海流を以て年々記  
多岐の言を論じ  
山陰海流を以て年々記

如是のる河に

一 實を以て海に利をのれと後して是  
交るを造化して是を補給し如く  
助るをのれのと此を論を以て  
一 實を以て海に利をのれと後して是  
交るを造化して是を補給し如く  
助るをのれのと此を論を以て  
一 實を以て海に利をのれと後して是  
交るを造化して是を補給し如く  
助るをのれのと此を論を以て



雨東の交煙を思ふに  
しらざる故に年  
の多かりきとてさうさう  
一程もあはれのみとて  
海東の海客を候とて  
一葉の舟を候とて  
け末の海客を候とて  
海東の海客を候とて  
一葉の舟を候とて  
海東の海客を候とて  
一葉の舟を候とて

よのちをふりしり

一 何れ民をてふ邦に自 國を成

之とてふ邦に 古邦 古邦 古邦

古邦 古邦 古邦 古邦 古邦

古邦 古邦 古邦 古邦 古邦

古邦

古邦 古邦 古邦 古邦 古邦

古邦 古邦 古邦 古邦 古邦

[illegible]

うゝあ新うあふあ局娘所群初のうを  
 掌との海向と希きうと

白鳥のふりて、  
 梅玉はさき  
 振るゝ花を  
 下町の屋敷に  
 咲かせしと  
 ぬきけり

新海子為遠山招拜之

子

子

唐中江

畫山

附

字も属する白の海神おまをたふさる  
あまのうきなり海に上陸する  
ふかしのうきなり海に上陸する  
はるのうきなり海に上陸する  
あまのうきなり海に上陸する  
あまのうきなり海に上陸する

附



純朴のきりひき兄弟協同者である  
数いふ而して先づ純潔の面ありと  
云ふ自らの解釋を以て成るる事  
その様を回覧するに中々之を  
能く書く——云々 余余何ん  
と成程と事何んと云ふ事一紙  
に書く物 云々之——云々之  
何れも誠々誠々私の利益を以て



富士の針を収るの意を

直に描き懐きしる意を

子母良

以修

子母

子母

名称	岩倉真淵文書 西川本
標題	広津弘信書状 附 朝鮮國理事 始末概略書 乙地

分類	
番号	349
号	

国立国会図書館

登録番号	
------	--

号三册内

五号百拾捌校

朝鮮部

第貳部

明治六年  
全八年

朝鮮事件書類

目次

明治八年

朝鮮事件

一第<sup>一</sup>号 七月廿日

廣津弘信書狀

附朝鮮國理事始末概略書往復

書內話探聞書并清韓關係見込

案及二三條獻議之數書六通

明治六年

一第<sup>二</sup>号 一月十三日

花房外務大丞書狀

附復命書應接書往復書周急

一件書尋文商量滋滯緣由畧

別後朝野国理の事極の事極  
すに云ふす者系は能く果は之  
にまゐるい三ヶ條取決し好む  
己の事おぼえていん世にる世  
即此にあらざるよりいん云々  
より本にあらざるよりいん云々  
おぼえていん云々  
即此にあらざるよりいん云々

夕  
系  
牛

廣  
傳  
乃  
信

右  
太  
臣  
殿  
下

我邦朝鮮國ト尋交事務上ニ付テ情ツテ前六年間ト今日  
トノ彼方状況ヲ比考スルニ其狀態ハ同ク曖昧遷延ニ出  
トモ然レトモ其情實ハ大ニ前ト異ナル處ノモノアリ今其  
異同アルヲ辨セントス先ツ其期ヲ分タサル可ラス

明治二三年ノ間ハ彼レ我維新ノ情由ヲ報シタル盛意ノ所  
在ヲ詳カニセス（世以前彼國佛國ト事アルノ際ニ方テ幕府ヨリ使ヲ派  
出セシコトヲ彼ニ告タルキヨリ既ニ我ニ對シテ一疑團ヲ孕ミタル上ニ）我報知ノ書  
契中皇勅ノ文字ヲ載セタルコト或ハ獨乙國ノ測量船ニ外務少

至馬渡カ乗テ彼海岸ニ至リシ事或ハ其前後ヨリ我國盛ニ  
西洋各國ト交際ヲ開キシコト等ニ付テ疑團固結シ大ニ恐怖心  
ハ抱キナカラモ

者ト相結ビ

此キ内国兵馬新ニ戢リタル東陲西遼人心方向未定況ニ對州ノ

如キ屢内乱ヲ經テ隘藩貧困ノ極名義ノ如何ニテ顧ルニ暇アラサル際  
ナレハ新規ヲ謝絶シ外務官負ニ面セス曰ニ依リテ畫ルニ一對州ヲ以テ  
セントス之ヲ第一尋交事務起原ノ期トス

明治四年廢藩置縣ノ時ニ至リ宗氏ハ東京ノ一華族ニ籍シ又  
外務大丞ニ任シ同五年春差使書ヲ賁ラシテ往テ其由ヲ彼  
ニ告ク此片韓人モ對人モ共ニ愕然タリ而モ猶旧面ヲ改メス



シテ對州ノ通交ヲ復セシトノ（海津茂太郎が内通ノ事跡ヲ以テモ内  
應ハアリナカラ聊カ其辭ヲ易ヘテ國議ヲ収メサレハ確答  
ヲナス可ラス而シテ其議ヲ収ムルハ急ニス可ラスト云ヲ以  
テ我ヲ屈セシメントス此ニ於テ宗氏ノ歲遣船ヲ止メ其役  
負ヲ退テ在館ノ官負皆外務省ノ名ヲ冒ラシメ以テ  
宗氏ノ松交ヲ復ス可ラス又彼カ接ト不接ハ我敢テ之  
ヲ強ヒサル狀情ヲ示スニ彼モ亦我動靜畢竟ノ如何ヲ  
見ルヲ主トシテ其間小節目ノ稍旧ニ依ラサルアルハ之ヲ  
默許シテ敢テ忤テス亦敢テ接セス以テ明治七年ニ至ル  
之ヲ第二尋交事務維持ノ期トス（タトヒ此間世間如何ノ議論紛起セ

シニモセヨ尋交事務順成ノ為ニ擔當負任セシ我輩ニ於テハ

明治七年夏秋ノ際征蛮餘鋒ノ彼ニ及シテ憶想驚易シ

テ前年內國征韓ノ議ト佐賀妄舉ノ事ト彼國大院君擯斥民氏之ニ代テ因

柄ヲ握リシ等皆彼カ國議變革ノ因トナリタレトモ遽カニ尋交初起以

來其事ニ關セル官吏ヲ改撰シ初メテ外務官員ト筆面應

接ヲ為シ遂ニ我外務卿ノ書ヲ接受ス可キヲ約スルニ至リ

シ其本心ニ出サルニモセヨ之ヲ第三尋交事務就緒ノ期トス

右三期六年間ノ蹤ヲ回想スレハ彼カ情狀ヲ審カニスルヲ得

ヘシ而テ其初期ヨリ維持ノ期ニ至ルマデ我ハ終始以實告

實ヲ主トシ彼ハ我維新ノ事ヲ報スルニ當テ突然皇勅等

ノ文字ヲ下スハ別ニ隱謀アルヘキヲ疑懼シ且暗ニ對州人内應ニ  
頼ム処アリシヲ以テ唯旧規古格ヲ主張シ以テ我為ス処ノ  
如何ヲ窺ヒシニ對州役員ハ悉ク退去シ我虛實ヲ探ルヲ  
途ヲ失セシヨリ慮ヲ轉シ支那ニ依リテ我動靜ヲ知ラシ  
ト欲シ明治五六年間ヨリ頻リニ人ヲ支那ニ出セシヲ聞ケ  
リ乃チ昨年遽カニ我ニ恐レ我ニ應スルニ至リシハ知ル可シ  
我勢情ヲ支那ニ於テ探リ聞ク処アルニ由リニコトヲ  
既ニ前六年間三期ノ經過ヲ分ツ則今日ノ變異スル処  
ヲ論セサル可ラス

昨年彼既ニ我ニ應シテ尋交ノ端ヲ開キ我外務卿ノ書契

ヲ賚ラシ至ラハ彼モ亦之ニ答フルノ使ヲ出スヘキトノ假約  
ヲ議シ我ヨリ果シテ書契ヲ修シ理事官ヲ派出シタル彼モ  
速カニ前議ヲ履行シ信誼ヲ全フシテ乃チ第四尋交事  
務順成ノ期ヲ終ヘテ更ニ新盟條約講明ノ期ニ至ル可キ  
ノ當然ナルハ論ヲ俟タス而ルニ我其門ニ臨ムニ及ンテ曖昧  
模糊屢其期約ヲ失シ其末終ニ我服色ニ異難ヲ起シ  
刺ヘ他國ノ制度上ニ可否ノ喙ヲ容レ断然前約ヲ履ムノ  
使莫ク擯スルニ至ル彼國タトヒ如何ノ頑愚ナルモ我怒ヲ  
激發スヘキヲ知ラサランヤ獨リ之ヲ知ルノミナラス我之ヲ  
怒ラハ彼孤立獨力其勢我ト相抗スル能ハサル固ヨリ當

自ラ覺ル所ロナリ既ニ我怒ル可キヲ知リ而テ之ヲ怒ラシメ又  
我ニ抗スル能ハサルヲ覺リ而テ之ニ抗セントス是豈其然ル所  
以ノ因ナクシテ而シテ然ランヤ故ニ我輩今日最モ意ヲ注ク  
可キハ其然ル所以ノ因リ来ル処ヲ求ルヨリ緊急ナルハナカ  
ルヘシ

其然ル所以ノ因リ来ル処何ニ在ルカヲ求ルニ嚮ニ訓導ヨリ今後  
先緒ノ年号ヲ記載ス可キ事及大日本ノ大ノ字ハ彼レカ事大  
ノ典文ニ碍リアルヲ陳スル等ヲ推シテ彼國近年更ニ清國  
ト幾分ノ協議ヲ為セシナル可キヲ揆察セシニ明治六年八月  
在清國總領事井田ヨリ私信ノ書信ニ日本國ヨリ朝鮮國ニ難問スル処ノヲ決

セシカ為ノ李鴻章ヨリ使船ヲ朝鮮國ニ發遣セリト云々芝罘新聞頃口  
鄭書記官カ報スル所口ニ據レハ益清國ハ依頼ノ實アルヲ證ス  
ルノ端ヲ得タリ加之昨年内外新聞紙上ニ或ハ曰韓國既ニ日  
本ニ降レリ或ハ曰既ニ使ヲ日本ニ出セリ等（其他ニモ）清國ノ嫌  
嫉スヘキ文多クアリ今若シ韓國我ニ傾心セハ實ニ己レカ為メニ  
一大患ヲ生センヲ恐ル、ヨリ昨年我ト台蚩ノ事ニ付テ紛議ヲ  
生セシ始末ノ如キモ己レカ失策ヲ秘シ自ラ尊大ニ居リ所謂  
大皇帝至聖内外一視同仁西國萬民ノ塗炭ヲ憐レシ我兵ヲシ  
テ無事ニ放チ還ラシメ至避至厥ノ一小蚩地モ猶覆載ノ  
恩ヲ蒙ラサルナキヲ誇示シ（清國新聞所載ノ語氣ニ付キ又其自尊

誇大ノ習情ニ付キ我輩ノ想像スル所ニ出レトモ或ハ驛ヲ騁セテ我  
韓ヲ齎フノ密計アルヲ韓国ニ報シ是亦新聞紙上ノ説ナレトモ  
或ハ内外新聞ノ韓人ヲシテ慚憤セシム可キモノヲ贈致スル近  
年一月二回文耶ヨリ各種ノ新聞紙ヲ韓国ニ贈致スルハ嘗  
聞ク所ノ事而テ昨年来我ト支那トノ新聞紙上ニ於テ屢韓人ノ慚憤スルニ足ルヘキ文ヲ載  
六等例ノ黥策ヲ授シテ韓人ヲ噉シ以テ其忿懣心ヲ挑撥シ我  
納約ノ牖ヲ閉塞セシメ暗ニ己ニニ依頼スルノ情ヲ釣シテ謀リ  
モ亦知ル可ラス其依頼スルニ及シテ公然之ヲ擔當スルト否トハ或ハ曖昧  
スルニモセヨ夫ノ清ノ韓ヲ援クルハ其實韓ヲ援ルニ非スレテ韓ヲ以テ自ラ  
援ルノ策ナレハ若シ清韓協議ノ實我輩ノ推考ノミナラス鄭永

寧カ報スル所ニ據リテモ  
 アラハ則我最緊急ノ事トシテ忖量  
 スヘキ所ノ彼國ノ昨ハ我ヲ拒ム  
 我ヲ客レ今ハ我ヲ侮リ我ヲ拒ムノ  
 原因ハ果シテ清國ト關係ノ上ヨリ起リ來ル者ニシテ而テ其狀  
 態ハ前後同一ナレ其情實ハ大ニ異ナル處ノモノアリトスル所  
 以ナリ

事此ニ至テ而テ我猶含垢忍耻年月ノ久シキヲ持ツトモ唯訓  
 導ニ面接スルノ一事ハ一步ヲ進メタルニ似タルモ  
 前六年間外務官  
 實ハ彼小通事ニタモ面スルヲ得サリシニ比スル  
 其他ハ總テ一昨年  
 以前ノ地ニ退步シ遂ニ尋交ノ盛意ヲ達スル能ハサルノミナラ  
 ス彼力我ヲ輕侮スルノ狀ハ愈加ハリ清國ニ依頼スルノ情ハ



益堅クミテ而テ徒ラニ年月ヲ空過スルノ後ニ至リテハ  
我ヨリ彼カ反約ヲ責ルノ名義ト機會トハ共ニ移リ去ル  
可シ

然レトモ彼草梁館ナルモノハ昔年移館ノ事アリテ其地易リア  
レトモ四百年來我ト彼トノ交際上ニ於テ我ニ占有シタル地ニシ  
テ旧交ヲ尋クモ破ルモ咄地アリテノ事若シ此地ナキトキハ兩國  
ノ手續キハ断絶シタル道理ナレハタトヒ彼ヨリ逐拂フトモ  
輕々シク逐拂フニ至ラサルハ保証シナカラ我ヨリハ之ヲ固守ス可キ  
地トス可シ

此案半ハ弘信力摸索ニ属スルニ似タリト虽トモ前後潜心付

量スル処口彼國情狀多クハ此外ニ出テス故ニ録上シテ

廟堂萬一ノ參考ニ備ヘ又將ニ之ニ就テ別ニ建ル所口ノ

議アラントス

明治八年七月十四日

廣津弘信

朝鮮國駐劄理事官進退ノ議

第一理事官彼地ヲ退去スルノ議

我々昨年ノ約ヲ履ミ本年二月渡航以來遷延五閱月ニ至ルノ間彼レ屢次反覆ノ言ヲ為シ主トシテ我が服制ニ喙ヲ容レ其語誹謗ニ涉リ結局我旧制ノ服ヲ用フルニ非スンバ肯テ接見セサルノ答辭ヲ為シ彼レ我レニ對シテ大ニ禮信ヲ失シタル事證ヲ具録シ因テ前件ノ委詳ヲ歸奏スルヲ告ルノ書ヲ代リ之ヲ彼國ニ遺シ理事官一行悉ク彼地ヲ退去スル事

此議現地ノ勢情共ニ此ニ出サル可ラサルモノニシテ而シテ其退去ノ際ニ至リ或ハ彼カ狡猾ノ習情ヲ破リテ別ニ其真情ヲ吐露シ來ルアラシモ必無ノ事トハセ

ザルナリ然ルモ是只臆想ヲ出ルモノニシテ恃ムニ  
足ルノ事ニアラス故ニ理事官彼地ヲ退クニ決セバ  
之ニ繼ク所以ノモノ或ハ寛ヲ以テスルカ或ハ猛ヲ以  
テスルカ必ス一廟謨ナカル可ラス而テ其猛ニ出ル  
カ如キハ決テ弘信ガ論スヘキモノニ非ス其寛ニ出  
ルモノハ朝廷特ニ官大丞ニ下ラサル剛正練達ノ人  
此官望ムラクハ<sup>海陸</sup>軍大佐ヲ兼シ<sup>テ</sup>シ簡飭シテ  
更ニ彼國ト談判ノ端ヲ開クヲ下手ノ初序トナシ  
別ニ第三議清國照會ノ事ヲ經テ自ラ廟議ノ  
趣向スル所アルヘシ

第二 理事官彼地ヲ退去セサルノ議

我レ昨年ノ約ヲ履ミ本年二月渡航以來遷延五箇  
月ニ至リ彼レ不接ノ答辭ヲ為スモ固ヨリ我レニ

絶ッテ語ヲ出スニアラズ畢竟偏見ヲ主張シ我旧制  
ノ服ヲ用フルニ非スシハ肯テ接見スノ云々副理官  
ヲシテ歸奏セシメタリシニ我ヲ曲ケテ人ニ從ハサル  
ハ固ヨリナルモ亦輒ク物ヲ絶ツテ欲セス前議終ヘズ  
敢テ退クナカレトノ朝命ヲ得タルノ旨ヲ彼國ニ告  
テ總シテ我ノ彼ニ於ケル其告ケサル可ラサルモノ  
(維新情由)ヲ告ケ其尋カサル可ラサルモノ(旧交情誼)  
ヲ尋キ其改メサル可ラサルモノ(書契及ヒ接待ノ  
儀例勘合印等)ヲ必ス改メントス況ンヤ近ク昨年約  
スル所アリ必ス之ヲ履行セサル可ラサルノ意ヲ斷  
然確守シ敢テ彼地ヲ退カサル事

此議ハ主意ハ大ニ從前ノ勢狀ヲ轉シ唯我守ル可  
キヲ守リ敢テ切迫リ勢ヲ見メサス強テ接不接ニ

関セス又彼カ好言惡意ニ就テ輕シク我喜怒ヲ為  
サス翻然體面ヲ改メテ其状含垢忍恥ニ似タルモ別  
ニ期スル所ノモノアルガ如ク彼ヲシテ我意ノ所在ヲ  
測ル能ハサランソ而シテ清國照會ヲ経ルノ後更ニ  
廟議ノ趣向スル所ヲ仰キ令ヲ待ツテ進止ヲ取ルニ  
在リ此件モ亦別撰ノ官ヲ派スルモ可ナルヘシ而テ  
現官ノ駐マルト還ルトハ新官渡航ノ後議ニ附シテ  
可ナラン

第三前議ノ内孰レニ出ツルヲ論セス必ス清國ニ照  
會ヲ経ヘキハ議

我ノ韓ト或ハ和或ハ絶ヲ論セス清韓兩國互ニ依頼  
庇シ護スル所以ノ厚薄深淺ヲ量ルヲ要ス此ヲ量ラ  
ント欲スルヤ今韓事ヲ以テ清國ニ照會スルヲ最

緊要ノ事トスルナリ我ノ照會ヲ為スヤ清國事  
ノ將ニ口舌ノ能ク了スヘキニ非サルニ至ントスルヲ  
知リ必ス之ヲ韓ニ報セントス其時ニ當リ韓ノ舉動  
如何ヲ察スヘシ故ニ此照會外ハ以テ清國ニ對シ  
先事ノ好誼ヲ盡クスト為シ實ハ以テ兩國ノ内情  
ヲ知ルニ足ル既ニ其内情ヲ知リ而シテ我レ韓ニ處  
スル所ノ寬猛緩急ヲ謀ラハ希クハ誤策ノ憂ヒ  
ナカラシ此ノ數者ノ意ヲ兼ヌ豈緊要ノ事ニアラス  
ヤ且韓ハ素ヨリ清ノ正朔ヲ奉スト雖氏我ニ對シテ  
其屬國タルヲ明言セシニ非サシハ我亦照會ヲ為ス  
ニ當リ屬國ノ故ヲ以テセズ只彼兩境壤相接スル  
ニ由ルノ意ヲ以テシ試ニ其文意ヲ綴ル尤ノ如シ  
我邦ノ朝鮮ニ於ケル鄰好ヲ通スル既ニ數百年ニ及

へり今ヲ距ル八年前我邦政體ヲ更草シ維新ノ治  
 ヲ布ケリ因テ其情由ヲ朝鮮ニ通知スルニ當リ彼  
 ヲ我カ意ヲ領スル能ハス頗ル好意ヲ少クト虽氏我  
 積年説諭止マサルヲ以テ昨年ニ至リ彼自ラ其非  
 シ知ルノ意ヲ表セリ則チ爾時更ニ約スル所アリ本  
 年使伶ヲ交發スルヲ須ツテ將ニ旧誼ヲ修メ新盟  
 ヲ締ハントス於是乎我々其約ヲ履ミ本年二月  
 書ヲ修シ理事官ヲ派遣シ以テ其議ヲ終ヘシム  
 豈圖ランヤ接待相議ノ際ニ當リ彼々其儀例ハ新古  
 或ハ同シカラサルヲ論シ我服制云々ヲ以テ口實ト  
 為シ終ニ前約ヲ措テ省ミサルモ、如シ彼々遠ク  
 ハ數百年来ノ旧誼ニ悖リ近クハ昨年ノ約ニ背キ  
 我々對シ大ニ禮信ヲ失ス其事證別冊ニ記セル所ノ



如シ然リト雖モ我猶懇諭以テ不外ノ意ヲ盡クサ  
シトス若シ彼レ昏頑終ニ悟ラスンハ我豈之ヲ不問  
ノ地ニ置クヘケンヤ顧フニ貴國ノ朝鮮國トハ其壤ヲ  
接セリ我ノ先事之ヲ告クル所以ナリ等

以上

右忝ル五月朝鮮國應接ノ始未同月廿一日ノ進狀ニ具陳シ  
猶彼カ再ヒ其京報ヲ得ルノ後ニ答フル所ノ如何ンニ就  
キテ我進退三ヶ條ノ令旨ヲ仰ギンニ六月廿四日彼國遂ニ  
我新禮服等ニ接スルヲ許サストノ決答ヲ為セリ是レ  
五月陳スル所ノ第二即チ理事官一行彼地ヲ退去スヘキ  
ヤノ條ニ當レリ然レモ未ク其可否ノ令ヲ奉承セサルヲ以テ  
木林山茂ハ彼地ニ在リテ弘信ガ歸奏シテ更ニ令旨ヲ奉シ

傳報スル所アルヲ待テリ然ルニ彼國ノ我ト相持スル多  
 年ノ際一昨冬ハ大院君ヲ擯シ昨冬ハ民宰相ヲ害シ現今  
 ハ姜宰相國柄ヲ握ル等内憂外患並セ至リ其苦慮蓋  
 シ我ノ彼ニ於ケルニ倍スルモノヤラン而テ我ト或ハ  
 和或ハ絶其孤立獨カノ相抗スルヲ能ハサルハ彼カ固ヨ  
 リ知ル所是ニ於テカ彼レ清國ニ依頼センカ清國彼ヲ挑  
 唆センカ必ス幾分ノ商議ヲ通シタルベキハ頃日既ニ管見  
 ヲ録上セリ嗟乎前事將ニ失敗ニ歸セントス弘信謹テ  
 朝裁ノ如何ヲ奉侍スヘキハ固ヨリ其分ナリ豈喋々後來ノ  
 議ヲ建ルノ身ナランヤ而モ猶更ニ獻スル所アルモノハ  
 七轉八起必ス我邦盛意ヲ達スルノ端緒ヲ闡カスハ措  
 カス苟モ見ル所アリ自ラ顧ミテ黙スルヲ能ハス區々ノ微  
 衷伏テ悃諒ヲ垂ンテ願フ

明治八年七月十九日

外務省等出仕廣津弘信

午後第一時商人野田清三郎宅へ金福珠入来談和聞書

福上ノ様子ハ如何候哉

清上ノ様子トハ何等ノ事ナル哉

福  
言テハ話成出来又上ノ様子ヲ御前ニ聞サル哉

清此節之事ヲ我ニ存不申外向ニ如何ナル哉

福既ニ御用ハ此北日迄之約定之處十八日ハ御催但ニ相

成訓導モ大ニ心配致シ矢張り兩三日之間ニ水營并東萊

釜山ヲ馳セ廻リ都分申越候条件ト館内之事情ト相

話銘々之異見ヲ相伺ヒ候處何レモ申升ルハハカク

事ノ切迫ニ相成候ニ付テハ不得止事義ニ候間都表ハ

申來リ候通リヲ以相答可申付被申付候由ニテ即訓導

ハ其趣申出ラレ候處森山様御怒リノ様子ニテ然ル最

早夫レニテ亘ニ後日亦面會可致旨ニテ御立ニ相成訓

導モ事情申上兼其伋羅歸リ候然處今朝亦御時使ニ付

早速參リ候處昨年約定セシハ書幹差渡候上ハ信使ヲ

遣ニ候テ兩國睦シク致度旨ナリシニ其約定ハ如何致

スヤト御尋ニ付訓導答テ御書幹ニ片假名ヲ入レ候義

ニ付我國ニテハ其意味相訣リ兼然ニ此事紛失ニ付テモ

随分謝ムカモ知レ不申乍去第壹大礼服ニテハ東某モ

未夕森山様方存不申都々々々勿論之義候間一先日  
奉服テ御對面其節府使ニ御通レ被成下候共何レ  
トモ相成可申實に殘念之至可ニ座候迄

清其ノ日本服出ハ何之事ナルヤ

福常之服ニテモ其ノ方ニテ存候

清然ハ府使内太廳ニ羅出御面談可申上哉

福答テ尤モ其ノ通り相成可申然ルニ口惜イ事ハ昨年七

月以來御用相勤居ル今至リ事若シ破レ候時ハ誠

ニ訓道主是迄配也申斐モ無之館内之御用ヲ聞有

使ニ言不都引運七候内御約定申上候日限ニ迫リ不得

止ニ付昨日迄迄答申上候様之都合ニ立至リ此上ハ最  
早日延之願ニ難申出何分當月中力来月初旬迄モ御待  
被成下候ハ訓導ハ都ニ申遣シ置クル旨モア申テ其  
迄事ニ參リ可申上候 彌都表之様子否相分リ可申  
何分訓導之胸中御分ハ無之ニ付日限前ハ御催促ニ付  
實ニ當茲羅在候訓導モ此節之御用件首尾能相調候得  
バ千貫文ノ賞ヲ得候ハ高名国中ニ魁ニ候方遙ニ亘キ  
リ三度訓導ハ猶此情ヲ大緊志有ル者ニ相話ニ希クハ  
森中様ニ相貫キ候様可致ト人事ナリ然レ此上ハ連  
三日延相成兼可申若其日延相成候様之義相計ヒ候ハ

訓導ハ亦都ニ登リ御用相捌ケ候様仕度様子ニ看之  
候

清是迫追々遠約ニ相成志モ日延相成候テモ都ノ  
決議先例之通り杯ノ答ニ出候ハ、其申變無之ニ  
附付此度ハ安々ト日延ハ相成兼可申併ニ此度ハ  
趣意ヲ立候ハ、相成ヘキモ難斗候

福然其趣意ハ如何致候ハ、亘レケ候哉

清及今ハ訓導都ニ登リ御用相捌ケ候者ナラハ哉ヲ  
僕ニ召連片都ニ登ラレ候ハ、其趣意ヲ以日延  
支願有テ出来ガル事有之間舖卜戯ヒテ云



福笑テ夫ハ随介亘リ我モ其都合ヲ致シ可申候

清若モ都ニ行ニ都合ニ相成候ハ其都ニテ我ヲ殺

シテ呉レ非カ是カ實ニ恐口出ク候

福御前ヲ殺スト跡カ大変ナリト互ニ笑ハ以催ニテ別

明治八年六月廿五日  
河村萬次郎

一館内入來之韓人ノ話ニ理事官渡泊以來追々延期ヲ請  
フテ都表ニ往來スルト言モ實ハ北京ハ日本ト相交リ  
テイカヤト伺ハレタルヨリ專ラ内向ニ導致シ候由ノ事

一此項都ヨリ歸リ來リシ設問々將之忤然話ニ自分滯京  
中北京ヘ行シ使者歸リテ北京向之返答ニハ日本ト既  
ニ約スル事アルノ上ハ相交ハラサルヘカラスト云因  
テ使者ヨリ我國日本ト交ハリテハ異国人モ繼テ來ラシ  
事ヲ疑フノ意ヲ述ヘシニ吏レハ來ラストノ請合ハ不  
相成ト答ヘラレシニ付都表ニテハ左様相成リテハ甚

夕迷惑故矢張日本トモ交ラサル方ヨロシキ噂有之ニ  
由ノ事

一又北京ニ事アレハ其時ハ朝鮮八道之内三道ハ裂テ與  
ヘルトノ旧約余アル事ニテ此項北京ニモ魯西亜ト入  
組事相生レタルヨシ故若事アレハ我國ヨリモ約ハ通  
リ三道ハ譲リ與ヘ子ハナラヌ勢ニ可相成ラスレハ朝  
鮮地方モ狭ク相成甚タ困リシ事ノ由噂致シ候事

明治八年六月廿八日

河村萬次郎

朝鮮国多年我尋文ノコヲ拒ムニ旧規ニ依ラ  
サレハ許設セストノ一言ヲ固執スルニ過キ  
ス而メ昨秋彼遽カニ外務官負ニ面セシコト  
ヲ求メ始メテ我旧例ニ循フ能ハサル情由ヲ  
審ニシタルノ意ヲ呈シ翻然圖ヲ改メ我外務  
卿ノ書契ヲ接受スヘキトノ新例ヲ約シタリ  
爾後彼權臣免黜ノ事アリ今其国柄ヲ握ル姜  
氏ナル者素ヨリ大院君ノ黨與中最モ暴慢驕

恣ナル者ノ由故ニ国論亦隨テ交換スル処ナ  
リト云爰ニ本年二月我昨年ノ前約ヲ履シテ  
外務卿書契ヲ賚シ渡航セシニ彼既ニ前約ア  
ルヲ以テ遽カニ之ヲ拒ムニ術ナク辭ヲ我服  
色ノ古ニ異ニ且ツ西洋各国ノ服色ニ類似ス  
ルニ疑フニ藉リテ接待ノ期ヲ遷延シ其間国  
議ヲ尽シテ遂ニ前年ノ固執ニ復シ隣邦古今  
一般凡例違舊則不可許施ト云ヒテ断然我ヲ  
擯斥シタリ今其始末概畧ヲ陳スル如左

本年二月至六月朝鮮國尋文事務辦理始末

### 概畧

一 初ノ<sup>二月二十五日</sup>我前議ヲ襲フテ東萊府前往ヲナ

スノ事ニ付テ彼レ未タ京報ヲ經サル旨ヲ以

テ其意報ヲ取ルノ間二十五日ノ延期ヲ乞ヒ

二月廿六日又外務卿及大丞書契謄本ヲ示サ

ニ事ヲ乞フ<sup>三月三日</sup>我皆其所請ヲ諾ス

一 遲延期限<sup>三月廿二日</sup>至リ訓導館ニ就キ東萊府

使カ我ト面接スヘキ命ヲ承タルヲ秘シテ已

レカ上京ノ命ヲ奉シタルノミヲ告ケテ猶其  
往返ノ日子ヲ俟シ事ヲ乞フ我迫リ進ムニ及  
ンテ其真ヲ吐露シ其過ヲ謝シ誓書ヲ以テ府  
使面接ノ日期ヲ約セリ  
三月廿四日

一府使面接儀例節目中我服色等ノ事ニ付テ彼  
之ヲ受ケ難キノ意ヲ述ベ我ハ到底之ヲ變ス  
可ラサルヲ弁シタリ  
三月廿七日

一其後訓導遽然約ヲ反シ府使面接  
四月一日ノ事ヲ  
置テ上京セリ其時遺シ致セシ書中ニ我書契  
本文真謗混書及其格式違旧圖書返還路引改

式火輪船騎來相接儀節服色異古等ノ丁上京

詳陳スヘキノ意ヲ具ス

三月三十一日

我モ書ヲ投シ

テ訓導カ失信反覆ヲイフ挙ケ且書契略引次

船等ノ丁大弁セリ

四月一日

一訓導都ヨリ下リ

館ニ入リ

五月八日

先浦瀬ニ就テ

書契国文ナル者我朝疑怖アル旨ヲ述ヘ又理

事官ニ接シテ

五月九日

府使教意ニ承ル書ヲ以テ

相接儀節従前無例ノ丁ハ設行ス可ラサルヲ

示ス我亦之カ弁駁書ヲ投ス

一訓導又來リ云フ貴国服色ト正門出入等到底



變通ノ途ナシトナラハ府使ヨリ再ヒ朝  
仰クノ日子ヲ曠フセシヲ乞フ我云ク訓導上  
京前既ニ我服色ノ變ス可ラサルヲ領シテ之  
ヲ詳陳セシニ非スヤ今又再三ノ延期ヲ乞フ  
侮蔑愚弄亦甚シキヲ論スレ氏列后暖昧明答

ヲ得ス五月十日

一訓導又府使ノ意ヲ以テ自ラ書ヲ見メス書中  
益我服制ヲ擯シテ之ニ干預スルノ意アリ

五月

十六日我亦彼カ我服制上ニ干預スル事及ヒ前

約ノ履背ヲ暖昧ニスルヲ責ル書ヲ投與ス

五月十  
七日

一訓導我書ニ對スル書ヲ致シ自ラ彼ノ朝ニ罪  
ヲ請ヒ勅ヲ待ツヲ示シテ我ト往復ノ途ヲ絶  
ツノ勢アリ而猶更ニ京司ニ報シテ府使相接  
ノ裁ヲ仰クノ間日子ヲ曠フセンヲ乞フノ意  
ヲ真ス  
五月十  
八日

一訓導又就館テ京報ヲ得タル旨ヲ筆シ之ヲ見  
メシテ曰ク獨リ服色ノミナラス凡例違旧ハ  
許施ス可ラスト而シテ昨年ノ所約ノ履行如  
何シヲ問ヘバ彼ハ府使面接ノ議相悞ハス昨

約講明ニ由シナシト答フ  
六月廿四日

以上

口陳書

爰襲前約賚我外務卿之書而未者為一商量兩國  
交誼事實屬至重務當盡信義不可有挾一毫私心  
而涉波滯若或托病辭難或臆度張疑議以誤大事  
則大為兩國所憂蓋交際之法者自有公道存焉遵  
之則共得綏寧戾之則從受其弊豈可忽哉故今先  
事陳之朝鮮國修交從事之客官宜盡力以期趁速  
就順便

明治八年二月二十五日

奉新三陳禮國

大日本國

之頃其時然事決之頃對其副官廣津弘信今山

傾入之西國所費蓋支新之表自前公直陳此

而新表新表為外海船籍必與氣求新船之

支新事實誠至重無當盡詳弄不以下前姓一

委辦諸務實亦非陳明之書而奉首盛一商置西國

新書

星槎遠涉深荷隣好之誼而使帆渡泊書契文意  
與迎接等事即當轉稟

朝廷恭候回教在所不已之事也蓋往返之間當費  
日字而且先者審書契按之意有承

本府使道教意矣僕等已自昨年秋公幹底意重  
出於善隣敦好之誼也今於

尊公再航之日豈欲宜力之少緩乎自我事例及  
有未逮俟二十五日則以昨秋前使道所答約中

二  
第 二 件 事 當 期 周 旋 矣

統 誥 是 希

乙 亥 正 月 二 十 日

訓 導 玄 普 運 印

別 差 玄 濟 舜 印

理 事 官 尊 公

副 官 尊 公

星槎到泊後初次報狀 朝廷回下內本府 使道  
往宴廳以為相接為教故六日中相接之事當往稟  
于 使道前議定其日子以本月二十日為之面答  
因請本日出門遲之若有違相接則唯在 貴官之  
措處矣 深諒是祈

乙亥二月十七日

訓導玄昔運印

理事官 尊公

副官 尊公



自昨秋以來、隣誼修好、誠心共濟、而星槎出來後書、  
 契與路引、謄報我朝廷矣、及承旨回下、則以慰遠  
 涉之勞、特設宴饗、而以書契真諺、混書係是三百年  
 未有之事、且拾式有違舊規、因書之還送、路引之改  
 式、火輪船之騎來、有欠誠信之意、詳布為教、故宴  
 饗、即欲設行矣、逮夫儀例相確之際、忝聞館中意  
 向、則不有前日之規、務從新式、且館中赴宴之服  
 色、大異於前日所見、

貴國服色而有同於他國衣服甚々訝々我國之  
於貴國幾百年交好即是衣冠禮度各盡其義而  
今者貴服之異儀節之變既如是則此亦不可不  
稟白子

朝廷受侯且慶令也宴享日字自至差退而前後公  
幹事情亦不可不上京詳達以因順使而事係時  
急未遑就館作別今方星夜啓行茲以替書仰報  
幸勿以奉別未暇為咎姑俟僕之未往以因兩  
國敦好豈非義事乎僕於千里跋涉既不忍勞而攢  
程則僕之心會庶可辱照而詳揣也僕之未往不過

一朔其間 安能自護胥期順便是祈之緬惟統亮  
不宜

乙亥二月念四日

訓導玄昔運印

理事官

西尊公

副官

凡号

我明治一年告維新情由於 貴國以來為歲幾年  
差使幾回而 貴國不納及昨年八月 貴國始知  
有中間擁閉之徒方行拿捕之際會茂與 貴國官

并面晤而約我外務卿修書 貴國祀曹判書更  
撰幹使賚抵東萊以商量尋交茂歸 奏可之於  
是修書如約令茂及弘信往東萊以修前議乃以本  
年二月十五日辭 京同月二十四日未于以與訓  
導面議訓導稱東萊府使委代之旨以有所請乃附  
書契謄本以致府使而遲前往東萊之期者二十五  
日及三月二十四日訓導未謂初次報狀

朝廷回下內府使承接倭等於宴廳之教意故議定  
以三月十九日相接之事及同月廿七日訓導就館  
請相接遲三日而其期在今日何料昨日訓導具書

以報上京而書中有言書契莫諉混書圖書之還送  
路引之改式火船之騎未有然於誠信之意矣不知  
是何等之言也無偽之謂誠不爽之謂信今所斥言  
歟者皆昨秋說明於任官而無少偽爽者非誠信何  
也又曰貴國服色而有同於他國衣服不可不稟  
白于朝廷更俟處分夫制度文物雖國有定制而  
從特制宜古往今來何常之有而當賓主相接之期  
遽問其衣服外貌之異同於他國豈所謂交際以誠  
信者哉我邦所重在尋回誼講新盟而遽延至今日  
猶且作言如此未審貴國底意所在蓋交際之道

者自有公道在焉遵之則共得綏寧戾之則從受其  
弊豈可忽哉此意前既具書以付訓導顧貴國在  
將命之各官早既領之矣夫人有土倫隣國遣使接  
使是即朋友之交固當信愛其權其利詎容侵越僕  
等固履約守信之使負意謂貴國必應有速酬我  
誠意者而在此地數月及聞本日相接之事信貴  
國有稍存友誼也言猶在耳疑訝尔萌何其與前日  
所議永炭不相容也事至此不用煩言而本使等亦  
不得不報事由我朝廷故令使副官歸國以聞  
若夫訓導往還不過一時則在待其回音以議將來

耳茲陳之 朝鮮國修交從事之各官各官其領之  
明治八年四月一日

大日本國

理事官 森山茂

副官 廣津弘信

甲号

乙号

使道教意內相接時儀節中客使之衣服變改正  
門出入本官迎接坐席相近屬官交椅坐俱是無例  
則唯當依例設行矣故茲以書陳 俯諒焉

乙亥四月初五日

訓導玄昔運印

理事官 尊公

右照復

一使道相接儀節中客使之衣服變改是為無例云

云



夫制度文物隨時制宜今日用之明日廢之唯是  
為主之權典章之所在何容他國之議議若及于  
此于預侵越莫甚焉交際成於禮敬我邦不殷是  
服則無以成禮敬貴國安亦取之

一正門出入云云

本官則大日本國之派員非昔日對馬州守陪臣  
之比州守之書契猶出入正門州守現任外務大  
丞大丞親來則將自何門而出入本官則為少丞  
其所職所掌彼此何差固應崇其禮遇蓋崇其禮  
遇者非獨崇敬使員乃所以崇敬友邦也所以崇

敬友邦者則所以崇敬自國也

而以一項我邦名分之所關非止本官一身之榮辱  
故斷不可聽新書中依例云云援何等之例而妄  
之係貴國創定乎將係對馬州守俯守之旧例  
乎細領朱立何例之有若夫府使迎接坐席相近  
屬官交椅是等小節目耳不必強辯但坐席太遠  
迎接太簡則情意不洽所宜接主之注意也  
右所逃言簡而寧非輕故以東某府使口陳書趁速  
明答爲

明治八年五月十四日

大日本國理事官森山茂 印

東萊使道教意內。即接日前所告。則事有不然者。  
 今以膚見條辯之如左。以此意更為詳言于館中。務歸  
 誠信相孚。情誼無阻之地。為可。客使礼服之隨時  
 制。臣典章權經之各有主。誠如客使所言。我國  
 豈欲使越而于預哉。第三百年相接之地。衣製忽殊。  
 則我之驚怪疑問。人情固然。而况衣製之有似乎我  
 所作之地乎。備使衣履同於他國。吾何必以

以是斥之乎、直為其近於所斥之地、故斥其衣製也、  
非有疑於客使也、夫昔聖王礼服、自有上衣下裳  
之製、典章昭々、客使誠欲更製、何不取此而取於  
彼耶、舊時衣服、前此三百年、曾亦以此服成礼敬矣、  
有何前後之不可乎、大抵今日宴餉、自朝廷特  
軫、客使遠涉、蛟海屢返、而久留近十年、阻絕之餘、  
別示慰勞、申好之盛意也、此日豈改更制度之地  
乎、

客使之正門出入、客使所言、非曰不然、今日之務  
循舊式、非不敬、客使而然也、雖儀節間細事、事係

叔新則不得不稟于朝廷在我之道唯朝廷奉  
行而頃者啓聞未承許施只以依舊式舉行之  
意更承申飭客使獨不可姑從主人之言順成宴  
礼乎今此客使之以是三條為名分榮辱之機開  
誠不可解也若使我國更定約條之後不遵定式必  
欲降屈之則果係名分榮辱使臣之死守不易礼  
固然矣未有定約而不諒主人之意遽以名分榮辱  
作為斷案我不敢受以為過何不明辨而申言之耶  
本府迎接坐席相近屬官交椅客使不以為辨今  
亦更不條辨耳主客相接之際情誼之洽不洽在

於誠信之字不字、豈在於迎接之簡不簡乎、使事  
次者順成、主客相字、則豈非兩國之大素主、  
客之義事歟、我意如此、須善為說辭、以為宴禮順成  
之地、為厚、

右使道所承、朝廷之命意也、而使道不以  
書報之者、以書契尚未結末、且書信往復、未承  
許可故也、乃使僕轉教此意於兩尊公前、  
清鑒是荷、

乙亥四月十二日

訓導玄昔運印

理事官尊公

副官 尊公

右監謀

丁号

本官等履約起程忽已四閱月未嘗一經貴國款  
過嚮者割道虛無上京尤屬反覆無信而以其書  
有貴服之變儀節之異不可不稟白朝廷更俟處  
分云云姑待僕之未注以罔兩國敦好豈非義舉  
哉云云未注不過一兩事間安心自護晉期順便等  
之語故強起以待而及其歸報也因弄變幻不一言  
及前約之履背所期何事美事何在更又以朝廷年  
意及府使委代之書以論服制等之事其言頗涉

侵越、本官輸誠致款、不為不竭、而滋端如是、其咎孰任、要之、兩國好交之成否、在此一款、故條辨之以陳、朝鮮國交際後事各官、前、畢言至此、萬出得乞、請速、明答、為

衣製忽殊云云

衣製改革之事、昨秋既終、未暇制圖式、於訓導數月之久、豈可無訓導陳之、府使府使啓之、政府之、日、茲而今至客蔭門、朔月之後、曰衣製忽殊、我之聲、怪、亦莫甚焉

衣具衣製也、非<sup>有</sup>疑於客使<sup>使</sup>也



我大小礼服則模倣上古之制而与时酌宜典章昭  
天下萬國誰敢容喙而今曰作其衣製也非有疑  
於容使也既作我服則作我邦也而巧言曰非有  
疑於容使是以不作為作避作之名居作之實何等  
操弄何等無礼

昔聖王礼服自有上衣下裳之制衣制誠欲更製何  
不取此而取於彼耶云云

聖者贊其德王者君國之稱天下古今何國無聖王  
而我所奉戴之聖王者無他即萬世一系之天皇帝  
是也今所稱聖王者指何人言之乎竟何人辨何人

禹湯文武又何人也所謂因事制礼利使之所在古  
今易地皆然安容他議且上衣下裳云云似以我服  
為衣裳無制又曰誠欲更製何不取此而取於彼是  
何考優越干預

則有何前後之不可乎云云

三百年前與今日亦皆可而無一不可者其可廢者  
廢之其可用者用之既廢之又既用之主權所在何  
之不行不待智者而後知也

此日豈改更制度之地乎云云

相接俄節則和而情中亦好之事苟若其盛意

者儀服儼然固其所也豈有以此日改更制度之理  
哉實是鶻突不了之語

裕欲從旧式非不敬客使而然也云

昨秋貴國始審我邦百度誰新不能其後旧式  
之由翻然改圖以開尋文之緒然則曰制曰式果指  
何等而言之手曰式莫須有也而謂其不可謂強其  
不可強務欲令從之非不敬而何

未承許施只以依旧式奉行之意更用申飭云

因議既如是乎何必須反復縷陳接之与不接只要

請教一言

為名分榮辱之機關誠不可解也云云

典章之所不在不容他議者前既詳論之苟容他議則  
國何以獨立而貴國以條約束定藉口以推諉名  
分榮辱之斷案輒曰誠不可解也曰不敢受以為過  
也悔蔑亦甚安可默止但以本官在尋交將命之職  
故今不強論之也乃以讓於他日

主客相享云云

迎接之末節不必須刺其至主客相享等之語  
則兩情無少背馳而其言雖美其事相反縱令費  
千萬言猶不可見其順成兩國之大幸主客之

養事果期何時乎

明治八年五月十七日

大日本國

理事 官森山茂印

副 官廣津弘信印

戊号

在於就事論事各陳所蘊務歸講明在理固當而其  
所講明不在於言詠書字之侵凌強迫況主客之  
交必致相敬然後可成禮貌也僕於出入館中悉心

致款靡不用極而夫何取侮轉甚至有來書之如是  
蔑如此果自侮之致歟貴官之不諒體禮吁亦甚矣  
寧欲無言而顧此事勢實不可一日冒居此任自損  
國體故方欲請眾候勘於朝廷何必辨說於館中  
辛茅書未末有曰陳于朝鮮各官云者非特無例  
無據從意作書欲使輪鑿於隣國之各官可謂有  
礼乎無礼乎意貴國近日衣服即當時禮制云然則  
其何中廢於貴國傳行於他國而貴國之後曰  
適在於他國通和之後余我國則但所見有同於  
所作之地故疑恠為同者而交隣係遠兩國重大

之事則任官之所可擅斷况宴儀相持竟至如是則  
不可不更報京司以俟處分矣日子曠費雖是  
固然惟希 清亮為

送來書意在我直不可受而受之故元本茲封  
還而自外入去書意之有不可收領者亦為還  
是企

辛亥四月十四日

訓導玄哲運印

理事官尊公

副官尊公

訓導玄公前

送來單札收領以呈 兩官公前 有 教曰 仇有公  
幹辦理之書 無來而不受之無受而不辦之也 來書  
中復論 我服製子預亦甚矣 其曰陳 朝鮮國交  
際從事名官者 陳之於其可陳之人 云爾 再因非泛  
言旁稱 訓導則為其官 使送亦其官 上之則  
祀曹名位 亦其官也 皆是可得陳之人 訓導柱為  
輪鑑之於 朝鮮全國名官 以諸例與祀之有無不



亦經於其他涉私情者不煩論之也僕承此教以轉  
致之於公今公更報京司以俟處分之事實  
是兩國重大之公幹為望速報其回教不備

昔日所携去之答辭書回無封還之理故既作  
付焉

明治八年五月十九日 浦瀨書生

送來滿幅 示意次第詳悉而 貴弊間不可以自  
引張皇相持也、事係重大、不能自專、方修報 京師  
矣、待 回下可以就議、深諒、 爲不備、

僕則以勞劣之致、自 本府請眾 烹師矣、將  
未知處分何如、而俟勘中不敢以公辭、惟復然  
既有送示、妄茲修謝耳、

乙亥四月十六日

訓導 印

以相接儀節之時 貴國服制舊相持事已仰稟  
示朝廷矣 臣等因兩國交隣古今一般不獨  
服制凡例舊相持則不可許施之意詳確為教而進使  
道教意亦如是茲以仰陳俯誦為哀 謹言 謹言  
順治五年五月廿一日 訓導玄苗連御江下奉

理事官玄尊公

副官玄尊公

幹傳官

三代官

令公前

即見章亦則不貪知事聖臨公以則遠處上下未而  
來初可以此此矣茲以相報以以此意詳告于理事  
正然山南官公前十廿下卡等三之其公幹事然則遠處  
上下後獲可詳耳為此報上

乙亥五月晦日

謝魯印

理事要畧

明治八年二月廿五日訓導玄昔運就館面接

我理事官一行ノ姓名各ヲ述シ及ヒ我①号ヲ  
口陳書ヲ附ス

明後廿七日東萊府ニ前往スハキヲ告シ

同廿六日彼ヨリ入府ノ事二十餘日ヲ待タニ  
一ヲ乞フヨリテ我ヨリ府使ノ各ヲ以テ之ヲ  
乞フヘキヲ談ス

三月一日訓導ヨリ府使ノ意ナルヲ以テ延日



狀ニテハ其要領ヲ得難ニ汝速ニ登京スヘシ  
トノ命ナリ故ニ今再ヒ京路往復間ノ日期ヲ  
曠フセシヲ乞フ我云足下ノ上京ハ我可否  
スヘキニ非ス本官等ニ於テ此上門外ニイム  
ノ理ナシ東萊ニ入テ其相接ノ期ヲ待ツヘシ  
トテ其調度ヲナス

同廿四日 訓導ヲシテ入府ノ先導ヲナサシメ  
將ニ館門ニ臨ムノ際ニ至リテ訓導頻リニ歸  
館ヲ乞ヒ乃チ六日、内東萊有使ヲシテ宴廳ニ  
往ドテ我ト相面セシムヘキ事ヲ擔當スル処

①号約書ヲ致シ今日ノ出門ヲ緩フセシテ乞  
フ乃チ其書ヲ収メ出門ノ期ヲ寛フス訓導其  
過チヲ謝シテ退ク

同廿七日 訓導来リテ府使面接三日ノ延期ヲ  
乞フ之ヲ容ル浦瀬裕ヨリ面接ノ儀即ヲ談ス  
其内我新制礼<sub>服</sub>及正門出入等ノ<sub>事</sub>被レ  
之ヲ難シス浦瀬亮<sub>氏</sub>我服色ノ愛ス可  
ラス正門ノ出入セサル可ラサ<sub>ル</sub>事ヲ辨論  
ス

同世一日 訓導①号書ヲ致シテ我書契真諺混



書及其格式違舊々圖書返還路列改式火輪船騎来  
相接儀節服色異古等之事ニ付テ自ラ上京詳  
陳シテ順便ヲ謀ラサル可ラス故ニ復ヒ一朔  
間ノ延期ヲ乞フノ意ヲ陳ヘタリ而シテ其身  
ハ既ニ歿シタリト云フ

四月一日 我ヨリ彼国修交從事ノ各官ニ陳ス  
ルノ書ヲ投シテ訓導力及覆ヲ論シ書契路引  
火船等ノ事ヲ弁ス

五月五日 訓導ヨリ書ヲ浦瀨ニ致シテ東莱へ  
下着セシ目ヲ告タリ

同八日 訓導入館浦瀨ノ寓ニ就テ云書契国文  
ナル者我朝疑恠アリ且ツ昨秋擔當宜クセシ  
大臣免黜セラレテ事務沈滞ス又皇勅及ヒ大  
字等ハ清国ニ對シテ到底難受服制旧ノ如ク  
ナラサレハ許接ス可ラサル等ノ一ヲ陳ス浦  
瀨曰貴朝廷意ノ所在有使書札ヲ以テ答ヘラ  
レ可然ト

同九日 訓導入館理事官ニ接シテ有使教意ヲ  
受ケテ陳ル処①号ノ書面ヲ出ス其意相接ノ  
時儀節中衣服異旧正門出入迎接等従前無例

同ノ事ハ設行可分サズ意ナリ我ヨリ此旨  
意違フアラハ迎接セサルヤヲ問フ彼云然  
ラス其服製他国ニ似タルヲ以テノ故ニ願ク  
ハ舊ニ異ナラサルヲ欲スト我曰我服制ト正  
間出入ノ一決シテ変ス可ラヌ且東萊前往  
ノ事ハ如何彼曰来々決セサルナリ於是我ヨ  
リ彼カ兎角前約ヲ曖昧ニ附スルヲ責メ且ツ  
大日本ノ大ノ字ノ事由等ヲ弁論シタル上ニ  
テ右書面ノ并駁書㊦号ヲ示シタリ

同十五日訓導入館曰ク府使ハ依旧テ接遇セ

ヨトノ命ヲ得テレシニ貴国新制服色ト正門  
出入ノ事ト到底変通ナシ難シトノ義府使ニ  
於テ再ヒ朝裁ヲ仰クハ趣ナレハ其間猶待  
テ乞フ我ヨリ我服色正門出入ノ事到底  
變通ノ道ナキ只訓導上京前詳悉シナカラ  
猶又再三延期果シテ何等ノ趣意ナラハ  
ト是ヨリ彼々屢背約失信ヲ責メ互ニ談  
判時ヲ移ス迄到底曖昧糊月日ノ遷延  
方謀心ニ過キス

同十六日 訓導府使ノ教意ヲ承ルヲ以テ(西)号

シ書ヲ面リ列<sup>改</sup>セリ書中我服色ヲ擯シ更製何  
不取此而取於彼耶ノ語アリ而テ務メテ我ヲ  
シテ彼ノ所言ニ曲從セシメシトス且府使未  
タ我ト書信往復シ許可ヲ兼ケス乃僕ヲシテ  
此意ヲ轉致セシムルトノ意ナリ

同十七日昨昨日訓導カ出セシ書面上ニ付テ彼  
が春未<sup>レ</sup>ノ反覆ヲ論シ且我衣服ノ制度上ニ侵  
越干預セシイ等ヲ朝鮮国交際從事ハ各官  
陳<sup>ハ</sup>ト云<sup>フ</sup>①号<sup>シ</sup>書ヲ訓導ニ授ケタリ訓導モ  
亦我服色ノ種々ナルヲ難シ<sup>シ</sup>ニ弁論遂ニ其

書ヲ収メ歸レリ

同十八日 昨日授ケタル我并駁書ニ對シタル

訓導ヨリ ⑤号ノ書ヲ致シテ已レカ出入悉心

致款尽サレル所ナキニ却テ蔑如セラルハ貴

官ノ礼躰ヲ諒セサルモ又甚タシ顧フニ此事

勢一日モ此任ニ居ル可ラス故ニ朝廷ニ罪ヲ

請ヒ勘ヲ待ニト欲ス何ソ必ス館中ニ并說セ

ニヤ但示書中ニ朝鮮国各官ニ陳スト云者ハ

特ニ例ナシ縦意作書シテ隣国ノ各官ニ輪鑑

セシメントス礼ト云ヘキカト駁シ其未更ニ

京司ニ報スルノ日子曠シク費ヤス公是問ス  
ト虫氏清亮ヲ希フト云ヒテ猶延期ヲ乞ノ意  
ニ結ビタリ而テ附言ニ昨日ノ書ハ安シテ  
受可ラス還付ヲ為スト云々

同十九日浦瀨書記生ヲシテ訓導ノ昨日ノ書意ヲ  
弁シ并ニ我々ヲ封還スルノ理ヲキヲ論シ又  
京司再報ソ回答連ナランヲ期スルト云(巳)号  
ノ書ヲ訓導ニ送ル

同廿一日 訓導(庚)号ノ各ヲ浦瀨書記生ニ致シ  
テ京師回下ヲ待テ議ニ就クヘシ僕薄劣ノ故

ヲ以テ本府ヨリ罪ヲ京師ニ請フ処分ヲ如何  
ヲ知ラス儻勘ノ中敢テ公幹往復ヲたサスト  
云ヲ示シ来レリ

同廿五日 雲揚艦来泊ス

同廿六日 訓導就館雲揚艦ノ来意ヲ問フ我曰  
リ使事延滞ノ故如何ヲ我輩ニ問フソ為少ナ  
ルヲ以テ答フ

同三十日 訓導就館曰款好商量中軍艦忽チ渡  
来ス上ナリ疑惑少カク又府使僕ヲシテ之ヲ  
問ハシム我曰我邦外國ニ派セル使臣軍艦ニ



テ護衛セラル、ハ曾テ通告ヲ經タリ既ニ派  
シタル使員及ビ外國在留官員等ハ命ヲ傳ハ  
ラル、為メ軍艦派出セラル、モ亦通例ノ事ナ  
リ貴國疑惑ノ情アラハ此ヲ以テ索セラレバ  
軍艦ノ名ヲ誤認シテ特ニ戦争ニソミ用ルト  
為ス勿レ彼曰諾我曰更ニ待ツ所ノ京報其回  
下果シテ幾日ニ在ル彼曰料ルニ来月十五日  
我六月乃至廿日間ニハ回教至ル可シ確答ハ  
ナリ難シト云テ日期ヲ曖昧セリ

六月十二日 第二丁甲艦渡来セリ

同十四日 訓導就館丁并艦ノ来意ヲ問フ我曰

貴国我来意ニ答ヘズ使事延遷故前艦徒泊又

新艦ヲ督促ヲ得タリ我輩實ニ惶悚ノ至ニ堪

ヘズ彼レ丁并艦一覽ヲ乞フ我曰過日足下云フ

軍艦ハ見ルニ不及ト而テ此一艦ヲ覽ルヲ期

ス艦長或ハ異見ナキ能ハス彼云二艦共ニ一

覽ノ允許ヲ得ハ幸甚ト乃二艦ニ告ク二艦許

諾ス訓導艦ニ乗ニ及ニテ艦長調煉ヲ一覽セ

シムルヲ告ク乃チ炮門ヲ開テ發射ス山鵠水

立チ烟焰四塞初一發ノ片訓導一行十八名戰

慄立ツ能ハス頻リニ往永辰安カ袂ヲ引テ艦  
長ヲ令シテ之ヲ止シ一ヲ請フ機械砲礮其他  
百般ノ整肅ナル駭目聳聽セサルナシ而テ其  
吟謦醜體實ニ見ルニ忍ヒス

同廿四日訓導就館京報ヲ得タル旨ヲ陳シテ  
曰京師ヲ教ニ曰相接儀節獨リ服色ノ事シ  
ミナラス凡例違背トキハ許施ス可ラスト  
故ニ斷然貴國ノ新服色ヲ以テ相接ス  
ルハ不相協ト○辛号書面ヲ出ス我ヨリ  
昨年ノ約ニ如何ニスルト問ヘハ彼レヨリ

府使ト面接ノ議不相協ニ於テハ其講明  
ニ至ラスト答フ

同三十日訓導就館我ヨリ我新服色ト相接セサル既

ニ詳悉セリ而テ昨年約スル所ノ事情然不同ノ地

ニ措クモノハ貴國自ラ此ニ安シスルカ將夕別ニ和

好ノ道アリトスルカノ意ヲ以テ叮嚀スルモ彼レ和

好ノ意ナキニ非スト虽トモ之ヲ保ツノ道ニ於テ

如何トモスル能ハスト云フノ意ヲ以テ答ルニ過キス

七月三日廣津弘信將ニ錨ヲ拔ントス訓導⑤号ニ答

テ浦瀨書記生ニ馳セ致シテ曰ク別遣堂上六月

初

彼六月朔ハ  
我七月四日

到着スヘキトノ京報ヲ得タリト廣津ハ

森山ト其果シテ下リ至ルノトキ之ニ應スヘキ豫議ヲ

定メ其身ハ散テ之ヲ顧ミサルカ如クシテ遂ニ錨

ヲ拔ケリ

六月三十日刑部送江新寓書來相與於大畧  
過臨江前都表相達於江賦中今般廟堂利  
事中一名人撰近日東甚之時差下此事決議相成  
於近日相人出京可致赴申裁於尤之報也數日  
因對着可於存於左判事時差遣於全之以  
編一取招之為相達之可相成今暫一兩官公  
之門深之於少於又之都合之有之小難  
係其人之看於其時之多不抄者之不集之故  
職可被申付之於其又其人之協力因旋可致  
申付之難於其博其何也其抄者之於之不都  
合

事を昨昨年来微力を盡し於今今四能職達心  
於今所謂中道といふ廢る類に其骨朽水泡を  
陽し何令罷職を免のて其人と共に所困を相共に  
公幹順成といひ畢竟其人の懇切と相成遺職無限付  
只可成其人小着也といふ二三番通はぬが同家法に  
授けたりたり又申立書し可多之を存す  
一理事官にも昨昨年来三月月日通渡居たり  
其順成を昨昨年来三月月日通渡居たり  
叙廟堂之形勢一書し終に今日より百事支吾し  
其運よくいふも甚難矣といふは其両官公に相面す

毎六日責問を多し、以事情と云ふ福を申す、元祖  
 一云と云ふを得、物有し朝廷に向つて更なる辭し  
 延引國却る、亦多之其三月月多し、その成を申し、物有  
 別々、庇陰を得、多民宰相、推中なる、此年、是、因命  
 隨以、長刀いふ、し、朝廷向、都合し、元祖をかりし、よ、不  
 料、し、此冬、臣氏、逝去、し、相成、其、跡、ハ、妻、宰相、前年、東萊、  
亦、便、勅、し、人  
 柄、權、を、執り、其、罰、を、怒、り、兩國、し、る、之、は、是、吳  
 福、有、し、抑、有、し、殆、と、不、首、尾、之、場、を、り、齒、感、心、に、恨、り、  
 左、以、人、元、大、院、君、と、堂、類、を、誅、し、相、密、し、方、柄、を、上、願、  
 假、慢、を、以、た、り、し、同、國、と、り、大、院、君、し、不、遠、入、地、所、と、



勢至申事之後

左申出於通下申上於虛實可然且多餘之為也

明治八年六月三十日

浦願 祐

朝鮮國滯留中より歸

朝廷より多量に復命書類を十一月十日差出置かれ後  
此以下お成居る要猶又より此より申越え類政事知  
り復命書に應接書に復命書周急一件書尋更商量  
に滯留由累書に差出され由落しより松原に  
存也

明治六年一月十二日

花房印務大丞

史官傳中

朝鮮國草梁公館ニ兼テ宗從四位ヲ相諾サセ置候代官共ノ所  
業間々不審ノ儀有リ殊ニ去々未冬本省十等出仕相良正樹ヲ  
宗氏家人ノ名ニテ大差使トシテ宗外務大丞ヨリ朝鮮國禮曹正  
東萊府使金山金使ヨリ書翰ヲ為持同國ハ差遣サレタリ又  
朝鮮ニ於テ接受禮ヲ受キ返答期ヲ定ムス候ニ付談判ヲ未返答  
期ヲ定メシカ者昨夏押テ東萊ニ入府使ノ面會ヲ望ミ候得共  
固辭ニテ接見不致ニ付空ク歸國政ニ以テ前書代官共彼ノ通事  
等ト内通致シ右面會ヲ遮リ以テ不聞有リ茲府外務大丞彼地

出張中取調あり館司深見正景一代官海津茂左衛門外之  
申口別紙口書之通り有之以付尚司法省に於て篤卜取調  
之上相當に法要置りて成松<sup>同前</sup>中沙法に成茂依り別紙口書類  
相添此段申進候也

明治六年一月

外務卿副島種臣

正院

東果弓和中通事生身像身

深見六節口書

寺通

春田長十節口書

寺通

海津長十節口書

四通

上野敬助口書

云通

中山喜兵衛口書

九通

相良正樹若拙者入府中數分彼より小通事より代官所へ  
府使面接可段か言存分尋来い由より紙紙河より返答に  
及いり此確證よりいふも面儀より候い出心得可とねきい  
方より少事由津茂を部より取知より各事田長十部より中  
半多事

方より候中上々

九月十五日

深見六郎 印





中山ノ事一承リニ

五月廿八日、頃、ト光武、ト中、ト通事、ト竊、ト入、ト報、ト中山、ト毒、ト之、ト間、ト

件我々も所を不審所と云ふ候中候也

右中候より云々、東条府使、而て被是差出可致候、

あつ候とお心得に故に、此面儀外要る候、

方より、此合に、此より、大小通事、わう中分、此儀、

且て探索ナト、恐也、有、一已に、南流、此儀、

前章、此合、尋、此儀、善惡之事、と、お下、

前章、此合、尋、此儀、善惡之事、と、お下、

九月十九日

海津、此合、尋、此儀、



此像身面有大小種種之相拘中上之相此差等之相在居得此  
者等之像了也爲事相也其不也心得此像之相難量中上之相  
却石迷也其也其也其心得一已之相此道以心也其也其也  
本之也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

台基對面橋之東身中山上即也  
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也  
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

差使能司以下東萊入府中一市中竊不通事入彼  
中山者之謂一也尋以是府使勿議方之儀身分乎我  
少得身且野致也中山者之謂一也我中身以府到  
府者之府使之所置以事之不被即以此及區之而如  
也者中以先般於韓地初府中尋之而事之奉以而也  
後以事尋之而事之而後以事尋之而事之而後以事  
也者中以先般於韓地初府中尋之而事之奉以而也  
也者中以先般於韓地初府中尋之而事之奉以而也

十月十五

出津為志郎判

文

法重困を以て法利に之を不務有る事は代官所  
 によりて貿易に法を以ておん裁に新規に裁官に事ぞ  
 一切関係は法を以て所存を裁に府使に議に可也  
 等裁に裁に代官所を裁に所存を裁に裁に裁に  
 府使に裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に  
 係ありと示し事に法を以て

法は裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に裁に

差使館司入府中出中不通事在守入彼中山無之  
日宅私無之也人一中使以之東萊府使而接之儀  
如中出或不然也之候中守以之私也一已之返之  
難く以之即刻海津初之節入之然也人より中守也  
返之如中守中守也之各中守以之私也之節より中守  
中守也之私也之より何れ中守也之各中守也之節  
置之有之私也中守也之各中守也之節中山無之也  
私也之歸宅仕也

古在守之已之反之難改以舟為常乃入也

以美之也

九月十日

上野教分

差使魏司入府中一和義中山義之助乃入府中

唯今小通事入魏部一東義府供面接之義乃入

不然則之限也尋就之題也此中一和義一已反之

取旨也其重大之義難開於義乃入義之助乃入





先般差使等入府當面申——此等時限もお是へ後然  
に餘り中山毒害地方へ移載し奉る毒害地方より列候被  
お招移載し奉る事と云ふ

一 其節面議申すに奉り毒害地方より移りし事と云ふ通  
事と名前も所詮位に奉る事と云ふ毒害地方に在り通事  
と面會申し事決る事と云ふ

一 毒害地方同様為す所定へ移載し奉る所定を即差使等  
に面議し奉り候し何事も了りぬる事と云ふ府使に所分

次第に有るに従て及海軍令に於ては其外府  
使面議之事に任事し多勅旨前座議定之上面議有  
う然れども其の決意を以て

古く通ち事世に望み

十月十五日

上野敦也

小通事入館之節東萊府使差使ハ一面議之我君恩  
心付之知と申す可き有之は

決而之

開路之儀ハ外前案之如牙海津藏主部ハ出之  
有之歟

各所望也

各所望也

九月廿五日

中山喜多郎 花押

中書一守入殿仕上野同位應爲仕事是也  
海内一守入殿仕上野同位應爲仕事是也  
多誠使一守入殿仕上野同位應爲仕事是也

サヲナ

イッコナ

又中書一守入殿仕上野同位應爲仕事是也

中書一守入殿仕上野同位應爲仕事是也

九月十九日

中山喜多郎

小通事より日卒を招きしむる事あり  
何事も中絶しなむ

先刻より差使館司入府中  
小通事より府使面接し成り  
諸事より其内健勝再之申上置る  
處篤と勤報仕る  
小通事より  
海津へ申上りて  
其内健勝

九月十五日

中山喜多郎 尾押

[illegible]

此程以尋府中上之先服差役入府爲中下通事云  
 中より中付要ありは府中供の事也云内使に  
 程決如  
 中より中付要ありは府中供の事也云内使に  
 中より中付要ありは府中供の事也云内使に

壬申

九月十八日

中山毒之洲 卯

再度以尋三付申上候

一差使館司小入府中月日不覺小通事サヲナリ者

廿日黄舎以東某山立即 以由る物サ以イツナリ者

當以小通事同是水宅ハ所越崔在守口上ニ由リ

中使ハ以テ書面ヲ差越答ニ由リ差使入府ニ一方混

雜今日ハ多忙府不能其矣今府入府ハ之憂アリ



府使面議之事、役勤之人、も評議區、うゝ、何分、  
里、高、或、部、所、以、女、可、成、二、然、も、の、こ、は、す、か、無、入  
意、一、多、極、身、内、一、心、付、お、る、い、百、存、家、も、い、い、承、お、の  
事、一、中、一、本、い、お、き、一、言、返、一、つ、時、誰、極、も、無、早  
味、致、也、を、も、お、招、き、猶、回、席、一、一、座、取、り、い、上、あ、回、付  
一、と、海、津、前、を、部、へ、移、載、し、を、改、一、所、席、を、移、置、い、ね、も  
起、出、二、人、一、回、前、係、返、を、振、如、中、部、一、い、す、か、と、あ  
等、と、お、儀、り、い、末、七、面、儀、一、事、い、外、務、省、一、事、う、え、家

關係之人、事、物、を、以て、中、極、も、其、方、の、評、議、  
以て、所、置、る、に、不、然、な、お、そ、置、い、ま、と、お、決、一、  
之、類、和、より、サ、ラ、ナ、ハ、お、傳、へ、差、返、し、よ、い、お、そ、い、之、  
意、に、盡、く、代、官、所、役、に、こ、於、て、い、確、く、宗、家、に、貿、易、取、  
輕、重、の、方、を、務、め、お、い、得、い、故、を、以、て、所、務、者、に、即、用、端、  
も、不、関、な、お、向、の、對、し、お、お、一、居、い、為、身、を、成、差、使、お、  
入、附、し、事、乃、破、滅、の、勢、を、負、一、因、に、拂、お、成、い、た、其、上、  
代、官、所、より、お、向、の、心、を、後、し、い、り、た、お、中、極、を、取、輕、重、を、

古通  
世是少生

+  
 4  
 +  
 2  
 b

中山喜氣郎判

尋更高量に謀利に詰り破産にも至る虞あり  
以事代官所より宗氏回來に貿易取換き方考へお  
し裁ち新規更張に事あり一切関係仕る事あり  
持論を改に差使入府中一被りり府使面議し可  
内府中裁に當り代官所一切関係無き事あり何  
存案ありきと云ふおそれ程に裁に被りり物い  
然るに社差使に取換に差使當り於て延期に謀利

承<sub>レ</sub>乏<sub>レ</sub>残念<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>守<sub>ニ</sub>り初<sub>メ</sub>々<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>央<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>意<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>規<sub>ニ</sub>  
に通<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>扱<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>来<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>貿易<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>差<sub>ニ</sub>障<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>  
致<sub>ス</sub>を<sub>レ</sub>歩<sub>ニ</sub>留<sub>ニ</sub>も<sub>ニ</sub>お<sub>ニ</sub>含<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>浦<sub>ニ</sub>漸<sub>ニ</sub>最<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>吐<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>  
尙<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>崔<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>守<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>引<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>セ<sub>ニ</sub>逐<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>詰<sub>ニ</sub>判<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>未<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>先<sub>ニ</sub>般<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>府<sub>ニ</sub>  
々<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>関<sub>ニ</sub>係<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>者<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>引<sub>ニ</sub>掛<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>関<sub>ニ</sub>係<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>代<sub>ニ</sub>表<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>  
々<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>格<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>踏<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>従<sub>ニ</sub>前<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>通<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>扱<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>新<sub>ニ</sub>規<sub>ニ</sub>更<sub>ニ</sub>際<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>  
何<sub>ニ</sub>お<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>い<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>来<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>貿易<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>依<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>後<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>了<sub>ニ</sub>れ<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>存<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>  
事<sub>ニ</sub>に<sub>レ</sub>は<sub>ニ</sub>望<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>

古通古事記

十月十四日

中山喜多利

代官所儀差使録司と列物と告示と居事と  
立守等と通古心得居事

同日

中山喜多利

一、教令部教助一同打寄、詰合し、未返は、振身教を仰り  
方面議之事は、外務省之事と而我く之關係を以て、  
振身之方法評議所及び所置有し、然る及返は、是れ  
中使より、府使面議し、多勢右前、廣任を以て、議定  
し、且面議し、然る及返は、振身使に、決るを望み  
し、通事入来し、常教助に招き、私同席し、通事より、用向  
委曲を吐き、我に、内望を

古通 ち多しを、内望に

十月五日

中山喜之助

篤と考中、紙小通事使上、松より敦睦へ申付、

古之通  
五教  
五法  
五德

十月五日

中山喜之助判

敬助  
系列  
お招き  
以候  
も  
金々  
束金  
セ  
家と  
七  
好  
處

十月十五

中山喜之助判



朝鮮周急一科緩命略

十月八日竹内猪三藏原列看朝鮮國饑饉之聞有救饑之  
廟議決定身屈實探偵之と為路之官に議り運輸之道  
可お問ふ外務卿之教令相違以て身寫と考量を要朝鮮國  
近年凶作し物價騰貴殊今年は全羅道に豐作ありとも慶尚  
道凶作して米價も隨ち騰貴し全羅道より凶作入送米も  
即ち凶作に如く去今夏秋に更草梁穀中士商に米穀  
買込對列送運一同所々肥荒上米に比せれば二割

位も下直あるは尚商人も送りて利する所有る位である。因  
作といふ高價といふあるは織襪といふを協事明白に  
有るは去運送不ぬとて國柄が東陽にぬくとも西海に  
ぬくともか切角にぬくともぬくともぬくともぬくとも  
尚別に船をぬくは近況を親密に聞知し中執するに  
中執するに能く面々商議とて目前に世洞澤に見  
ゆりていふ令ある報を異する事有りとも急ぐ事実  
を操便する事難くある。寧ろ隣国急ぐは盛意を通

以方可然と名信通事崔在守よりその呼寄せ其意を宣旨  
に差へり入る。これ列差より在守より回を朝臣に教達。天  
下は所稱萬一に所不作。その外は他所より舟漕り入る  
い之を補ふて不足ある事あり。況や今年八道均蒙豊饒  
あるに、此浪説何より。と播磨より守殿中に所言。  
隣睦む情たる難くへりある事。も是據る事あり。不然彼中  
傳致せよとの意あり。と在守より返す書差出。以由る。名公  
面差哉。一に折帶重なり。其指揮列東部。大為省議定

糶糧價位かも亟知所<sub>レ</sub>に被地<sub>ニ</sub>價より<sub>ハ</sub>却る上位  
もあり<sub>ハ</sub>程<sub>ニ</sub>後強<sub>ニ</sub>目のあり<sub>ハ</sub>に<sub>ハ</sub>運<sub>ニ</sub>お見<sub>ニ</sub>なり<sub>ハ</sub>若  
而運送<sub>ニ</sub>道<sub>ニ</sub>も<sub>ハ</sub>なる<sub>ハ</sub>事案探偵<sub>ニ</sub>と<sub>ハ</sub>尚<sub>ニ</sub>に<sub>ハ</sub>運輸<sub>ニ</sub>を  
一<sub>ニ</sub>お<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>方法<sub>ニ</sub>も<sub>ハ</sub>有り<sub>ハ</sub>と探偵<sub>ニ</sub>も<sub>ハ</sub>其<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>に<sub>ハ</sub>断<sub>ニ</sub>お<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>る<sub>ハ</sub>  
能<sub>ニ</sub>司<sub>ニ</sub>代官<sub>ニ</sub>お<sub>ニ</sub>る<sub>ハ</sub>中<sub>ニ</sub>あり<sub>ハ</sub>是<sub>ニ</sub>に<sub>ハ</sub>所<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>に<sub>ハ</sub>此<sub>ニ</sub>以上

五申  
十一月

外務大臣花房義質

犬差使入府中密使往来始末

五月大差使相良正樹館司深見六郎東菜入府中  
東菜より中山喜多町に夜中竊に尋越き事件  
取らるゝ大略

壬申九月十五日夕刻花房妙勢大至金山浦着直草  
梁館へ上陸一夜館司深見六郎呼出に去る五月差使  
公入府中東菜より杉中へ通事を以て代官  
所へ差使相良正樹館司深見六郎東菜入府中  
去月書面を以て被中立候に確證有之哉否相

尋之處

差使以府中府使而攝之可然否代官  
所心附焉其之之處如何之返答及哉  
ハ確證之之得共彼之尋越ハ海内  
ハ返答拒差圖及之ハ春田長十郎ハ此  
度之ハ段相違之由深見六郎相答  
書面拒差出

次ハ二代官春田長十郎ハ之ハ差使以府中

彼中相中密使之代官訪一國議以一事  
隊首之由其方海及軍事也中中中中中  
和隊其以國之存在其後為地海者之存其說  
其相隊之隊首之哉其相隊之隊首之相  
成其隊之隊首之何事也中隊海者之存其  
然其隊首之隊首之何事也中隊海者之存其  
入府之初也其可及而隊隊之隊隊之其其其  
其相變一遂其及其隊其不審其存其由中其



此間初々風聞をきき以て相中へ密使は来り  
御使は由承りて其の事曲柄之事打合せ  
もなき事ありしやと邪推せしと相語り遊遊之  
事々々旨長十郎相答せり

然るに雄より海りてとの確證なき之哉相尋せ處  
今く此の事は此の事と申出せり智村は是れ  
再び御見上郎の事と申す外中立之際決る相違  
なき相尋せ處

決り相違ふ之に長十郎ハ海内茂太郎ハ海  
内と申隊確と申間々ハ答ふ

依之又長十郎呼ふハ一般ハ渡韓之仰趣意  
前後相承け御力切之旨時體等ハ臨ハ相回看  
朋友之私情ハ拘泥ハ多國間之御力事を誤入  
うらやま旨教示ハ未何事ハ有之決ハ公ハ様中  
聞此處

近刻ハ同局ハ情も少ハ相包サ疑也之入也

右丞相中山通事二人之館第中山長子  
孫越府使面議之際如何——可也哉  
末此中山長子南之野致此同色——海  
八區各振河公海津之君意及指國  
海分真話——海分真話——海分真話——  
郎事面——海分真話——

右一代官海津茂左郎峰公——其方上可  
次中長之品——其方上可

存心家之此一可之家勿論ニ其音存

先以差使以入府中一相中東某の密使差越一  
多る家之武を帝何事をや来り武如何返  
答し一進一武漸々推問せし處

五月廿九日迄と相覺へ相中ハ通事密之館  
中山某と何れより差使面會之事如何し一就  
哉尋来り而面議と其方より都多来り  
相答るハ通事ハ差返一其趣を何れ并西代官

上野助。初へ番出。中。由。茂太郎。中。出。其。身。

其節之印。用。抽。不。家。有。譯。及。い。館。中。以。得。方。有。多。を。

宗。從。四。位。より。別。段。論。即。一。以。方。も。有。之。其。方。厚。く。以。得。

居。其。苦。味。二。此。面。議。所。要。之。譯。も。與。に。中。間。置。且。

其。池。も。有。大。小。と。多。く。分。向。一。葉。一。右。接。之。以。方。ハ。高。く。

可。り。立。標。中。は。置。為。時。々。相。尋。其。際。有。之。處。必。一。

条。二。限。り。只。今。と。相。包。其。ハ。何。之。旨。也。其。相。尋。其。受。

其。家。難。針。一。身。中。出。杯。不。能。合。之。返。答。中。立。其。り。

其際、所段之趣を畫可致せしを、四代官の聖勅  
傳ふ。條件之次第、所を以て推究し、其處

若使、入所中、崔、在、所中、の館、中山、在、所  
宅、に、在、り、在、り、所、中、と、面、議、之、未、海、津、中  
出、海、津、中、面、議、之、際、に、其、方、之、所、都、合、に、所、中、と、  
在、所、中、の、差、圖、を、以、て、返、答、に、中山、に、在、り、所、中、  
致、助、り、書、面、差、出、す

古、代、官、中、山、在、所、中、の、差、使、の、所、中、に、在、り、所、中、

小通事の籍府使面接可否詰し未だ隊省之裁相  
乱しを愛

右様之家決るべき事

然る東来より會合越し隊津茂を即ち公隊に  
之之裁とわするを愛

館内を兼所造之面經難事公孫子孫有之故

旨候し是しそ通るを所り海津に宿せし公津津に

中々隊決るべき事由る出面差公に

於市諸詰問相問推究ししより其を所由を露著  
一衣良等其を移又て字公一相下し其を八岐野  
教助とて内諒之上海は河分と隊首を推て其得  
其處

其を其守の事をして閑路に難多題  
回報の事り其隊は其之に其多其を其分八岐  
教助隊の事之其公其出

其又て其野教助隊公一相中八龍之者八崔其



相違多之哉且其方也守之有法  
中云此標中則此處暫時相考也

此刻方入彼面議之  
 趣ニ中ニ之ニ此ニ直ニ第

和館詰小吏ノ朝鮮小通事ト直面對談スル  
身分ノ者ヲ直對ト云フ則代官等ノ下役ナリ  
之身分ニ劣る者ニ屬ス

より取りとち 雑巾二回分 1合 巾拭き 4月 敷

と存し我々の事ニ望み遊んで実ハ社会直話文政

雅志隊有志士併席會去々海内

迺若此者，同一公案，而決其相違，蓋其趣

書面ニ志スル者出レ

依テ再ビ海津茂方郎呼ビ一ニ刻為公ニ書面之  
隊相違ニ歳年之我相尋ニ愛努付閉口之後

誠ニ追刻ハ突然沖尋之隊有本心ニ失レ一會

連之隊ハ之我貝岸ハ中山ニ野兩人新宅ニ我公

唯今ハ通事ノ入彼ノ様中ニ公ニ留メ様返答ニ一

ハ通事ニ在リ仰ミ立テ伺公出ルニ中ニ之我公共ニ要

ニ面議可ク否見込ニ為来ニ決断ス何返答ニ一

是一可然哉何公夢留府使面談之多都令  
廉任官之以此講定之より面談有之可然と云  
至は標取差(圓)此事は定坐所として出而る出を

方身深見六郎海津茂太郎春田長十郎之野致助中山  
赤之角一同呼ぶ之野致助迄近おせしと相尋ね  
と刻より止り之面海津茂太郎之口書二通を匿  
名にて渡上げ此面通之中何れを事實ニ通  
せ哉又二面通とも事實ニ通せしと云ふ方より二面通

二哉と相尋は處

而通と意充分に解し、一魚は兎角は刻  
初より此の所ハ毛既相違ふ之と之相答ふ  
其意意出口より一處に述べ也

所々中山を以て中閑とハし刻より再三相尋はた功  
此人數何れも好むるは之を不包有体ニ可中述と  
中閑は處

昌刻より此處中閑と交る如様之際之可中述と

相答

依る又と海津中閑此ハ其方と刻ハ中出カ爾耐使面接  
之隊有中山之野と云返答振田公男及差國並隊  
相違之哉

決る相違は是れと云

則中山並に其ノ中ハ其ノ野隊助其分より其相之  
功才者細中立其處其再三相拒ミ其何之ハ其  
哉

五、度帝立教、助、向、心、基、語、及、元、と、信、者、等

可乎此等毒藥當時閉口不敢入

相之次第而論之

古事一初着とつて遂に渡儀とある之旨一回引取り  
惜むる程に渡に時二十日曉第に事あり

十九日十時帰國に渡り佐賀縣唐原山張新にも  
合の預親類預ホヤは事

九月十日海津港を即ち三人と者出帆に臨み中山を  
多岐と書せぬ中使として入来りて山道にハ渡り  
の便ありやとお尋ね愛崔と云ふと云ふ

十月十四日歳末光清寺に於て中山を別邸に再渡せし

芝罘貿易の續を考とて世に叙及之事ニ關係あり  
る事代官亦貿易の所なる常ニ關係あるを示し  
居は市面係之を考よりてハ尚更關係あるを示  
し此係肝要と爲り其意を以て答ふる旨ハ公喬知  
書あり

同十五日付ニ於て海津茂太郎は野島助中山を以て  
呼出し此間芝罘海津を最良ハ本心を失し中ハ所  
錯ひ此旨を以て答へて出所望公喬知よりて之を野島と



金久府令一為之野中山中曰翌驛之廣也而之推  
て夫に相尋せ霞之野中曰之方に大概府令に  
手は銘に口書に考細認にせ所預親に預め  
二美多事

去月九日附る由狀同廿八日夜半頃相違奉拝見候然し要少  
由不快より模様申恐念候時令何分由保護玉候る事  
由他より便宜漂民人負書及し金學生大收る書あり由  
漂民人負る儀は外向より知る事は若し由他より則ち三郎より  
外向より知る事は送受るに數而小時機を以てして應  
對し及試み振養食置交ふ如在守り及應對より申し知免角  
先般より申張る意味より如く候令漂人由果より先規る

外不付類也其由也

一列差新役任所と下着候此程より取沙汰仕所也

去月廿八日列差到任候に在守より通詞内をぬか

則に廿九日先例に通届し候就候事先格に通りお

心得候と申事所在に候司事全体到任挨拶不

仕通詞中よりお色一通り及応答に候列差よりお色

に候改に先成も申上り候司事候に入府以来お向

於て候司事にお互就候司事差継に候一代官に候

一代官を以て教司とお立派に百大小種重くし所用の職者  
一代官に下中階就るを以て教司に届か不致候おそ姓名  
書小も野拙に差出不申第一是迄に儀小通事小申分て  
各等公然任官に為分より右様中上各候者更難得き素筋  
合月殿と為及尋問為出望き等内外前廣切組より等  
顯然に得る及應對に時種に辨るを設けざるに必然なる却  
ふ都合に有る殊更應に法未の時機に依るに容易ナラカ  
機會に可押移り難量素より今更可驚筋に等此位候に

可也生費語前後者大事と前も又河渠と欲スル事と但セ  
置多万後日強ト愚意仕実ニ内外ニ見分不都合と依  
由以得長寸分不及应接と依分所存其以右一条ニナラズ  
改注逐志と通リ八月被岸古教詣由他リ事々右詣後不向  
よりお引と執意ニ任官未お歸故を以て中出孟蘭盆會  
所中出保生常ニ速ニ承届古教詣差為居以得と事々  
右為度もお断是ハ素リ枝葉ニ似て由他ハ一昨今  
能内と新掛商人中ニ於テ不向と取違り引違もサハレ

たういふ事平日外人面談に際してもお至る社日を目的と  
仕りぬる事而して情實を籠黙し事を以て常儀ハ中  
止し通ふ事成順一應及返る此後以後何分お向ふ小  
通事ハ品能強健に及ばず通事中を以て中向ふ尤も苦渠  
より及強迫以て申出さ通う而して心得る達の方お見合  
彼岸前日夕刻にお扣居り此以後何ハ儀も不申出  
お達し通承彼セシハ儀もおん得前日夕刻古教詣差  
免以段及達を要す達ハ直に教中二代官より觸せ

乃置于此茅ヲ春冬ニ以テ内通及以由就所  
同夜半不通事一統入穀石以通河中を以テ斷申出  
以テ終て申出以通り許容仕て右に定て内通と合俸達  
出テお待直て内通へ内通被是為申出求テ内通と不  
却合お生といふに子組右殿に形似年竟茂太郎者  
之何右為人之好曲云云處下云云在御隊明て甚敷  
新業色第一輕輩之方分とて西岡大休を家  
一此何云罪難問。

至極以下三十  
五文字密往  
復取レシノ  
起元ナリ

退己御内端之次第も此等の間一已耻辱も必に相忍むる  
毛既相厭む心得無所せざる共古別差都合を以て  
月今野拙劣面にお叶ふも勿論御用組合迄に至甚重  
念此等隊に生ずる併み分る時迄御指揮を仰ふ所  
輝之可針も可有之に憂寧も何ある筋可ある哉  
今後之御用害惡念無き第一味今に至り種々内端  
之和奸洩漏此隊に有之中一も至極に容易一条風  
評集知多御用も生ずる共中お悔む所密



沛直始可仕此右梯之機會自然と雖巾一舉乃評以  
右西人之和研看日果少と進と退と添添際可有望  
別差公就館日云々其他之際と云り左彼士族中松  
大憤發一代官有壽及尋問並由相関最早十目  
所視畫分少明考と仰と既と先般代官所物体  
之處曲尺合と内福之也と威銘死生と受と右維輩  
一人之也と此後善室と云と寧と月令と難換天害  
面之也と此帝旧官相良と委曲及出狀と云

次第以坐時官曰官之權宜處置可省之節  
と云考此時自然印付此等處可有此等裁前章  
可然以實量其成二諸般軍器是皆揮多難  
此等此夜通初不四判二減少物品而計其柄  
是書也托墨時官尚休情見分前之者其委能  
此書奉仰

水營金山新官去月十三日下來之由

新別差姓名 大有玄僉知 堂上官之由

八 乍卷末先度印畫狀節留寫印告知以厚  
情奉輝謝以自今共宜安多厥光

· 右可申之斯以望也

九月朔日

深見六郎

廣津弘信樣

尋交高量法滯緣由畧

附錄共

尋交商量渋滞之緣由概略

朝鮮交通從來之狀景及び一新報知以來之連續ヲ以  
其事之渋滞する緣由を考ふるに左之三件ありて之を  
るる也

第一往來聘問を等閑と爲し來りて固續する  
慣習

第二我々無限の欲望あり且西洋人と結ぶ

なむぐーといふ朝鮮人之疑懼

第一 往々軽く来々重々歳遣々贈酬々害

何々事々也々々對州吏人の俗情

右三件々め何々事々滞滯々引起々也々を別々

々先つ左々件々有々を考々さるるべし

第二 朝鮮政府ハ我々拒絶逐件々々の決心

々々や否

第三 朝鮮人ハ日本人の往來交通々々々を忌む

や否

第三朝鮮人ハ日本人を輕侮する也否

戊辰以來數回之應答彼之常々いふ所違格之  
事ハ不可受又金石之契約不可換と而して毎も  
隣國を傷むと云ふこと可とすとの意なく  
毫も拒絶之語意あり——其他百般應答中  
其跡疑ふべきに似たるも甲を斥めて乙を接し  
丙を除く丁ニ親む等々策として決して一涯  
拒絶逐斥之意ある事あり

朝鮮人日用品具衣裳亦う内我送る所の  
銅と金巾との如きは最不可欠の物と  
我交通の爲るため、禄を保ち作業を得る  
の數千人皆兩國交通の盛なることを欲する  
もの也未と一人も西國和平う交通を忌む  
ものあることを知らず

古來朝鮮人の深く我國人を畏懼せり近來  
對州人々所業彼う輕侮を招く事なき



此ら以て依て對州人、則ち水近つけ、他々日本人、  
隔て遠く隔ち、事々去夏差使入府、  
郎府使面會せり、金く館中黨派あり、  
を知りて乙と納まると申と斥けんとせり、  
則ち其輕侮する所と納ま畏懼する所と遠さ  
あるとせり也、然るに輕侮するもの、對州々  
日本といふ其畏懼する所あると今も替り  
さる也

之に依て是れ、既、拒絶逐斥す決心あり又交通を  
 忌むの意あり素より輕侮の念あり此より唯  
 六十年未聘問を等閑する、未だこの易きと馴  
 まる又温むもの煩きを厭ふ我、無限の欲望有  
 り且西洋人と結ぶるあり人事を疑ふより往來の端  
 を開くは必し以凌辱を受けるに至る人事を恐る  
 何となく其畏懼も、所のものゝ遠ざけ往來を  
 端を開くさうな様にと、往來を、一歲遣貿易を、暗に

對州吏人を使役せし對州吏人此歲遣之利を失せし  
とを患ふの俗情も終に彼り街中に玩弄せし水  
遲滞今日よりこれより然る今既に此一大弊を  
破れり其他の所件も如きは破るに於て甚と難  
うする所あるべし

附錄

中古以來朝鮮交通沿革大略  
一新報知以來尋交商量手續大略

# 中古以来朝鮮交通沿革大略

對州と朝鮮と往來交通して定例の如く嘉吉約定  
以来茲より四百三十年其間の變化の如く雖も綿々今  
いふて断つべし但し豊公征韓の事いふて後暫らく  
断絶せしむと徳川氏之始頻々好言を以て之を誘ひ終  
に信使を來し是より終聘せし絶つて對州之交是に  
至る又起る然れ必竟邊疆を奉り隣交を司るもの  
なり又一家之交の如くされとも從來私交の如く

依然として改め以信使來聘之事ハ毎例我より  
之を促し迎て江戸に送り幕府に謁するをありし  
を明和夜大改に接待し文化夜之に對則に攝し以來  
等閑に過り今はいづて六十餘年を絶て來聘の  
事あり此錄宗氏慶吊するもの毎に譯官を來  
其儀を述るゝと例とせし去る庚申以來茲に十餘年  
廢て不顧年條送使漂民送還等々外別使に往  
來無く其後慶應二年朝鮮國佛國艦と爭鬪之

後幕府之命を以て爾後兵器銃砲等買賣之道を  
開くべしとのむぬ對州より拭合ふ彼方との好  
意は感ぜられとも先王之法典不可改金石之約定不可  
換唯入用之時ハ之を乞ふべしと答て止む其後米國  
船を傷り其人を害し米佛連合其罪を問ふの由く  
何の幕府米佛公使に計り中保をもちんため使節を  
渡さんとして對州をして其旨を通せしめ幕府  
使を来せしと前例なりとして之を難し且言を左右

託一期を延んと應接未だ幕府政權返上となり  
此議又々興ふ其後一新報知改制報知歳遣中  
止則今之状態とあるなり



一新報知以來尋交商量之手續概畧

一戊辰土月宗對馬守おして大差使を朝鮮に遣り

皇政一新之事を通報せむ書中 皇勅お交隣

以來未曾用之字あり且宥衛印章お例に違えりか

名と云ふ受あり

古來對馬を請求之事或は変革ありける事

より多し其事を云ふより比較かすれは使ふ重き

年お強き事少しなり況んや我書お受け支

配に向て自らを補はるるを至つてハ輕く  
受ぬも怪むとあるあり

己巳五月宗氏其家人大島正朝を遣は實際を  
探偵せしむ正朝歸て状を陳へ併て見る所を宗  
氏其朝鮮の俗深沈狡獪筆舌に能く動さぬ  
を以て寛猛を兼ふ宜きを見て受する所を宗  
氏成效朝すとのうといふ

正朝は陽に兵力を以てハ動さくといふ

隱ハ如何心得を以てしるハ明察し難くも  
對阿一般の多情なるに建カ一刀兩断に御所置  
こ出ましく先此儘を貿易の利を失せざる  
と為れしものなり也

同年々外務省佐田直寛森山茂おと散し對阿  
人となり實際を觀察せしむ翌庚午年二月同人が  
朝鮮に着き此時差使より刻道に終し其来意  
を拒むる故に書面を差出されしと云ふ如きこと速

其故お記せり短簡お出せり是に於て佐田お帰  
来りて近況を述へ且凌り筆闘舌戦せし成功  
之期何多し其唯兵お用ひて速に事を定むるおは  
と云と建言す

同年五月宗氏其家人浦瀬景輔お遣り差使  
接受し手立お内訳せしむ時獨逸船釜山浦に  
至りし我官貢并對州に通詞其船よりせりしお見  
て朝鮮人益我を西洋上結ひて害お被に加ふんと

計るに疑ふよしを内納熟せし能く兩政府  
互等對に敵を置いて書翰も皇勅おれり  
憚り文字おそひ全く等對の交際を  
あつしとの言訓道と由お令せしむしお帰告く

一 浦瀨~~浦瀨~~後館中に借を極し市を撤せんとする  
の勢あり是浦瀨が親に申す事若し阻害せらる  
くも兵を以てあるといふこと云々なりとい  
館中大驚き館日伴某おより辨解し全く

浦波が虚言を傳へて之を罰し其事を  
さかふし平徳に傳ふ

一 同年<sup>冬</sup>吉岡森山外務卿が禮曹外務大臣

より東萊府使釜山會使に書状を携へ時機を

見て捧出すに積りて探索を告として歩及す

此時浦波を連れ渡りてより同一人の朝鮮

對し犯すを何ん則今渡航させざるを由宗氏

より断りて推し其意を問ひ強て拒みしを

て他の小輩も鳴じし館員伴某も乍も浦潮ハ江  
ニ從ふ如新せり依て翌辛未正月吉岡亦同渡  
韓東萊釜山あ使に面會を望むる宗氏の命を  
以て館司に紹介せしむるも接せし僅に刻違ふと内  
面謁せしむるも刻違ふ雖新例不可開を主張し且  
以後百事對州を以て應接せしむるを定め決  
して受まゝと云ひ對州吏人も相和して此上ハ外  
勢省に通信ハ止められ一の就といひ浦潮と曰説を

唱へ去年由緒の手續ハ復た敷と云

一 同三月宗氏より別書狀を東萊金山に送

面接を促す八月いづる返書著越す其畧外

勢官貢の是より来る無前之事也况や面接に

理<sup>ア</sup>んやと云終る面接を肯や

前條訓道内面謁の節答へ振り及に萊府

使の別書弊<sup>と</sup>酬<sup>ひ</sup>て越<sup>へ</sup>代官所設<sup>の</sup>者<sup>あり</sup>

確<sup>と</sup>例<sup>と</sup>事<sup>ハ</sup>あらず勿れと言しめ<sup>なり</sup>



右、依<sub>テ</sub>外勢師外勢大ニ書<sub>ル</sub>弊<sub>ハ</sub>未<sub>レ</sub>捧<sub>ル</sub>出<sub>ス</sub>  
本<sub>ニ</sub>林山廣津<sub>ハ</sub>歸<sub>ル</sub>京<sub>ニ</sub>近<sub>ク</sub>况<sub>ハ</sub>陳<sub>ル</sub>之<sub>ニ</sub>且<sub>ニ</sub>宗重<sub>ニ</sub>  
日<sub>ニ</sub>渡<sub>ル</sub>韓<sub>ニ</sub>す<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>様<sub>ニ</sub>市<sub>セ</sub>之<sub>ニ</sub>交<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>建<sub>ル</sub>言<sub>ス</sub>

是<sub>ハ</sub>從<sub>ル</sub>四位自<sub>ラ</sub>渡<sub>ル</sub>韓<sub>ニ</sub>セ<sub>ニ</sub>對<sub>ル</sub>州<sub>ノ</sub>俗<sub>ノ</sub>吏<sub>ノ</sub>私<sub>ニ</sub>奸<sub>ニ</sub>  
り<sub>モ</sub>其<sub>ノ</sub>且<sub>ニ</sub>被<sub>ル</sub>用<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>例<sub>ニ</sub>阿<sub>ル</sub>多<sub>ク</sub>之<sub>ノ</sub>を<sub>拒<sub>ム</sub>可<sub>ク</sub></sub>  
な<sub>ル</sub>之<sub>ノ</sub>必<sub>ラ</sub>以<sub>テ</sub>尋<sub>ル</sub>交<sub>ニ</sub>成<sub>ル</sub>熟<sub>ニ</sub>之<sub>ノ</sub>後<sub>ニ</sub>令<sub>ル</sub>充<sub>ル</sub>分<sub>ニ</sub>  
た<sub>ル</sub>之<sub>ノ</sub>又<sub>ニ</sub>是<sub>ノ</sub>を<sub>進<sub>ム</sub>可<sub>ク</sub></sub>之<sub>ノ</sub>意<sub>ニ</sub>出<sub>ス</sub>

し<sub>テ</sub>な<sub>ル</sub>之<sub>ノ</sub>

辛未夏米國軍艦が朝鮮に遣り先年其國民  
が暴殺に罷りつゝ盟を結ぶんとする由を少  
館に上り通して此事を朝鮮に告しむるに朝  
鮮答に隣誼如意に謝されとも元此より迄  
不

一 同秋廢藩立縣之事何甚後宗重正外務大臣  
任し後韓命せられしに程なく後韓ハ止る  
れ同人より使を遣し及び制を報知しと轉職を

告る事とあり、森山廣津ハ辛未十二月、發京申  
正月、差使相良某、共渡韓、其書契刻、  
道下、披見濟、寫を以テ、京師ニ内啓せし、國議  
お盡して、後、返答すことあり、其返  
答、期限も定め、依に數回、談判し、未差使ハ  
推テ、東萊入り、強テ、面議を乞ふ、而、使固ク、辭  
して、接せし、差使ハ、不得已、退き、國ニ歸りて、其  
由、お述ふ

一 館司此時差使と告て東菜入りし事館司に  
何るすしき所業なりとて常例に供饌あて廢し  
旦竊て代官おゝ諷して其帰國お勸む

一 此時東菜金山よりの嚴命ありとて館中禮式に  
関する屋宇の内朽廢せる一字お急に解撤す

一 右入府に砌萬周<sup>施</sup>する所の被戒通詞お今の  
中、面會の義便服あるを然る被方へ出しく礼  
那相當なること此方より答へしるあり

一此時若使館司ハ一意盡力シ得共代官所<sup>鬼</sup>免角  
外物<sup>鬼</sup>より多くあり朝鮮<sup>鬼</sup>の對シテも代官所ハ全く  
外務<sup>鬼</sup>ノ關係を有物トナシテ其候

一此時重立内<sup>族</sup>親<sup>族</sup>致シ其の通<sup>鬼</sup>の申より代官中が親

のより申夜中竊<sup>鬼</sup>使お差越シて市中諸官評議區<sup>鬼</sup>

多<sup>鬼</sup>極<sup>鬼</sup>難<sup>鬼</sup>浪<sup>鬼</sup>の由を面議<sup>鬼</sup>可<sup>鬼</sup>否<sup>鬼</sup>心付由尋越<sup>鬼</sup>より

右尋越<sup>鬼</sup>より市代官所ハ此面議<sup>鬼</sup>肝要<sup>鬼</sup>と告<sup>鬼</sup>衆

と申會<sup>鬼</sup>も受<sup>鬼</sup>ひたう<sup>鬼</sup>人<sup>鬼</sup>全<sup>鬼</sup>く關係<sup>鬼</sup>せざる<sup>鬼</sup>より心

其の無きと爲る外務の如く何れもなきをあるし

り

此時釜山其他評議區をきりし趣の未だ通

運中事端も開らば東業迄通し始りある事

ハ竹嘯の慰勞に且面議の節ハ便服を

てハ有便の底分と成るべく云内を

金と通しし位を交通するより夜中竊

代官所人お差越し義福通を頻に因

迫の由おのゝ旦面議との吾代官所の見込  
か尋問しおおひと考れ、右使始一言不  
振の確論ありとも見、且若館中二心也  
るのち々々春米町寧論ふせし意おひて参  
るハ必定面會も遂多んと思ふも

一 若使引而後被我通事中に内容、若使引  
取た故今ハ別々國議、書より素より返答  
し期も定る事ありとて、去若使の宗氏

家人の名さい今差使より刻道は書おいて  
三年お限り返るお得をせくれよと頼み越  
し其三年間貿易其外凡て旧規に從ひ其な  
ハ對州迄ても益ある事よ朝鮮をも慶尚道  
数千人に命脉お取繫き得るもの此事整  
ひたる其上あそハる事周施様なるべしとの内  
歩合あり事

差使引而後自然餓中物引揚のりて



んを種科しといふ恐れあるより陽は館司の  
供を撤しまゝ寤、自ら帰り去る事を訊し  
或は急る廳廊を解撤せしお<sup>朝</sup>解人平常  
の風習に似ず是れも被戒の侍使内訖し  
て古例を遵守より黨を引新規を講明す  
る黨よりけり的手段中に出たるなり故に  
八月中に頻りに館司を歸らしめんとせし  
代官彼に何事にも引當置との説内外に

頻りなりしなり三年期限きとふも惣引揚  
おそれたる深情おとろふ是れり

一 右内侍令に關しは歲遣船中止治滞も返歸し  
運ひとある刻違ふは復職したれとも大丘は生  
しとある未歸來との上面議いさるし

府使刻違ふの罷職といふも復職といふも皆  
偽り刻違ふが大丘はりといふも目積りとも  
る情とも必らず京都に一生復せしもの

なり是も亦彼り古例といふべし

一 漂民後方よりハ春米議論の片附をり  
——くとも此等ハ手數お省き簡易に受取たり  
此漂民中金學成とふとのハサ——事理  
お解せらる者も近來朝鮮の如き對せらる  
其所置當お失せらるお知り歸國のハ必  
し當らる——と曾て我通詞のものに話  
せり

# 江華島事件ニ付参朝始末

明治八年九月廿八日午後十一時許長奇縣令宮川房之  
飛報政府ニ達ス曰ク雲揚艦朝鮮江華島ニ於テ砲撃  
ヲ蒙ルニタ

初メ該艦支那近海ヲ測量セント欲シ釜山浦ニ航シ停  
ルニ數日同浦ヲ飛シ岸ニ沿ヒ廻航測量シ江華島灣  
ニ至リ錨ヲ下シ上陸薪水ヲ乞ハント欲スルノ際率然該  
島ノ戍兵我艦ヲ砲撃スト云フ時ニ該艦水火夫ヲ擧  
テ二十拾名ニ滿ス而シテ其砲臺ヲ奪ヒ其兵を不孺シ  
其甲杖什器ヲ獲ル等我武亦多シト謂フヘシ矣

十月三日特ニ参内命アリ先是余病ニ罹リ四月ヨリ本月<sup>ニ</sup>至ル病ヲ養ヒ家居シ更ニ機務ニ関セズ此病ヲ勉メテ朝ス

上曰頃日朝鮮ノ事アリ其詳悉ニ未ダ知ルベカラズト雖凡想フニ是レ国ノ重事朕甚ダ憂念ス御本年四月以来病ヲ養ヒ家居スト虽凡今當サニ勉メテ職ニ就キ以テ庙謨ニ参贊シ規益スル所アレト余謹デ命ヲ奉ジ且奏曰臣~~西~~宿病未愈誠ニ事ヲ執ルニ勝ズ雖然今回ノ事ハ當ニ勉メテ臣ガ愚衷ヲ竭シ以テ詔命ニ奉答スベシ唯自余職務上ノ所

務ニ至テハ暫ク 庶議ニ参スルヲ免レシメ玉ハシ  
ク 聖旨之ヲ允ス因テ退ヒテ内閣ニ至リ

勅詔及ヒ上答ノ旨ヲ陳ス而後更ニ三條大政大臣島津左  
大臣衆参議ト共ニ謁見ス 上曰朝鮮ノ事卿等  
宜シク協同成ス所アル可シ云々衆拜シテ退ク

十月七日 會館ニ会ス三條氏曰ク赤山ノ信晉當ニ明曉迄  
ニ達スベシ而後政府ニ於テ集議スヘシト余之ヲ諾  
ス 赤山者外務ノ大等出仕釜山ニ駐シ  
韓廷之ニ在タル者

同 八日 昧爽ニ條ノ招ニ應シ行ヒテ之ニ面晤本氏曰ク  
参議者卿分離ノ事既ニ畧變タル所アリト虽氏

便上ルカ如シ

今方ニ朝鮮ノ事アリ姑ク曰ニ從フ則チ公意如何ト因

テ從前ノ情状及ビ客歲延慶ノ事情ヲ陳ブ

庶議ノ順序可否ハ僕ノ知ル所ニ非ズ唯朝鮮ノ事ニ

就テ之カ便否ヲ論スル則チ姑ク曰ニ依ルノ高議誠ニ

可ナルカ如シト因テ他事ヲ談ジテ歸ル正院一至リ左

大臣ニ面シテ離ノ可否ニ就テ三條ト答ノ始末ヲ

陳ベ且其意ヲ問フ左府曰ク此議原ト板垣退社ノ

首唱ニ所僕其議ニ同スルノミ今ニ公經歴上ノ試

ニ就ヒテ韓事ノ為ニ姑ク不分離ヲ以テ便トナス僕強

ヒテ前議ヲ主スル所ナレ宜シク其利便ニ從フベシ但板

垣ニ至テハ必ス服セサシトナト後ニ大臣及余三人相議ス亦

同シ後板垣ニ公及余ニ面セシヲ乞フ板垣論ス所アリ

其所論ノ意建白各載スル所ニ同シ左府曰ク今ニ當ニ之ヲ分離シ更ニ

韓事ヲ以テ之ヲ召集スル可ナシ余曰ク今ニ當テ之ヲ爲ス

必ス將ニ事ニ害アラシヨニ依ル議可ナルニ似タリ板垣

曰ク今日分離ニレテ行ハレサル枢軸整肅ナラズ枢軸ニ

シテ整肅ナラサル則チ何ヲ以テ海外ニ事アルヲ得ンヤ

今日韓事ノ重事アル是レ分離ノ益行ハサルベカラサル

所ナリ若シ今分離論ニレテ行ハレサル生決メテ廟堂

ニ立チ枢機ニ參スル能ハズ唯我ヲ辭スルアラシノニ余曰



使主客如左

今方ニ朝鮮ノ事アリ姑ク曰ニ從フ則チ公意如何ト因  
テ從前ノ情狀及ビ客歲征臺ノ事情ヲ陳ブ在リ  
廟議ノ順序可否ハ僕ノ知ル所ニ非ズ唯朝鮮ノ事ニ  
就テ之ガ便否ヲ論スル則チ姑ク曰ニ依ルノ高議誠ニ  
可ナルガ如シト因テ他事ヲ談ジテ歸ル正院一至リ左  
大臣ニ面シテ離ノ可否ニ就テ三條ト答テノ始末ヲ  
陳ベ且其意ヲ問フ左府曰ク此議原ト板垣退社ノ  
首唱ニ所僕其議ニ同スルノニ今ニ公經歴上ノ策試  
ニ就ヒテ韓事ノ為ニ姑ク不分離ヲ以テ使トナス僕強  
ヒテ前議ヲ主スル所ナレ宜シク其利便ニ從フベシ但板

垣至テハ必ク服セサシトナト後ニ大臣及余三人相議ス亦  
同シ後板垣ニ公及余ニ面セシヲ乞フ板垣論を所アリ  
其所論ノ意建白各左府曰ク今ニ當ニ之ヲ分離シ更ニ  
載スル所ニ同シ

韓事ヲ以テ之ヲ召集タル可ナラン余曰ク今ニ當テ之ヲ為ス  
必ク將ニ事ニ害アラシト依ルノ議可ナルニ似タリ板垣  
曰ク今日分離ニレテ行ハレサル樞軸整肅ナラズ樞軸ニ  
シテ整肅ナラサル則チ何ヲ以テ海外ニ事アルヲ得ンヤ  
今日韓事ノ重事アル是レ分離ノ益行ハサルベカラサル  
所ナリ若シ今分離論ニレテ行ハレサル生決ニ永福堂  
ニ立チ杞機ニ參タル能ハズ唯我ヲ辭スルアラシノミ余曰

今大事前ニアリ一談協ハスレテ去ル豈大臣國ニ尽スノ  
道ナランヤ板垣曰ク生敢テ國事ヲ抛擲スト親王ニ非ス  
事急ナルニ至テハ當ニ武官トナリ以テ國ニ尽スヘシ唯改  
府ニ立ツ能ハサルノミト此更ニ衆參議ニ問フ衆答フル  
所一ナラスト虽氏大抵皆不分離ヲ以テ便トナス太政大臣  
曰ク既ニ衆議ヲ尽ス其可否ハ當ニ上奏シテ宸裁ヲ乞  
フヘシト因テ議ヲ止ム

九日 正院ニ參ス

十日 正院ニ參ス

十一日 休

十二日 午前九時参朝萬條ニ公同シク分離ノ事ニ就

テ各自ノ意見ヲ上奏ス

上曰朕當ニ熟慮スヘシト

○板垣参議等ヲ大臣御前ニ伺候ノ時ヲ以テ上奏

致度旨申請アリ本日板垣参内タルヲ以テ御前ニ召サル

時既ニ十時許三大臣中老人政府ニ出頭スヘシト三条氏

亦談アリ余即チ三院ニ参ス板垣皇后退居ノ帰途

三院ニ参シ曰ク分離ノ件 勅答ヲササルノ間ハ出仕セサル

云々ヲ陳レテ退ク

十三日 正院ニ参ス宮内卿徳大寺 各ヲ以テ報シテ曰ク板

垣参議ノ建白各拝借ヲ願フノ処進テ御下付可相

成云々余先是德大寺氏ニ就テ建白屑ノ拝借ヲ願フ  
ヲ以テナリ

十四日正院ニ参ス本夕德大寺<sub>ヨ</sub>校垣ノ建白ヲ回達ス<sub>甲午</sub>

十  
リ

十日正院ニ参ス本日外務省其駐釜山<sub>茂</sub>山茂ノ信各ヲ  
呈ス其各辞暖昧彼ノ国情判明ナラズ以テ 庶謨ヲ  
変スベカラサルヲ以テ赤山ヲ召還タルニ該変ス

十六日鷺尾隆聚来ル左大臣ノ事ニ就キ<sub>カ</sub>カ<sub>ル</sub>所アリ

十七日 家ニ在リ

十八日 風邪家ニ在リ

十九日 午前第九時参内人申アリ病ヲ以テ辞ス云午十二時  
ニ條来晤曰ク頃日来紛々タル方離ノ議本日韓事後  
局ニ至ルマデ曰ニ依ルノ 勅裁アリ而シテ左大臣ハ  
勅旨ヲ拝スルノ後封事ヲ献ジテ退ク其議ノ如何ヲ知ズ  
ト午後六時海江田信義来朝左府建言ノ事ヲ陳ブ余  
洪歎ニ勝ズ因テ信義ニ訊テ曰ク余嘗テ左府ニ告テ曰ク  
毎事屑ヲ以テ論奏スルハ大臣ノ宜ク為スベキ所ニ非ズ  
公尔後上言セラル、所アル當サシロツカラ上奏セラルベシ  
ト而メ今又突然此事アリ誠ニ太息ノ至ニ勝ズ雖然今事  
既ニ逝キ又如何ニス能ハス汝宜シク速カン建白、稿ヲ以

テ余ニ送レト信義云ル明日建白稿ヲ送致ス

三日 早天徳大寺氏来リ 内旨ヲ傳ヘテ曰ク又先ノ封事

ニ就ヒテ卿ニ諮詢ス所アラントス 卿里シク病ヲ勉ナテ朝

スヘシト時ニ余頭痛頗ル劇 内諒誠トニ筆シト虽氏

又如何共ニ誌スズ因テ本日ノ参内ヲ辞ス此時徳大寺

封事ノ寫ヲ齎ラシ来ル○午後ニ時木戸孝元大久保

利通ノニ参議来ル曰ク昨日ノ事誠トニ驚愕ニ勝ズ此事

敢テ生等ノ喙ヲ容ル、所ニ非ズ唯願ハクハ公速カニ朝

シ 聖意ノ所在ニ從フテ宸断ヲ輔ケラレシイヲト又

他ヲ諷ハスシテ去ル又中山忠能来リ建白事ニ就キ云々

スル所アリ午後六時熾仁親王参駕頭痛劇シキ  
ヲ以テ面謁ヲ謝ス

二十日 早徳大寺来リ復タ内謁ヲ傳ヘ参内ヲ促カス後

宮内卿ノ文啓ヲ以テ

午後三時

入参ノ命ヲ傳フ午後一時

参内ス途次有栖宮ニ参謁ス親王去々ノ高談アリ

余曰ク今回ノ奉<sub>レ</sub>聖断ニアリ臣等ト虽<sub>レ</sub>一言ヲ置

ク能ハスト因テ辞去スニ時参内時ニ

上少シク不豫徳大寺ト共ニ臥内ニ就ヒテ拜ス封事

処分ノ趣向アリ余奉答シ高ク此事備<sub>ヘ</sub>テ聖断ニ

アリ唯 陛下ノ裁<sub>ニ</sub>所<sub>ニ</sub> 上曰実<sub>ニ</sub>戊辰<sub>ノ</sub>来



ノ功勞 朕決シテ忘ル、能ハス且其罪ノ所在ヲ見ス久光  
ノ封事朕當サシ之ヲ返付スベシト依テ様辞シテ歸ル

三言 家居ス左府各ヲ送ラル同ク退日國家ノ爲ナ上言  
スル所アリ而ルニ本日召命ニ依テ謁見ノ處卑言取ル  
所ナキヲ以テ返付ヲ被ル因テ下官奉職ノ目的ナレ將ニ  
辞表ヲ上ラシトス公事ヒニ執奏セラレシヲト此日終ニ  
辞表ヲ献ス

百  
林  
武  
校

